

## 第二言語としての日本語における漢語系形容動詞の 習得研究：プロトタイプ理論の観点を中心に

毛, 莹

<https://doi.org/10.15017/1441001>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

第二言語としての日本語における漢語系形容動詞の習得研究

—プロトタイプ理論の観点を中心に—

毛 瑩

2014年3月

## 目次

図表一覧	vi
〈図一覧〉	vi
〈表一覧〉	vii
序章	1
第一章 形容動詞に関する研究の概観	7
はじめに	7
1.1 形容動詞の由来	7
1.2 品詞分類における位置づけ	8
1.3 形容動詞の種類	10
1.3.1 「ナリ」活用と「タリ」活用形容動詞	10
1.3.2 文語と口語の分類	11
1.3.3 語系による分類	13
1.3.4 構造上の特質による分類	16
1.3.5 主観性・客観性による分類	17
1.3.6 形容動詞に特有の特徴	18
1.4 通時的観点から見る形容動詞	19
1.4.1 「だ」の成立から形容動詞の誕生へ	19
1.4.2 連体形「な」の形成	21
1.4.3 語形上の変遷	21
1.4.4 品詞性の変遷	22
1.5 形容動詞の漢語語幹	23
1.5.1 形容動詞と形容詞の語幹の異同	25
1.5.2 形容動詞の語幹と名詞との異同	27
1.6 連体形「な」と「の」	30
1.6.1 統語的特徴による比較	30
1.6.2 意味的特徴による比較	33
1.6.3 連体形「な」と「の」の区分	35

1.7	形容動詞の特殊性	37
1.7.1	意味論の観点から見る形容動詞カテゴリー	42
1.7.2	統語論の観点から見る形容動詞カテゴリー	48
1.8	第一章のまとめ	51
第二章	プロトタイプ理論の研究	52
	はじめに	52
2.1	プロトタイプ理論の誕生	52
2.2	プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論	54
2.2.1	古典的カテゴリー論	54
2.2.2	プロトタイプ・カテゴリー論	56
2.2.3	プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の相違	57
2.3	プロトタイプ理論の言語学への応用	58
2.4	プロトタイプ理論の発展及び問題点	61
2.4.1	ネットワークとしての文法	61
2.4.2	抽象名詞カテゴリー拡張のメカニズム	63
2.5	動的文法理論の援用	66
2.5.1	動的文法理論の発想とその基本規則	66
2.5.2	動的文法理論による統語機能の再解釈	67
2.6	動的文法理論の発展	68
2.7	動的文法理論を援用した理由	71
2.8	第二章のまとめ	72
第三章	プロトタイプ理論による形容動詞の再解釈	74
	はじめに	74
3.1	形容動詞カテゴリーが典型性効果を示す理由	75
3.2	形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの関係	75
3.3	形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴と統語的特徴の再解釈	78
3.3.1	形容動詞カテゴリーにおける意味的特徴の再解釈	81
3.3.2	形容動詞カテゴリーにおける統語的特徴の再解釈	83
3.4	第三章のまとめ	99

第四章 漢語系形容動詞の習得 1 : 習得順序の解明 .....	101
はじめに .....	101
4.1 語彙の習得順序に関する先行研究 .....	101
4.2 形容動詞の習得順序に関する調査 .....	101
4.2.1 予備調査 .....	101
4.2.2 調査の手順と方法 .....	105
4.2.2.1 被験者 .....	105
4.2.2.2 調査対象となる形容動詞 .....	106
4.2.2.3 調査票 .....	107
4.2.2.4 手続き .....	108
4.2.2.5 分析方法 .....	109
4.3 結果と考察 .....	109
4.3.1 テストごとの正答数の平均値の多重比較 .....	115
4.3.2 形容動詞の典型性による正答数の平均値の多重比較 .....	116
4.4 第四章のまとめ .....	117
第五章 漢語系形容動詞の習得 2 : 母語転移の可能性 .....	119
はじめに .....	119
5.1 誤用の種類及び要因 .....	119
5.2 日中同形語による誤用の可能性 .....	121
5.2.1 日中同形語の差異 .....	121
5.2.2 誤用が生じる原因の分析 .....	125
5.2.3 日中同形語に関わる調査 .....	128
5.3 中国語の形容詞と助詞「的」 .....	130
5.4 日中連体修飾句の対照比較 .....	132
5.4.1 語順の比較 .....	132
5.4.2 「の」と「的」の比較 .....	133
5.5 母語転移説 .....	135
5.5.1 母語転移賛成派 .....	135
5.5.2 母語転移反対派 .....	137

5.6	調査の手順と方法	142
5.6.1	調査対象者	143
5.6.2	調査対象となる修飾語	143
5.6.3	調査票	144
5.6.4	手続き	145
5.6.5	分析方法	145
5.7	結果と分析	145
5.7.1	日本語能力レベルでの誤答数の平均値	145
5.7.2	品詞別の誤答数の平均値	146
5.8	誤用ごとの要因の分析	148
5.8.1	「の」か「な」の誤用	148
5.8.2	「な・の」の混用	150
5.8.3	連体形の脱落現象	150
5.9	第五章のまとめ	154
第六章	漢語系形容動詞の習得3：そのほかの誤用要因の可能性	155
	はじめに	155
6.1	形容動詞の出現頻度による影響の可能性	155
6.2	学習者要因と日本語指導による影響の可能性	156
6.3	習得環境からの影響の可能性	160
6.4	第六章のまとめ	161
第七章	結 論	162
7.1	総合的考察	162
7.2	今後の課題	168
7.3	日本語教育への示唆	169
	参考文献	171
	〈付録一〉 [分類語彙表(1964)による形容動詞の語系上の分類]	180
	〈付録二〉 [形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による記号表記]	188
	〈付録三〉 [形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による分類]	190

〈付録四〉	[形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による段階わけ] .....	193
〈付録五〉	問巻調査封面（調査①） .....	202
〈付録六〉	調査後アンケート（中①のみ） .....	203
〈付録七〉	アンケート調査表紙（調査②） .....	204
〈付録八〉	格助詞との共起による文法性判断テスト(PPTによる問題) .....	205
〈付録九〉	連体形「な」と「の」の適用による文法性判断テスト(PPTによる問題)	207
〈付録十〉	アンケート調査表紙 .....	210
〈付録十一〉	アンケート I .....	211
〈付録十二〉	[KOTONOHA コーパスによる漢語系形容動詞の文法用法に関わる用例] ...	213
謝辞	.....	300

## 図表一覧

### 〈図一覧〉

図 1.1	用言類と体言類の分類.....	9
図 1.2	形容詞と状態名詞の分類.....	9
図 1.3	頻出形容動詞カテゴリーにおける各語系形容動詞の割合.....	15
図 1.4	形容動詞の主観・客観性による分類.....	17
図 1.5	連体形から見る形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリー.....	31
図 1.6	品詞間の領域.....	38
図 1.7	名詞と形容動詞の連続的なカテゴリー.....	39
図 1.8	日本語の名詞・形容動詞カテゴリーに属する語彙の配置図.....	46
図 1.9	時間的安全性から見る品詞と意味の関係.....	46
図 1.10	状態概念の形成過程.....	48
図 2.1	プロトタイプ・カテゴリー論の特徴.....	56
図 2.2	動物、食べ物、植物のカテゴリー.....	57
図 2.3	プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の相違.....	58
図 2.4	名詞・動詞・形容詞における中心的な意味と周辺の意味.....	59
図 2.5	ネットワークカテゴリーの拡張イメージ.....	62
図 2.6	概念カテゴリーの拡張過程その1.....	62
図 2.7	概念カテゴリーの拡張過程その2.....	63
図 2.8	形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーの合成.....	64
図 2.9	動的文法理論による解釈.....	68
図 3.1	名詞・形容動詞カテゴリーの継続性.....	76
図 3.2	形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの品詞性.....	76
図 3.3	形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーに属する語彙メンバーの分類.....	77
図 3.4	名詞性の変化過程.....	80
図 3.5	名詞・形容動詞カテゴリーの間にある抽象名詞の特徴.....	80
図 3.6	形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴の拡張過程.....	82
図 3.7	抽象名詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張過程.....	95
図 4.1	調査の流れ.....	108



図 4.2	各テストにおける正答数の平均値.....	110
図 4.3	格助詞との共起判断による正答数の平均値の段階的変化.....	112
図 4.4	連体形「な」の接続による正答数の平均値の段階的変化.....	113
図 4.5	連体形「の」との共起による正答数の平均値の段階的変化.....	114

〈表一覧〉

表 1.1	文語形容動詞の種類及び活用形式.....	12
表 1.2	口語形容動詞の種類及び活用.....	12
表 1.3	頻出形容動詞における語系による分類及びその比率.....	14
表 1.4	接尾語の文法用法及び特徴.....	28-29
表 1.5	形容表現の段階的分類.....	36
表 1.6	形容動詞と形容詞及び名詞の連続性.....	38
表 1.7	当該語彙の辞書別品詞分類.....	40-41
表 1.8	形容動詞と形容詞における意味上の対応性.....	42
表 1.9	品詞間における語根の拘束性.....	45
表 1.10	形容動詞カテゴリーに特有の文法用法とその特殊例.....	49
表 2.1	様々なカテゴリーにおける中心例と周辺例.....	53
表 2.2	形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の典型性効果の段階別分類.....	65
表 2.3	代不定詞が生起する統語環境の分布.....	69-70
表 3.1	形容動詞・名詞カテゴリーに属する語彙メンバーが示す名詞性の変化.....	79
表 3.2	形容動詞語彙とその格助詞共起に見る名詞らしさ.....	84
表 3.3	形容動詞の典型性による統語的特徴の段階分け(その1).....	85
表 3.4	一次的基準による段階別分類の仕組み.....	86
表 3.5	二次的基準による段階別分類の仕組み.....	87
表 3.6	三次的基準による段階別分類の仕組み.....	87
表 3.7	3つの基準における形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の段階分け.....	89-90
表 3.8	形容動詞の典型性による段階分け(その2).....	91-92
表 3.9	形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の再解釈.....	94
表 4.1	〈テスト1〉格助詞との共起表現候補(人数).....	103
表 4.2	〈テスト2〉連体形「な」と「の」の選択(人数).....	104

表 4.3	被験者情報.....	105
表 4.4	調査対象となる語彙難易度の内訳.....	106
表 4.5	調査対象となる形容動詞.....	106
表 4.6	テストの種類とその内容.....	107
表 4.7	テスト全体の有意性検定.....	109
表 4.8	変数の有意性検定.....	109
表 4.9	形容動詞の典型性変化による正答数の平均値及び標準偏差.....	110
表 4.10	格助詞との共起判断による正答数の平均値及び標準偏差.....	111
表 4.11	連体形「な」の接続による正答数の平均値及び標準偏差.....	113
表 4.12	連体形「の」との共起による正答数の平均値及び標準偏差.....	114
表 4.13	テストごとに正答数の平均値の多重比較.....	116
表 4.14	形容動詞の典型性の段階別による正答数の平均値の多重比較.....	117
表 5.1	日中同形語における品詞性の比較.....	129
表 5.2	「的」の付け方（名詞・形容詞が修飾語となる場合）.....	131-132
表 5.3	「の」の必要性.....	134
表 5.4	「的」の必要性.....	134
表 5.5	名詞修飾構造に関する対照分析表.....	135
表 5.6	連体修飾構造における「の」の過剰使用の要因に関する母語転移反対派の各仮説 .....	139
表 5.7	日本人の幼児に観察された正用及び誤用例.....	139
表 5.8	テストのバージョンと被験者人数の内訳.....	142
表 5.9	被験者の語学力レベル分けの内訳.....	143
表 5.10	調査対象となる修飾語.....	144
表 5.11	調査対象となる語彙難易度の内訳.....	144
表 5.12	形容動詞と抽象名詞の連体修飾句における誤答数の平均値及び標準偏差.....	146
表 5.13	形容動詞の連体修飾句における誤答数の平均値.....	147
表 5.14	名詞の連体修飾句における誤答数の平均値.....	148
表 5.15	日中同形語における品詞のズレによる連体形の誤用.....	150
表 5.16	中国語母語話者の意味理解度による「な」抜き連体修飾表現の分類.....	152
表 5.17	連体形「な」の脱落に関する正答数の平均値.....	153

表 6.1	調査対象となる形容動詞の出現頻度.....	155
表 6.2	各テストにおける正答数の平均値と使用頻度との相関.....	156
表 6.3	形容動詞の習得及び指導に関わる 5 段階評価の内容.....	157
表 6.4	形容動詞の習得及び指導に関わる 5 段階評価の結果.....	158
表 6.5	正答数の平均値と学習者要因及び指導法との相関.....	159
表 6.6	習得環境による正答数の平均値への影響の測定.....	160

## 序 章

日本語の形容動詞は現在ひとつの品詞<sup>1</sup>として多く用いられているが、その大多数は日本語固有のものではなく、「漢語を中心とした借用語である」ため、形容動詞が表す「概念そのものが社会文化的にもともと存在していなかったか、もし存在していたとしても新語の台頭による置き換えに堪え得るほどの基本性はなかった」（上原 2002:95）と言われる。そのため、ほかの品詞に比べると、形容動詞は他品詞（形容詞・名詞）との境界が曖昧であり、同じカテゴリー<sup>2</sup>に属する語彙間にも典型性効果<sup>3</sup>の段階性が見られる。このような特別な品詞が修飾語<sup>4</sup>となる連体修飾語を習得する場合、形容動詞という品詞が示す意味的特徴及び統語的特徴も他の品詞より複雑になり、結局、形容動詞の習得の難易度もほかの品詞より高くなることが予想できる。また、その典型性は学習者の習得順序に影響を与えているのか。さらに、その影響には正の転移と負の転移があるのか。あればその割合はどれぐらいあるのかというような問いを解明するため、本研究を始めた。形容動詞習得の難点のひとつとして、次の例を見られたい。

例 1 :

- (1) 綺麗な部屋
- (2) 透明な・の傘
- (3) 自由な女神・自由の女神

例 1 は形容動詞の連体修飾句における連体形の使用に見られる相違である。形容動詞は名詞を修飾するとき、基本的には(1)と同じく連体形「～な」をとるが、(2)、(3)のように、

---

<sup>1</sup> 品詞とは、「文法上の性質や振舞いに基づく語の分類である。国文法では普通、名詞・形容詞・動詞・副詞・接続詞・感動詞・助詞・助動詞に分ける。他に代名詞、形容動詞、連体詞を認める学説もある」（『広辞苑』1998：2292）。本研究では、形容動詞を1つの品詞として認める立場をとる。

<sup>2</sup> 人間が「さまざまなモノやコトを、必要に応じて何らかの観点から整理・分類することを、カテゴリー化(categorization)」という。また、「カテゴリー化の結果として作り出されたまとまりの1つ1つを、カテゴリー(category)」という(靱山 2010：18)。

<sup>3</sup> 「概念の事例の典型性が人間の認知的処理過程に及ぼす効果を総称して典型性効果(typicality effect)という。典型性効果は、概念に関する人間の認知的処理過程を探る有効なデータ」(山下 1993：682)となる。

<sup>4</sup> 日本語の場合、「語順で言うと前にくる意味内容を限定・補足する語彙を修飾語」と呼ぶ(『日本語教育事典』p. 96)。

「～な」と「～の」の併用も少なくない。また、連体形「～な」、「～の」<sup>5</sup>の併用に、意味上の区別が付くものと付かないものが存在している。具体的には、(2)は「な」か「の」どちらを使っても、意味上の区別が感じられないが、(3)の例では「自由な女神」は「自由である女神」という意味を持つ一方、「自由の女神」は「自由の象徴としての女神」という意味になる。また、(2)の「透明な・の傘」はどちらも「透明である傘」と置換できるが、「自由の女神」は「自由である女神」と置換することはできない。

そして、日本語における「漢語」とは「国語の中に用いられる中国起源の語のことである」(志村 1982 : 202)とされるため、形容動詞カテゴリーにおける漢語系形容動詞は他種の形容動詞に比べ、中国語と語形的・意味的に共通性や類似性が最も高いと思われる(劉 1970)。そのため、中国語を母語とする日本語学習者は特に漢語系形容動詞を習得する際に、中国語との共通性をもとに、漢語系形容動詞の意味を類推する傾向が強く見られる(豊田 1980)。しかし、数多くの漢語系形容動詞は同形の中国語との品詞性に差異が存在するため、漢語系形容動詞を習得する過程で、中国語を母語とする日本語学習者は日中同形語の干渉で他言語を母語とする日本語学習者以上に誤用が確認されている(豊田 1980, スワン 1994, 原田 2001, 龔 2012, 覃 2013 など)。それゆえ、本研究では、中国語を母語とする学習者を対象に、漢語系形容動詞の習得に絞ることとする。

さらに、より効果的な教授法を開発する前には、形容動詞の習得をめぐり、習得順序から習得状況、さらには誤用の要因を分析する必要があると考える。そこで、本研究では形容動詞に備わる特殊な品詞性という問題を念頭に置きながら、プロトタイプ理論の観点から形容動詞カテゴリーに備わる特殊性を徹底的に解明した上で、第二言語習得研究<sup>6</sup>の領域において、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語における漢語系形容動詞の習得順序、名詞との区分及び誤用<sup>7</sup>の要因を分析していく。

---

<sup>5</sup> 「の」は格助詞であるが、多くの研究で「～の」を連体形として扱っているため(飯豊 1973, 豊田 1980, 奥津 1993, スワン 1994, 田野村 2002, 上原 2003, 荻野 2006)、本研究では形容動詞の名詞修飾句で用いられる「の」を連体形として扱うことにする。

<sup>6</sup> 「第二言語習得研究とは、学習者が目標言語(Target Language : TL)をどのように習得していくのか、その習得に影響を与えるのは何か、教え方で違いが生まれるのか、学習者の母語は大きな影響があるのか、第一言語習得と習得プロセスに違いがあるのかなど、第二言語の習得にかかわるさまざまな事象の研究である」(迫田 2002 : 10-11)。

<sup>7</sup> 誤用とは、「第二言語学習者の発話(話したものと書いたもの両方)の中に現れた言葉の使い方、母語話者なら用いないようなものを誤用と言う。これは学習の不完全さを示しているもので、話者の疲労や不注意から生じる誤りのミスエイクとは区別すべきであると考えられる」(高見 2004 : 193)。

## 1. 本研究の研究課題

これまで行われてきた L2<sup>8</sup>日本語の形容動詞の習得研究では、ほとんどが誤用に影響を与える母語転移の可能性に焦点を当てており、誤用が引き起こされた要因について、連体修飾構造の習得研究では、中国語の「的」干渉説が主張されている(鈴木 1995, 守屋 1995, 迫田 1999, 奥野 2001 ; 2003 ; 2005, 張 2002)。一方、漢語系形容動詞の習得研究では、日中同形語の干渉から日本語の形容動詞と名詞の品詞上の区分による誤用が起こるといふ指摘が多く見られる(豊田 1980, スワン 1994, 村松 2000, 原田 2001, 龔 2012, 覃 2013)。いずれも誤用の要因を中国語の母語転移によるものとしているが、統一的な検証は見られない。

また、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性が習得順序及び習得効果に及ぼす影響の度合はあまり言及されていない。しかし、形容動詞カテゴリーに備わる典型性は「なぜ形容動詞は特殊な品詞であるか」を説明する重要な根拠であるため、形容動詞の習得を考える上では語彙メンバーの典型性は無視できないのではないだろうか。

さらに、前述の形容動詞の連体形の使用という例において、「な」と「の」の使用は勝手に組み合わせられたものではなく、語彙メンバーの典型性と強く関わっている。まず、(1)のような最も典型性(形容動詞性)の強い語彙メンバーは名詞を修飾するとき、必ず連体形「な」しか用いられない。典型性の弱化につれ、「な」と「の」の併用現象が現れる。しかし、当該語彙メンバーに備わる形容動詞性と名詞性<sup>9</sup>が均等である場合には、「な」と「の」の使用に、意味上の差は特に感じられない。それに対して、形容動詞性より名詞性が強くなると、当該語彙メンバーは自ら形容動詞と名詞、いわゆる「二重品詞語」(上原 2003)として用いられることになるので、「な」をとる際は形容動詞である一方、「の」をとるときには名詞になる。それゆえ、「な」と「の」の使用に、意味上の差が現れる。よって、最も典型的な語彙メンバーの習得は容易であるが、典型性の弱化につれ、名詞の統語的特徴も適用されていくことから、学習者にとって、非典型的な形容動詞の語彙メンバーの習得は難しいと想定される。

そこで、本研究はプロトタイプ理論を用いて、第二言語としての日本語における漢語系形容動詞の習得過程の解明を目的とする。まず、形容動詞カテゴリーに典型性が備わる原

<sup>8</sup> L2は第二言語の略称である。「人がある言語を第一言語として習得した後学習する言語のこと」である(『新版日本語教育事典』2005: 35)。

<sup>9</sup> 「名詞化において、本来そうでないものが名詞的な性質、名詞らしさを帯びることになるが、この名詞的な性質、名詞らしさを「名詞性」という(上原 2010: 24)。

因を明らかにする。次に、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性による段階性を調べた上で、その典型性の段階と習得順序との関連を解明する。また、学習者の語学能力による形容動詞の習得状況を確認してから、母語転移の可能性を検討する。さらに、様々な誤用において、最も母語から干渉を受けやすい誤用を示す。最後に、母語転移以外に、形容動詞の習得に影響を及ぼすそのほかの誤用の可能性を明らかにする。具体的には、以下の6つを研究課題とする。

- ① なぜ形容動詞カテゴリーに典型性が備わるのか。
- ② 形容動詞の習得はプロトタイプ理論が指摘したように、典型的なメンバーから非典型的なメンバーへという順序になるか。
- ③ 形容動詞の習得状況について、上級学習者は中級学習者より漢語系形容動詞の連体形の習得が進んでいるか。
- ④ 学習者は漢語系形容動詞を習得する際、母語の中国語からの干渉を受けているか。
- ⑤ 形容動詞を習得する過程で産出された誤用の種類及び要因は何であろうか。
- ⑥ 母語転移以外に、形容動詞の使用頻度、習得環境、学習者要因、日本語教師による指導法などの要因が形容動詞の習得にどのように影響しているか。

## 2. 本研究の調査方法

本研究は横断的研究の手法を取り、集団テストで学習者の形容動詞の習得状況を測定する。「比較的少数の被験者を対象とし、長期間に渡って定期的に被験者の自然な言語行動を観察・記述し、質的分析を行う」縦断的研究に対して、横断的研究は「比較的多数の被験者を対象に、ある時点における言語データを収集し、量的分析を行う。具体的には、言語産出テストや文法性判断テストなどを利用して、ある言語項目に関する仮説検証・探索を行うが、言語テスト研究と関連の深い研究方法である」(清水 2003 : 59)という特徴がある。

日本語学習者の語学能力を測定する方法は様々あるが、横断的研究における文法性判断テストは「中間言語のシステム、特に文法能力の一部を間接的に、あるいは直接的に観察できるという点で重要であり、学習者の学習された文法能力と何らかの関係を示すものと考えられる。そのため、学習者の中間言語・習得状況・習得順序等を仮定することができるので、文法性判断テストは学習者の文法能力を調査する妥当な調査方法の一つであると

考えられている」(花城 2010 : 52)と指摘されている。そのため、本研究では語彙知識から日本語の漢語系形容動詞の習得状況を調査するため、文法性判断テストを採用した。

### 3. 本研究の構成

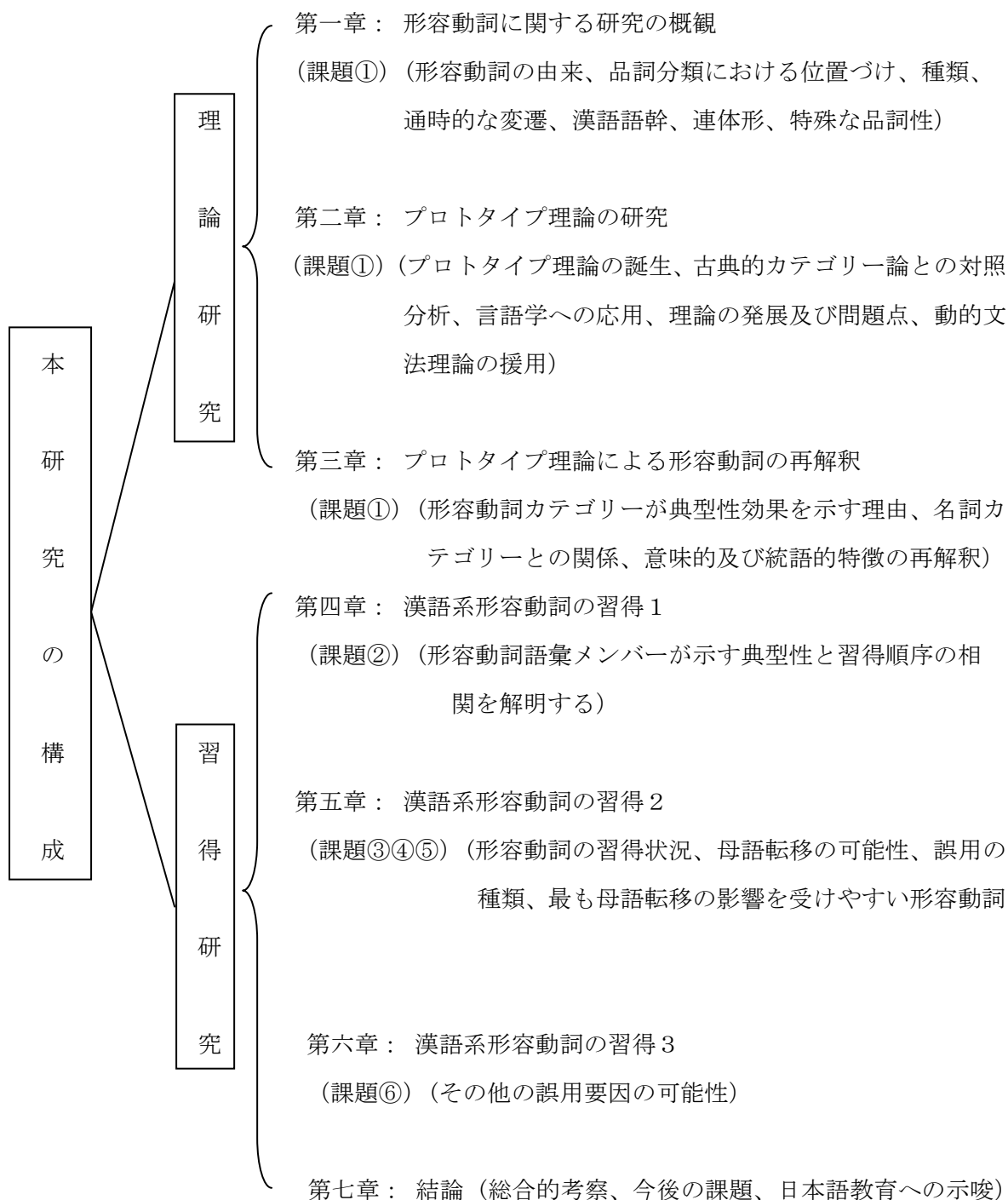
本研究は日本語の形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性の段階性を中心に調査、考察を行う。形容動詞は形容詞や動詞などほかの品詞に比べると、そのカテゴリーの境界線が非常に曖昧であることは、単なる学校文法による影響だけではなく、「品詞の枠組み全体に関わる問題」であると加藤(2003 : 85)によって指摘されている。本研究では、形容動詞論が品詞の枠組み全体に関わる問題であるという基本的認識に基づき、プロトタイプ理論の観点から漢語系形容動詞の習得を分析する。本研究の第一章から第六章は、形容動詞に関わる語彙研究、理論研究、習得研究の3つの部分から構成されている。形容動詞の語彙研究に基づき、その特殊な品詞性を手掛かりにプロトタイプ理論を紹介する。また、習得研究では、形容動詞の習得、形容動詞の典型性による習得順序及びそのほかの要因を分析した。前半で言語学及び認知科学の理論を説明した上で、言語習得研究の分野へと移り、漢語系形容動詞の連体形に関する習得状況、誤用分析や先行研究の問題点などを検討する。

第一章では日本語における形容動詞の由来、品詞分類における位置づけ、種類、歴史的変遷、漢語語幹、連体形などの語彙研究を通して、形容動詞という品詞の特殊性を明確にする。第二章では、プロトタイプ理論の誕生と展開、特徴、研究の現状などをまとめ、理論の限界を指摘した上で、補完として動的文法理論を導入する。第三章では、プロトタイプ理論と形容動詞カテゴリーとの関連性を示し、プロトタイプ理論に動的文法理論を援用した上で、意味論と統語論の観点から、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴及び統語的特徴を再解釈する。次に、第四章では、先行研究の問題点を考察した上で、「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」の有無という2つを基準にした文法性判断テストを用いて、中国語・ネパール語・マレー語を母語とする日本語学習者を対象に、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの習得順序を解明する。また、第五章では、連体形「な」・「の」の選択という文法テストを用いて、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、習得状況、母語の影響及び誤用の種類という3つの側面から漢語系形容動詞の習得を考察した上で、誤用ごとに産出される要因の可能性を分析し、母語転移からの影響を最も受けやすい形容動詞の特徴を見出す。さらに、第六章では、母語の転移以外に、語彙の出現頻度、



習得環境、日本語教師による指導法など形容動詞の習得に影響を及ぼす様々な要因の可能性を分析する。最後に、第七章では調査の結果を個別にまとめて考察し、今後の課題及び日本語教育への示唆を提示する。

本研究における各章の構成をまとめると次のようになる。



## 第一章 形容動詞に関する研究の概観

### はじめに

日本語の形容動詞は通常、形容詞と共に物事の属性や状態を描写、修飾する機能を持っていることから、両者は類似していると思われる。しかし、多くの研究は、形容動詞が表す意味的特徴は名詞カテゴリーに強く影響を与えられていると指摘している(上原 2003 ; 山橋 2009 など)。それゆえ、本章では、形容動詞の由来から品詞分類における位置づけまで、様々な角度から形容動詞の特徴を解明した上で、名詞カテゴリーとの深い繋がりを示す。

### 1.1 形容動詞の由来

日本語における「形容動詞」という名称は明治24年4月刊の『和文典』で大和田建樹が使用したものが最も古い(柏谷 1973)。『和文典』における「動詞の用い方」の項で、「名詞を形容して前に置く」用法を「形容動詞」と呼び、「曇る空・降りくる雪・照る日・水に棲む蛙」などの例を挙げている。しかし、このような表現は「名詞を形容する動詞」の意味になり、これは本研究でのいわゆる「形容動詞」の対象外となる。

本研究が対象とする「形容動詞」の概念は、以下に準ずる。

日本語の形容動詞は事物の性質・状態を表現する語で、内容の面では形容詞に類似し、ほかの語の接続などの面では動詞と同じ機能がある。また、文語では、名詞にアリの結合した「静かなり」(ナリ活用)、名詞にトアリの結合した「泰然たり」(タリ活用)がある。形容詞の語尾クに動詞のアリ結合した「多かり」(カリ活用)を加える説もある。活用はラ行変格活用に、連用形にナリ活用でニ、タリ活用でトを加えたものになる。口語では「だろ、だっ(で・に)・だ・な・なら」となり、タリ活用は連用形ト、連体形タルだけがある。

(広辞苑 1998 : 825)

上記のような特徴を持つ品詞を「形容動詞」と呼んだのは芳賀矢一が最初である(橋本 1948, 柏谷 1973)。この名称の詳細については、芳賀による明治37年刊の『中等教科明治

文典』の「巻の一教授の注意」に以下のように書かれている。

形容詞のありに連れて、動詞の如く各種の助動詞の連れるものを形容動詞と命名し、形容詞の一部として説けり。性質に於いては形容詞にして、活用に於いては動詞なればなり。立派なり、詳なりの如き、従来多くは立派に、詳になどの副詞よりありに連れるものと説けり。この相違に注意せられんことを望む。

(芳賀 1905 : 5)

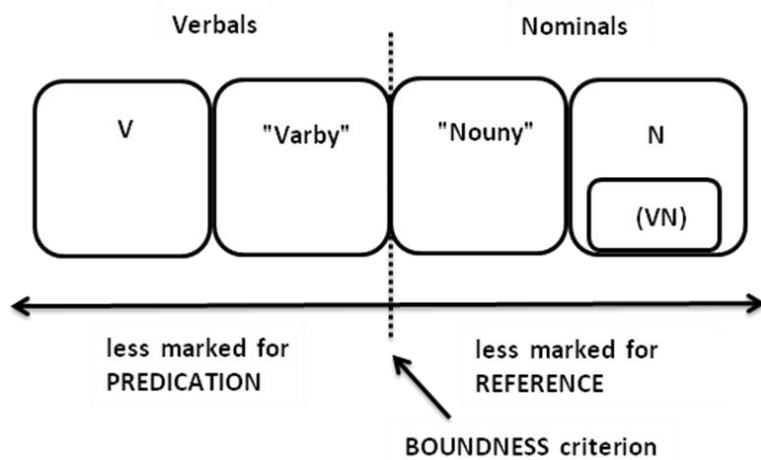
## 1.2 品詞分類における位置づけ

現在の国文法における「形容動詞」という名称は「意味は形容詞に等しく、活用は動詞と同じである」という意識の基に付けられたものである。しかし、「形容動詞」が一品詞として認められるか否かについては、様々な学者によって多くの議論が行われている(野呂 1994)。

吉澤儀則は、「形容動詞」が動詞でも形容詞でもない一種の用言として独立させることを説いた。寺村秀夫は、形容詞と名詞の中間的性格を持つものとして、これに「名詞的形容詞」という名を与えている。一方、時枝誠記は、「形容動詞」の語幹を独立した体言とみなし、それに指定の助動詞「だ」がついた二語の連続であると説明した。水谷静夫もまた、「形容動詞」を「無活用の詞+判断辞」と見る立場を取っている。鈴木重幸らの説で、「形容動詞」と形容詞は、その語彙的な意味の性質が同じであるだけでなく、品詞を性格づける文論的な働き、形態的なカテゴリーが共通であり、異なるのは主に活用形であることから、本来の形容詞(「い」で終わる形容詞)を「第一形容詞」、「形容動詞」(「な」で終わる形容詞)を「第二形容詞」と呼び、両者を一つの品詞と見なした。また佐久間鼎は、口語の「形容動詞」は形容詞だけでは性状表現が十分でないことを補うために発達したものであり、形態よりその意義を重視し、両者を一括して「性状語」と呼んでいる。

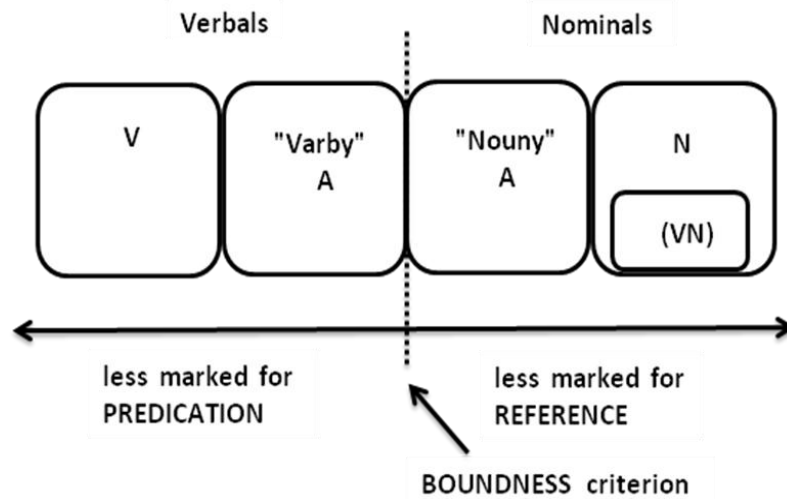
(野呂 1994 : 2-3)

Uehara (1998)は、統語範疇に関する研究を基盤に日本語の状態名詞と形容詞の関係について、次の図 1.1 のように品詞間の連続性を示している。



[図 1.1 : 用言類と体言類の分類(Uehara 1998 : 93)]

そして、形容詞を Varby A(djective)、状態名詞を Nouny A(djective)と呼ぶことを想定して以下のような図 1.2 も示している。



[図 1.2 : 形容詞と状態名詞の分類(Uehara 1998 : 94)]

図 1.1 と図 1.2 は形容動詞という品詞を設定しない立場に立つ分析で、用言類と体言類に分けた上で、形容詞が用言類に、状態名詞が体言類に所属するという分類である。

江戸時代以来、形容動詞を一品詞として立てることに反対する立場をとる学者が常に存在している。「その反対論に共通する点は、カリ活用・ナリ活用・タリ活用のことだが、一語ではなくて、二語であるという見解である」(柏谷 1973 : 132)。すなわち、形容動詞の語幹が単独で一語として認められるとの主張である。

また、形容動詞という品詞の分類基準の不一致によるものは「形容詞」との比較においてさらに、2つの立場に分かれる。一つは、「伝統的な学校文法で採用されている立場で、形式上の特徴に重点を置き、『形容動詞』を『形容詞』とは異なる品詞として区別する立場である」。もう一つは、「意味上の共通性に重点を置き、両者を同一の品詞と捉え、形式上の違いを下位分類の問題と見なす立場であり、最近の日本語教育でも多く採用されている」(山橋 2009 : 161)。

具体的には、名詞を修飾する場合「きれいな所、元気な子供」など、修飾語と被修飾語の間に連体形「な」を挿入するため、日本語教育では「ナ形容詞」と呼ばれる。意味的には性質・状況を表し、印欧語の文法では形容詞として扱われる語群と共通する意味を持ち、文法的機能も似ていることから、日本語教育では、「〈イ形容詞〉〈ナ形容詞〉を一括して形容詞として」分類する(原田 2001 : 106)。曾(2013)は、語形、意味及び活用の面で、形容動詞と形容詞を比較した結果、修飾機能以外に、両者の類似性が見られなかったため、形容動詞を形容詞カテゴリーの下位分類にすることは不適切であると述べている。

本研究では形容動詞の品詞論の是非に関わらず、研究調査の便宜上、「形容動詞」という名称を用いることとする。

### 1.3 形容動詞の種類

#### 1.3.1 「ナリ」活用と「タリ」活用形容動詞

邱(2003)は、語彙発展史の観点から見ると、現代日本語の形容動詞の活用形は「ナリ」形から生まれてきたため、「ナリ」形は古代形容動詞の活用形と言われるが、古代形容動詞には「ナリ」以外に、「タリ」形文語形容動詞もあると述べている。両者の区別は、「タリ」活用形容動詞は表音性漢語連用修飾語として多く用いられる一方、「ナリ」活用形容動詞は表意性漢語連用修飾語として多く用いられる。また、文語形容動詞の形成過程から見ると、「タリ」は「と・あり」の音韻変化によってできたもので、「ナリ」は「に・あり」の音韻変化音韻変化によってできたものである。また、「と」は「タリ」活用形容動詞の連用形であるのに対して、「に」は「ナリ」活用の連用形である。

例 2 :

タリ活用形容動詞 :

涙がハラハラとこぼれる。

犬がワンワンと吠える。

ナリ活用形容動詞 :

穏やかにに流れる川

静かににしている

(邱 2003 : 18)

### 1.3.2 文語と口語の分類

文語の形容動詞は 3 種類に分けられている。

第一種 形容詞の連用形:カリ活用(例:面白かり、苦しかり)

第二種「に」で終わる副詞+「あり」:ナリ活用(例:静かなり、丈夫なり)

第三種「と」で終わる副詞:タリ活用(例:堂々たり、確乎たり)

(橋本 1948 : 98)

この分類について、橋本(1948)は現代口語に用いられる形容動詞は文語の第二種のみである(ナリ活用から変化した「獨特の活用を有する一種の用言」(橋本 1948 : 128)である)と指摘している。第一種の形容動詞は、口語においては形容詞の活用形式の中に融合したと見られ、一方、第三種の形容動詞は、口語では、副詞と動詞「する」によって表れることを示している。つまり、口語のいわゆる形容動詞の範囲は文語よりずいぶん限られていると考えられる。

また、柏谷(1973)は、文語と口語の形容動詞に関するそれぞれの活用形式を表 1.1 と表 1.2 で示している。

[表 1.1 : 文語形容動詞の種類及び活用形式(柏谷 1973 : 123)]

活用の種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	すなほ なり	すなほ	－なら	－に・ －なり	－なり	－なる	－なれ	－なれ
タリ活用	窈窕 たり	窈窕	－たら	－と・ －たり	－たり	－たる	－たれ	－たれ

[表 1.2 : 口語形容動詞の種類及び活用(柏谷 1973 : 130)]

活用 種類	語幹	語 尾							語幹の用法	
		未 然 形	連 用 形	中 止 形	副 詞 形	終 止 形	連体形	仮定形	連 体 法	副詞 法
A類	静か	だろ	だっ	で	に	だ	な	なら	×	×
B類	精密	だろ	だっ	で	に	だ	な	なら	○	×
C類	無限	だろ	だっ	で	に	だ	な・の	なら	○	×
D類	色々	だろ	だっ	で	に	だ	な・の	なら	×	○
E類	特別	だろ	だっ	で	に	だ	な・の	なら	○	○
F類	当然	だろ	だっ	で	(に)	だ	な・の	なら	×	○
G類	神秘	だろ	だっ	で	(に)	だ	な・の	なら	○	×
H類	同じ	だろ	だっ	で	(に)	だ	×	なら	○	×
I類	こんな	だろ	だっ	で	に	だ	×	(なら)	○	×

(注 : ○ = 語幹の用法有り ; × = 語幹の用法無し)

表 1.2 における形容動詞の分類について、柏谷(1973)は研究者によっては形容動詞として認められないものがあると述べている。本研究では、口語形容動詞を中心に研究調査を展開するが、すべての形容動詞は連体形を持ち、連体修飾語になり得るという点で、H類とI類の語彙は形容動詞カテゴリーから外すことにする。

さらに、柏谷(1973)は吉沢(1932)と橋本(1948)の研究を踏まえて、形容動詞の特徴を以下のように示している。

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |   |             |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|-------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>A. 一語である</li> <li>B. 事物の状態・性質を表現する</li> <li>C. a. 用言に属する</li> <li style="padding-left: 20px;">b. 活用がある</li> <li style="padding-left: 20px;">c. 単独で述語<sup>10</sup>になり得る</li> <li>D. a. 活用形式が独特である (表 1.1、1.2 参照)</li> <li style="padding-left: 20px;">b. 副詞法・中止法を司る特別の形がある。</li> <li style="padding-left: 20px;">c. 終止形と連体形が形を異にする。</li> <li>E. a. 接続助詞「て」が付かない</li> <li style="padding-left: 20px;">b. 仮定形は単独で用い得る。</li> </ul> | } | 文語・口語形容動詞共通 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | } | 口語形容動詞のみ適用  |

(柏谷 1973 : 123-124)

### 1.3.3 語系による分類

日本語の形容動詞は語系によって、和語系、漢語系、外来語系、混種系の4種類に分類できる(原田 2001)。

- |   |                      |
|---|----------------------|
| { | 和語系: 静か(な)、穏やか(な)    |
|   | 漢語系: 便利(な)、有名(な)     |
|   | 外来語系: ハード(な)、スマート(な) |
|   | 混種系: ありがた迷惑(な)       |

語系による分類について、森田(2008 : 163)は「形容動詞はさまざまな語基に断定の助動詞『だ』の伴ったもの」であり、「和語とは限らず、むしろ語種の面では、漢語や外来語(洋語)に基づくもののほうが多い」と述べている。また、劉(1997)は『一万語語彙分類集』(1991)によると、「形容動詞総数 3223 語の中に、漢語系形容動詞は 2167 語あって、また、漢語混種形容

<sup>10</sup> 述語とは、「文中で事柄を述べたり、描いたり、説明したり、判断を加えたりするという機能を持っている語である。動詞、形容詞、形容動詞・名詞+コピュラが述語となる」(『新版日本語教育事典』2005 : 94)。



動詞は 178 語(漢和 68・和漢 107・漢外 3)あるため、漢語と関連があるもの(漢語系形容動詞)の総数は 2345 語ある」(劉 1997: 37)と述べている。

上述の 4 種類の形容動詞を中心に、書籍や雑誌などの頻出語数が当該カテゴリーに占める比率を国立国語研究所『分類語彙表』(1964)<sup>11</sup>を用いて調べた(付録一参照)。形容動詞カテゴリーに存在する頻出語を語系ごとに分類したものをまとめると表 1.3 になる。

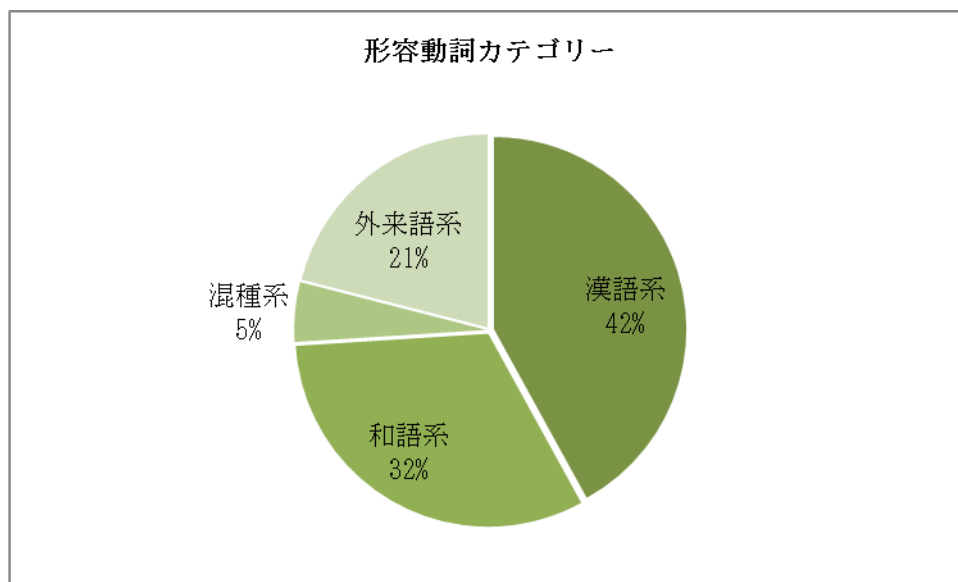
[表 1.3: 頻出形容動詞における語系による分類及びその比率]

品詞上の特徴 による分類	語系	語数	合計	全体に占める比率
「名・形動」	漢語系	233	425 語	55%
	和語系	127		30%
	混語系	30		7%
	外来語系	35		8%
「形動・名」	漢語系	4	26 語	15%
	和語系	5		19%
	混語系	0		0%
	外来語系	17		65%
「形動」	漢語系	126	387 語	33%
	和語系	124		32%
	混語系	18		5%
	外来語系	123		32%
そのほか	漢語系	56	143 語	39%
	和語系	57		40%
	混語系	2		1%
	外来語系	28		20%

<sup>11</sup> 『分類語彙表』とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス(類義語集)」である。「昭和 39 年(1964 年)に出版された初版『分類語彙表』(現在は絶版)は、現代日本語の本格的なシソーラスとして幅広く活用されてきた」(国立国語研究所「分類語彙表—増補改定版データベース」<http://www.ninjal.ac.jp/archives/goihyo/>)。それゆえ、本研究は 1964 年版の分類表を参照することにした。

合計	漢語系	419	981 語	42%
	和語系	313		32%
	混語系	50		5%
	外来語系	203		21%

表 1.3 は形容動詞カテゴリーの語彙メンバーを品詞上の特徴によって分類したものである。「名・形動」は形容動詞性より名詞性が強いメンバーを指し、「形動・名」は名詞性より形容動詞性が強いメンバーを指している。語数から見ると、「名・形動」と「形動」の語数がほかの分類より圧倒的に多く、頻出形容動詞カテゴリーの 9 割以上を占めていることが分かる。また、「形動」には漢語系、和語系、外来語系語彙の語数がそれぞれ 3 割近くあるのに対して、「名・形動」では漢語系語彙の語数が最も多く見られた。このことから、漢語系形容動詞は他語系形容動詞より名詞カテゴリーとの関連性が強いことが想定できる。さらに、981 語の頻出形容動詞カテゴリーに属する語の出現率は、図 1.3 が示すように、漢語系形容動詞は 4 割、和語系形容動詞は 3 割、外来語系は 2 割、混語系形容動詞は 1 割未満であった。



[図 1.3 : 頻出形容動詞カテゴリーにおける各語系形容動詞の割合]

図1.3から、上記の4種類の形容動詞が頻出形容動詞カテゴリーの全体に占める割合は四等分ではなく、漢語系のものが最も大きな割合を占めており、日本語の形容動詞の働きを果たすことに重要な役割を担っていることが分かる。この結果を踏まえ、本研究では、漢語系形容動詞を中心にして研究を進めることにする。

#### 1.3.4 構造上の特質による分類

北村(1991)は、語彙構造上の特質を用い、和語系と漢語系の形容動詞を中心にさらに細かく分類している。

##### (1) 漢語成分による

- A. 語頭に打ち消しの意味の成分をもつ
  - 「無」・・・無関係・無害など
  - 「非」・・・非凡・非常など
  - 「不」・・・不了件・不運など
  - 「未」・・・未完成・未曾有など
- B. 語頭に程度の甚だしい意味の成分をもつ
  - 「真」・・・真正・真実など
  - 「最」・・・最適・最悪など
  - 「特」・・・特殊・特有など
  - 「絶」・・・絶大・絶妙など
  - 「極」・・・極太・極上など
- C. 後ろに形式的意味の成分をもつ
  - 「質」・・・悪質・均質など
  - 「式」・・・新式・正式など
  - 「風」・・・今風・唐風など
  - 「様」・・・同様・如何様など
  - 「格」・・・適格・別格など
- D. 四字熟語によるもの
  - 一本調子・奇怪千万など

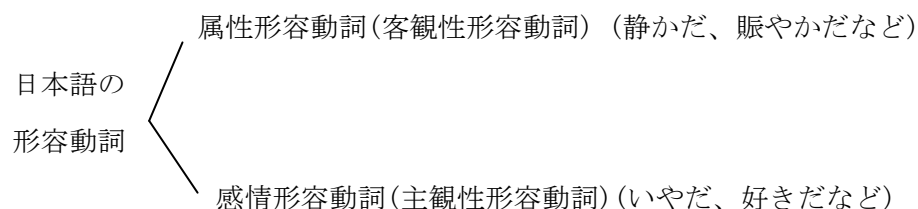
(2) 和語

- E. 畳語構造による擬態語  
ぎゅうぎゅう・フワフワなど
- F. 語頭に程度の甚だしい意味の成分をもつ  
「生」・・・生臭・生半可など  
「真」・・・まんまる・真っ白など
- G. 後ろに程度の意味を有する「接尾語」としての成分をもつ  
「め」・・・抑えめ・遅めなど

(北村 1991 : 131-132)

1.3.5 主観性・客観性による分類

何(1995)は日本語の形容動詞に備わる主観性と客観性という角度から、形容動詞を「属性形容動詞」と「感情形容動詞」に分類した。以下の図 1.4 を参照されたい。



[図 1.4 : 形容動詞の主観・客観性による分類(何 1995 : 16 の内容をもとに筆者作成)]

何(1995)によると、図 1.4 で示した「属性形容動詞」は「この町は賑やかだ」のように物事の客観的な性質、状態を表す。それに対して、「感情形容動詞」は主語による心理上の主観的な感情を表し、主観性形容動詞とも言えるため、「僕は田辺がいやだ」(何 1995 : 16)のように、主語の心理活動を表す対象語構造で多く使われると述べている。

また、応(1988)によると、連体形「な」と「の」が併用できる例とできない例を分析した結果、形容動詞の連体形「な」は断定の助動詞から生まれてきた<sup>12</sup>ので、連体形「な」が用いられる例文には、主観的な判断という印象があるのに対し、「の」は元々格助詞であ

<sup>12</sup> 連体形「な」の形成過程は 1.4.2 に参照されたい。

り、所有・所属を表すため、「な」に比べると客観的な叙述という印象があると述べている。つまり、修飾語の品詞性(名詞・形容動詞・副詞など)に関わらず、名詞を修飾するとき、連体形「な」が用いられる場合は主観的な見方を表し、連体形「の」が用いられる場合は客観的な叙述を表すということである。

### 1.3.6 形容動詞に特有の特徴

加藤(2003)は、形容動詞に特有の特徴として次のようなものを挙げている。

- ① 7つの活用形以外に、語幹が用いられることがある。
- ② 活用形はダ行とナ行が混じている。
- ③ 副詞的に用いる「ーに」の形がある。
- ④ 終止形と連体形が異なる。
- ⑤ 仮定形は「ば」がなくてもよい。
- ⑥ 「て」と合体した「ーで」という形がある。

(加藤 2003 : 87)

本研究でのいわゆる「形容動詞」の名付けは芳賀が最初であるが、形容動詞を一品詞として立てるか否かは学者によって、様々な意見が見られた。日本語教育学では形容動詞を「ナ形容詞」と呼び、形容詞の下位分類として扱っている。本研究では形容動詞の品詞論の是非には触れず、調査研究の便宜上、「形容動詞」という名称を用いる。また、形容動詞の種類は大まかに文語と口語に分けられるが、種類、文法活用法や形容動詞の特徴からみると、口語形容動詞は文語形容動詞より使用範囲が広く見られるため、本研究では口語形容動詞を研究対象とする。さらに、形容動詞は語系や構造などの角度によって、様々な分類ができることが分かった。

次節では、形容動詞がいつ誕生し、どのような変化を経てきたのかを見るために、形容動詞の歴史的変遷を追う。

## 1.4 通時的観点から見る形容動詞

上原(2003)は、形容動詞という品詞は古代日本語には数が極めて少ないと指摘している。その理由について、上原は次の2つの点を挙げている。まず、「形容動詞は開いたクラス<sup>13</sup>(open class)であり、実際現代語の形容動詞の大部分が漢語を含めた外来語・借用語である」。また、「大多数の形容動詞が和語、外来語に関わらず、もともと名詞であったこと、よって現代語の形容動詞の用法は性状概念へと、もの概念から意味変化を果たしたものである」(上原2003:69)という。

### 1.4.1 「だ」の成立から形容動詞の誕生へ

形容動詞は名詞と同じように、断定を表す助動詞「だ」を後接することができる。この助動詞「だ」の成立過程は形容動詞の誕生と強い関わりを持っている。本節では、阪倉(1966:378)、上原(2003:77-80)の研究を踏まえ、「だ」の成立過程と形容動詞誕生との関わりを明らかにする。

現代語で用いられている「だ」は古代語の「なり」が変化してできたものであるが、その古代語の助動詞「なり」は場所を表す助詞「に」と存在動詞「あり」の結合体である。

「 <u>に</u>	<u>あり</u> 」	→	「なり」	→	「だ」
場所を示す助詞	存在動詞		古代語		現代語

まず、「にあり」から「なり」の変化という助動詞の形式上の変化が起こり、その後意味上の変化が引き起こされた。

「にあり」 → 「なり」(助動詞の形式変化 → 意味変化)

#### A. 「にあり」の接続：位置表現から状態表現へ

例3：太郎、京にあり (位置表現)

Taro is in the capital.

<sup>13</sup> 「開いたクラス(open class)とは、新しい項目が絶えず加えられるために、メンバーが原則として限定されていないものである。英語では、動詞、名詞、形容詞、(そしておそらくは副詞も)はすべて開いたクラスである」。一方、「閉じたクラス(closed class)とは、メンバーが大体固定しているもので、限定詞、前置詞、接続詞などがそうである」(ウェイリー2006:63)。

例3の「にあり」は最初は場所・位置を表す表現であった。しかし、徐々に抽象名詞の後ろにも「に」の接続が可能になり、そのとき、「にあり」は位置表現以外に、例2のように、状態概念の表現機能を付加的に得た。つまり、「にあり」は場所名詞と抽象名詞両方に接続することが可能になり、位置表現と状態表現を表している。

例4：太郎、健康にあり (状態表現)

Taro is in (good) health.

その後、場所表現に助詞「に」がそのまま残る。一方、状態表現は助詞「に」を除いた残りの形式を担わされる。助詞をとることは名詞であることの証であるため、「に」の消滅は名詞を示す唯一のマーカを失ったことになる。

## B. 「に」の消滅

例5：太郎、健康なり (名詞文:もの概念)

Taro is (good) health.

ところが、例5による「に」の消滅はただ形式上の変化だけであり、意味上の変化まではしていないことが分かる。

最後に、残された「なり」が助動詞に形成されることによって、原初のももの概念から例6のような性状概念が生成された。

## C. 「だ」の形成と助詞の取り込み

例6：太郎、健康なり (形容動詞文:性状概念)

Taro is healthy.

つまり、「だ」の形成は、文法的機能が空間位置表現と状態表現の形式の同一性というメタファーによって引き起こされた結果であり、それをきっかけに、抽象名詞は形容動詞へと意味上の変化を遂げたのである。

#### 1.4.2 連体形「な」の形成

前節では、助動詞「だ」の形成が形容動詞の誕生となるきっかけであることを明らかにした。形容動詞と名詞の最も顕著な一つの違いは体言を修飾するとき、連体形「な」をとることである。また、形容動詞は修飾語の場合、通常、「語幹+連体形+被修飾語」という文型をとる(柳沢 1984, 野呂 1994, 田野村 2002, 原田 2001, 羅 2004)。

この連体形「な」も「だ」と同じように、文法上の変化を経て現代語になった。本節では、上原(2003)の研究をもとに、「な」の形成過程を明確にする。すでに述べた助動詞「だ」の形成と似ているが、連体形「な」の古代語は「なる」である。この「なる」は名詞や形容動詞に接続できる。また、「なる」よりさらに古い表現は「にある」であり、最初は存在表現として用いられた。

「 <u>にある</u> 」	→	「なる」	→	「な」
存在表現		古代語		現代語

上原(2003)によると、形容動詞の表現における助動詞「だ」及び連体形「な」は存在表現と同一の形式を有する。それは「形容動詞が空間を根源領域とするメタファーによる拡張によって成立したもの」(上原 2003 : 81)だからである。この現象は形容動詞が統語的に名詞と著しく類似していることと深く関係していると考えられる。

#### 1.4.3 語形上の変遷

村田(2001)は平安初期から中期の作品において、「～カナリ」と「～ゲナリ」で接続する和語系形容動詞の出現率を調べた結果、「22 作品全体では、異なり語数は 1,089 語で、その内ゲナリ型が 392 語で 36 パーセント、カナリ型が 152 語で 14 パーセント」(村田 2001 : 19)であり、「～カナリの比率が高く、それ以降の作品では～ゲナリは語の種類は増加するものの、使用率では～カナリを凌ぐには及ばず、依然として～カナリの方が優勢である」(村田 2001 : 16)と述べている。また、「このような使用状況の差異が現れた背景」に関して、「両形容動詞の歴史性の違いが大きく関わっている」と指摘している。つまり、～カナリは「すでに前時代に存在する同じ語基をもつ～カニという形態の情態副詞にアリが後接し、それが縮約を起こして成立した副詞分出型の語が元来のものであるのに対して、～ゲナリは平安時代に入ってから新しく形成された新造語型の語彙であり、造語法におけるこうし



た歴史性の違いが両者の使用状況の差異として現象化したもの」(村田 2001 : 16)であることを示している。また、村田(2005 : 248)は、「形容動詞(ナリ活用)の成立」は、形容動詞が「形容詞本活用とは異なって活用が整備されており、形容動詞が中古に飛躍的な発達を促す背景には、この点も重要な意味をもっていたに違いない」とも述べている。

#### 1.4.4 品詞性の変遷

永澤(2011 : 147)は漢語「～な」型形容動詞 700 語の変化を対象に、国立国語研究所「太陽コーパス」(近代語コーパス)を用いて調べた結果、近代期に「名詞性質を有する『-の』型と『-なる』型が衰退し」、代わって『-な』型の形容詞用法が伸張した」ことが明らかになったことを示している。特に、1917-1925 年の間に「～な」型の増加率が飛躍的に高まったことが分かった。また、「この 1917-1925 年という年代区間は『-さ』型の漢語名詞用法の出現数が飛躍的に増加する時期と重なる」と述べている。この現象について、永澤は、この時期、「漢語は原初的な無標の名詞として用いられる段階を脱し、多くが和語の形容詞に特化した接辞『-な』や『-さ』のような品詞マーカ―を具え、日本語への同化をより進めたものと見る事ができる」と指摘している。

本節では、形容動詞の誕生から、連体形「な」、形容動詞の語形及び品詞性を中心に、形容動詞の歴史の変遷を考察した。助動詞「だ」の形成と強く関わりが見られたことから、助動詞「だ」の成立が形容動詞誕生のきっかけになったということが言えよう。また、連体形「な」の形成過程は「だ」の形成過程と類似し、両者とも空間を根源領域とするメタファーによる拡張によって成立したものである。さらに、形容動詞はもの概念から性状概念への意味変化を通し、抽象名詞から変化してきたものである。この点については、品詞性の変遷による永澤(2011)の研究から証拠を得られた。特に、1917-1925 という年間は、「漢語は、品詞を明示する形式を伴わない原初的な名詞として日本語に取り込まれた段階を脱し、形容動詞に特化した和語接辞『-な』といったマーカ―を備えた」(永澤 2011 : 147)ということである。すなわち、この年間は抽象名詞から形容動詞への変化が最も盛んであった時期であった<sup>14</sup>。但し、変化の程度は語彙ごとに差が残ったため、現代になると、大量の形容動詞は名詞カテゴリーと明確な境界を持たず、辞書には「名・形動」のように載

<sup>14</sup> 永澤(2011)は、なぜ 1917-1925 という年間に、多くの抽象名詞が形容動詞へ変化したについては言及していない。

せられている。つまり、形容動詞は従来古代日本語固有のものではなく、長い年月及び様々な変化を経て、ようやく一品詞に至ったものであるが、名詞カテゴリーとの曖昧さから、変化の不完全性も同時に現れたと思われる。

形容動詞は抽象名詞から変化したものであることが明らかになったが、形容動詞という品詞は文法上、具体的にどのように活用できるかという疑問を解くため、次節では、非常に重要な部分である「語幹」から、形容動詞の文法機能を考察する。

### 1.5 形容動詞の漢語語幹

本節では、形容動詞における語幹の概念、文法機能及び種類を明確にした上で、名詞との異同を検討する。

『広辞苑』(1998 : 931)によると、「語幹」とは「日本語において用言の活用語尾が付く基幹部で、例を挙げると、『落とす(落す)』の『おと』、『くろい(黒い)』の『くろ』などがある」。

日本語の中で、語彙的に貧弱な形容詞を補足するために、カリ活用・ナリ活用・タリ活用形容動詞が登場し、発達した。その中で、タリ活用形容動詞の語幹はすべて漢語であり、ナリ活用の語にも漢語が多い。漢語は外来語である。日本語の中で、外来語は、まず体言としての性格を与えられる。したがって、これらタリ活用・ナリ活用の語幹は体言であったといえる。また、形容動詞の語幹がほかの活用形式の持っていない重要な構文上の機能を果たしていることは注目すべきことであり、形容詞の語幹以上の役割を持っていることがこれまで指摘されている(柏谷 1973, 原田 2001)。

松下(1975 : 108)は、「名詞と形容動詞は、体言と用言」に区別できるが、「形容動詞の語幹に」、「健康、自由、幸福」などのように「名詞性のあるものは、名詞とある程度の共通性」があり、これこそが「名詞と形容動詞の文法的なかわりあい」であると指摘している。

加藤(2003 : 88)は、「形容動詞の語幹は名詞と性質がよく似ていること」から、形態論的には、連体修飾で連体形「な」を適用すること以外には、「むしろ、名詞との共通点の方が多い」こと、また、「形容動詞の語幹」は名詞だけではなく、「副詞としても振る舞う」ことがあるのが「問題を複雑にしている」と述べている。

劉(1983)は、形容動詞の語幹の独立性は動詞の語幹より甚だしく強く、文語ではあまり用いられていないが、口語では語幹が語尾と分離された用法が多く見られる。語幹は形容

詞と同じように、程度副詞で修飾することができ、また、独立して文中で述語になれることを示している。

形容動詞の語幹が単独で使用されることを説明するため、柏谷(1973:158)は以下の例を挙げている。

折に触れては歌俳諸に想を述べ、香茶の湯に<sup>しずか</sup>静を愛されては、ますます感服なり。  
(坪内逍遙『当世商人氣質』)

私には「緑園の天使」にテアラアの天恵の美が花開かうとして匂ひあふれる新鮮が印象に長く残っている。

(川端康成『新鮮』)

柏谷(1973)は、上記の「静・新鮮」などの語幹を一語として認める必要があることを示している。また、飯豊(1973)は、形容動詞の語幹と名詞との違いについて目立った特徴として次のように指摘している。

- A. 名詞は「が」を帯びて主語になり得ることをはじめ、他の格助詞を帯びることができる  
(机がある・机を動かす)
- B. 名詞は連体修飾語を上接する  
(美しい花・寝ている赤ちゃん)
- C. 名詞は格助詞「の」を帯びて連体修飾語となる  
(永遠の愛・唯一の要求)
- D. 形容動詞語幹は連体形「-な」の形で連体修飾語となる  
(静かな海・静かな声)
- E. 形容動詞語幹は接尾語「さ」を付けて名詞となる  
(静かさが漂う)
- F. 形容動詞(語幹)は連用修飾語を上接する  
(ずいぶん静かだ)
- G. 形容動詞は「-に」の形で副詞的修飾語になる

(静かに働く)

(飯豊 1973 : 196-197)

劉(1997 : 64)は、漢語系形容動詞の語幹は特に「独立性が強いので、しばしば独立して使われる」こと、また、「語幹の後ろに他の品詞を付けることによって、文、或いはセンテンスの中で、ものを形容する役割を果たす場合もよくある」ため、「形容動詞と他の品詞との間に密接な関係も出てくるようである」と指摘している。

例えば、「綺麗」という漢語系形容動詞の語幹は独立した言葉として、「綺麗な部屋」、「綺麗な人」のように、連体形「な」の挿入によって、名詞を修飾することができる。また、「この部屋は綺麗だ」のように直接コピュラを加え、述語にもなれる。

趙(1994)は一部の形容動詞は、漢語系形容動詞として語幹の独立性が強いため、名詞としても使えると述べている。

例 7 :

危険	短気	面倒	質素	縦順
実直	ぜい沢	ばか	不快	厄介

(趙 1994 : 4)

森田(2008 : 188)は、「形容動詞の語幹には、和語のほか、漢語や外来語(洋語)」もなりうると述べている。その上、「その漢語を形容動詞化するには、『～に/～だ/～な』の活用語尾を添えて『勇敢に～』『冷静だ。』『臆病な～』とする方法のほかに、漢語語基『的/式/風』などの力を借りて、形容動詞化する手もある」と述べている。つまり、「『的』や『式』は漢語名詞を形容動詞語幹に変える働きを備えている」ということである。

和語と漢語系形容動詞の語幹における意味上の区別について、飯豊(1973 : 193)は、語幹と「そうだ」との共起の可否を基準に、「肌寒そうな天気」とはいうが、「寒冷そうな天気」とはいわず、「にぎやかそうだ」といって、「喧騒そうだ」とはいわないなどの例を挙げ、和語系形容動詞の語幹は「自然の関係・現象」を表すのに対して、漢語系形容動詞の語幹は「人間の精神・行動・性質」などを表すことを指摘している。

### 1.5.1 形容動詞と形容詞の語幹の異同

張(2011)は、形容詞と形容動詞における語幹の使用上の異同を、以下のように説明して

いる。

A. 語幹の類似点

a. 語幹の独立性が両方とも強い

例 9 :

- ① あ、いた(痛)。
- ② おお、さむ(寒)。
- ③ このネクタイは素敵。
- ④ 旅行はいや？

(張 2011 : 626)

張(2011)は、上述の例を用いて、以下のように、形容詞と形容動詞の語幹は両方とも語尾の「い」と「だ」から分離され独立して用いられると主張している。

b. 一部分の形容動詞と形容詞の語幹は同じである

例 10 :

暖かだ — 暖かい    意味悪だ — 意地悪い    黄色だ — 黄色い  
気軽だ — 気軽い    毛深だ — 毛深い    手荒だ — 手荒い

c. 語幹に「すぎる」と「そうだ」が後接できる

例 11 :

- ① 若いころ、よく衆生の恩など言ふ語を教はつたものだが、その用語例に包含させては、ちょっと冷淡過ぎる気もする。折口信夫『聞悪の創造』
- ② ところが水素の混合の割合があまり少な過ぎるか、あるいは多過ぎると、たとえ火花を飛ばせても燃焼が起らない。寺田寅彦『流吉輩語』
- ③ 特務曹長「それは甘そうだ。」曹長「食べるというわけには行かないものがありますか。」宮沢賢治『饑餓陣営一幕』

d. 語幹に「らしい」が後接できる

例 12 :

静からしい

B. 語幹の相違点

- a. 形容動詞の語幹は文末が述語になれるのみならず、文中でも用いられるが、形容詞にはこのような使い方がない。

例 13 :

- ① 赤ちゃんもご立派、お嬢さんもご立派です。
- ② 波も静か、風も穏やかならしい。

- b. 形容動詞の語幹と語幹の間には接続語を入れることが可能であるが、形容詞にはこのような使い方がない。

例 14 :

- ① 頭脳は明晰そして穩健です。
- ② 「貴船の安全且つ幸福なる航海を祈る。」

(張 2011 : 626)

張(2011)は、以上のように、形容詞と形容動詞の語幹には類似点だけでなく相違点もあり、それぞれ特徴が備わっているため、形容動詞を形容詞として認識するのは不適切であると主張している。

### 1.5.2 形容動詞の語幹と名詞との異同

漢語系形容動詞の語幹と名詞の区別の問題は議論されることが多いが(桜井 1964)、その異同については、今のところ国文法では、以下の様に指摘されている。

- A. 形容動詞語幹には主格や他の格助詞がつかない。しかし、名詞にはつく。
- B. 形容動詞語幹は〈～ナ〉の形で連体修飾語となる。しかし、名詞は〈～ノ〉の形で連体修飾語となる。
- C. 形容動詞語幹は〈～ニ〉の形で連用修飾語になる。しかし、名詞は連用修飾語にならない。
- D. 形容動詞語幹は連体修飾語をとらない。しかし、名詞はとる。
- E. 形容動詞語幹は接尾語〈サ〉をつけて名詞となる。
- F. 形容動詞語幹は連用修飾語の被修飾語となる。

(原田 2001 : 110-111)

また、「ーさ」という接尾語が純粋な形容詞と形容動詞には添加されるが、名詞や動詞には添加されないという指摘もある(影山 1993)。

- A. 形容詞+さ： 美しさ、暑さ、醜さ、怖さ、広さ、力強さ、焦げ臭さ
- B. 形容名詞+さ： 穏やかさ、活発さ、醜悪さ、巨大さ、利発さ、元気さ、丁寧さ
- C. 名詞+さ： \* 名詞さ、\* 巨人さ
- D. 動詞+さ： \* 食べさ、\* 踊りさ、\* 狂いさ

影山 (1993 : 25)

張(1995)は、接尾語の「さ」、「み」、「め」、「げ」は、必ずしもすべての形容詞と形容動詞の語幹に後接できるわけではなく、仮に、同じ形容詞や形容動詞の語幹に後接しても、それぞれの接尾語が表している意味は異なると述べている。各接尾語の文法用法及び特徴は表 1.4 のように示される。

[表 1.4 : 接尾語の文法用法及び特徴]

接尾語	形容詞	形容動詞	例	特徴
さ	◎	○	親切さ・明るさ など	物事の状態、性質、程度、感情、感覚などを表す
み	○	△	高み・深み・弱み・ 甘み・痛み・青み・ 厚み・面白みなど	「高い・深い」などの形容詞に後接して、場所・ところを表すことが可能である。また、「～のような感じ・感情・味」のように、物事の抽象的な属性を表す
め	△	×	長め・短め・小さ め・濃いめ・派手 めなど	数量・程度に関わる語彙のみに後接でき、物事の量・程度を表す

げ	○	×	苦しげ・楽しげ・ 懐かしげ・悲しげ など	主に形容詞の語幹に後接して、当該語彙 を形容動詞に変更させる
---	---	---	----------------------------	-----------------------------------

(注：表 1.4 は張 1995 の内容をもとに筆者が作成したものである。◎：すべての語彙に後接可能；○：大多数の語彙に後接可能；△：少数の語彙に後接可能；×：後接不可)

表 1.4 から、接尾語「め」と「げ」は、形容詞のみに後接できるが、「さ」と「み」は形容詞のみならず、形容動詞の語幹にも後接できる。また、「み」に比べ、「さ」の方は大多数の形容動詞の語幹に後接できることが分かる。

加藤(2003)は、「さ」という接尾語は、形容動詞が示す名詞らしさの「段階性と関連している」(加藤 2003 : 152)と述べ、形容動詞は原則として「さ」が後接可能であるが、すべての形容動詞に当てはまるものではないと指摘している。

例 15 :

- ? 真っ赤さ
- ??? 高価さ
- \* 健康的さ

(加藤 2003 : 152)

すなわち、接尾語「さ」は名詞化<sup>15</sup>辞でもあり、その接続は段階性<sup>16</sup>と関連していると考えられ、形容動詞では、語彙メンバーの名詞性が強くなるにつれ、「さ」が後接しにくくなることが分かる。

以上の研究から、漢語系容動詞の語幹は形容詞の語幹より独立性が著しく強いと思われる。但し、漢語系容動詞の語幹は中国語の漢語と語形が同じであるが、意味・用法が異なる場合、ズレが生じる可能性が高いと考えられる。

では、形容動詞が名詞を修飾するとき、後接する連体形は「な」のみなのであろうか。その疑問を次の節で解明する。

<sup>15</sup> 「本来名詞でないものが名詞(のようなもの)に変わること」を「名詞化」という(上原 2010 : 24)。例えば、「巧妙」対する「巧妙さ」、「独特」に対する「独特さ」などが挙げられている。

<sup>16</sup> 「連続的な評価軸が存在し、対義語間に中間段階が想定されるような性質のこと」を「段階性(gradability)」という(加藤 2003 : 109)。



## 1.6 連体形「な」と「の」

松崎(1977 : 100)は、形容動詞の連体形「な」は、「形容動詞を名詞あるいは形容詞から区分する最も特徴的な形である」と述べている。しかし、形容動詞が名詞を修飾する場合、その連体形は「な」だけではなく、「な・の」両方が使える場合も珍しくない。本節では、連体形「な」と「の」の相違を形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーが示す統語的特徴及び意味的特徴から明らかにする。

### 1.6.1 統語的特徴による比較

桜井(1964 : 42)は、『一の』『一な』のゆれの中には、品詞問題がからんだものも多い」と指摘した。

柳沢(1984 : 26)は、形容動詞の連体形の選択は「文中でその語が持つ役割、概念及び語の位置に影響され、日本人の間でもだいぶ個人差がある」と指摘している。また、形容動詞の漢語系語幹には「乱暴」、「失礼」、「退屈」のように連体形「な」のみが適用できるものと「精巧」、「忠実」、「平行」のように連体形「な」と「の」両方の適用が可能なものがあり、当該形容動詞の多くは後者であると述べている。さらに、形容動詞の連体形「の」は場合によって使えるときと使えないときがあるが、「な」は必ず使用できるとも述べている。

上原(2003)、加藤(2003)、李(2010)は、連体形「な」と「の」の使用にはゆれがあり、どちらを用いるかは明確に決められず、「ありがちの」「ありがちな」のようにいずれも許容され、「どちらをとっても特に両者の間の目立った意味上の差異の感じられないものがある」(上原 2003 : 55)と指摘している。また、「個人差や歴史的変化で『な』と『の』の使い方が変わるものもある」(上原 2003 : 55)とも述べている。

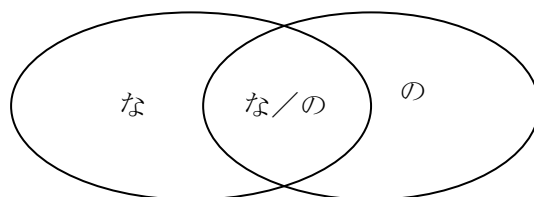
鈴木(1986 : 495)は、形容動詞の語幹や副詞で物事の「情態性(サマ)の概念」を表すものを「情態性体言」と呼んでいるが、この情態性体言を連体形「な」か「の」かで分けると、以下の「B」で示している3種類に分類されると指摘している。それに対して、物事の「実体性(モノ)の概念」を表すものは、「実体性体言」と呼ばれ、連体修飾では以下の「A」のように、連体形「の」のみが現れると述べている。実体性体言と情態性体言を連体修飾について表すと以下のようなになる。

- A. 実体性体言＋ノ
- B. ①情態性体言＋ノ  
②情態性体言＋{ナ/ノ} ③情態性体言＋ナ

(鈴木 1986 : 500-501)

つまり、連体修飾で「な」が現れるということが、情態性体言であることの十分条件ということになる。一方、実体性体言は「な」が現れることが許されないので、連体修飾に「の」を用いるということは実体性体言であることの必要条件になると解釈される。しかし、両者の区分は容易ではない。このことについて、鈴木(1986)は、実体性体言と情態性体言との区分は明確でなく、連続的なものであると指摘している。

また、羅(2004)は、連体修飾構造における連体形「な」と「の」の区分から、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーにおけるその曖昧性について、図 1.5 のように示している。



[図 1.5 : 連体形から見る形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリー (羅 2004 : 72) ]

図 1.5 から形容動詞の連体修飾語には連体形「な」が適用できることが分かる。それに対して、名詞の連体修飾語には連体形「の」が用いられる。このことから、名詞のカテゴリーに近づくに従い、形容動詞の連体修飾における連体形「な」と「の」の選択にも曖昧性が強くなることが予想される。

楊(2010)は、『岩波国語辞典』を用いて、連体形「な」と「の」の使用にゆれが見られた形容動詞を抽出した上で、それらの語を国立国語研究所の KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」で検索し、「な・の」の併用を当該語彙の品詞性、語源との関係などの面から総合的に分析した。その結果、「な」の使用率が 90%以上のものは「な類」、10%以下のものは「の類」、その間にあるものは「な・の類」として分類された。

田野村(2002)は、形容動詞の連体形「な」と「の」の選択は「一見単純そうであるが、種々の要因の絡んだやっかいな問題である」(田野村 2002 : 207)と述べている。また、田

野村(2002)は連体形「な」と「の」の選択に関与する要因として、次の3つを挙げた。

第1に、「な/の」の選択には、形容動詞そのものの種類や性質によって決まると  
いう側面がある。

第2に、形容動詞連体形が現れる文脈に選択が依存しているという面もある。

第3に、「な/の」の選択には時代差、文体差、個人差などの要素も関わっている。

田野村(2002:207-208)

原田(2001)によると、「～の」による名詞修飾は、本来は、前項の語彙が後項の語彙とどのように関係していくかを示す広範な関係提示を表す機能があるが、漢語語幹の「～の」の意味・用法はそれとは異なっているという。漢語系形容動詞の「～の」の用法は、「が」「を」などの格助詞が付く用法を有することや歴史的に外来語として導入された時の形態としての用法から考えても、名詞に由来するものと見られたため、漢語系形容動詞は元々、積極的に属性を表さない名詞的な語であったことに拠ると考えられる。

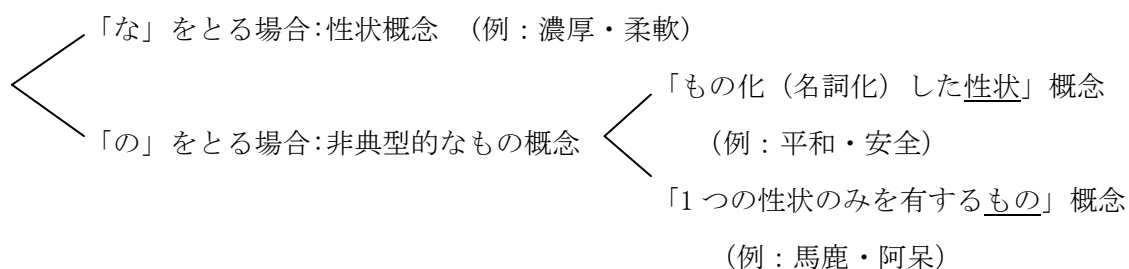
沈(1983)は連体形「な」と「の」の使用について、「A+B」という連体修飾モデルの中で、AがBの属性を説明する場合、「AなB」が多く用いられると述べている。一方、Aに備わる名詞性が強く、また、Bの属性を説明していない場合、「AのB」という形式が多くの場合使われると指摘した。そのため、連体形「な」と「の」の使用は当該語彙が形容動詞か名詞という品詞上の判断だけでは不十分であり、修飾語が被修飾語の属性を表すか否かが判断のポイントになると述べている。

松下(1975)と奥津(1978)は「自由の女神」と「自由な女神」の区別を説明している。前者の「自由」は名詞と連体形「の」との結合体であるため、「形容動詞性をもつ名詞」(松下1975:108)ということになる。「自由の女神」の意味は、「自由の象徴としての女神」(松下1975:108)ということになる。一方、後者の「自由」は形容動詞であり、「『自由な』は形容動詞の連体形」であるため、「述語性」があると指摘した。また、松下は「『自由』は形容動詞とすると、もっとも名詞性の強い部類」に(松下1975:109)属すると主張している。さらに、奥津(1978:122)は同じ語彙であっても、名詞的な用法か形容動詞的な用法かを区別しながら、連体形「の」か「な」を「使い分けるものもあったし、そうでないものもあった」と述べている。

## 1.6.2 意味的特徴による比較

上原(2003)によると、物事の属性や状態を修飾するという意味で、形容動詞は基本的に連体形「な」をとると述べている。また、上原は日英語対訳の方法で、英語の形容詞に対応する「の」をとる形容動詞は程度副詞「『もっと』と共起しにくい」(上原 2003 : 64)傾向があると指摘している。その理由について、上原は、「な」と「の」の区別は、その連体形が「付加する語彙」の名詞らしさの「程度性が鍵になっている」(上原 2003 : 65)と述べている。すなわち、連体形「の」をとる語彙の示す概念は名詞らしさの程度性が高く、対応する英語が比較級になりにくい場合が多いため、形容詞的概念から少し離れたものであるということである。

また、連体形「な・の」両方とも後接できる語彙に関して、上原(2003)は、名詞は「もの概念」を表し、一方、形容詞は「性状概念」を表すことを区分した上で、「な」をとるか、「の」をとるかによって、表している概念の違いを説明している。



上述の非典型的な「もの概念」から「性状概念」への変化について、上原は「真剣」という語を例にして、以下の用法を挙げている。

例 16 :

真剣	(本物の剣) (名詞)	⇒	「まじめ、本気」(形容動詞)
真剣勝負	(真剣を使った果し合い)		
真剣の勝負	(真剣を使った勝負)		
真剣な態度	(まじめな態度)		

(上原 2003 : 70 の内容をもとに筆者作成)

その具体的な変化の具体的なプロセスは以下の通りになる。

意味構造の中心／プロファイル「剣」という「もの」があり、その周辺／背景に様々な場面によって想起され得る「危険である」「高価である」といった属性などの性状の意味が(それぞれそのスケールとして)存在するのである。その全く周辺の意味の一つである「まじめ、本気」という心的態度を表す意味が前景化したわけであるが、それはやはり剣道において「剣」に「真」がついていることで練習用の「竹刀」と対比され、「竹刀」を使用している場合とは異なる「真剣」を使用している場合の使用者の心的態度、真剣さ(「さ」に注意)が焦点化されたからであると考えられよう。「真剣勝負」が「真剣を用いて行う果し合い」から「命がけで行う勝負」という意味に転換し、柔道やトランプなど剣を用いない競技にも使われるようになり、また、「な」を伴った「真剣な態度」という使い方が可能になったのである。

(上原 2003 : 70-71)

つまり、抽象名詞はもの概念を「背景化」した上で性状概念を「前景化」にするものであり、「中には典型的なもの概念を表す名詞から意味構造の大規模な再構築を経て性状概念(形容動詞)化することもある」(上原 2003 : 70)。

加藤(2001)は、連体形「な」と「の」の区別を意味的観点から考察し、「学校文法は形態に重点を置いているため、あまり考えこまなくても自動的に分類できるという利点」があるが、「意味が形態と連動している場合には、うまくいかなくなること」があり、「形容動詞でも名詞でも、どちらでもいいということ」(p. 110)で、「名詞を一時的に形容動詞として使う傾向」(p. 111)も見られると指摘している。

また、加藤(2001 : 111)は、一般に連体形「な」か「の」の適用で意味が違う場合は、使い分けが見られることも示し、「～の」は修飾語の実体を表し、一方、「～な」は修飾語の性状を帯びた属性を表すと述べている。例えば、「ピーチの酒」は「ピーチ」を材料にして作られた酒を意味するが、「ピーチな酒」というのは「ピーチという風味かイメージ」を意味する。しかし、「意味の差が明確でないケース」もある。例えば、「透明の傘」と「透明な傘」は両方ともビニールで作られた傘のことを示している。

以上の研究から、「な」と「の」は連体形として、示している意味に差が感じられる場合と感じられない場合があることが分かる。

### 1.6.3 連体形「な」と「の」の区分

鈴木(1980)や村木(1998)は、名詞の連体機能は、主に関係規定的(「なにの」、「だれの」に対応)であるのに対して、形容動詞のそれは常に属性規定的(「どんな」に対応)であるという違いがあると述べている。本節では、加藤(2003)の研究をもとに、連体形「な」と「の」を区分する基準をまとめる。

まず、「XのY」という形において、「X」が「抽象名詞であるか具体名詞であるかを問わず」(加藤 2003 : 97)、加藤は次のように分けている。

XがYの《属性》と解釈できる場合 … 「の」は叙述的な「の」<sup>17</sup>

(例： 幸運な女神、平和な国など)

XがYの《属性》とは解釈できない場合 … 「の」は叙述的ではない「の」<sup>18</sup>

(例： 幸運の女神、平和の使者など)

(加藤 2003 : 97)

この分類から、「XのY」という形容表現には、叙述的な「の」と叙述的でない「の」の2種類が存在していることが分かる。ちなみに、本研究におけるいわゆる連体形「の」はすべて叙述的なものである。

連体形「な」と「の」の区別が難しいことは加藤以外にも、多くの先行研究で指摘されている(豊田 1980, スワン 1994, 曲 1995, 村松 2000, 羅 2005, 劉 2010, 譚 2011, 佟 2012, 覃 2013)。加藤(2003 : 99-102)は、「相対形容」と「絶対形容」という概念でその差異を説明している。すなわち、連体形「な」は相対形容として、「段階性・程度性を想定できるものになっているということであり」(加藤 2003 : 99)、一方、連体形「の」は絶対形容として、「そうであるかないか、ある表現で表現すべき範囲に含まれるかどうかということだけに言及するもので、程度や段階性が想定されない」(加藤 2003 : 99)と述べている。つまり、連体形「な」と「の」を区分する基準は程度や段階性が想定できるか否かになる。

この基準の適切性を確かめるため、加藤(加藤 2003 : 101)は「かなり」などの程度副詞

<sup>17</sup> 『XのY』が『XであるY』とパラフレーズできる場合、『XのY』の『の』を叙述的な『の』と呼ぶ(加藤 2003 : 97)。

<sup>18</sup> 『XのY』をXとそのYと書き換えて不適格にならないものについて、『XのY』の『の』を叙述的でない『の』と呼ぶ(加藤 2003 : 97)。

を用いて、連体形「な」と「の」との適格性を調べた。その結果、連体形「な」は程度副詞との「親和性が高く、連体形「の」を「程度副詞で修飾しても不適格とまでは言えない」が、その「許容度の違いを絶対形容と相対形容の対立概念である程度説明可能である」と述べている。

上述の分析を踏まえて、加藤は連体形「な」と「の」の区別を表 1.5 のように示している。

[表 1.5 : 形容表現の段階的分類(加藤 2003 : 102)]

X な Y	X は Y の(属性)を表す。程度表現を意味する(相対形容)になる	
X の Y	「健康」「不真面目」など叙述的でない「の」を用いるもの	X は Y の(属性)を表すわけではない
	「問題」「大幅」「正式」など叙述的な「の」を用いるもの	X は Y の(属性)を表す。程度表現になるかどうかは(絶対形容)の制約の違いによる

表 1.5 から、連体形「な」はおおよそ物事の属性を表す表現であるのに対して、連体形「の」については、属性を表すものとそうでないものが混在していることが分かる。加藤は形容動詞性が強く見られるのは前者であると示し、「《属性》を表すものの中には、連体ノ形が段階的(gradable)に使えないものと段階的に用いることについてかなり許容度の高いものが見られる」(加藤 2003 : 102)と指摘している。

以上の研究によると、形容動詞の語幹は単独で活用できるほど独立性が強いため、形容詞の語幹以上の役割を持っていることが分かる。特に、漢語系形容動詞の語幹は形式上中国語の漢語と同じであるものが多く見られるが、意味的と統語的用法が異なる場合、ズレが生じる可能性が高いと思われる。また、形容動詞の語幹の大半は漢語であるため、名詞と混同されやすいが、格助詞と共起せずに、連体形「な」と共起する、語尾に「さ」が付くと名詞化できるなどの点は名詞との顕著な違いである。但し、名詞を修飾するとき、形容動詞に後接する連体形を実際に考察すると、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーに名詞カテゴリーとの境界が不明確であるゆえ、名詞的機能がまだ残存しているものがある

る。具体的には、形容動詞に後接する連体形は「な」のみならず、「な・の」の併用も見られた。また、連体形「の」をとる語彙の示す概念は名詞らしさの程度性が高く、形容詞的概念から少し離れたものであり、歴史的変遷からみると、そのような語彙は名詞に由来するものである。さらに、連体形「な」と「の」を意味的観点から比較すると、修飾語そのものの属性か実体のどちらかを示すとの違いが存在するが、語彙によって、意味の差が明確でないケースもあることが分かった。これも名詞カテゴリーとの曖昧さによるものが意味に反映した結果ではないかと考えられる。

形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーとの境界の曖昧さを統語的観点及び意味的観点から考察したが、形容動詞というカテゴリーにおいて他品詞との境界線をどのように引くのか、また、そのカテゴリーがどのような特徴を持つかに関しては、次節で説明する。

### 1.7 形容動詞の特殊性

多くの研究では、形容動詞はほかの品詞より特殊であると指摘されている。本節では、寺村(1982)、三枝(1996)、上原(2003)、村田(2005)、李(2010)の研究を参考にしながら、その特殊性を説明する。

寺村(1982 : 74)は品詞間の連続性を主張し、「日本語の場合、実質語<sup>19</sup>の分類は」次の図1.6のように、「境を接して隣り合っている4つの領域として理解すべきもの」と述べている。

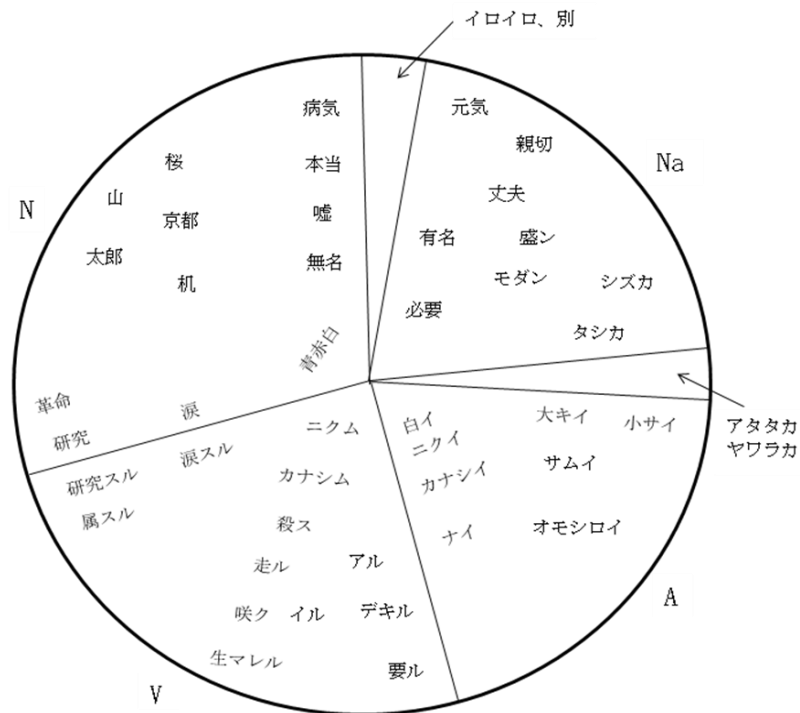
図1.6から、寺村(1982)は、品詞に色をつけて形容動詞の性質を以下のように示している。

Nをかりに青色、Vを赤色、Aを黄色とすると、Naは緑色ということになる。三原色のそれぞれの中央に、最もそれらしい特徴をもった語が並んでおり、隣りの色との境界に近づくに従って隣りの色彩が少しずつまざってくるように、隣りの品詞の性質を少しずつ共有する度合の高い語が存在する。それは虹の色が連続しつたおいくつもの異なる色が並んでいるものとして認識されると同じことであろう。

(寺村 1982 : 74-75)

<sup>19</sup> 「機能語に対して、物事を指し示す実質的な内容を表す語は実質語（内容語とも言う）と呼ばれる。『これは彼からの手紙です』という文は、『は・から・の・です』が機能語、『これ・彼・手紙』が実質語である（『新版日本語教育事典』2005 : 571）。





[図 1.6 : 品詞間の領域(寺村 1982 : 74)]

三枝(1996)は、形容動詞と形容詞及び名詞との連続性を表 1.6 のように示している。

[表 1.6 : 形容動詞と形容詞及び名詞の連続性]

	「い」を伴う	「な」を伴う	「を」を伴う	「の」を伴う
あたたか	○	○	×	×
静か	×	○	×	×
健康	×	○	○	○
病気	×	×	○	○
特別	×	○	×	○

(三枝 1996 : 97 の内容をもとに筆者作成)

表 1.6 から、形容動詞は名詞だけではなく、形容詞とも明確な境界線が引きにくいこと

が分かる。三枝(1996)は、格助詞及び連体形「の」との共起の有無、また、「い」形と「な」形の後接を名詞、形容詞と形容動詞を区別する基準にして、三者における統語上の連続性を主張している。

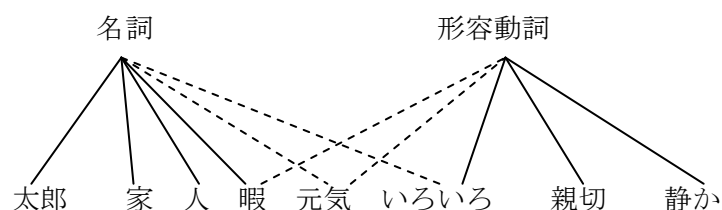
上原(2003 : 52)は、ほかの品詞に比べ、「形容動詞は形態的には名詞に近く、意味的には形容詞に近い」ということを、以下のように述べている。

述定機能にあるとき、形容動詞は名詞とともに有形の形態素の「だ」をとるのに対して、形容詞はその「だ」を必要としない。また修飾機能にあるとき、名詞、形容動詞はともに有形の形態素であるそれぞれ「の」「な」を必要とするが、形容詞はそれらを必要とせず、そのまま被修飾名詞の前に置かれるわけである。

(上原 2003 : 53)

村田(2005 : 249)は、形容動詞の語幹と名詞との境界が曖昧であることに言及している。また、考えなければならない問題は、形容動詞の語幹と名詞との間に、連続して把握される特徴が存在していることであると述べている。さらに、名詞には根源的に「事物と様態と事態」の「三種の意味」があり、「そのいずれを具現するかは、文脈場面が決定する」と述べ、「様態表現」となる場合を形容動詞の語幹、「事物表現と事態表現」となる場合には名詞と認定すべきであると指摘している。

上記の記述から、意味的には、形容動詞は形容詞とともに物事の状態や属性を表す語をそのメンバーとし、その多くが英語での形容詞に訳すことができることなどから、名詞よりは形容詞に近いと言えよう。しかし、当該の二品詞はすっきりと二分されるわけではない。形容動詞カテゴリーは、名詞カテゴリーからはっきりと独立したものにはならないのである。つまり、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの境界は明瞭ではなく、曖昧である(上原 2003, 李 2010)。その詳細は図 1.7 の通りである。



[図 1.7 : 名詞と形容動詞の連続的なカテゴリー (李 2010 : 64)]

図 1.7 では名詞カテゴリーと形容動詞カテゴリーが持つ連続的關係を示している。「太郎」、「家」、「人」、「暇」などの語彙は名詞カテゴリーの典型的なメンバーである。一方、「親切」、「静か」などのメンバーは形容動詞カテゴリーの典型的なメンバーとして存在している。さらに、李(2010 : 65)は、両カテゴリーの間に、「元気」や「いろいろ」のように、「どちらのカテゴリーにもなり得る中間的な」メンバーがある。このような分析は、名詞カテゴリー及び形容動詞カテゴリーにおけるメンバーの「多様性をより柔軟に」表すことを可能にし、両カテゴリーの間にある曖昧な境界とその連続性という「本来の特徴を無理なく」捉えることになる。

また、飯豊(1973 : 199)は、形容動詞はほかの品詞との境界が非常に曖昧であるため、「どこで境界の線を設けるかによって形容動詞そのものの用法もあるいは広くなり、狭くなる」と指摘している。

さらに、劉(1989)や菊池(2002)は、形容動詞カテゴリーでは、辞書ごとに語彙メンバーの品詞性の扱いが異なることを示している(表 1.7 参照)。

[表 1.7 : 当該語彙の辞書別品詞分類(劉 1989 : 23)]

品詞性 語彙	辞書	国語大辞典	学研国語大辞典	新明解国語辞典	岩波国語辞典	例解新国語辞典
べ つ	形動： △べつのをく ださい	一、名： (1)形動： △べつのことを考 える(な) △べつに処理する (2)名： △男女のべつを問 わない 二、接尾	名： △男女のべつ △べつの時 △食費はべつに 払う	名： △べつの事 △べつの家	名・形動： △べつの機会 △べつな意見 △男女のべつ △べつに考える	

本 当	形動： △本当のところ	名・形動： △お酒は本当はコ ップで飲むもの ですわね	名： △本当の話 △本当の革 △本当の寒さ	名： △本当をいうと △本当のちから △本当に困った	名・形動： △本当をいえば △本当にする △本当のこと
逆	形動： △煙草を逆に くわえる	名： (1)形動： △本心の逆をいう (2)名	名： △逆を取る ーな・ーに △考え方が逆だ	名： △逆を取る	名・形動： △本心と逆なこ とをいう
抜 群	(一)形動： △抜群の成績 (二)副	名・形動： △抜群の成績	名： △抜群の成績	名、ナ'： △抜群の成績	名・形動： △抜群のでき △抜群の成績 △抜群にうまい
最 高	形動： △最高の位 △最高の気分	名：△日本で最高の 山△会社で最高 の給 料をもらう 形動： △最高に面白い	名： ーな △最高の人出 △最高に面白い	名：	名、形動： △最高の品質 △最高におもし ろい

表 1.7 からは、同じ語彙でも辞書によってそれに付与される品詞に相違が見られることが分かる。しかし、このように当該語彙の品詞分類にゆれが見られるのは、形容動詞と名詞の間だけであることから、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの境界は曖昧で継続性があると考えられる。

以上のことから、カテゴリーとしての形容動詞は名詞カテゴリーと形容詞カテゴリーの間にあり、意味的には形容詞に近く、統語的には名詞と類似すると言えよう。

### 1.7.1 意味論の観点から見る形容動詞カテゴリー

形容動詞が表している意味的特徴は形容詞と似ているため、同一の性状概念を表す表現が多く見られる。一方、表 1.8 の「大きな」、「おかしな」、「小さな」などの形容動詞では「大きいだ」、「大きくなる」といった活用形はなく、「な」形しか持たないため、ほかの形容動詞メンバーより形容詞化が進んでいると考えられる(上原 2002)。

[表 1.8 : 形容動詞と形容詞における意味上の対応性(三枝 1996 : 98 をもとに筆者作成)]

浅黒な、暖かな、甘辛な、意地悪な、おめでたな、きめ細かな、細かな、四角な、茶色な、手荒な、ナウな、幅広な、腹黒な、ひ弱な、間近な、真っ黒な、真っ白な、まん丸な、柔な、柔らかかな	大きな、おかしな、小さな	大きい、おかしい、小さい	浅黒い、暖かい、甘辛い、意地悪い、おめでたい、きめ細かい、細かい、四角い、茶色い、手荒い、ナウい、幅広い、腹黒い、ひ弱い、間近い、真っ黒い、真っ白い、まん丸い、柔い、柔らかかい
形容動詞			形容詞

上原(2002 : 100)は、この現象は、「同グループに属する」形容動詞と形容詞の「意味的なつながりから形態的なつながりを生みだしたもの」であると述べている。

孫(2012)は、「暖かな」と「暖かい」、「柔らかかな」と「柔らかい」、「細かな」と「細かい」などのような、その語幹が「-か」で終わる形容動詞と同源の形容詞を対象に、「日中対訳コーパス」(北京日本学研究中心 2002)に収録された例文を用いて、これらの同源語の使用上の傾向を調べた。その結果、語幹同源の形容詞と形容動詞は表す意味が同じであるが、連体用法では、形容詞が形容動詞より多く用いられ、書き言葉より話し言葉に多く使われる傾向があると述べている。

また、加藤(2003 : 145)は、「暖かい」と「暖かな」における意味上の差異について、形容詞「暖かい」は「物理的な性質」を表すのに対して、形容動詞「暖かな」は「室温に以外に心理的な『暖かさ』の意味合い」が含まれていると述べている。

塚原(1964)は、対応形容詞と対応形容動詞は、「本来は別個のものが、言語素材を共有

することから、形態的な分岐として編成されたものである」(塚原 1964:32)と述べている。一方、この類の形容詞は、「すべて、文語文法では、ク活用の範疇に所属し、シク活用に所属するものは、全く存在しないこと」から、これらの形容詞に対応する形容動詞の活用は、「必ずしも一様ではない」(塚原 1964:24)とも述べている。

例 17:

暖かな ○、 暖かの ×  
白な ×、 白の ○  
黄色な ○、 黄色の ○

(塚原 1964:24)

すでに述べたように、形容動詞は形容詞と同じく意味的に性状概念を表している。このことを踏まえ、本節では、形容動詞と形容詞における意味的及び形式的な異同を比較した上で、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴を考察する。

村田(2005)は、形容詞は語彙的な貧弱さを抱えた語彙であり、形容詞語彙の不足は、形容動詞語彙による補給で解消されたと指摘している。

豊田(1980:85)は、「日本語の形容詞の中で、形容動詞は形容詞にくらべて造語力<sup>20</sup>が活発で、外来語や漢語からさかんに作られ、重要な役割りをはたしている」と指摘している。例えば、形容動詞には「ゴージャス(gorgeous)」、「スペシャル(special)」、「ナイーブ(naive)」など英語から作られた語彙があり、「平凡」、「静寂」、「誠実」など中国語の漢語から転換された言葉もある。このような例から、形容動詞は造語の力が確かに形容詞より強いと言える。

また、形容詞との共通点について、森田(2008:165)は、形容詞と形容動詞は物事の性状・状態を表す語であるため、「動詞に比べて圧倒的に、人間にかかわる語の全体に占める比率が高い」と述べている。

これらの研究によると、形容動詞は形容詞と同じように物事の属性や状態、とりわけ、人の描写、評価を表し、一方、形容動詞の語幹は独立性が高く、その活発な造語力によって、形容詞の語彙的な貧弱さを補っているということが分かる。

上述のように、形容動詞と形容詞はいずれも物事の属性や状態を修飾するという点で類似してい

---

<sup>20</sup> 造語力とは、「新たに言葉を造る能力のことである。また、その造った言葉、ほとんどの場合、既成の語を組み合わせる力である」(『広辞苑』1998:1543)。

るが、山橋(2009 : 10)は、形容動詞は形容詞に比べ、その「意味領域は非常に限られている」と指摘している。その理由を探る前に、形容詞に含まれる意味クラスを明確にする必要がある。

Dixon(1977)は形容詞の典型的な意味クラスを7つに分け、以下のように挙げている。

- (1) 寸法:長い・短い・大きい・小さい・広い・狭いなど
- (2) 物質の性質:重い・軽い・熱い・冷たい・硬い・柔らかいなど
- (3) 色:赤い・青い・黒い・白いなど
- (4) 人の性癖:
  - A. 人の性格  
(賢い・ずるいなど)
  - B. 感情・感覚  
(嬉しい・悲しい・恥ずかしい・羨ましい・寂しい・悔しいなど)
  - C. 性癖そのもの  
(厳しい・酷い・賢い・ずるい・めめしいなど)
- (5) 年齢:若い・幼いなど
- (6) 評価:よい・悪い・まずい・おいしい・うまい・難しい・ひどいなど
- (7) 速度:速い・遅い・とろい・のろいなど

(Dixon1977 : 16 を筆者訳)

Backhouse(1984)は、日本語の形容詞は上述の7つすべての意味クラスに存在しているが、形容動詞は色・年齢・速度のクラスには見出せず、評価と人の性癖のクラスに多く見られると指摘している。

形容詞と形容動詞が存在する意味クラスの相違に関して、上原(2002)は形容動詞が表している修飾意味は形容詞の下位レベルに属し、すなわち、非基本レベルであると述べている。また、上原(2002 : 95)は「形容動詞=非基本」という主張に対応する2つの現象を挙げている。「一つは形容動詞の大多数が漢語を中心とした借用語である」ため、「概念そのものが社会文化的にもともと存在していなかった」ことがある。もう一つは、「借用語ではない和語系の形容動詞も、ほとんどが他の品詞からの派生形(好き←好く、嫌い←嫌う)であったり、形態的に複雑な語である傾向は、基本レベル・カテゴリーの短く単一形態素の

語になりやすい傾向に対しての下位レベル・カテゴリーの言語形式の特徴(例：BIRD に対しての BLACKBIRD)」という点である。すなわち、形容詞はより基本的で「一般的な意味領域を表すものなのに対して、形容動詞の方はその意味領域の中のさらに特定した意味や特定の背景のもとに使われるニュアンスが加わったもの」(上原 2002:92)ということである。

また、上原(2002:96)は認知言語学の「基本的経験」の基準の中で、意味クラスにおける7項目のうち、(1)(2)(3)(5)(7)を人間の「知覚・認知において『基本的』」なものとして定め、一方、「より抽象的な」(4)と(6)を「二次的な認知情報」に分類した。つまり、認知言語学上の「基本的経験」であるか否かを形容詞と形容動詞が表す意味領域の区別の基準にしたのである。

さらに、上原(2002)は、表 1.9 に見られるように、形容詞と形容動詞との形式上の違いを用い、両者の意味上の異なりを説明している。また、山橋(2009)は上原(2002)の研究を踏まえ、語形の区別は意味の区別に関係があると指摘した上で、品詞間における「語根の形態的拘束性<sup>21)</sup>」(山橋 2009:160)を基準として、「活用詞」と「非活用詞」に分類することが可能になることを示している。詳しくは表 1.9 を参照されたい。

[表 1.9 : 品詞間における語根の拘束性]

	品詞	語根の拘束性	例文
非活用詞	名詞	弱い	「あー、雨、雨」・「あー、雨だ、雨だ」
	形容動詞		「あー、楽、楽」・「あー、楽だ、楽だ」
活用詞	動詞	強い	「さあ、* 寝、寝」・「さあ、寝る、寝る」
	形容詞		「あー、* 高、高」・「あー、高い、高い」

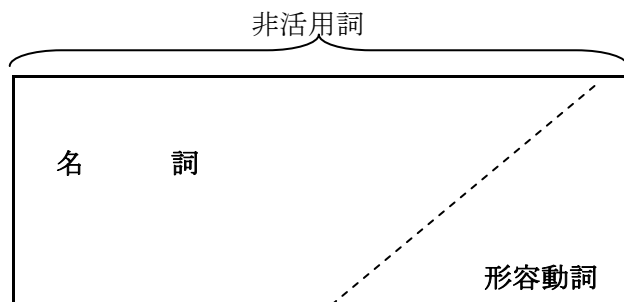
(上原 2002:86 の内容をもとに筆者作成；\* = 非文法的)

表 1.9 によると、形容動詞と名詞の語根の拘束性は弱く、語幹の独立性が強いため、形容動詞や名詞が述語として使われる時は語尾にコピュラがなくても正しい表現として容認される。それに対して、形容詞と動詞は語幹だけでは非文になる。また、形容詞を動詞の下位分類にする先行研究は少ない一方(山橋 2009)、形容動詞を名詞の下位分類にする先行

<sup>21)</sup> 「形容動詞は基本形式から『だ』を除いたより短い部分(これを語根 (lexical root) と呼ぶ)が独立して存在し得るのに対して、形容詞のそれに相当する(基本形式マイナス『い』)の部分は独立性が弱い(拘束性が強い)ということなのである」(上原 2002:86)。



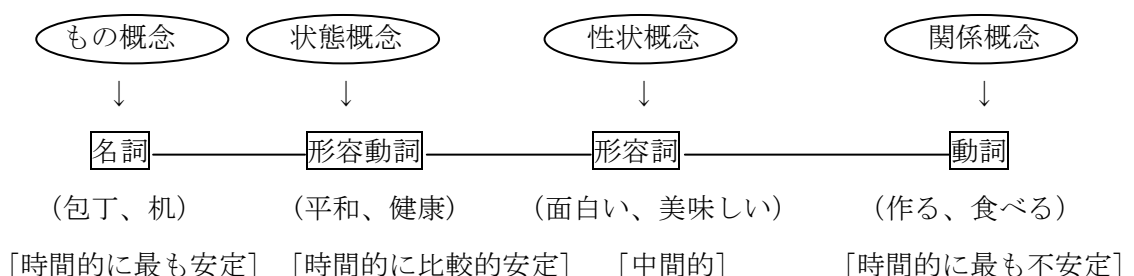
研究はいくつか存在する (Martin1975, Dixon1982, 寺村 1982, 上原 2002)。それらの先行研究のうち、Martin(1975)と寺村(1982)は、「形容動詞」を「形容名詞」と名付けることを提案をしている。上原(2002)は、図 1.8 に示されるように、形容動詞を名詞の下位分類と提示している。



[図 1.8 : 日本語の名詞・形容動詞カテゴリーに属する語彙の配置図 (上原 2003 : 61)]

活用とは、「単語が文中でその語の機能や他の語への続き方に応じて、語形を体系的に変化すること」である(『広辞苑』1998 : 529)。また、活用形の有無によって、動詞は活用詞、名詞は非活用詞と分類することができる。図 1.8 において、上原(2003 : 61)は、名詞と形容動詞は「両者とも述定機能において指定辞<sup>22</sup>『だ』をとる」という点から、形容動詞を名詞と同じく非活用詞の下位カテゴリーに分類している。この観点は、Backhouse(1984)、Uehara(1998)、張(2008)と同じものである。

また、影山(2010 : 16)は Givón (1984) の研究を踏まえ、「時間的安定性<sup>23</sup>」という概念を基に品詞と意味の関係を捉えている。具体的には、図 1.9 を参照されたい。



[図 1.9 : 時間的安定性から見る品詞と意味の関係(影山 2010 の研究をもとに筆者作成)]

<sup>22</sup> 国語学では「だ」を、断定を表す助動詞であると定義しているが、上原(2003)は「だ」を述定機能を示す指定辞として扱っている。本研究では、国語学に従い、「だ」を助動詞として扱う。

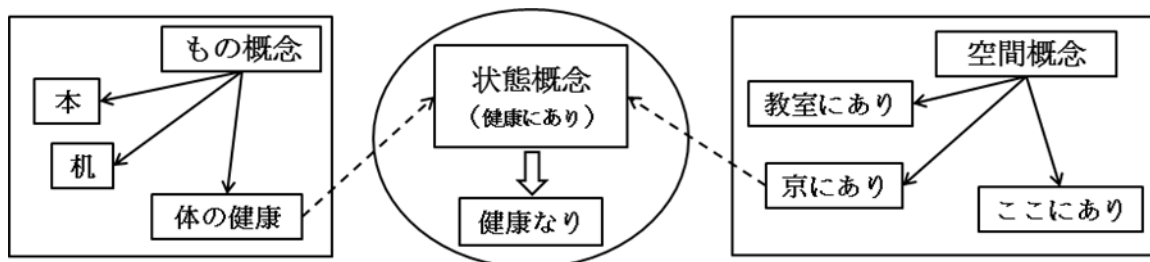
<sup>23</sup> 「その品詞の表す外延が時間の流れとともに変化するかどうかということ」を「時間的安定性」という(影山 2010 : 17)。

図 1.9 において、影山(2010 : 17)は、「作る」や「食べる」という「動詞が表す事象は時間の流れと共に、開始→途中過程→終了という展開」が見られると述べている。それに対し、「包丁、机」という名詞が表すもの概念は「時間的に一定している」ため、動詞のような「事象の時間的展開」は見られないと述べている。また、上原(2010 : 27)は、「食べる人」、「食べられるもの」などの例を用い、「動詞はその概念成立をその参加者の概念の存在に依存して」いるため、意味的には関係概念を表すと指摘している。さらに、「平和、健康」という形容動詞が示す「状態概念」は一定の時間帯にその状態が継続的に続くという意味で、「熱い、辛い」などの形容詞が示す瞬間で変わる「性状概念」に比べ、時間的に安定性が強く見られる。以上のことをまとめるならば、形容詞や動詞が示す意味的特徴に比べ、形容動詞が示す意味的特徴はより名詞に近いのではないかと思われる。上述の研究は次に見る山橋(2009)の主張と一致している。

山橋(2009 : 5)は、形態論的に、「主格を表わす『ーが』及び時制を表す『ーる(現在)・ーた(過去)』との結合」によって名詞と動詞を区別した。この時制との結合性の区別に対応する意味は、名詞は「持続的に存在し時間の流れと関わらない『花、本』等の『具体物』を指示するが、動詞は瞬間的、一時的に存在し時間の流れと関わる『走る』等の『動き』を指示するもの」と区別される。

そのため、名詞と同じく、「時制と結合しない『形容動詞』は、人の存在と共に存在する『人の性格』を表す語が大多数を占めている。また、『評価』、『感情』や『物体の性質』等も、『形容詞』の場合とは区別される持続的に存在するものを表す」(山橋 2009 : 11)。それに対して、動詞と同じく、「時制と結合する『形容詞』は、『人の性格』以外の全ての意味タイプに分布している」(山橋 2009 : 11)ことが指摘されている。つまり、時制との結合性の有無という観点から、動詞と形容詞は物事の動態を表している一方、名詞と形容動詞は物事の静態を表している。

山橋が述べた「持続的な存在」はいわゆる「状態概念」であり、意味的に形容詞は「性状概念」のみを示すが、形容動詞は非活用詞カテゴリーの下位分類にあるため、「性状概念」以外に「状態概念」を表すことも可能である。その状態概念の形成を「健康」という語を例に取って説明すると、図 1.10 になる。



[図 1.10 : 状態概念の形成過程(上原 2003 : 72-80 の内容をもとに筆者作成)]

図 1.10 によれば、「健康」は元来「身体の健康」を表し、「本、机」と同じように名詞として「もの概念」を示す。これは英語の[health]に相当するものである。しかし、「本、机」が「具体名詞」なのに対し、「健康」は「抽象名詞」である。一方、古代日本語では、「～にあり」は場所・方位名詞に後接し、「場所、方位」など「空間概念」を示す表現であった。この「空間概念に基づく位置表現のメタファー(比喩)的解釈という動機付け」によって、「～にあり」は構文的に場所・方位名詞のみならず抽象名詞への後接も可能になった。その結果、「健康にあり」という表現は、英語の[healthy]と同じく、「健康な状態にあり」を意味することになった。このように、「にあり」がその後「なり」に変わり、「健康なり」から形容動詞の「健康だ」が生じたわけである。

以上のことから、形容詞と形容動詞は物事の属性や状態を描写するという性質を共有する語彙ではあるが、形容動詞が表す意味領域は形容詞のそれより非常に限られていることが分かった。それは、形容詞の典型的な 7 つの意味クラスに両品詞が占める割合から、形容詞は基本的な存在であるのに対して、形容動詞は非基本的な存在であることが確認されたからである。また、語幹の拘束性及び時制との結合性の分析からは、「もの概念」を示す名詞の下位分類にある形容動詞は、形態上、名詞と同じように時制と結合できないため、「性状概念」以外に、持続的な「状態概念」をも表していることも明らかになった。

### 1.7.2 統語論の観点から見る形容動詞カテゴリー

前節では、形容動詞と形容詞の間に見られる意味的特徴の相違を考察した。本節では、統語的観点から見た形容動詞と名詞の間に存在する統語的特徴の差異を探る。

村木(1998 : 44)は、品詞分類の際、優先されるのは統語的な機能であり、「苦痛」という共通の意味をもつ「痛み」、「痛む」、「痛い」の 3 つの語彙を例にして、それぞれ「名詞、

動詞、形容詞という異なる品詞に属するもの」から、意味は品詞の分類には関連がないと指摘している。

先行研究では、形容動詞は統語的に名詞との類似点が多いと指摘されている（寺村 1982, 原田 2001, 上原 2003, 森田 2008）。また、原田(2001 : 111)は、漢語系形容動詞の連体形「～の」の用法は「名詞に由来するもの」とし、これは形容動詞が「積極的には属性を表さない名詞的な語であったことに拠る」と指摘している。さらに、「安全、健康、迷惑」などのような語彙は形容動詞性と名詞性の両方を備えていることから、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの間には連続性が見られるとも述べている。

以上の先行研究の指摘から、本節では、統語的な観点から形容動詞と名詞を比較することを通し、形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴を明確にしたい。

まず、形容動詞カテゴリーに特有の文法項目を確認しておく。表 1.10 を見られたい。

[表 1.10: 形容動詞カテゴリーに特有の文法用法とその特殊例]

文法用法	特殊例
主格やほかの格助詞が付かない	「ガ」格：不安がつきまとう・残る 「ヲ」格：不安を感じる・訴える・与える 「ニ」格：不安に襲われる 「カラ」格：不安から逃げられる
「～な」の形で連体修飾語をとる	無口な(の)少年；同様な(の)手口など
「～に」の形で連用修飾語になる	危険、貴重、迷惑、貧乏、静寂、広大など
語幹は連体修飾語を取らない	大きな不安・困難；ささやかな親切・平穏など
語幹に接尾語「さ」をつけて名詞となる	貧乏、大事、有害、可能、当然、大丈夫など

(原田 2001 : 110-111 の内容をもとに筆者作成)

表 1.10 の「特殊例」が示すように、形容動詞カテゴリーに特有の文法用法は必ずしもすべての語彙メンバーには適用されない。

例えば、形容動詞が名詞化されるとき、多くの場合、その語尾には「さ」を加えられるが(Backhouse1984)、「安全」「幸運」などの語彙は語幹の独立性が強いため、「さ」がなく

ても、独立で名詞として使われる。また、名詞を修飾する場合、「無口」「同様」などの語彙は、連体形「な」のみならず「の」との共起もしばしば見られる。この現象について、寺村(1982)は、一般に形容動詞はふつうの形容詞と同じように、接尾語「さ」をつけることができるが、名詞はできないと述べている。一方、「無名さ」「有名さ」の判断にゆれがあるように、「名詞の中にも形容動詞寄りのものがあること、形容動詞の中にもより名詞に近いものと、より形容詞に近いものがある」(寺村 1982 : 72)とも述べている。

つまり、形容動詞カテゴリーでは、それに属する語彙メンバーの典型性が弱くなるにつれ、名詞に特有の文法現象も確認されることになるため、結果的に、名詞カテゴリーとの境界が曖昧になるのである。このようなことが起こるのも、形容動詞が、ほかの品詞とは異なり、同一の文法用法ですべての語彙メンバーをまとめること、換言すれば、それに固有の統語的特徴で定義するのが難しいからであろう。

一方、村木(1998)、上原(2003)、加藤(2003)は、形容動詞と名詞を区別する2つの要因に言及している。一つは、形容動詞と名詞が修飾語として機能する際の形式の違い、すなわち、その連体形における形容動詞がとる「な」と名詞がとる「の」の違いである。もう一つは、形容動詞のほとんどはそのままでは格助詞をとることはできないが、名詞はそのまま格助詞をとることができるという点である。つまり、名詞修飾における連体形「な」と「の」の違い及び格助詞との共起の有無が形容動詞と名詞を区別する顕著な特徴ということになる。

本節では、意味的及び統語的観点から形容動詞カテゴリーを考察した。形容動詞は物事の属性や特徴を描写・修飾するという意味では、形容詞と類似しているが、形容詞の典型的な7つの意味クラスに両品詞が占める割合からすると、形容動詞は形容詞と比べ、その意味範囲が非常に限られていることが分かった。また、統語的には、語幹の独立性の強弱、また、時制との結合性の有無という2つの基準から、形容動詞は名詞と同じく非活用詞カテゴリーと見なされるが、名詞がその上位分類に属するのに対して、形容動詞はその下位分類になることが明らかになった。さらに、形容動詞の文法用法は名詞とは異なっているが、そのメンバーを名詞のメンバーから明示的かつ統一的に区別することのできる統語的特徴は存在せず、それらはただその典型性によって区別されるだけであることも見た。上原(2003)が形容動詞カテゴリーをいわゆる典型性効果が示されるカテゴリーとしたのも、まさに以上のような形容動詞の示す特徴によるのであろう。

## 1.8 第一章のまとめ

本章では、形容動詞の特徴を、その品詞の由来、品詞分類における位置づけ、種類、歴史的変遷、漢語語幹及び連体形など様々な角度から考察した上で、特に、その意味的特徴及び統語的観点から解明した。形容動詞という品詞は動詞、名詞、形容詞などほかの品詞とは異なり、そのカテゴリーに属するすべての語彙メンバーを明示的かつ統一的に定義する統語的特徴を持たないことから、カテゴリーとして常に不安定である。その不安定性は、とりわけ、名詞カテゴリーとの間で見られることが多く、両者間の境界線は曖昧になっている。本章では、この形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの間の境界線の曖昧性が生まれたプロセスを、特に、断定助動詞「だ」との繋がり、連体形「な」の形成、語形及び品詞性の形成という歴史的変遷から明らかにした。その結果、形容動詞に特有の連体形「な」の形成は助動詞「だ」の形成過程と並行したものであり、両者とも空間を根源領域とするメタファーの拡張によって成立したものであることを示した。また、形容動詞は「もの概念」と「空間概念」の結合から「状態概念」への意味変化を通し、抽象名詞から変化してきたものであることも明らかにした。さらに、形容動詞カテゴリーは統語的のみならず、意味的観点からも、名詞カテゴリーと深い関係を持っていることを示した。周知のように、日本語教育では、形容動詞は「ナ形容詞」という名称が示すように形容詞の一つとして扱われているが、本研究では、本章で明らかになった形容動詞と名詞の曖昧性に注目し、研究を進めていくことにする。次章では、形容動詞カテゴリーとプロトタイプ理論の関係を扱う。

## 第二章 プロトタイプ理論の研究

### はじめに

プロトタイプ理論(Prototype Theory)は認知科学の概念の一つであり、カテゴリーに属するメンバー間の多様性を強調し、典型的なメンバーと非典型的なメンバーとの共存を認めている(田中 1990, 河上 1996, 白井 1998, 松本 1999, 菅谷 2004, 靱山 2010, 李 2010 など)。プロトタイプ理論は、まず、1970 年代に認知心理学において提唱され、当初は色彩の心理実験によって支持された(Rosch 1973, Rosch & Mewls 1975)。その後、理論が発展するにつれ、心理学だけでなく、言語研究にも多く応用されるようになった。本章では、プロトタイプ理論の誕生の背景、及び、それを従来の古典的カテゴリー論と比較対照することにより、プロトタイプ・カテゴリー論の特徴を明らかにする。また、後述するように、形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張過程には文脈依存を前提とするプロトタイプ理論だけではうまく説明のできない部分がある。本研究はそのような部分の分析に「動的文法理論」を採用するため、本章の最後ではこの「動的文法理論」の紹介も行う。

### 2.1 プロトタイプ理論の誕生

プロトタイプ理論は、まず、Rosch (1973) の色彩に関する心理実験によって提示された。Rosch (1973) は、68 名のダニ語<sup>24</sup>(Dani)の母語話者を対象に、ピンク・レッド・イエロー・オレンジ・ブラウン・グリーン・ブルー・パープルという 8 種類の色の中から、冷色系(mill)と暖色系(mola)の 2 つの色彩カテゴリーの最も典型的な色を選択させた。その結果、オレンジ、レッド、イエローが mola の最も相応しい例として選ばれた。このことから Rosch は色彩カテゴリーには焦点色が存在する傾向を発見したのである。

上述の色彩の心理実験の結果をきっかけに、Rosch(1973)は様々なカテゴリーにおいて、典型的なメンバーと非典型的なメンバーを発見していった。その対照事例は表 2.1 のように示される。

---

<sup>24</sup> 「ダニ語とは、二つの基本色彩カテゴリー、すなわち、mill (黒緑青を含む暗く冷たい色)と mola (白、赤、黄を含む明るく暖かい色)のみを有するニューギニアの言語である」(レイコフ 1987: 46)。

[表 2.1 : 様々なカテゴリーにおける中心例と周辺例]

メンバー カテゴリー	中心的	周辺の
おもちゃ	人形	スケート
	ボール	スイング
鳥	ロビン	ニワトリ
	スズメ	カモ
果物	梨	イチゴ
	バナナ	トリム
病気	ガン	リュウマチ
	麻疹	くる病
親戚	叔母	妻
	叔父	娘
金属	銅	マグネシウム
	アルミ	プラチナ
犯行	強姦	裏切り
	強盗	詐欺
スポーツ	野球	釣り
	バスケットボール	ダイビング
乗り物	車	タンクローリー
	バス	馬車
科学	化学	医学
	物理	工学
野菜	にんじん	たまねぎ
	ほうれん草	きのこ
身体の一部	腕	唇
	足	皮膚

(Rosch1973 : 114 の内容をもとに筆者が訳したもの)



表 2.1 に挙げたのは日常生活で常に触れるカテゴリーであり、それぞれのカテゴリーには中心的(典型的)なメンバーと周辺の(非典型的)なメンバーがある。このメンバー間に見られる典型性の差は当該カテゴリー内でしか比べられないため、プロトタイプ理論は「カテゴリー」という概念と密接な関係を持ち、それをもとに立てられたことが分かる。

一方、田中(1990)は、言語学的な基準に基づく「理論的プロトタイプ」と心理学的基準に基づく「心理的プロトタイプ」はあまり区別されず、混同されていることが多いと指摘した。田中(1990: 101)によれば、「理論的プロトタイプ」は「物理的現象を重視するため、具体性を基準とし、言語学の有標性とほぼ同義である」のに対し、「心理的プロトタイプ」は「連想喚起力、つまり何が心理的に顕著であるかを問題とし、文化、年齢、性別などの変数によって基準が異なりはするものの、ある集団の意識を測定してみると意義のある安定値が得られる」ものである。これらのうち、以下、本研究が扱うプロトタイプ理論は前者の「理論的プロトタイプ」である。

## 2.2 プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論

プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論は、ともに「カテゴリー」という概念に基づいて形成されたものである。本節では、プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論を対照し、プロトタイプ理論の特徴を明らかにする。

### 2.2.1 古典的カテゴリー論

坂原(2004)によれば、古典的カテゴリーは、メンバー全体の「共通属性」(坂原 2004: 91)に基づいて出来上がったカテゴリーである。坂原は、古典的カテゴリー論の特徴を以下のように挙げている。

- A. すべてのメンバー<sup>25</sup>に共通する属性がある。
- B. カテゴリーには明確な境界がある。
- C. 人間的要因を介在させず客観的に定義できる。
- D. メンバーは同じ資格でカテゴリーに所属する。

---

<sup>25</sup> カテゴリーに属する「メンバー」あるいは「成員」は同じものであるが、その呼び方はそれぞれの研究によって異なり、統一されていないようである。本研究では語彙の典型性を中心に分析しているため、多くの場合人間を指す「成員」より「メンバー」の方がより相応しいと考え、「メンバー」と呼ぶことにする。

(坂原 2004 : 91-92)

また、高野(2002)は、古典的カテゴリーの観点から英語の“boy”、“gentleman”、“girl”、“lady”という4種類のカテゴリーを次のように定義している。

<boy> = /+animate/ /+human/ /-adult/ /+male/  
<gentleman> = /+animate/ /+human/ /+adult/ /+male/  
<girl> = /+animate/ /+human/ /-adult/ /-male/  
<lady> = /+animate/ /+human/ /+adult/ /-male/

(高野 2002 : 42)

以上から、まず、4種類のカテゴリーはすべて[animate]、[human]、[age]、[sex]という4つの「必要十分条件」において定義されているため、カテゴリー間の境界は明確である。また、それぞれのカテゴリーに属するメンバー間の属性は共通している。さらに、すべてのカテゴリーには主観的な観点は含まれず客観的に分類されたものであることが分かる。

しかし、本研究は、このような特徴が備わっている古典的カテゴリーには次に示すような3つの大きな欠陥があると考える。まず、世の中に存在するカテゴリーに属するすべてのメンバーは必ずしも同一の属性を持っているわけではない。例えば、「飛べる」ことは「鳥カテゴリー」をほかのカテゴリーから区別する大きな特徴の1つであるが、そのメンバーには「ニワトリ」、「ペンギン」、「ダチョウ」など飛べないものもいる。つまり、すべての鳥類が飛べるとは言えないということである。しかし、古典的なカテゴリー論はそのような同じカテゴリーに属するメンバー間の差異には注目しない。また、カテゴリーの中には必ずしも明確な境界を持たないものがあるにも関わらず、古典的カテゴリー論はカテゴリーの連続性や拡張の可能性を認めていない。後述するように、本研究の対象となる「形容動詞」カテゴリーは、特に、「名詞」カテゴリーとの境界が曖昧であるが、古典的カテゴリー論の観点からはそのような現象は十分に説明できないと思われる。さらに、同一のカテゴリーに属するメンバー間には当該カテゴリーへの帰属度に差があり、中心的なメンバーと非中心的なメンバーが存在する。例えば、「鳥」というカテゴリーでは、「雀、燕、鶯」などのメンバーは想起しやすく、典型的なものと言えるが、「ダチョウ、ペンギン、エミュー」などのメンバーは想起しにくく、非典型的なものである。しかし、古典的カテゴリー

論では、このようなカテゴリーの内部構造は重視されないのである。

## 2.2.2 プロトタイプ・カテゴリー論

「あるカテゴリーの典型的なメンバー、あるいは典型的なメンバーが満たす条件・特性の集合」を「プロトタイプ」という。また、「プロトタイプに基づき形成されたカテゴリーをプロトタイプ・カテゴリー」（靱山 2010:19)という。

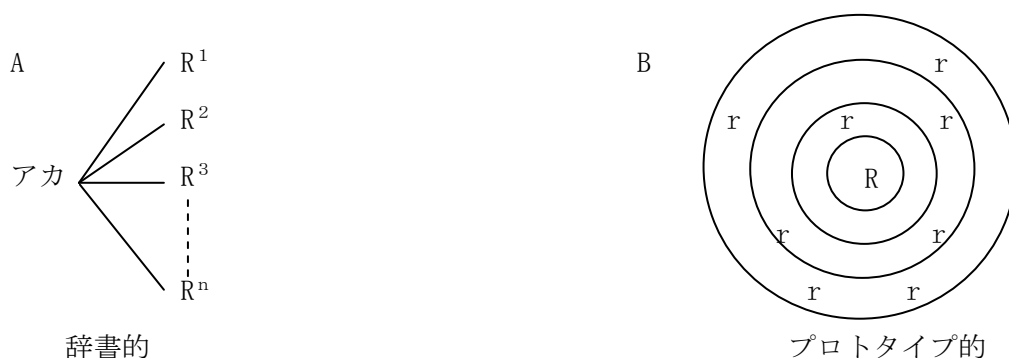
柴谷(1985 : 10)は湯呑とコーヒーマグの形の比較を例として、プロトタイプの特徴を説明している。2種類の器における最も顕著な判別条件は、「把手」及び「蓋」の有無であることが分かる。しかし、「最近日本でも出回り始めた、中国製の器」は「蓋のある点は湯呑的であるし、把手のある点はコーヒーマグ的である」。そのため、その器が湯呑とコーヒーマグどちらに分類されるかについて、形状での判断にゆれが見られたと述べている。

プロトタイプ・カテゴリー論については、具体的に以下のような特徴が示されている。

- A. さまざまなレベルの成員からなる。
- B. 単一の属性でくくることはできない。
- C. その成員の中には典型的な例と典型からはずれる例がある。
- D. 典型例と非典型例は連続的である。

(有田 1999 : 80-81)

また、田中(1987)は、上述のプロトタイプ・カテゴリー論の特徴を以下の図 2.1 のように示している。



[ 図 2.1 : プロトタイプ・カテゴリー論の特徴(田中 1987 : 33, 35) ]

図 2.1 は、単語の意味について、辞書的アプローチとプロトタイプアプローチの 2 種類を示したものである。田中(1987)によると、2つのアプローチには決定的な違いがあり、「Bではプロトタイプ『R』からほかの『r』が発生していると考えるのに対し、Aではメンバー間の関係は示されない」(田中 1987 : 35)と述べている。また、プロトタイプ理論ではメンバー間の典型性と連続性が強調されることも指摘している。

さらに、坂原 (2004)は、カテゴリーに属する典型的なメンバーが持つ特徴を以下のよう示している。

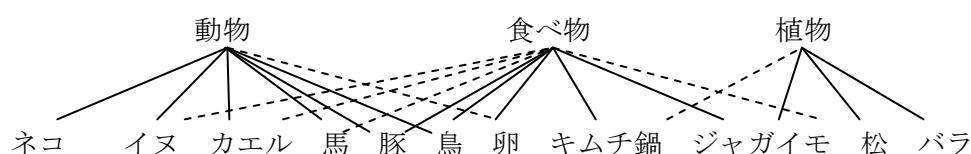
- A. カテゴリーに属すかどうかの判断に要する時間が短い
- B. カテゴリーの例として思いつきやすい
- C. 学習が早い

(坂原 2004 : 96)

つまり、プロトタイプ理論はカテゴリーの内部構造を認め、カテゴリーに属するメンバー間の多様性や連続性に注目し、それぞれのメンバーにおける当該カテゴリーへの帰属度を基準として、典型的なものと非典型的なものをグループ化した上で、段階的に見ていく理論であることが分かる。

### 2.2.3 プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の相違

前節で述べたように、プロトタイプ理論では、カテゴリー間には曖昧な境界が存在することを認め、連続性のあるものであると主張している。李(2010 : 61)は「食べ物」というカテゴリーを例として、「動物や植物など、隣接するカテゴリーとの間で、成員の帰属度やカテゴリーとしての境界」は明確ではないことを指摘した。その詳細は図 2.2 の通りである。



[図 2.2 : 動物、食べ物、植物のカテゴリー(李 2010 : 61)]

李(2010)によると、図 2.2 の「実線と破線はカテゴリーへの帰属度の相違を示す。実線は所属カテゴリーへの帰属度が明確なもの」であり、「破線は帰属度が曖昧なもの」(p. 61)である。「食べ物」のカテゴリーにおける典型的なメンバーは「豚」や「卵」である一方、「馬、カエル、イヌ、松」のようなメンバーを食べ物と捉えるか否かは「個人の経験や個人がおかれた文化圏によって異なる」(p. 62)と述べている。

また、李(2010)は、カテゴリー間の境界が明確に分けられるか否かがプロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の最も大きな違いであることを指摘した上で、図 2.3 でその相違を示している。



[図 2.3 : プロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の相違(李 2010 : 62)]

図 2.3 はプロトタイプ・カテゴリー論と古典的カテゴリー論の相違を示したものである。白黒で明確に分けられる(b)の古典的カテゴリー論に対して、(a)のプロトタイプ・カテゴリー論は白と黒の間に複数の曖昧な境界が存在し、白から黒へ段階的に変化していくプロセスが表されている。つまり、「白か黒かの二者択一」(李 2010 : 62)である古典的カテゴリー論は、カテゴリー間に曖昧な境界の存在を認めないのに対して、カテゴリーの内部構造に注目するプロトタイプ・カテゴリー論は、カテゴリー間の連続性及び曖昧な境界の存在を認めるのである(李 2010)。

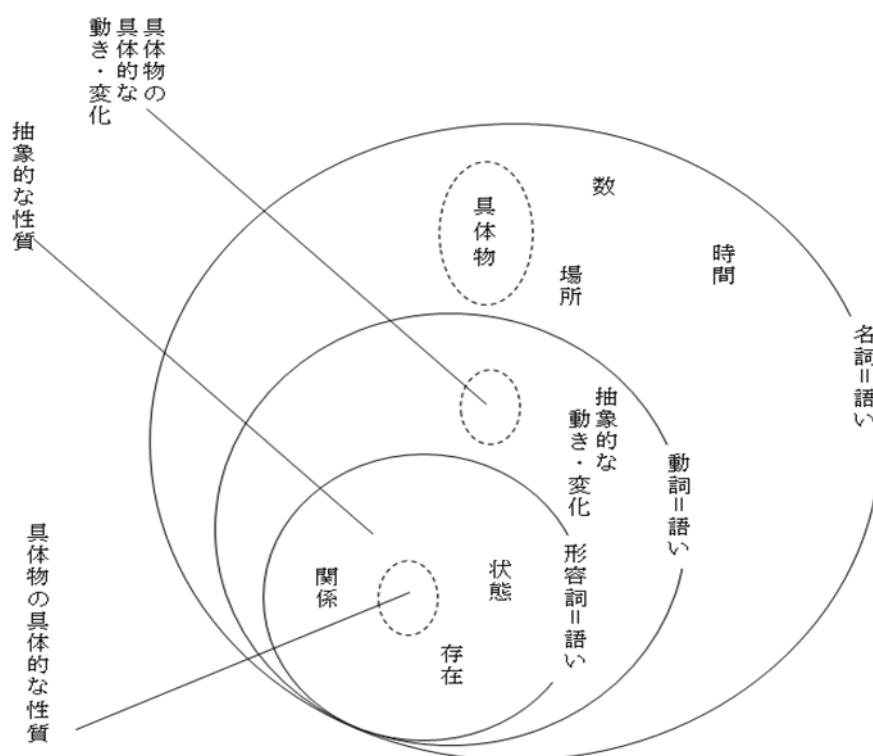
### 2.3 プロトタイプ理論の言語学への応用

プロトタイプ理論は言語学の分野での応用も多く見られる。例えば、“break”という語彙の典型的な用法は、“break the vase”であり、“break the tradition”は非典型的な用法ということになる。カテゴリー内はプロトタイプのものとそうでないものに分かれるが、その構造はプロトタイプのものが中心となり、そこからほかの語義が広がっているとイメージできる(田中 1990)。

また、「有標性」や「無標性」はプロトタイプ理論に基づき、言語学に導入された用語

と考える研究者もいる。レイコフ (1987 : 70)によると、「有標性」は一種の典型性効果であり、「1つのカテゴリーの中である成員ないし下位カテゴリーが何らかの意味でその他の成員より基本的であると解されるという不均整な現象を記述するのに言語学者が用いる用語」であり、また、「無標の成員」は「カテゴリーの成員のうち一つのみが現れることができ、また他のすべての条件が同じであるという場合に現れる成員である」と述べている。

さらに、鈴木(1980 : 12)は、「中心的な意味と周辺的な意味」の視点から、名詞、動詞、形容詞(形容動詞も含まれる)それぞれの品詞カテゴリーに属する語彙メンバーが表す「カテゴリーカルな意味」を以下の図 2.4 のように示した。



[図 2.4 : 名詞・動詞・形容詞における中心的な意味と周辺的な意味(鈴木 1980 : 12)]

図 2.4 によれば、名詞、動詞、形容詞カテゴリーが示す中心的な意味はそれぞれ点線で囲まれた内容であり、当該品詞の「文法的な特徴(品詞性)」(鈴木 1980 : 13)を表す。それに対して、「周辺的な意味は、中心的な意味に照応して発達」したもので、「その品詞であらたに発達した語彙的な意味」(鈴木 1980 : 13)ということになる。

鈴木(1980)のほかにもプロトタイプ理論を用いた日本語研究には、以下のようなものがある。

有田(1999)は、プロトタイプ理論の観点から日本語の条件文を分析し、条件文の「空間的拡張」と「時間的拡張」(有田 1999 : 103)を手掛かりに、典型例から非典型例への拡張現象を捉えた。

スニーラット(2001 : 26)は「条件表現の意味を 8 つに分類」した上で、「日本語学習者による習得順序」を調査する目的として、KY コーパスにおける「中国語・韓国語・英語母語話者の自然発話から条件表現」を取り出している。「条件表現の意味分類で典型的なものは『仮説』、『反事実(一過去)]』と『反事実(+過去)]』の3つであるが、調査結果によると、『仮説』は早く習得されるが、『反事実(一過去)]』と『反事実(+過去)]』の習得がかなり遅れている」ことが明らかにした。

菅谷(2002 : 77)は、KY コーパス<sup>26</sup>を用い、英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者計 90 名の発話データから、日本語能力と「イク・クルテイク・テクルの習得状況」の関連を分析したもので、「イクは話者の視点と移動方向が一致する」ため、「クル」より過剰使用の傾向が強く見られることを指摘した。また、「学習者の日本語能力の向上に従い、本動詞と補助動詞は両方とも典型的な用法(『物理的空間移動』)から、非典型的な用法(『抽象的移動』)へと使用が広がっていく」プロセスも観察している。

森山(2004 : 67)は、「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景(事態成立の基盤やさま)を補足的に示す」という共通の「スキーマ的意味」に基づき、格助詞「で」の放射状カテゴリーを解明したものである。

加藤(2005)は、中国語の多義語“開”と“看”を中心に、9 段階評価の典型性判断テストを用いながら、中国語を母語とする日本語学習者の日本語の語彙習得を調査した。その結果、中国語において典型度の高い用法は母語転移が起りやすい一方、中国語における典型度の低い用法でも母語の知識に「依存する傾向があり、正の転移や過剰使用が起りやすい」(加藤 2005 : 5)という現象を明らかにした。

白(2007)は、プロトタイプ理論を用い、多義語である複合動詞「～出す」を対象に韓国

---

<sup>26</sup> KY コーパスとは、日本語学習者 90 人分の OPI テープを文字化した言語資料である。90 人の被験者を母語別に見ると、中国語、英語、韓国語がそれぞれ 30 人ずつであり、さらに、その 30 人の OPI の判定結果別の内訳は、それぞれ、初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつとなっている。また、KY コーパスの K と Y は、コーパス作成の担当者となった鎌田(Kamada)と山内(Yamauchi)の頭文字である。( [http://www.opi.jp/shiryo/ky\\_corp.html](http://www.opi.jp/shiryo/ky_corp.html) )

語を母語とする日本語学習者の意識を調査したものである。その結果、母語の韓国語に直訳できる用法(典型例として扱われているもの)ほど、学習者の受容度が高くなる傾向があることを明らかにした。

張(2013 : 98)は、プロトタイプ理論を援用しながら、67人の中国語を母語とする日本語学習者を対象に、文法性判断テストと文産出テストで日本語の受動文の習得順序を調査している。その結果、中国語を母語とする日本語学習者は日本語の受動文を習得する過程で、「直接受動文(『被字句』との対応あり)」→「持ち主受動文」→「間接受動文」→「直接受動文(『被字句』との対応なし)」という順序で習得が進んでいることを明らかにした。また、この習得順序は母語の中国語に強く影響されているため、「母語のプロトタイプのメンバーと対応するものが習得されやすい」と主張している。

以上の諸研究から、プロトタイプ理論は言語研究、日本語研究において、語彙の典型的な用法の比較、有標性と無標性の区別、品詞間の連続性の解明や語彙の習得研究まで、幅広く応用されていることが分かる。

## 2.4 プロトタイプ理論の発展及び問題点

本節ではラネカーによって提唱されたネットワークカテゴリーを中心に、プロトタイプ理論の発展をまとめる。また、形容動詞カテゴリーの拡張をラネカーの枠組みで分析するとうまく説明できない部分があることを指摘し、プロトタイプ理論の問題点を示す。

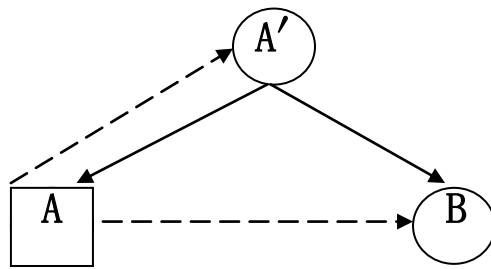
### 2.4.1 ネットワークとしての文法

従来のプロトタイプ理論はカテゴリーに属するメンバー間の典型性の変化は正しく捉えることはできたが、当該カテゴリーが典型性効果<sup>27</sup>を示す際のメカニズムは、うまく説明されなかった。一方、ラネカー(2000 : 77)は「言語に関わる知識は、ネットワーク構造をなしている」と主張した。このネットワーク構造とは、「数多くの事例の共通部分から継続的にスキーマが抽出できることによって、カテゴリーがネットワークのように拡張していく」ことを指し、図 2.5 のように示される。

---

<sup>27</sup> 「典型性効果」の概念については注 3 参照。



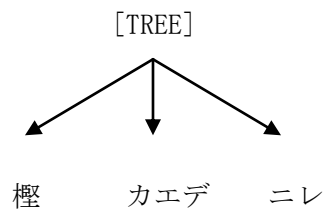


[図 2.5 : ネットワークカテゴリーの拡張イメージ(ラネカー2000 : 77)]

図 2.5 によると、多くのプロトタイプ事例が持つ共通部分から最も基本的なスキーマ“A”が抽出される。また、プロトタイプ事例の横方向の拡張である“B”が現れる。スキーマ A と事例 B には異なる部分はあるが、両者の共通部分からさらに縦方向のスキーマ“A'”が抽出される。ラネカー(2000 : 76)は図 2.5 において、「プロトタイプからの拡張によるネットワークの『横方向』への拡張はより高次のスキーマの抽出による『縦方向』への拡がりを引き起こす傾向がある」と述べている。

また、河上(1997)によると、Langacker (1987)は、子供の認知過程に見られた[TREE]という概念カテゴリーの拡張を図 2.6 と図 2.7 のような 2 つの段階から捉えているという。

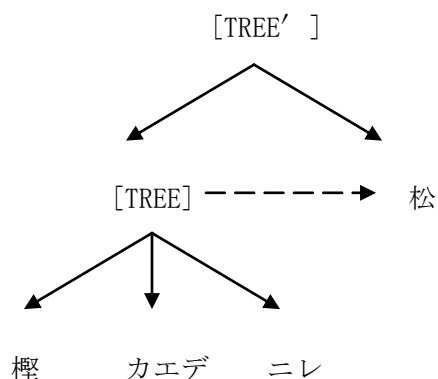
#### 第一段階



[図 2.6 : 概念カテゴリーの拡張過程その 1(河上 1997 : 52)]

子供は最初の認知段階で、「榿、カエデ、ニレ」などのような広葉樹から「TREE」というスキーマを抽出する。

## 第二段階



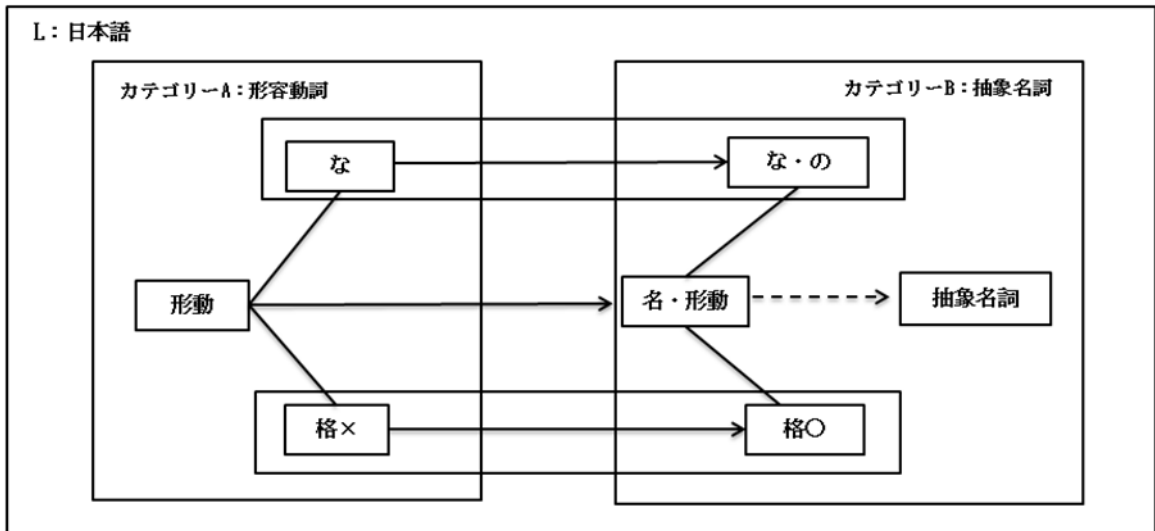
[図 2.7: 概念カテゴリーの拡張過程その 2(河上 1997 : 53)]

針葉樹である松は、第一段階で得られた広葉樹と葉の形状が著しく異なるが、木の皮、幹、根元など部分的な共通性に基づいて、子供は松を木のプロトタイプスキーマからの拡張メンバーとして認識する。河上(1997 : 53)によれば、「この段階は、子供の『木』の概念」のスキーマ的ネットワークが形成されたということになる。

つまり、ラネカーのネットワークカテゴリー観は、異なるスキーマ間に見られる部分的な共通性に基づき、新たなスキーマが連続的に派生される状況をネットワークの形で動的に捉えたものである。このようなラネカーの見方は、プロトタイプ事例の拡張のみならず、カテゴリーの構成を支えるメカニズムまでも解明すると思われる。

### 2.4.2 抽象名詞カテゴリー拡張のメカニズム

ラネカー(2000)の、プロトタイプ事例の拡張はスキーマの連続的な抽出によって形成されるネットワークカテゴリーである、という考えを用い、形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張を考察すると、そのメカニズムは図 2.8 のようになる。



(ラネカー2000 : 91 の内容をもとに筆者作成)

[図 2.8 : 形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーの合成]

図 2.8 によると、連体形「な」のみの適用と格助詞との共起不可から「形動」のスキーマが抽出される。一方、連体形「な・の」の併用と格助詞との共起可から「名・形動」のスキーマが抽出される。なお、「平和・健康」など多くの「名・形動」は状態概念を示すため、本研究では辞書に「名・形動」と記載されたものは抽象名詞カテゴリーの下位分類として扱うことにする。その上で、図 2.8 を眺めるならば、統語的に、「な」のみの適用から「な・の」両方の適用、また、格助詞との共起不可から共起可への拡張と共に、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性の移行、さらに、品詞カテゴリーの変化が起こることになる。

しかし、実際の統語的特徴の拡張はより複雑と思われる。ここで、改めて上原(2003)が挙げた形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の典型性の変化を見てみたい(表 2.2 参照)。

[表 2.2 : 形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の典型性効果の段階別分類]

	格助詞との共起	連体形「の」との共起	
一	×	×	な
二	×	○	な・の
三	○	×	な
四	○	○	な・の

表 2.2 で、上原は形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーが示す統語的特徴の典型性効果を四段階に分けている。「格助詞との共起」の列は図 2.8 の共起不可から共起可への変化と一致している。問題となるのは「連体形『の』との共起」の列である。図 2.8 では連体形「な」から「な・の」へ変化しているが、実際の統語的特徴の拡張における連体形「な」から「な・の」への変化は一様ではない。つまり、「一」段階から「二」段階では「な」から「な・の」へ変化しているが、「二」段階から「三」段階では「な・の」が再び「な」に変化し、「三」段階から「四」段階ではその「な」が再度「な・の」に変化しているのである。このような連体形「な」から「な・の」への交替、あるいは、連体形「な・の」から「な」への交替はプロトタイプ理論ではうまく説明できないものである。なぜこのようなことになるのだろうか。

それは、プロトタイプ理論が「文脈に依存する」(松香 2010 : 106)ことを前提に考えられてきたものであるためと考えられる。そのため、文脈に依存しないモデルと文脈依存のモデルが混ざっている場合、どのプロトタイプ条件が優先的に形成されているのかがうまく説明できないのである。

形容動詞の場合、表 2.2 において、「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」の両方が可能という統語的特徴は非典型的な形容動詞に備わるものであり、「形容動詞性以外に名詞性を持つ語彙である場合」という文脈を前提に成り立つものであるため、文脈依存と言える。一方、「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」の両方が不可能という統語的特徴は典型的な形容動詞に備わるものであることから、何の文脈も前提とせず、文脈自由と言える。統語的特徴の典型性が強から弱に変化していく過程自体は、プロトタ

イプ理論のいう文脈自由から文脈依存への変化で説明することはできるだろうが、一旦、文脈自由が文脈依存に変化したものが、再び文脈自由になり、その後、再度文脈依存になるという現象は説明することは難しい。少なくとも、この現象はプロトタイプ理論だけでは解明できないものであり、プロトタイプ理論の限界を示すものである。そこで本研究では、この形容動詞の典型性効果が現れる要因を解明するために、以下の動的文法理論を援用することにした。

## 2.5 動的文法理論の援用

「動的文法理論」(dynamic model of grammar)はKajita(1977)によって提案され、生成文法理論の句構造規則に基づき、プロトタイプ理論の観点を補いながら、文法規則をより基本的なものより派生的なものに区分した上で、動的に文法規則の拡張を捉えているため、従来の理論では十分に説明できなかった多くの現象を解き明かす理論である。

### 2.5.1 動的文法理論の発想とその基本規則

梶田(1982)は、生成文法による句構造規則に基づきながらも、プロトタイプ理論の観点から、統語的特徴の拡張を動的に捉えた上で、統語的特徴の習得順序を推測しようとしたものである。その基本的な考えは次の2種類の法則からなる。

法則 A. X という種類の規則は、任意の言語の任意の段階で可能である。

法則 B. もしある言語  $j$  の習得段階  $i$  の文法  $G^j_i$  のなかに Y という種類の規則が含まれているならば、同言語のつぎの習得段階  $i+1$  の文法、 $G^j_{i+1}$  においては、Z という種類の規則が可能である。

(梶田 1982 : 79)

梶田(1982)は、基本型の統語的特徴は法則 A に対応するが、派生型の統語的特徴は法則 B に対応すると述べている。法則 A の「任意の段階で可能」というのは、この理論が任意の言語“X”において、基本型の統語的特徴の習得結果だけではなく、習得過程にも注目していることを示すものである。また、法則 B は、その習得のプロセスに言及したものである。具体的には、1つの習得段階“i”において知識 Y があれば、次の習得段階“i+1”で、“Z”という新たな統語的特徴が派生されるということである。このような見方に従うなら

ば、文法の習得過程を分析する際、『より基本的』、『より派生的』という概念に明確で自然な定義を与える」(梶田 1982 : 92)ことが可能になる。文法の習得段階の「移行」についての説明の有無という意味で、梶田(1982)は、生成文法による可能な文法が「静的」なのに対して、A、B類の法則を含む理論は「動的」であるとし、その理論を「動的文法理論」(梶田 1982:79)と呼んだ。

つまり、動的文法理論は、従来の生成文法による句構造規則に基づきながらも、プロトタイプ理論の観点から統語的特徴を基本型と派生型に区別し、派生型は基本型からの拡張とする動的な文法理論なのである。

### 2.5.2 動的文法理論による統語機能の再解釈

梶田(1982)は英語の前置詞句“from… to …”を例にして、動的文法理論の利点を示した。

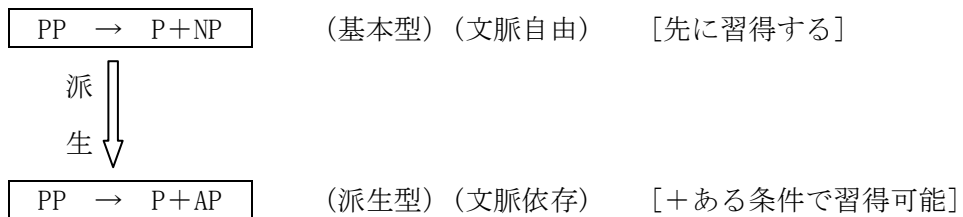
例 18 :

- A. He flew from Moscow to Manilla.
- B. The temperature turned from cold to hot.

(梶田 1982 : 79)

福田(1987 : 49)によると、英語の前置詞句を生成する“PP→P+NP”という規則について、Aの“from Moscow to Manilla”における“from Moscow”と“to Manilla”は“by bus”、“with Mary”のような表現と同じように、どんな環境でも自由に使える文脈自由規則である。ところがBにある2つの前置詞句は両方とも「P+AP」の形をしている。「もし前置詞句を展開する規則として、PP→P+NPのほかにPP→P+APがあるとすると、後者も文脈自由のはずである」。しかし、Bのような「前置詞句は非常に限られており」、「from cold」、「to hot」などの表現から成る「PP→P+AP」という規則はどこにでも使える形ではない。つまり、同じ英語の前置詞句の構造であるが、「PP→P+NP」は「文脈自由」であり、一方、「PP→P+AP」は「文脈依存」ということになる。これは「句構造規則には正反対の性格をもつものが混在」していることを示すものである。このような現象が生じるのは、可能な文法に対する不十分な限定によるものであると考えられる。

それに対して、動的文法理論は、AとBを同列に置くことはせず、Bのような前置詞句は一定の状況下でのみ生じうると考える。その主張をまとめると図 2.9 になる。



[図 2.9 : 動的文法理論による解釈(毛 2012 : 21 の図を基に筆者修正)]

図 2.9 から、文脈自由の基本型である「PP→P+NP」に対して、文脈依存「PP→P+AP」は派生型であると認識されていることが分かる。そして、この派生型は基本型と同じ時期に習得されるのではなく、基本型の習得が定着された後、ある条件のもとでのみ習得可能ということになる。

## 2.6 動的文法理論の発展

萱原(2003)は従来の動的文法理論による「基本型から派生型へ」という文法拡張の仕組みを踏まえ、英語の諸構文を手掛かりにし、「内部的拡張から外部的拡張へ」という文法拡張のプロセスを解明している。本節では、萱原の研究を中心に、動的文法理論の発展を見ていく。

Kajita(1977)が提案した「基本型から派生型へ」という文法の拡張形式を踏まえ、萱原(2003)は、構文形式の統語変化のプロセスは、「内部的拡張」と「外部的拡張」という 2 つの発達過程が担っていることを指摘した。「内部的拡張」とは「当該の構造の内部形式がどのような特徴を持った形式から発達していくかという、構造の内部自体の変化のプロセス」(萱原 2003 : 179)を示したものである。それに対して、「外部的拡張」とは、「当該の構造が、どのような外部的統語環境のもとで生起するようになるのかという、問題の構造と外部環境との相関関係を踏まえた変化のプロセス」(萱原 2003 : 179)のことである。

まず、萱原(2003:180)は動詞“call”を例にして、以下のように、構文形式の統語変化のプロセスにおける「内部的拡張」を説明している。

例 19 :

- A. Before this Disappointment, Sir ROGER was what you call a fine Gentleman.  
(Specator. 2 : 8)

(萱原 2003 : 180)

B. It was at this extremity — and he never resorts to the expedient until the bidders have reached what they themselves at the time conceive to be the highest point —

(Old and New London. I : 524)

(萱原 2003 : 180)

萱原(2003 : 180)は、例文 A において、「独立関係節構文内で使われる動詞は“call”を基本として拡張し、時間の経過とともに」、例文 B のように、“call”から“conceive”にも「拡張していくというプロセスを見て取ることができる」と述べている。また、このような「統語的発達過程における内部拡張プロセス」は、英語の「文名詞句、分裂文、擬似分裂文、感嘆文、否定倒置構文」などにも見られると指摘している。

一方、萱原(2003 : 181)は、「代不定詞が生起する統語環境の分布」を表 2.3 のようにまとめながら、構文形式の統語変化のプロセスにおける「外部的拡張」を説明した。

[表 2.3 : 代不定詞が生起する統語環境の分布]

統語環境	数	割合	例 文
動詞の補部	21	56.8%	She opened the window, though I had told Her not to $\phi$ . (Zwicky1982 : 14)
擬似法助動詞の直後	9	24.3%	I don' t dance much now, but I used to $\phi$ a lot. (Swan1980 : 328)
主語の位置	4	10.8%	a. % You shouldn' t play with rifles, because it' s dangerous to $\phi$ . (Zwicky1982 : 13) b. * You shouldn' t play with rifles, because to $\phi$ is dangerous. (Zwicky1982 : 7)



間接疑問節	1	2.7%	a. I want to calculate the bill, but I don' t know how to $\phi$ . (Zwicky1982 : 14) b. ?/* Sally has to be told when to leave for school; she can' t remember when to $\phi$ on her own. (Lobeck1086 : 157)
形容詞的用法	2	5.4%	a. I meant to destroy it from the first, but I was afraid to $\phi$ . (Jeapersen1949 : 340) b. * Sally was slow to react, though Lucy was quick to $\phi$ . (天沼 1987 : 77)

(萱原 2003 : 181-182 の内容をもとに筆者作成)

表 2.3 から、それぞれの統語環境において、「代不定詞の生起する統語環境は、8 割以上が動詞の補部と擬似法助動詞の直後であること」(萱原 2003 : 181)が分かる。萱原(2003 : 181)は、この現象から、「動詞の補部」及び「擬似法助動詞の直後」以外のほかの統語環境に生起したのは代不定詞の統語変化のプロセスにおける「外部的拡張」である、と主張した。また、この主張の妥当性を示すために、萱原はそれぞれの統語環境における「代不定詞の生起」に対する「容認可能性」の差を比べた。

具体的には、表 2.3 の例文が示すように、すべての構文において、「動詞の補部」や「擬似法助動詞の直後」に生起する代不定詞は容認可能である。それに対して、「間接疑問節」、「主語の位置」における不定詞の適用は構文によって容認度の差があるのが分かる。また、形容詞的用法では、[be afraid to  $\phi$ ]は容認されるが、[be quick to  $\phi$ ]は容認されないように、代不定詞の適用に対する容認度が文法的に条件付きとされる場合もある(萱原 2003 : 182)。

萱原は以上の分析を踏まえ、「内部的拡張においては、基本的なものほど歴史上の生起過程が早く、外部的拡張においては、ある狭い環境から変化が生じ、より広い環境に拡張していく」(萱原 2003 : 184)と指摘した。また、外部的拡張が行われた後の統語環境で形成された構文には、当該文法項目に対する容認度が低くなる傾向が見られたとも述べている。

本節では、プロトタイプ理論だけでは説明できない形容動詞の典型性効果を解明するのに役立つと思われる動的文法理論を紹介した。この動的文法理論は、統語的特徴の中により基本的なものとそれをもとに拡張した派生的なものを認め、派生的なものは基本型を習得した後、ある条件下で習得されるという動的な習得プロセスを想定する。梶田(1982:92)は「文法事項の配列決定のための科学的な規準の1つとして、動的な生成文法を採用することは、検討してみる価値が十分ある」と述べている。また、萱原(2003)は梶田による「基本型から派生型へ」という文法の拡張形式を踏まえ、文法の拡張による統語環境の変化に注目し、「内部的拡張から外部的拡張へ」という文法の拡張プロセスを示した。本研究が対象とする形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張が、動的文法理論を援用しながら、どのように分析されるのかという問題は、次章で扱う。

## 2.7 動的文法理論を援用した理由

動的文法理論は生成文法と同じく句構造規則をもとに文の構造を分析しているが、文法規則間の非均質性と連続性という発想は、プロトタイプ理論における当該カテゴリーに属するメンバー間の非均質性及び連続性という基本的な認知観点をういたと思われる(岡田1988, 松本1995)。松本(1995)は、上述の特徴に基づいて、動的文法理論を通じて「従来の生成文法理論とプロトタイプ理論との共存的融合の姿」(松本1995:4)が見えると述べた。つまり、動的文法理論はプロトタイプ理論の認知観点を援用しながら、様々な句構造規則の位置づけ及び拡張プロセスを分析している。

梶田(1977)によって提出された動的文法理論の特徴について、次の2点が見られる。まず、動的文法理論は、すべての文法規則を同一視するのではなく各文法規則の非均質性を認めた上で、より基本的な規則(基本型)とより派生的な規則(派生型)を区分することにした。

次に、動的文法理論もプロトタイプ理論と同じく、文法規則間(メンバー間)の連続性に基づいて文法規則の拡張プロセスを分析している。動的文法理論では、基本型の文法規則から派生型の文法規則が派生でき、派生型の文法規則を基にさらに新しい規則が派生できるため、文法規則が基本型から派生型へという方向で徐々に拡張していくと見なすため、文法規則間の連続性を主張している。

2.4.2 でプロトタイプ理論は文脈依存の理論であるため、理論自体の限界性が見られると述べたが、動的文法理論は文法規則や構文が拡張する過程で統語環境の変化を分析する

ため、プロトタイプ理論によって説明できない統語拡張の現象を解釈できるようになっている。岡田(1988)によると、「動的文法理論は、可能な文法規則の規定の中に『より基本的な規則』と『より派生的な規則』の区別を盛り込むことにより規則間の派生関係を規定する唯一の理論である」(pp. 87-88) ため、「言語知識の性質と起源の解明」(p. 88) に貢献できると指摘している。それゆえ、本研究では、形容動詞カテゴリーに備わる統語的特徴の拡張において、プロトタイプ理論によって説明できない部分に動的文法理論を援用した上で解明する。

## 2.8 第二章のまとめ

本章では、プロトタイプ理論及び動的文法理論に関わる内容を概観した。プロトタイプ理論は Rosch(1973)による色彩の心理実験から生まれ、カテゴリーという概念に基づいてメンバー間の不均質性、段階性を強調したものである。すなわち、それは、当該カテゴリーに属するメンバーはより典型的なものと非典型的なものに分けられ、その典型性の変化には段階的な連続性の存在が認められる、また、習得は典型的なメンバーから非典型的なメンバーへと行われるということを中心とするカテゴリー論なのである。このようなプロトタイプ・カテゴリー論の特徴は古典カテゴリー論のそれとは根本的に異なるものである。

プロトタイプ理論は発展するにつれ、心理学だけではなく、言語学でも幅広く応用されることになった。中でもラネカー(2000)は従来のプロトタイプ理論を踏まえ、ネットワークとしての文法を提案し、カテゴリー間の連続性を動的に捉えていった。しかし、このラネカー(2000)のネットワークとしての文法という考え方では、本研究が対象とする形容動詞カテゴリーは十分説明されない。なぜならば、形容動詞カテゴリーにおいては文脈自由の統語的特徴と文脈依存の統語的特徴が混在し、その拡張プロセスは文脈依存を前提としたプロトタイプ理論だけでは説明できないからである。この問題を解消するために、本研究は Kajita(1977)が提唱した動的文法理論を援用することにした。

動的文法理論とは、生成文法の句構造規則に基づきながら、プロトタイプ理論の観点から、統語的特徴の拡張プロセス及び習得順序を推測しようとするものである。具体的には、統語的特徴は均質ではなく、より典型的な規則(文脈自由の基本型)と非典型的な規則(文脈依存の派生型)があり、派生型は基本型に基づいて作り出されるものであるため基本型の習得が定着してから習得される、また、派生型からはさらに新たな統語的特徴が産出されることにより統語的特徴は動的に拡張していく、とするものである。このような動的文法

理論とプロトタイプ理論の間には、非常に類似した方向性がうかがえる。すなわち、「ある範疇内・集合内に、基本的・典型的な成員と、二次的・派生的な成員とを認めようという発想の存在である」（松本 1999 : 5）。このことから、形容動詞カテゴリーの分析に、文脈依存を前提にしたプロトタイプ理論の不十分な部分を補足するものとして動的文法理論を導入することは適切であると思われる。

本研究では、プロトタイプ理論の観点から、形容動詞における品詞性、カテゴリーの特徴、意味的特徴及び統語的特徴、習得順序を分析するが、形容動詞に関わる統語的特徴の拡張プロセスの部分については、動的文法理論を援用しながら解明したい。次章では、プロトタイプ理論及び動的文法理論を用いて、形容動詞の意味的特徴及び統語的特徴の再解釈を試みる。

### 第三章 プロトタイプ理論による形容動詞の再解釈

#### はじめに

従来の研究では、形容動詞はほかの品詞に比べると、意味的には形容詞に近く(活発な子供、大切な思い出など)、物事の属性や特徴を描写・修飾する機能が備わっているが、統語的には、助動詞「だ」の接続が可能である点(静かだ、元気が一番だなど)、漢語語幹の独立性といった点で名詞と類似し、特殊な品詞であると指摘されている(寺村 1982, 上原 2003, 森田 2008 など)。しかし、それらの研究は、一般の辞書に登録された語に付された「形動」<sup>28</sup>、「名・形動」<sup>29</sup>という分類の違いを意識することなしに形容動詞の特殊性を論じているために、形容動詞という品詞自体の位置づけやその意味的特徴、及びその統語的特徴に関わる説明も漠然としたものとなっている。そのような状況から、学習者にとって形容動詞の習得はそのほかの品詞の習得よりも困難を伴うことが多いと推測される。また、形容動詞カテゴリーだけではなく、名詞カテゴリーが典型性を持つ可能性や、名詞カテゴリー側の視点から形容動詞カテゴリーのプロトタイプ性を考察するといった研究は行なわれていない。さらに、辞書に記載されている「名・形動」が「形動」とどのような関係を持つのか、また、それが形容動詞カテゴリー<sup>30</sup>の典型性の形成にどのような役割を果たしているかも詳細には言及されていない。

本章では、まず、「形動」と「名・形動」の違いを明らかにし、形容動詞カテゴリーの典型性を分析する。また、名詞カテゴリー<sup>31</sup>から形容動詞カテゴリーへの影響の有無を確かめるため、形容動詞カテゴリーの典型性だけでなく、名詞の典型性も検討する。その上で、形容動詞側と名詞側の2つの角度から、形容動詞の意味的特徴及び統語的特徴の典型性の変化のプロセスを明確にする。さらに、形容動詞の意味的特徴及び統語的特徴の拡張過程で、「名・形動」が果たした役割を明らかにする。

<sup>28</sup> 本研究は、辞書で「形動」と記載されたものは形容動詞性のみが備わる語彙を指す、と理解する。

<sup>29</sup> 本研究は、辞書で「名・形動」と記載されたものは名詞性と形容動詞性の両方帯びた語彙を指す、と理解する。なお、上原(2003: 55)は、このような語彙を「二重品詞語」と呼んでいる。

<sup>30</sup> 本研究では、「形容動詞」は品詞の名称である。一方、「形容動詞カテゴリー」は、プロトタイプ理論の観点から、形容動詞性が備わる語彙の集合を指す。

<sup>31</sup> 本研究では、「名詞」は品詞の名称である。一方、「名詞カテゴリー」は、プロトタイプ理論の観点から、名詞性が備わる語彙の集合を指す。

### 3.1 形容動詞カテゴリーが典型性効果を示す理由

上原(2003)は、形容動詞カテゴリーにおいて典型性効果が表れる理由として、次の3点を挙げている。まず、形容動詞カテゴリーに属する語彙は、必ずしも共通した文法的なふるまいを示すものではないということである。これは、飯豊(1973)の、形容動詞カテゴリーにおいて一つ一つの文法用法に当該する語は限られている、という指摘と一致するものである。次に、形容動詞カテゴリーは、形容詞カテゴリー、また、特に抽象名詞カテゴリーとの境界線がはっきりと引けないという点である。さらに、形容動詞カテゴリーに属する語彙の中には、形容動詞であることが明確なものからそれほど明確ではないものまでがあるという点である。

しかし、形容動詞カテゴリーが典型性効果を示す理由は上記の上原(2003)が言及したもののだけでなく、1.4で述べた形容動詞の歴史的変遷とも強く関わりがあると考えられる。形容動詞カテゴリーの三分の二以上は漢語系形容動詞であるが、永澤(2011)によると、漢語系形容動詞の名詞から形容動詞への変化の度合は、語彙メンバーそれぞれにおいて違いがあった。それゆえ、現代日本語には「奇妙」、「活発」のように典型的な形容動詞が存在すると同時に、「平等」、「孤独」のように名詞的特徴の強い形容動詞も存在しているのである。すなわち、品詞性の歴史的変遷過程が形容動詞カテゴリーの典型性効果の段階性を引き起こした原因の一種と考えられるということである。

### 3.2 形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの関係

加藤(2003)は、形容動詞の品詞区分については、大きく分けて以下のような3通りの立場があると述べている。

- ① 形態的な特性に重点を置き、形容動詞を名詞と連続的なものと見(て、名詞の下位分類として両者を分け)るという立場
- ② 意味的な特性を重視し、形容動詞と形容詞を連続的なものと見(て、形容詞の下位分類として両者を分類す)る立場
- ③ 形容動詞を名詞とも形容動詞とも異質なものと見て区分する立場

3番目の立場は、形容動詞を体言と別の要素と見るか、用言と見るかでまた異なり、それぞれを1番目の亜属2番目の亜種と見てもいい。

(加藤 2003:149)

本研究は①の立場に立ち、プロトタイプ理論を用いて、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの関係を解明していく。なお、プロトタイプ理論はカテゴリーという概念に基づくものであるため、形容動詞カテゴリーの典型性を考察するにあたっては、まず、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの関係を明確にしておく必要がある。

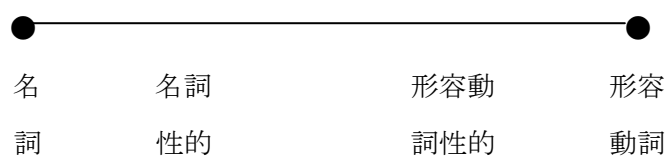
形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの関係について、上原(2003)は、以下の図 3.1 を用い、それらの境界が明確に区切られないことを示した。



[図 3.1 : 名詞・形容動詞カテゴリーの継続性 (上原 2003 : 59) ]

図 3.1 を見ると、形容動詞カテゴリーにおいて典型的なもの「静か」から名詞カテゴリーに近くなればなるほど、語彙メンバーの形容動詞としての典型性は次第に弱まっていくと同時に、名詞的な性質を帯びてくるのが分かる。

一方、沈(1985)は、形容動詞カテゴリーにおける語彙メンバーの品詞性を図 3.2 のように分類している。



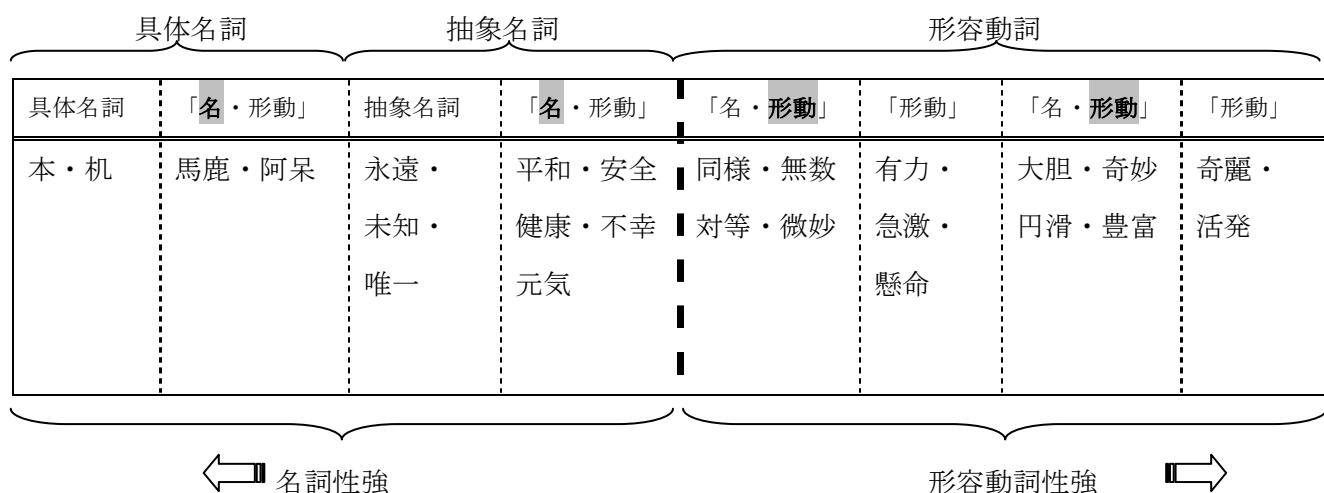
[図 3.2 : 形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの品詞性 (沈 1985 : 33)]

沈(1983)によると、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの品詞性は均質ではなく、語彙によって、名詞的なものと形容動詞的なものが両方存在しているという。すなわち、形容動詞には、より形容動詞性の強い語彙とより名詞性の強い語彙があるということである。

また、桜井(1964 : 42)は、形容動詞カテゴリーの非均質性について、「中心に典型的存在(和語系では『静かだ』『穏やかな』など。漢語系では『ふしぎだ』『だいじだ』など)があつて、それを囲んでさまざまの度合いの形容動詞性を持った語が存在し、結局、名詞+なにがしの形容動詞でないものまで連続している」という。

さらに、松下(1975 : 102)は、「語幹に格助詞『が』や『を』がついたり、また連体修飾語を受けたり」する形容動詞は「名詞としての性質」が備わっているため、「このような形容動詞は名詞性を兼有する」と述べている。

形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーに属する語彙メンバーを、辞書に記載された品詞分類(「形動」、「名・形動」)、また、名詞カテゴリーの場合は「具体名詞」か「抽象名詞」かに従って類別すると、図 3.3 のようになる。



[図 3.3 : 形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーに属する語彙メンバーの分類]

図 3.3 によると、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーに属する語彙メンバーは「具体名詞」、「抽象名詞」、「形容動詞」の3つのグループに分けられる。各グループには、それぞれの品詞名と一致しているメンバーがある。一方、「名・形動」は3つのグループのすべてに存在している。この「名・形動」と記載された語は名詞と形容動詞両方の品詞性を備えたものと思われるが、その両品詞の性質はメンバーごとに異なる。つまり、抽象名詞と形容動詞カテゴリーの境界線(太字の点線)を中心にして、それより右側に行けば行くほど、形容動詞性は強くなるが、逆に、名詞性は弱くなる。一方、同境界線を中心にして、それ



より左側に行けば行くほど、名詞性は強くなるが、形容動詞性は弱くなるように見える。また、上の図の抽象名詞カテゴリーと形容動詞カテゴリーの境界線は便宜上太い点線で示したが、抽象名詞と形容動詞カテゴリーの区別自体は意味的にも統語的にも明確ではないため、「名・形動」の品詞性の転換は一気に起こるわけではなく、抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへ徐々に変わっていくものと思われる。

### 3.3 形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴と統語的特徴の再解釈

本節ではプロトタイプ理論を用いて、形容動詞カテゴリーにおける意味的特徴の典型性の変化プロセスと統語的特徴の典型性の変化プロセスは互いに正反対の方向性を示すことを明らかにする。また、形容動詞カテゴリーの文法拡張プロセスにおいて、プロトタイプ理論によって説明できない部分は、動的文法理論を援用することにより説明可能になることを示す。

まず、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーに属する語彙メンバーが示す名詞性の弱から強への変化は、「可算性」及び「同定性」を基準にすると、以下の表 3.1 のように捉えられる。ここで、「同定」とは、指し示された 2 つの対象が「同一であると見極めることである」（広辞苑 1998 : 1887）。例えば、「犯人は太郎だ」という名詞句を「太郎が犯人だ」（今田 2006 : 71）のように言い換えられる性質を「同定性」という。また、多くの場合、「A は何であるか」という問いに対して、答えの「A は B だ」という名詞句に、「A という記述を満たす値が B であることを述べ、B が A だと言い換えられる」（今田 2006 : 71）名詞句を「同定文」という。本研究では、表 3.1 で挙げているそれぞれの語彙が示している意味概念を手掛かりに「A は B である」という文を作り、それぞれの文が同定文であるか否かを判断した上で、当該語彙に備わる同定性の有無を判定した。

[表 3.1： 形容動詞・名詞カテゴリーに属する語彙メンバーが示す名詞性の変化]

語彙	可算性	同定性	意味概念
活発 綺麗	* 1つの活発 * 1個の綺麗	あの(その)性状は何であるか? * あの性状は活発である。 * (活発があこの性状である。) * その性状は綺麗である。 * (活発がその性状である。)	性状概念
健康 平和	* 1つの健康 * 1個の平和	あの状態は何であるか? あの状態は健康である。 (健康はあの状態である。) その状態は平和である。 (平和はその状態である。)	状態概念
馬鹿 阿呆	3人の馬鹿 1人の阿呆	あの(その)人は何であるか? あの人は馬鹿である。 (馬鹿はあの人である。) その人は阿呆である。 (阿呆はその人である。)	ある特徴を持つモノ概念
本 魚	1冊の本 一匹の魚	あれ(それ)は何であるか? あれは本だ。 (本はあれだ。) それは魚だ。 (魚はそれだ。)	モノ概念

表 3.1 によると、「活発・綺麗」など典型的な形容動詞は「性状概念」を表すため、「同定性」を持たず、数量詞とも共起できない。一方、「本・魚」など典型的な名詞は「モノ概念」を表し「モノ」として同定されるため、数量詞とも共起する。また、典型的な形容動詞と典型的な名詞の間には、同定性はあるが数量化の不可能な「健康・平和」のようなものと同定性があり数量化も可能な「馬鹿・阿呆」のようなものがあることが分かる。

表 3.1 の分析に基づいて、「同定性」と「可算性」という 2 つの基準によって各段階の語彙メンバーが表している名詞性の度合を示すと図 3.4 になる。

名詞性最強	名詞性強	名詞性弱	名詞性無
同定性最強・数量可	同定性強・数量可	同定性弱・数量不可	同定性無・数量不可
本・机	馬鹿・阿呆	平和・健康	活発・綺麗
具体名詞	非典型的な具体名詞	抽象名詞	形容動詞

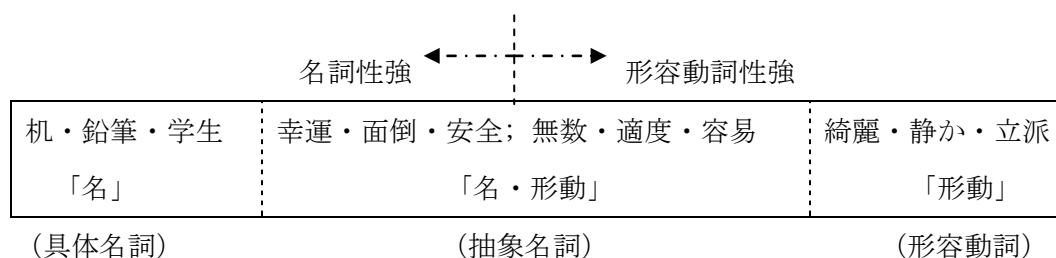
← --- 視点

(毛 2013b : 173 の図をもとに筆者が修正したものである)

[図 3.4 : 名詞性の変化過程]

図 3.4 から、形容動詞「活発・綺麗」から名詞「本・魚」へ名詞性が強くなるにつれ、語彙メンバーの可算性、また、同定性の度合が次第に強くなっていくのが分かる。つまり、形容動詞から具体名詞へ、語彙メンバーの名詞性が徐々に付与されていくということである。

また、分析の視点を「形容動詞」の側に置こうが「名詞」側に置こうが、語彙メンバーの典型性の変化は両カテゴリーの間にある「抽象名詞」に影響を与えるため、次に、図 3.5 でその曖昧な区間の特徴を示す。



[図 3.5 : 名詞・形容動詞カテゴリーの間にある抽象名詞の特徴(毛 2013b : 174)]

図 3.5 の左端は、実体のある対象物を示す典型的な具体名詞である。一方、右端は物事の性状を表す典型的な形容動詞である。また、中央の部分は典型的な名詞と形容動詞の間に挟まれて、名詞性と形容動詞性両方の性質を帯びるため、辞書では「名・形動」と記載されたものである。しかし、同じ「名・形動」であっても、語彙メンバーの性質は均質ではなく、「幸運・面倒・安全」のようにより名詞性の強い語彙と「無数・適度・容易」のよ

うにより形容動詞性の強い語彙があり、名詞カテゴリーあるいは形容動詞カテゴリーへの帰属にはゆれが見られる。

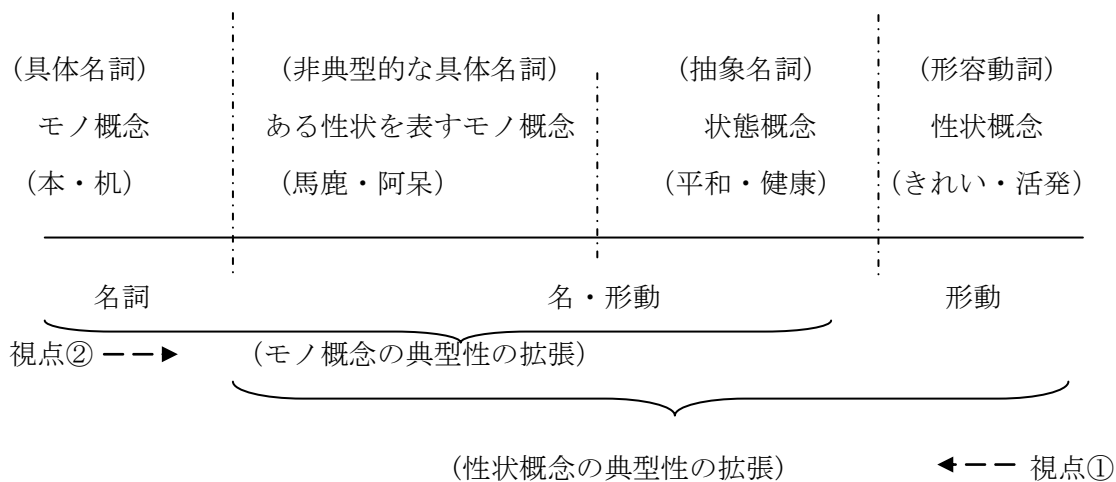
また、「名・形動」に属する語彙は、通常、明確な形を持たない状態概念を表すことから、意味的には名詞カテゴリーの下位分類にある「抽象名詞」の特徴を帯びる。このことから、本研究では、多くの先行研究と同じく(阪倉 1966, 上原 2003, 永澤 2011)、「名・形動」の記載のある語彙については抽象名詞として扱うことにする。

この「名・形動」の記載のある抽象名詞は、語彙メンバーによって違いはあるものの、統語的には、基本的に連体形「な・の」の併用が可能である。また、意味的には、物事の状態や様相を表し、形容動詞と類似している。そのため、「名・形動」と記載された抽象名詞は、特に、形容動詞カテゴリーと非常に曖昧な境界を持ったものといえることができる。つまり、形容動詞と名詞の間の「名・形動」というカテゴリーの存在は、形容動詞カテゴリーが典型性を備えていることを示す証拠となるものである。

### 3.3.1 形容動詞カテゴリーにおける意味的特徴の再解釈

Dixon(1977:16)によって分けられた「寸法・物質の性質・色・人の性癖・年齢・評価・速度」という7つの典型的な形容詞の意味クラスに基づいて、Backhouse(1984)は日本語の形容詞と形容動詞の意味クラス分類を考察した。その結果、形容詞はすべての意味クラスに存在する一方、形容動詞は色・年齢・速度のクラスには見出せず、評価と人の性癖のクラスに多く見られることが明らかになった。この調査結果から、上原(2002)は、形容詞と形容動詞は物事の属性や状態を描写するという点においては共通するものの、上述の7つの意味クラスに対する両品詞が占める割合から、形容詞は「基本的」であり、形容動詞は「非基本的」である、とした。つまり、それが表す意味クラスの割合とそれが表す意味的特徴自体の相違から、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴は形容詞カテゴリーのそれとは完全には一致しないということである。

一方、上原(2003)による形容動詞と名詞の意味的特徴の区分をもとに、形容動詞と名詞カテゴリーに属する語彙メンバーの意味的特徴の拡張過程を捉えると図3.6のようになる。



[図 3.6 : 形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴の拡張過程(毛 2013b : 175)]

図 3.6 を見ると、分析の視点によって、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの拡張プロセスには質的な相違が見られるのが分かる。具体的には、視点②によれば、名詞が示す「モノ概念」の拡張は「具体名詞」から「抽象名詞」まで同じ名詞カテゴリーの内部で行われるため、語彙メンバーの品詞性自体には変化は見られない。

一方、視点①によれば、典型的な形容動詞が示す「性状概念」の拡張は形容動詞カテゴリーを越え、名詞カテゴリーの「非典型的な具体名詞」にまで及ぶため、結果的に、その語彙メンバーの品詞性に変化が見られることになる。このことを意味的観点から見ると次のようになる。つまり、形容動詞カテゴリーの意味上の典型的語彙メンバーは「性状概念」を表す「形動」であるが、この「性状概念」が「状態概念」にまで変化・拡張されると、「状態概念」を示す抽象名詞までが形容動詞カテゴリーに属することになり、結果的に、その語彙メンバーに名詞カテゴリーの語彙が含まれることになるということである。

以上、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの拡張プロセスは、名詞側から見るか形容動詞側から見るかにより質的相違が見られることを見た。すなわち、名詞側から見たカテゴリーの拡張は意味的特徴の変化を伴うものの、その語彙メンバーの品詞性には変化はないが、形容動詞側から見たカテゴリーの拡張は、意味的特徴の変化と共に抽象名詞までもがその語彙メンバーとなるため、その品詞性にも変化が起こり、結局、辞書に「名・形動」という記載が生じることになったということである。

### 3.3.2 形容動詞カテゴリーにおける統語的特徴の再解釈

「名・形動」と記載された抽象名詞は、形容動詞の意味的特徴のみならず、その統語的特徴にも影響を与えている。したがって、本節では、「名・形動」と記載された抽象名詞と形容動詞の名詞性を比較対照することを通し、形容動詞カテゴリーにおける統語的典型性の変化を考察していく。

#### 3.3.2.1 「名・形動」及び「形動」の語彙メンバーの名詞性判断の基準

統語上、名詞は「が」、「を」、「から」など様々な格助詞に前接できるが、形容動詞はそれらの格助詞とは共起できない。また、名詞を修飾する場合、名詞と形容動詞はそれぞれ連体形「の」と「な」をとるという違いがある(上原 2003)。つまり、格助詞及び連体形「の」との共起の可否を判定することで、「名・形動」と記載された抽象名詞と「形動」の語彙メンバーの名詞性を区分できるということである。

しかし、この2つの名詞性判断の基準の有効性には違いがある。統語上、「名詞は、格助詞を伴う点はその大きな特徴」(三枝 1996 : 97)であり、一方、形容動詞は体言としては認められず格助詞の後接は起こらないため、「格助詞との共起<sup>32</sup>」という基準で形容動詞と名詞の品詞性は明確に分けられる。したがって、この条件によって「形動」と「名・形動」との品詞性を区別することも可能になる。

上原(2003)は、寺村(1982 : 67)の研究をもとに、「各形容動詞語彙によって、そしてある共起可能な格助詞の数、格助詞と共起するとしてもその使用に制限があるかないかが異なるなど、傾斜が見られる」(上原 2003 : 56-57)と述べた上で、寺村(1982)と同じ立場に立ち形容動詞と格助詞との共起の有無を調べ、その結果を表 3.2 のように示している。

---

<sup>32</sup> 「格助詞との共起」を基に形容動詞と名詞を判別する際の格助詞の候補としては、「に」、「が」、「から」などいろいろあるが、「から」はいわゆる内在格の格助詞であるため、前接する語の意味がその共起の可能性に影響してくる。それに対して、「が」「を」は構造格の格助詞であり、前接する語の意味が共起の可能性に影響することはないため、本研究では、格助詞「を」と共起するか否かを名詞性の判断基準として用いる。

[表 3.2 : 形容動词语彙とその格助詞共起に見る名詞らしさ (上原 2003 : 58) ]

形容動詞 語彙	格助詞					名詞らしさ
	が	を	から	…	… … … … …	
元気	ok	ok	?	…	… … … … …	
親切	ok	?	ok	…	… … … … …	
愉快	?	?	?	…	… … … … …	
静か	*	*	*	…	… … … … …	
… …	…	…	…	…	… … … … …	
… …	…	…	…	…	… … … … …	

上原 (2003 : 58) は、形容動詞ごとに共起できる格助詞の数は異なるが、「格助詞間の名詞性を示す度合の差(例えば『が』と『に』とでは『が』のほうが名詞性を高く示すとするなど)や、格助詞共起形式のどの程度の生産性を持って正用とするか(慣用句にしか使用されないような場合もある)など、客観的な計算方法が存在しない」と指摘している。

一方、名詞を修飾する場合、形容動詞は連体形「な」をとる(静かな夜・大切なもの)が、具体名詞は連体形「の」をとる(いちごのケーキ・バラの香り)。しかし、抽象名詞の特徴を帯びる「名・形動」には連体形「な・の」の併用が見られる(平和な(の)国、幸運な(の)女神)。すなわち、抽象名詞と形容動詞両方に連体形「な」の適用が認められるため、この基準によっては形容動詞と名詞の品詞の区別は根本的には判別できないということになる。

以上のことから、「格助詞との共起」という基準は形容動詞と抽象名詞を品詞的に判別する必要十分条件であり、「連体形『の』との共起」という基準は形容動詞(「～な」)と抽象名詞(「～な・の」)を区分する十分条件であると言える。したがって、本研究では、「格助詞との共起」という条件を優先的に用いて語彙メンバーの名詞性を評価したい。

上述の「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」という2つの基準に従い、形容動詞カテゴリーにおける統語的特徴の典型性の変化を見ると、表 3.3 のように四段階に分けられることが分かる。

[表 3.3 : 形容動詞の典型性による統語的特徴の段階分け(その 1)]

項目 段階	格助詞と の共起	連体形「の」 との共起	例	品詞分類
一	×	×	* 綺麗を、* 綺麗の部屋 * 活発を、* 活発の子供	形動
二	×	○	* 懸命を、懸命の(な)努力 * 急激を、急激の(な)変化	形動
三	○	×	健康を維持する、* 健康の人 安全を祈る、* 安全の隠れ家	名・形動
四	○	○	幸運を祈る、幸運の女神、幸運な 人；平和を願う、平和の(な)国	名・形動

(注: 「×」 = 指定条件と共起不可、「○」 = 共起可能；上原 2003 の内容をもとに筆者作成)

表 3.3 では、まず、「格助詞との共起」という基準で形容動詞と抽象名詞の品詞性が区分されている。「一」段階、「二」段階に属する語彙は「形動」であるのに対して、「三」段階、「四」段階に属する語彙は「名・形動」である。これに「連体形『の』との共起」という基準を加えると、「共起不可」と「可」が交替しながら現れている。これは、すなわち、品詞性が同一でも、「連体形『の』との共起」には相違が見られるということの意味する。また、連体形「の」と共起可能な語彙はそれとの共起が不可能な語彙より名詞性が強いいため、表 3.3 では「一」段階から「×」と「○」が交互に並ぶことになる。つまり、形容動詞カテゴリーには連体形「な・の」が併用できる語彙メンバーがあり、抽象名詞カテゴリーには連体形「な」のみが適用される語彙メンバーがある。さらに、「一」段階、「四」段階に属する語彙はそれぞれ形容動詞と名詞の典型的な統語的特徴を示すが、「二」段階、「三」段階では、語彙メンバーの品詞性とそれが見せる統語的特徴に不一致が見られる。本研究は、形容動詞と抽象名詞の境界が曖昧になるのは、それらが見せるこの品詞性と統語的特徴の不一致に因ると考える。

一方、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーが実際に示す統語的特徴は表 3.3 のように大きく四段階に分けられるが、この 4 つの段階のそれぞれは、その語彙メンバーの典



型性効果によってさらに複数の段階に分けることが可能である。

先行研究では、形容動詞を統語的に判断する基準として、漢語語幹の独立性(桜井 1964, 飯豊 1973, 原田 2001, 加藤 2003, 趙 1994, 劉 1997, 張 2011)、格助詞との共起(三枝 1996, 原田 2001, 上原 2003)、連体形「の」との共起(松下 1975, 奥津 1978, 松崎 1977, 沈 1983, 柳沢 1984, 鈴木 1986, 三枝 1996, 田野村 2002, 上原 2003, 加藤 2001 ; 2003, 羅 2004 ; 2005, 李 2010)及び接尾語「さ」との共起(桜井 1964, 張 1995, 加藤 2003)の4つが指摘されている。しかし、3.3.2.1 で述べたように、語彙の名詞性を判定する基準は必ずしも均質ではなく、形容動詞と名詞を区分する際の有効性という観点から、一次的基準と二次的基準に分けられる。前述したように、「格助詞との共起」という基準は、統語上、当該語彙が形容動詞か名詞かを明確に判定できるため一次的基準となる。また、名詞を修飾する場合、基本的に形容動詞は文法上「な」をとるのに対して、名詞は連体詞「の」をとる。しかし、形容動詞には「な」と「の」の併用が可能な語彙があるため、「連体形『の』との共起」という基準のみによって、当該語彙が形容動詞なのか名詞なのかを判定することは難しい。したがって、この「連体形『の』との共起」という基準は二次的基準ということになる。さらに、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの名詞らしさは、接尾語「さ」との共起の有無を基にさらに細かく分類することができるが、この接尾語「さ」との共起という基準は当該語彙の品詞性の直接的判定基準にはならないため、いわば三次的基準として利用される。以上の3つの基準をまとめると、表 3.4、3.5、3.6 になる。

[表 3.4 : 一次的基準による段階別分類の仕組み]

段階	名詞性の度合	一次的基準 : 格助詞との共起	例
一	1	格助詞と共起不可 ×	* 綺麗を・* 活発を
二	2	○○語幹+格+V	対米対等を目指す; 体調不良を訴える
三	3	N+の+語幹+格+V	国の安泰を願う・経済の好調を維持する
	4	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V	家族の無事を確かめる、無事を祈る; 自らの不幸を嘆く、不幸をもたらす
四	5	語幹+格+V	孤独を感じる・幸福を招く

[表 3.5 : 二次的基準による段階別分類の仕組み]

段階	名詞性の度合	二次的基準：連体形「の」との共起	例
一 三	(1)	「の」と共起不可×	* 立派の人・* 柔軟の対応
	(2)	〇〇語幹+の+N	精力旺盛の人；被告有利の判決
二 四	(3)	〇〇語幹+の+N or 語幹+の+N	当事者対等の原則、対等の立場； 条件不利の地域、不利の状態
	(4)	語幹+の+N	無数の星、懸命の努力

[表 3.6 : 三次的基準による段階別分類の仕組み]

段階	名詞性の度合	三次的基準：名詞化辞「さ」との共起	例	品詞分類
一 二	①	○	大切さ・活発さ	「形動」
すべて の 段階	②	×	* 妥当さ・* 主要さ	「名・形動」
	③	○	素朴さ・便利さ	
三 四	④	—	危険を伴う・孤独を感じる	

(注：V=動詞；N=名詞)

表 3.4 は当該語彙が一次的基準を満たすかどうかを数字で、表 3.5 は当該語彙が二次的基準を満たすかどうかを括弧つきの数字で、表 3.6 では当該語彙が三次的基準を満たすかどうかを○付きの数字で示している。なお、国立国語研究所「KOTONOHA コーパス」から抽出された用例(付録十二参照)をもとに形容動詞の漢語語幹の独立性を調べた結果、上記の3つの基準はさらに細かく分類されることが分かった。以下、表 3.4 から表 3.6 について説明する。

一次的基準及び二次的基準に従うならば、「形動」及び「名・形動」が示す統語的特徴は、典型的な形容動詞(格助詞との共起不可及び連体形「の」との共起不可)のそれから徐々に典型的な名詞のそれ(格助詞との共起可及び連体形「の」との共起可)へ変化していく過程がうまく捉えられる。また、同表の中には「〇〇語幹」という記述があるが、これは、当該漢語語幹はそれ独自では格助詞とも連体形「の」と共起できないが(??対等を目指す、\* 不良を訴える)、ほかの名詞あるいは動詞と一緒に複合語を形成した場合には、格助詞及び連体形「の」のいずれとも共起が可能になることを表している(対米対等を目指す、体調不良<sup>33</sup>を訴える)。しかし、このように、ほかの語彙と結合した際に見せる語幹の独立性を基に、当該語彙が格助詞あるいは連体形「の」と共起可能と判断することはできないであろう。また、「N+の+語幹」は、「経済の好調を維持する、国の安泰を祈願する」のように、漢語語幹が連体詞「の」を介して名詞と組み合わせられ、格助詞との共起が可能になることを示している。このような結合は前述の「〇〇語幹」における結合と比べ、語幹の独立性がより強く、前に置かれた名詞にも制約が見られなかったので、この場合の当該語彙は格助詞との共起が可能と判断することにした。

ここで強調したいのは三次的基準、接尾語「さ」との共起である。コーパスの漢語によると、すべての「形動」は名詞化される時、語尾に「さ」が付けられる(数字①で表記)。一方、「名・形動」が名詞化される時には、次の3つのパターンが見られる。「妥当、主要」などの語彙は性状概念が強く、当初から名詞化という形式がないので、「×」で表記する(数字②で表記)。また、「素朴、便利」などは語尾に「さ」を付加することによって名詞化が可能になる(数字③で表記)。さらに、「危険、孤独」などでは漢語語幹の独立性が最も強くなり、接尾語「さ」がなくても、そのまま抽象名詞として使えるので、それを「一」で示している(数字④で表記)。品詞上の特徴を考えると、「形動」は「名・形動」より形容動詞性が強いので、結局、接尾語「さ」との共起は①～④という順序で並ぶことになる。

また、一次的基準から三次的基準まで階層をなしているため、3つの基準を統合した上で表3.7でまとめた。

<sup>33</sup> 「体調不良」と「体調の不良」のように、「〇〇語幹」が「N+の+語幹」に置き換え可能な場合があるが、本研究では、KOTONOHA コーパスに収録された用例を基に、当該形容動詞の語幹の独立性を判断した。例えば、「体調不良」と「体調の不良」では、「体調不良」の用例数が圧倒的に多かった。また、「N不良」については、「接触不良」、「消化不良」、「動作不良」などの用例も数多くあったことから、「不良」という語幹の独立性は弱く、表3.4、3.5に「2」の「〇〇語幹」に当てはまると考えられる。

[表 3.7 : 3つの基準における形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の段階分け]

段階	名詞性の 度合	統語的特徴	品詞分類
一 格助詞 との共 起不可 連体形 「の」と の共起 不可	1(1) ①	格助詞と共起不可；「の」と共起不可；接尾語「さ」と共起可	形動
	1(1) ②	格助詞と共起不可；「の」と共起不可；接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	1(1) ③	格助詞と共起不可；「の」と共起不可；接尾語「さ」と共起可	名・形動
	1(2) ①	格助詞と共起不可；〇〇語幹+の+N；接尾語「さ」と共起可	形動
	1(2) ②	格助詞と共起不可；〇〇語幹+の+N；接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	1(2) ③	格助詞と共起不可；〇〇語幹+の+N；接尾語「さ」と共起可	名・形動
二 格助詞 との共 起不可 連体形 「の」と の共起 可	2(3) ①	〇〇語幹+格+V；〇〇語幹+の+N or 語幹+の+N； 接尾語「さ」と共起可	形動
	2(3) ②	〇〇語幹+格+V；〇〇語幹+の+N or 語幹+の+N； 接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	2(3) ③	〇〇語幹+格+V；〇〇語幹+の+N or 語幹+の+N； 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	2(4) ①	〇〇語幹+格+V；語幹+の+N；接尾語「さ」と共起可	形動
	2(4) ②	〇〇語幹+格+V；語幹+の+N；接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	2(4) ③	〇〇語幹+格+V；語幹+の+N；接尾語「さ」と共起可	名・形動
三 格助詞 との共 起可 連体形 「の」と の共起	3(1)②	N+の+語幹+格+V；「の」と共起不可； 接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	3(1)③	N+の+語幹+格+V；「の」と共起不可； 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	3(1)④	N+の+語幹+格+V；「の」と共起不可； 接尾語「さ」と共起無し	名・形動
	3(2)②	N+の+語幹+格+V；〇〇語幹+の+N； 接尾語「さ」と共起不可	名・形動

不可	3(2)③	N+の+語幹+格+V ; ○○語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	3(2)④	N+の+語幹+格+V ; ○○語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起無し	名・形動
	4(1)②	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; 「の」と共起不可 ; 接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	4(1)③	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; 「の」と共起不可 ; 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	4(1)④	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; 「の」と共起不可 ; 接尾語「さ」と共起無し	名・形動
	4(2)②	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; ○○語幹+の+N ; 接 尾語「さ」と共起不可	名・形動
	4(2)③	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; ○○語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	4(2)④	N+の+語幹+格+V or 語幹+格+V ; ○○語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起無し	名・形動
四 格助詞 との共 起可 連体形 「の」と の共起 可	5(3) ②	語幹+格+V ; ○○語幹+の+N or 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	5(3) ③	語幹+格+V ; ○○語幹+の+N or 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	5(3) ④	語幹+格+V ; ○○語幹+の+N or 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起無し	名・形動
	5(4) ②	語幹+格+V ; 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起不可	名・形動
	5(4) ③	語幹+格+V ; 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起可	名・形動
	5(4) ④	語幹+格+V ; 語幹+の+N ; 接尾語「さ」と共起無し	名・形動

以上の分類方法に従い、表 3.7 で示した段階別の形容動詞カテゴリーに属する語彙メン  
バーの典型性を分けた結果は、付録四のようになる。

一方、本研究は、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性による段階分けをより詳しく捉えるために、『分類語彙表』(1964)に挙げられた157語<sup>34</sup>の漢語系形容動詞を対象に、国立国語研究所『KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて、その統語的特徴を調べた(付録二、付録三参照)。その結果、表3.8のように、上記の四段階はさらに複数の段階に分けられることになった。

[表 3.8 : 形容動詞の典型性による段階分け(その2)]

段階	名詞性の 度合	語 彙
一段階 格助詞との 共起不可 連体形「の」 との共起不 可 1、2の(1)、 (2)類	1 (1) ①	活発、濃厚、奇麗、柔軟、綺麗、立派、猛烈、大切、急激
	1 (1) ②	急速、顕著、有益、夢中、無難、完全
	1 (1) ③	強烈、貧弱、丁寧、強引、意外、軽快、明白、賢明、器用、呑気、露骨、豪華、簡単、気楽、単純、嚴重、奇妙、明確、深刻、複雑、極端、堅実、豊富、新鮮、明瞭、明朗、簡易、利口、敏感、大胆、率直
	1 (2) ①	有力
	1 (2) ②	無惨、著名、有名
	1 (2) ③	旺盛、確実、有望
	2 (1) ③	円滑、健全
	2 (2) ②	不良
	2 (2) ③	上手、優秀
	二段階 格助詞との 共起不可	1 (4) ①
1 (4) ②		無数、適当、正当、特異、正式、肝心、沢山、特殊、一様、適度、同様、直接、適宜
1 (4) ③		微妙、巧妙、独特、容易、広大、曖昧、重要、粗末、重大、巨大、良好、

<sup>34</sup> この「157語」というのは、『分類語彙表』(1965)に記載された265個の形容動詞のうちから、「いろいろ、様々、別々」などのような疊語、「特別、普通、大変」などのように形容動詞以外に副詞として使える語彙、「勤勉、反対、妥当」などのように形容動詞以外に「する」との後接によってサ変動詞として使える語彙、「粹、主、真面目、有頂天、一生懸命」など一文字や二文字以上の漢語系形容動詞、「明らか、鮮やか、穏やか」などのような和語系形容動詞、「スマート、ロマンチック、スポーティー」などのような外来語系形容動詞、「大好き、不確か、気まぐれ」などのような混語系形容動詞を除外した157語の二文字漢語系形容動詞のことである。

連体形「の」		独自
との共起可	2 (3) ②	対等
1、2 の(3)、 (4)類	2 (4) ②	共通、無用、同一
<hr/>		
三段階	3 (1) ③	親切、純情、冷酷、幼稚
格助詞との	3 (2) ②	安泰、可能
共起可	3 (2) ③	有利、有効
	4 (1) ③	公平、贅沢、清潔、単調、好調、強力
連体形「の」	4 (2) ③	不明、正確
との共起不 可	5 (1) ②	地味
3、4、5 の	5 (1) ③	健康、幸福、冷静、重宝、寛容、適切、熱心、忠実、阿呆、愉快、順調、 窮屈、素朴、面倒
(1)、(2)類	5 (1) ④	幸運、危険
	5 (2) ④	安全
<hr/>		
四段階	3 (4) ②	無効、必要
格助詞と	3 (4) ③	神秘
の共起可	4 (3) ②	不利
連体形	4 (4) ②	反対、不幸、無知、無礼、主要、無事
「の」と	4 (4) ③	便利、孤独、静寂、得意、不便
の共起可	4 (4) ④	詳細
3、4、5	5 (4) ②	多忙、平気、正常、妥当、平等、高価、緊急
の(3)、	5 (4) ③	平凡、純粹、残念、慎重
(4)類	5 (4) ④	本気、水平

表 3.8 は、『分類語彙表』(1964)に挙がっている 157 語を対象に、それぞれの語彙に備わる統語的特徴を表 3.7 に基づいて、段階的に分類したものである。どの段階の境界も曖昧なので、点線で示している。また、「一」段階、「二」段階に属する語彙メンバーは全体的に「性状概念」を表す形容動詞性の方が名詞性より強く見られるが、「三」段階、「四」段階に属する語彙メンバーは全体的に「モノ概念」を表す名詞性の方が形容動詞性より強

く見られるため、「二」段階と「三」段階の間を形容動詞的な語彙から名詞的な語彙へという語彙の品詞性の転換境界として、太い点線で示した。一方、このように「名詞性の度合」を基準に分類しても、実際、KOTONOHA コーパスで収録された用例の出現頻度数は語彙ごとに異なる。そこで、表 3.8 では、同じ「名詞性の度合」を示す語彙の中で、ほかの語彙に比べ、その用例の出現頻度数が特に低いものは下線で示した。

### 3.3.2.2 統語的特徴の拡張メカニズム

前節の統語的特徴の拡張に関する分析からは、「形動」と記載された形容動詞よりも「名・形動」と記載された抽象名詞においてこそ、より強く統語的拡張が行われたと言える。本節では、プロトタイプ理論及び動的な文法理論を援用して、抽象名詞カテゴリーの統語的拡張を支えるメカニズムを明らかにする。

すでに述べたように、形容動詞カテゴリーにおける統語的特徴の典型性の変化は意味的特徴と同様に、「名・形動」と記載された抽象名詞の存在と深く関係していると考えられる。しかし、意味的特徴の解釈に比べると、統語的特徴の解釈の方は様々な文法規則と絡んでいるため、より複雑になっている。具体的には表 3.9 のように示される。

表 3.9 では、まず、「格助詞との共起」の有無によって、「形動」（「一」段階、「二」段階）と「名・形動」（「三」段階、「四」段階）の品詞性を区分した。また、「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」という 2 つの基準に従った統語的特徴と語彙メンバーに記載された品詞の一致度を確かめるために、上原(2003)の調査方法を参照した上で、『分類語彙表』(1964)に収録された最頻出語の中から、『大辞泉』(1998)の中で「形動」及び「名・形動」と記載された語 157 語を対象に、その文法的振る舞いを調べた。

その結果、調査語 157 語のうち「形動」は 10 語、「名・形動」は 147 語ということで、「名・形動」の語数が「形動」の語数を大きく上回ることが確認された。また、「三」段階、「四」段階に属する語彙メンバーはすべて「名・形動」であったが、これは理論的に予想された結果と一致したものである。しかし、「一」段階、「二」段階に属する語彙メンバーには、理論的に予想されたものとは異なる品詞性を持つ語彙が現れていた。つまり、理論的には、語彙メンバーの品詞性がすべて「形動」であるはずの「一」段階、「二」段階に「名・形動」の語彙が見られたのである。なお、「名・形動」が抽象名詞の特徴を帯びていることを考慮するならば、それは抽象名詞カテゴリーの非典型的なメンバーと見なされることに



なろう。このことから、統語的に、名詞の統語的特徴の拡張は、抽象名詞カテゴリーを経て形容動詞カテゴリーに至ったと言える。

[表 3.9 : 形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の再解釈(毛 2013b : 178)]

共起 段階	格助詞「を」 との共起	連体形「の」 との共起	品詞性	例	語数	
一	×	×	形動	静か・大切	8	↓ 視点① 形 容 動 詞 ↑
			名・形動	曖昧・巧妙	25	
二	×	○	形動	懸命・急激	2	↑ 抽 象 名 詞 ↓
			名・形動	独特・深刻	19	
三	○	×	名・形動	幸福・贅沢	51	↑ 名 詞 ↓
四	○	○	名・形動	平和・面倒	52	
	○	○	名詞	本・机		↑ 視点②

(注: 「×」=共起不可、「○」=共起可、太字は当該段階に属する語彙メンバーが備わる品詞性の強い方を示す。)

以上のことを視点②に従い、「四」段階から「一」段階の順に眺めて行くと、「名・形動」と記載された抽象名詞の統語的特徴の典型性変化を捉えることが可能になる。まず、その変化は典型的な名詞が示す統語的特徴と同じ統語的特徴を示す「四」段階の抽象名詞から始まるが、当該語彙が形容動詞カテゴリーに近くなればなるほど、その名詞性は段々弱まって行き、形容動詞性が徐々に強くなっていく。そして、その傾向が「一」段階まで拡張すると、ついに典型的な形容動詞と同じ統語的特徴を示すことになるのである。それに対して、視点①から見た形容動詞の統語的特徴の典型性の変化は「一」段階から「二」段階までで止まり、抽象名詞カテゴリーまでは拡張していない。

以上、統語的特徴の典型性の変化は意味的特徴とは反対で、「名・形動」の文法拡張は形容動詞カテゴリーにまで及んだが、「形動」の文法拡張は抽象名詞カテゴリーにまで及ばず自らのカテゴリー内部に留まったことを見た。すなわち、統語的特徴の拡張は意味的特徴の拡張とは逆の方向に進み、形容動詞は「名・形動」の文法拡張の影響を強く受けたと

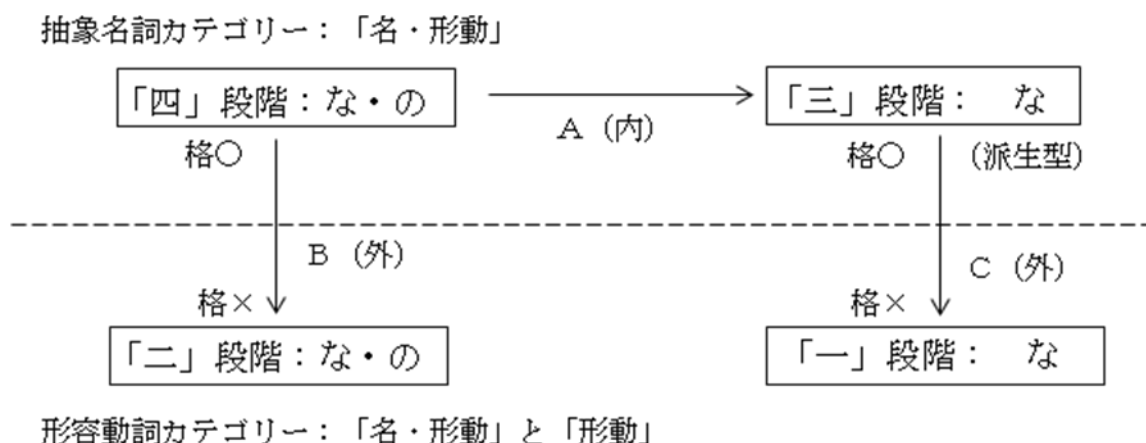
ということである。また、表 3.9 にも明らかなように、「名・形動」はすべての段階に現れているため、結果的に、それは 4 種類の異なる文法的振る舞いを見せることになる。本研究は、この「名・形動」が見せる複雑な統語的特徴こそが日本語学習者がそれらを習得する際の障害になり、その習得難易度の高さに繋がっていると考える。

### 3.3.2.3 統語的特徴の拡張プロセス

本節では、統語的特徴の拡張が抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへ拡張していったプロセスを、動的文法理論に基づく萱原(2003)の研究を踏まえながら、「内部拡張から外部拡張へ」という観点から分析する。

ここで重要なのは、形容動詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張は、分析の視点によって「基本型」及び「派生型」の決定に相違が見られるという点である。つまり、それを表 3.9 の視点①のように、形容動詞カテゴリーの統語的特徴の拡張と見るならば、「格助詞及び連体形『の』との共起不可」が基本型であり、「格助詞及び連体形『の』との共起可」は派生型となる。それに対して、それを表 3.9 の視点②のように、抽象名詞カテゴリーの統語的特徴の拡張と見るならば、逆の結果になるのである。しかし、本研究の行った語彙調査によれば、統語上、形容動詞は抽象名詞の特徴を帯びる「名・形動」の文法拡張の影響を強く受けたことが明らかになった。したがって、本研究では、抽象名詞カテゴリーの統語的特徴という角度から統語的特徴の拡張プロセスとタイプを解明することにする。

まずは、図 3.7 を参照されたい。



[図 3.7： 抽象名詞カテゴリーが示す統語的特徴の拡張過程]

まず、図 3.7 において明確にしておきたいのは、上述の四段階の統語的特徴が適用される統語環境の相違である。「格助詞との共起」の有無という抽象名詞と形容動詞の品詞性を根本的に区別する「一次的基準」に従うならば、「格助詞との共起」が可能な「三」段階と「四」段階が示す統語的特徴はともに抽象名詞カテゴリーにおいて適用されるものと考えられる。それに対して、「格助詞との共起」が不可能な「一」段階と「二」段階が示す統語的特徴はともに形容動詞カテゴリーに適用されるものと考えられる。

一方、「四」段階が示す「連体形『の』との共起」は典型的な抽象名詞が示す統語的特徴であるため、動的文法理論に従えば、抽象名詞カテゴリーにおける「基本型」の統語的特徴ということになる。しかし、この抽象名詞の「基本型」の統語的特徴は、抽象名詞カテゴリーが形容動詞カテゴリーへ拡張を始めると、その典型性効果と共に変化を被る。すなわち、連体形「の」との共起が消え、「三」段階における「連体形『な』のみの適用」がその「派生型」を示すことになるのである。梶田(1982)による「基本型から派生型へ」の観点から、この統語的拡張は「A」が示す方向で進むはずである。また、前述したように、「四」段階と「三」段階が示す統語的特徴は同じ抽象名詞カテゴリーに適用できるため、この拡張が行われる統語環境は萱原(2003)による「内部的拡張」であると考えられる。

次に、縦の方向を見ると、「四」段階と「三」段階が示す「連体形『の』との共起」をめぐる統語的特徴はそれぞれ「二」段階と「一」段階が示す統語的特徴に対応しているように見えるが、それらが適用される統語環境は「四」段階・「三」段階と「二」段階・「一」段階で異なっており、前者は「名・形動」、後者は「名・形動」と「形動」となっている。これを萱原(2003)の「内部的拡張から外部的拡張へ」という観点から見ると、[A]の「内部的拡張」に続いて、抽象名詞が示す統語的特徴が[B]、[C]の方向に沿って、抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへ「外部的拡張」をし始めた考えられる。但し、動的文法理論によれば、基本型の統語的特徴は派生型のそれより早く生起することから、両者の拡張は同時に行われるわけではないと想定される。つまり、基本型である「四」段階の統語的特徴の拡張が形容動詞カテゴリーに至ってから派生型である「三」段階の統語的特徴の拡張が行われるということである。このように、「四」段階と「三」段階が示す「連体形『の』との共起」をめぐる統語的特徴は「外部的拡張」を通して形容動詞カテゴリーにも適用されるようになったと考えられる。

ところで、ここで、上記の抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへの統語的特徴の拡張を説明する際に用いた「内部的拡張」と「外部的拡張」について、萱原(2003)を引用しながら説明しておきたい。

萱原(2003)が対象としているのは「構文」であるが、本研究が対象にしているのは形容動詞あるいは抽象名詞が示す「統語的特徴」である。しかし、対象は異なるものの、萱原が挙げる以下の文法拡張の一般原則は、「統語的特徴」に対しても応用可能に思われる。

- A. 統語変化の拡張には、当該の構造自体が拡張する内部的拡張と当該の構造が生起する統語環境が拡張する外部的拡張とがある。
- B. 統語変化の内部的拡張においては、各構文は当該言語の統語上・意味上の基本的な特性を継承して拡張する。
- C. 統語変化の内部的拡張においては、基本的な特性を持っている形式ほど歴史上早く生起し、派生的な形式ほど生起する時期が遅い。
- D. 統語変化の外部的な拡張は、ある狭い統語環境から始まり、次第により広い統語環境に広がっていく。

(萱原 2003 : 184)

上述の原則 A と B から見ると、図 3.7 で[A]の矢印が示す連体形「な・の」の併用から「の」の消失までの変化は、抽象名詞の統語的特徴が形容動詞カテゴリーへ拡張する過程で、語彙メンバーに備わる品詞性は変わらないが、連体形の変化を通して名詞性が消失したという「内部的拡張」と考えられる。このような見方の妥当性は、原則 C に従えば、抽象名詞の方が形容動詞より早く生起するという品詞の歴史的変遷によって確認されるはずである。そのような品詞の歴史的な変遷は次節で詳しく説明する。

一方、図 3.7 で[B]と[C]の矢印が示す抽象名詞から形容動詞カテゴリーへの変化は萱原(2003)のいう「外部的拡張」と判断される。抽象名詞カテゴリーと形容動詞カテゴリーという2つの統語環境を直接比較することできないが、表 3.9 においてそれらの環境に適用される語彙メンバーの種類を見ると、「三」段階と「四」段階では抽象名詞(「名・形動」)のみが適用可能であるのに対し、「一」段階と「二」段階では、抽象名詞と形容動詞(「名・形動」)の両方の適用が可能であるのが分かる。これは萱原(2003)の挙げた原則 D のいう「狭い統語環境から広い統語環境へ」の変化である。すなわち、統語環境の拡張に従い、当該

環境で適用できる品詞の種類が拡大されたことになる。したがって、図 3.7 による [B] と [C] の拡張は「外部的拡張」であると考えられる。

また、萱原(2003)は、「外部的拡張」が行われた後の統語環境では、前の統語環境と比べ、当該文法項目に対する適用の容認度が低くなる傾向があると述べていたが、このことを利用して [B] と [C] の拡張が「外部的拡張」であるとする主張の妥当性を確認してみたい。ここで分析の対象となる文法項目は「連体形『の』との共起」であるが、統語環境の変化によるこの統語的特徴に対する容認度の差を比較するために、再び以下の表 3.5 を参照されたい。

再掲 [表 3.5 : 二次的基準による段階別分類の仕組み]

段階	名詞性の度合	二次的基準： 「連体形『の』との共起」	例
一 二	(1)	「の」と共起不可×	* 立派の人・* 柔軟の対応
	(2)	〇〇語幹+の+N	精力旺盛の人； 被告有利の判決
三 四	(3)	〇〇語幹+の+N or 語幹+の+N	当事者対等の原則、 対等の立場； 条件不利の地域、不利の状 態
	(4)	語幹+の+N	

表 3.5 を見ると、「四」段階と「三」段階で適用される「語幹+の+N」という語幹が独立して連体形「の」と共起しながら名詞を修飾するという統語的特徴は、「二」段階及び「一」段階では適用されないのが分かる。また、「二」段階と「一」段階を見ると、それに属する語彙メンバーによって「連体形『の』との共起」が容認される場合と容認されない場合があるのが分かる。このように、「連体形『の』との共起」という統語的特徴の適用の容認度は、「三」段階・「四」段階と「一」段階・「二」段階の間で大きな差があり、「一」段階・「二」段階ではその適用は極めて難しくなるのが確認された。このことは、図 3.7 による [B] と [C] の拡張が「外部的拡張」であることを示すものである。

### 3.3.2.4 抽象名詞から形容動詞へ：品詞性の通時的な変遷

ここまで、抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへの統語的特徴の拡張プロセスを解明した。しかし、歴史上における抽象名詞と形容動詞の生起順序を明らかにするため、本節では、形容動詞の品詞性の通時的な変遷を見る。

原田(2001:113)は「漢語はまず名詞として日本語の中に取り入れられ、形容詞の語彙の貧弱さを補う形で形容動詞として変化してきたところから、形容動詞の構文的な機能に関してはまだ変化の過程にあり、名詞的機能が未だ残存しているものがある」と指摘している。

また、1.4 で述べたように、1917年から1925年の間に、多くの漢語は抽象名詞から形容動詞へ、時代とともに変化してきた(永澤2011)。

つまり、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバー間に名詞性消失の度合が見られるのは、形容動詞という品詞が元来日本語固有の品詞ではなく、抽象名詞が長い時間をかけ変化した結果で形成されたものだからなのである。

## 3.4 第三章のまとめ

本章では、従来の研究とは異なり、「形動」と「名・形動」を区別した上で、形容動詞カテゴリーの典型性を分析した。また、カテゴリー間の影響を確かめるために、形容動詞カテゴリーだけでなく、名詞カテゴリーの典型性も考察した。その上で、形容動詞側と名詞側の2つの視点から、形容動詞に関わる意味的特徴及び統語的特徴の典型性の拡張過程を解明することにより、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴と統語的特徴を再解釈した。その結果は、以下のようにまとめられる。

形容動詞カテゴリーは、意味的には、「性状概念」の典型性の変化に伴い、抽象名詞カテゴリーにまで拡張した。この見方に従えば、辞書で「名・形動」と記載され「状態概念」を表す抽象名詞は形容動詞カテゴリーの非典型的な語彙メンバーということになる。このことから、形容動詞カテゴリーの語彙メンバーが示す意味的特徴は同質ではなく「性状概念」を示す度合はそれぞれ異なるということができる。

それに対して、統語的に、「名・形動」と記載された抽象名詞は抽象名詞カテゴリーの統語的特徴の典型性の変化とともに、形容動詞カテゴリーまでに至る。このとき、形容動詞が示す統語的特徴は非典型的な抽象名詞のものと同じであるため、形容動詞は抽象名詞

カテゴリーの非典型的な語彙メンバーになり得る。このような見方の妥当性は形容動詞の通時的な変遷によって確認される。つまり、大多数の形容動詞は抽象名詞から派生したものであるということである。それゆえ、形容動詞は統語的に抽象名詞と類似する点が多いのである。

以上の分析から、意味的特徴及び統語的特徴の典型性変化に関して、形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーは逆の方向で拡張していることが明らかになった。また、「名・形動」と記載された抽象名詞は、形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーの間に存在し、意味的には、形容動詞のカテゴリーの非典型的メンバーであるが、統語的には、抽象名詞カテゴリーの典型的メンバーであることが分かった。形容動詞カテゴリーが抽象名詞カテゴリーと明確な境界線を持たず、また、典型性効果を発揮するのはまさにこの「名・形動」の存在によると考えられる。

## 第四章 漢語系形容動詞の習得 1：習得順序の解明

### はじめに

プロトタイプ理論は、あるカテゴリーにおいては典型的なメンバーの習得が定着してから、非典型的なメンバーの習得が始まるとしており (Rosch1973, テイラー1995, 白井 1998)、習得順序や言語習得のメカニズムを明らかにするため、有益な手掛かりを与えると期待される (菅谷 2002)。本章では、「形容動詞の習得はプロトタイプ理論が指摘したように、典型的なメンバーから非典型的なメンバーへという順序になるのか」を研究課題として、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語の漢語系形容動詞の典型性をもとに、語彙の習得順序がどのようになるのかを具体的な調査研究によって明らかにする。

### 4.1 語彙の習得順序に関する先行研究

第二章の 2.3 でまとめたように、従来のプロトタイプ理論に関わる先行研究(有田 1999, スニーラット 2001, 菅谷 2002, 坂原 2004, 加藤 2005, 白 2007, 張 2013)では、あるカテゴリーにおいて典型的なメンバーが先に習得され、非典型的なメンバーの習得は遅くなると示しているが、形容動詞の習得順序については調査が行われていない。

そこで、本節では中国語を母語とする日本語学習者を対象に、形容動詞の習得はプロトタイプ理論が指摘しているように、典型的なメンバーから非典型的なメンバーへという順序になるのかを研究課題として設定する。

### 4.2 形容動詞の習得順序に関する調査

#### 4.2.1 予備調査

形容動詞の典型性に基づいた習得順序の考察においては、名詞との統語的特徴を明確に区分できるかがポイントになると考えられる。先行研究(原田 2001, 田野村 2002, 上原 2003 など)で指摘されている「格助詞との共起の有無」及び「連体形『の』との共起の有無」という形容動詞と名詞の文法上の 2 つの顕著な相違を用いて文法性判断テストを作成した。調査対象となる語彙の文法用法に関して、菊池(2002)は、形容動詞の品詞性認定及び連体形「な」と「の」の選択について、日本語母語話者によるアンケート結果は辞書の認定は



どばらつきが多くないと指摘しているので、今回の調査は辞書を参照した上で、日本語母語話者にアンケートをすることにした。また、調査の正誤判断の基準は日本語母語話者において、回答が多数の方とした。

具体的には、『大辞泉』(1998)に記載されている格助詞との共起及び連体修飾句の用例を参照した。そして、形容動詞語彙メンバーの典型性による段階分けの適切性を確かめるため、2012年9月23日に日本の九州大学で日本語母語話者32人を対象に予備調査をした。

テスト1(「格助詞との共起」とテスト2(「連体形との共起」)において、表現ごとに文法性を判断した上で、「適切」か「不適切」を選んだ人数をJavaScript-STAR<sup>35</sup>でt検定にかけた。具体的な結果は表4.1と表4.2に示す。

表4.1にあるテスト1で用いた形容動詞は付録一に収録された二文字漢語系形容動詞の内、旧日本語能力試験(1~4級)の範囲内で選んだ44語である。「安全、平和、健康」などのように格助詞と共起できる語彙の場合、それらはすべて大辞泉(1998)による例文を参照した。一方、「曖昧、大切、立派」などのように格助詞と共起できない語彙の場合、「〜に」という形容動詞の連用形を利用することで、後接する動詞を決めた。そして、「に」を格助詞「を」に変えた誤った表現で判断させた。44問のうち、「得意を伸ばす」という表現だけは1%水準で適切と不適切を選んだ人数の差が有意でないことが分かる。そのため、この表現は調査対象から除外することにした。

また、表4.2に示したテスト2で用いた形容動詞はテスト1と同じく、『大辞泉』(1998)による連体修飾の用例を参照した。連体形「な」と「の」の選択について、1%水準で人数の有意差がない連体修飾句は本調査では除外することにし、表4.2における「得意( )表情、平和( )国」という2つの表現は、連体形「な」と「の」の選択人数に有意差がなかったため、本調査では調査対象外にする。また、「無数」の連体修飾用法の場合、『大辞泉』では「無数な(の)星」という「な」と「の」併用の例が挙げられているが、予備調査では、ほとんどの日本人被験者は「無数の星」を選んでいる。このように、辞書による例文と実際の文法活用に異なりが見られる語彙は今回の調査では使わないようにした。因みに、「特有な(の)問題」、「緊急な(の)用事」などの表現は、連体形「な」と「の」の併用が可能であるが、正誤判断の答えを1つだけにしぼるため、今回の語彙調査では使わないこととした。

<sup>35</sup> JavaScript-STARは1997年に「ブラウザ版として公開された」統計ソフトであり、基本的なデータ分析だけでなく、「アンケート集計やクロス集計などのユーティリティも多数用意」している(中野2012:はじめの部分)。

[表 4.1 : 〈テスト 1〉 格助詞との共起表現候補(人数)]

格助詞との共起 表現	適切	不適切	有意差	格助詞との共起 表現	適切	不適切	有意差
曖昧を変える	2	30	$p < .01$	無知を悟る	28	4	$p < .01$
無事を知らせる	23	9	$p < .01$	公平を期する	26	6	$p < .01$
好調を支える	31	1	$p < .01$	大切に扱う	3	29	$p < .01$
立派を変える	1	31	$p < .01$	重要を感じる	9	23	$p < .01$
対等を感じる	6	26	$p < .01$	単純を装う	6	26	$p < .01$
巧妙を楽しむ	9	23	$p < .01$	孤独を表す	24	8	$p < .01$
不便を解消する	21	11	$p < .01$	容易を見せる	4	28	$p < .01$
巨大を変える	8	24	$p < .01$	幸運を招く	31	1	$p < .01$
平凡を感じる	22	10	$p < .01$	深刻を感じる	6	26	$p < .01$
微妙を察する	12	20	$p < .01$	不幸を嘆く	27	5	$p < .01$
不利を被る	29	3	$p < .01$	清潔を保つ	29	3	$p < .01$
無礼を詫びる	24	8	$p < .01$	幸福を祈る	31	1	$p < .01$
単調を嫌う	6	26	$p < .01$	本気を出す	30	2	$p < .01$
安泰を祈る	28	4	$p < .01$	安全を保障する	31	1	$p < .01$
詳細を見る	25	7	$p < .01$	広大を好む	7	25	$p < .01$
柔軟を対応する	2	30	$p < .01$	危険を伴う	32	0	$p < .01$
健康を維持する	31	1	$p < .01$	呑気を暮らす	3	29	$p < .01$
強引を進める	3	29	$p < .01$	嚴重をする	5	27	$p < .01$
重大を考える	5	27	$p < .01$	急激を変える	4	28	$p < .01$
顕著を変える	4	28	$p < .01$	平和を祈る	30	2	$p < .01$
粗末をする	7	25	$p < .01$	無数を数える	28	4	$p < .01$
得意を伸ばす	19	13	<i>n. s.</i>				

(注：影部分の表現は調査対象外とする。)

[表 4.2 : 〈テスト 2〉 連体形「な」と「の」の選択(人数)]

連体修飾句	な	の	有意差	連体修飾句	な	の	有意差
本気( )人	25	7	$p < .01$	柔軟( )態度	25	7	$p < .01$
巨大( )影響	29	3	$p < .01$	深刻( )表情	28	4	$p < .01$
微妙( )関係	24	8	$p < .01$	呑気( )人	27	5	$p < .01$
曖昧( )関係	26	6	$p < .01$	顕著( )業績	25	7	$p < .01$
無知( )人間	31	1	$p < .01$	不幸( )生活	26	6	$p < .01$
公平( )裁判	29	3	$p < .01$	容易( )事	27	5	$p < .01$
幸福( )人生	24	8	$p < .01$	詳細( )内容	29	3	$p < .01$
不便( )家	25	7	$p < .01$	危険( )事	24	8	$p < .01$
無事( )顔	29	3	$p < .01$	不利( )立場	27	5	$p < .01$
単調( )生活	28	4	$p < .01$	単純( )機械	23	9	$p < .01$
重大( )過失	29	3	$p < .01$	好調( )出足	29	3	$p < .01$
巧妙( )方法	25	7	$p < .01$	大切( )書類	32	0	$p < .01$
広大( )土地	26	6	$p < .01$	平和( )国	19	13	<i>n. s.</i>
得意( )表情	15	17	<i>n. s.</i>	強引( )方法	30	2	$p < .01$
幸運( )人	27	5	$p < .01$	安泰( )国	28	4	$p < .01$
対等( )関係	22	10	$p < .01$	立派( )業績	32	0	$p < .01$
平凡( )人生	25	7	$p < .01$	無数( )星	8	24	$p < .01$
重要( )地域	23	9	$p < .01$	無礼( )態度	25	7	$p < .01$
孤独( )生活	28	4	$p < .01$	安全( )場所	22	10	$p < .01$
健康( )体	27	5	$p < .01$	急激( )変化	30	2	$p < .01$
粗末( )食事	31	1	$p < .01$	清潔( )服	21	11	$p < .01$
厳重( )監視	28	4	$p < .01$				

(注：影部分の表現は調査対象外とする。)

予備調査の結果、「得意、平和、無数」という 3 つの形容動詞は次の本調査に用いないこととした。

#### 4.2.2 調査の手順と方法

本研究で実施した調査(2回)の調査票は形容動詞カテゴリーにおいて語彙メンバーの典型性(語彙メンバーが統語上表している名詞らしさ)の相違をもとに作成したものである。そこで「格助詞との共起」及び「連体形『の』との共起」の有無の2つを基準にして文法性判断テストを行った。被験者、調査用素材、調査の手続き、分析に関する詳細は以下のとおりである。

##### 4.2.2.1 被験者

調査①は2012年12月19日に行われ、調査対象者となる中国の西安外国語大学に在籍する学部生80名のうち、有効回答は76名(漢民族)であった。なお、国籍は全員中国である。今回の調査で用いた語彙の難易度を配慮した上で、旧日本語能力試験1級に合格している学生のみを調査対象にした。

また、習得環境が調査結果に影響を及ぼすことを配慮し、日本の九州で調査②を行った。その調査は2012年10月～2013年5月の間、九州の各大学に在籍している留学生の協力を得て完成したものである。被験者情報は表4.3のとおりである。

[表4.3: 被験者情報]

分類	母語	人数	日本滞在歴	日本語能力	年齢層	職業
調査①	中国語	76	なし	1級合格	20～30代	学生
調査②	中国語	11	5～8年			
	ネパール語	8				
	マレー語	7				

表4.3から分かるように、調査①では中国語母語話者だけを対象に調査したが、調査②では中国語母語話者以外に、ネパール語とマレー語を母語とする学習者も対象にした。被験者全員が20～30代の学生で、日本語能力試験1級に合格している。

#### 4.2.2.2 調査対象となる形容動詞

調査対象となる形容動詞は表 3.8 から抽出したものであり、その難易度の内訳は旧日本語能力試験(1～4 級)を基準とした。これを表 4.4 に示す。

[表 4.4 : 調査対象となる語彙難易度の内訳]

レベル	1 級	2 級	3 級	4 級
語彙数	12	23	3	2

(注 : 1～4 級は旧日本語能力試験の出題基準による難易度である。)

また、表 4.5 に示すように、40 個の形容動詞を、それらの典型性によって、第三章における表 3.8 の分類方法をもとに 4 つの段階に 10 個ずつに分けた上で、格助詞「を」との共起判別テスト、連体形「な」及び「の」の文法性判断テストをそれぞれ 40 問作成した(付録八、九参照)。テストに関わる具体的な例は表 4.6 を参照されたい。

[表 4.5 : 調査対象となる形容動詞]

典型性の段階分け	語 彙 (40 語)
一段階	1. 立派 2. 大切 3. 柔軟 4. 急激 5. 顕著 6. 深刻 7. 単純 8. 嚴重 9. 強引 10. 呑気
二段階	11. 曖昧 12. 広大 13. 巨大 14. 容易 15. 微妙 16. 粗末 17. 巧妙 18. 重大 19. 対等 20. 重要
三段階	21. 安泰 22. 清潔 23. 健康 24. 危険 25. 単調 26. 幸福 27. 幸運 28. 安全 29. 好調 30. 公平
四段階	31. 不利 32. 不幸 33. 不便 34. 孤独 35. 無礼 36. 本気 37. 無事 38. 無知 39. 平凡 40. 詳細

[表 4.6 : テストの種類とその内容]

テスト 典型性	格助詞「を」との 共起判別	連体形「な」の 適性判断	連体形「の」の 適性判断
一段階	立派をする 大切に扱う など(10問)	立派な業績 大切な書類 など(10問)	立派の業績 大切な書類 など(10問)
二段階	粗末を扱う 重要を感じる など(10問)	粗末な食事 重要な地域 など(10問)	粗末の食事 重要な地域 など(10問)
三段階	公平を期する 健康を維持する など(10問)	公平な裁判 健康な体 など(10問)	公平の裁判 健康の体 など(10問)
四段階	詳細を見る 本気を出す など(10問)	詳細な内容 本気な人 など(10問)	詳細の内容 本気の人 など(10問)

因みに、「十分」・「当然」・「僅か」など形容動詞以外に副詞としても使える語、「贅沢」・「勤勉」・「反対」など「スル」の後接によって動詞になれる語、「種々」、「ばらばら」、「散々」などの量語は今回の調査から除外された。

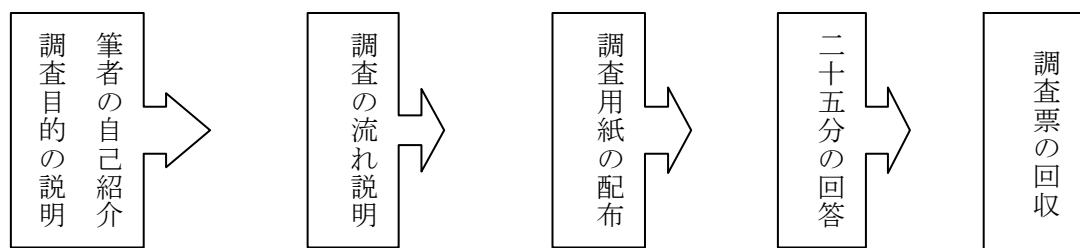
#### 4.2.2.3 調査票

今回の調査では被験者に、調査対象となる形容動詞における、格助詞及び連体形「な」、「の」との共起の文法性の正否を質問した。回答方法は被験者にとって正しい表現を「○」、間違った表現を「×」で判断してもらうことにした。なお、調査票表紙には被験者の情報、国籍、年齢、性別、日本語能力レベル、民族、日本での滞在暦などを記入する欄を設けた(付録五参照)。

#### 4.2.2.4 手続き

調査結果の客観性を求め、被験者に一旦書いた答えの正誤を改めてチェックさせないように、今回の調査問題はパワーポイント(PPT)形式で出題した。問題ごとに7秒間提示し、その後スライドが自動的に転換し、次の問題に進むように設定した。テスト1は調査対象となる形容動詞と格助詞「を」の共起の文法性を判断する問題(40問)である。例えば、「大切をする」(×)、「幸福を祈る」(○)などの問題である。そして、テスト2は調査対象となる形容動詞の連体修飾句の文法性判断問題であり、連体形「な」と「の」による表現をそれぞれ40問、出題順序をランダムにした上で作成した。例えば、「立派な業績」(○)、「立派の業績」(×)などの問題である。

調査①では、被験者をマルチメディア教室に集め、授業中に行った。調査の流れは図4.1のように、まず、筆者が自己紹介、調査の目的を述べた後、授業担当の教師が調査の流れを説明した。また、被験者に心理上の負担をかけないように、今回の調査は成績と関係がないと伝えた。さらに、調査票を配布し、被験者は挙げられた例を理解した上で、文法性判断テストを始めた。約25分後、すべてのテストが終了した後、解答用紙を回収した。



[図4.1: 調査の流れ]

調査に関する説明は事前に全部中国語に訳したプリントを作成した。プリントに記載されていない補足説明及び被験者からの質問などはそのたびに答えた。

一方、調査②は日本の九州で行った。調査対象者の留学生たちを全員同日に集めることは難しく、それぞれの都合に合わせて、毎回少人数(1~3人)で調査した。調査方法と手順は1回目の調査と同じく、パワーポイント形式で、問題ごとに7秒間の提示があった。自己紹介の後、アンケート調査について説明した。そして、例文で練習した上で、スライドに提示している表現の適切性を尋ねた。

#### 4.2.2.5 分析方法

以上の方法で実施した調査の結果は一元配置分散分析により統計処理をした。格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストにおいて、形容動詞の典型性を基準に、一段階から四段階まで学習者の正答数の平均値から、形容動詞の習得順序を分析する。

#### 4.3 結果と考察

形容動詞の習得順序に関わる正答数の平均値の分析は、正答数の平均値の検定と多重比較の2つの部分から構成される。

調査①：

まず、正答数の平均値を用いて、テスト全体及び変数の有意性を確かめた。具体的には、表 4.7 と表 4.8 を参照されたい。

[表 4.7：テスト全体の有意性検定]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F 値
級間要因	11645.067	11	1058.642	8.283***
級内要因(誤差)	13802.800	108	127.804	
全体	25447.867	119		

(有意水準\*\*\*0.1% 決定係数=.458)

[表 4.8：変数の有意性検定]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F 値
典型性の段階分け	3745.667	3	1248.536	9.769***
使用テストの種類	7377.617	2	3688.808	28.863***
典型性*使用テスト	521.783	6	86.964	0.680

(有意水準\*\*\*0.1%)

表 4.7 は格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストという3つのテストの有意性の検定結果である。3つのテストでは、 $F(11, 108) = 8.283$  となり、0.1%水準で有意であることが認められた。また、表 4.8 は変数の有意性の検定結果である。説明変



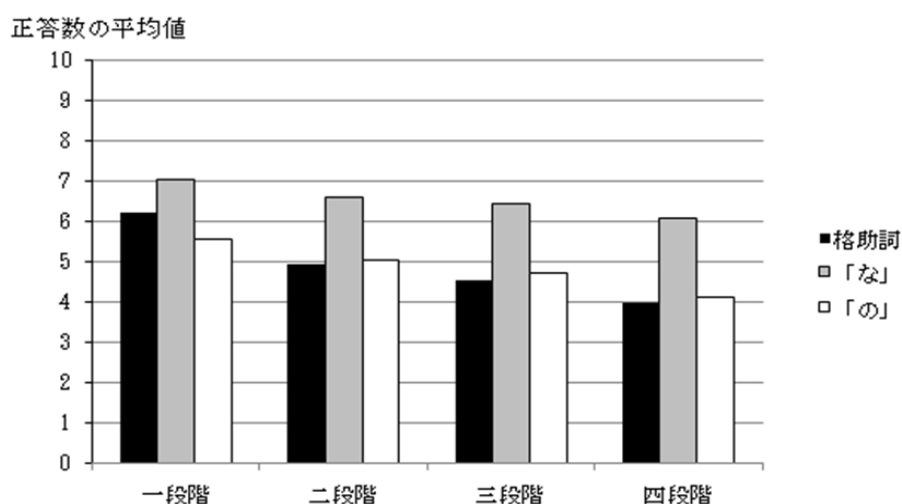
数については、形容動詞の典型性による段階分けという要因が  $F(3, 108) = 9.769$ 、使用テストの種類という要因が  $F(2, 108) = 28.863$  となり、それぞれ 0.1%水準で有意であった。つまり、形容動詞の典型性変化と使用テストの種類によって、正答数の平均値には有意な差が生じた。しかし、形容動詞の典型性による段階分けと使用テスト種類との交互作用は  $F(6, 108) = 0.680$  で有意ではなかった。正答数の平均値の詳細は以下の表 4.9 で示す。

[表 4.9 : 形容動詞の典型性変化による正答数の平均値及び標準偏差]

典型性の段階分け	格助詞との共起		連体形「な」の適性		連体形「の」との共起	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
一段階	6.22	0.959	7.05	0.389	5.56	1.083
二段階	4.94	1.242	6.62	0.713	5.05	0.956
三段階	4.53	1.860	6.46	1.030	4.72	1.281
四段階	3.99	1.686	6.09	0.428	4.11	0.969

(注:各段階の満点は10点である。)

表 4.9 から、形容動詞カテゴリーでは、格助詞との共起、連体形「な」と「の」の正答数の平均値はいずれも語彙メンバーの典型性が弱くなるにつれ、段階的に低くなる傾向が捉えられる。その典型性変化の詳細は図 4.2 のようになる。



[図 4.2 : 各テストにおける正答数の平均値]

図 4.2 は中国語を母語とする日本語学習者を対象に、形容動詞の典型性の段階分けをもとに、3 つのテストで得られた正答数の平均値である。すべての正答数の平均値は「一」段階から「四」段階へ徐々に低くなる傾向が見られた。それゆえ、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性は語彙の習得に影響を与える可能性が高いと思われる。すなわち、典型的な語彙が最初に習得され、語彙の典型性が弱化するのにしたがって習得も遅くなり、非典型的な語彙メンバーが最後に習得されるという順序が考えられる。

また、3 つのテストにおいて、連体形「な」の文法性判断テストの正答数の平均値が最も高く、標準偏差も一番低いことから、学習者が形容動詞の連体修飾句を習得するとき、連体形「な」の使用が意識されていることがうかがえる。しかし、格助詞及び連体形「の」との共起は典型的な名詞の統語的特徴であり、この2つのテストの正答数の平均値は両方とも低くなっていることから、学習者は形容動詞の習得時に名詞の統語的特徴の影響を受けていることは否定できないと考えられる。

#### 調査②：

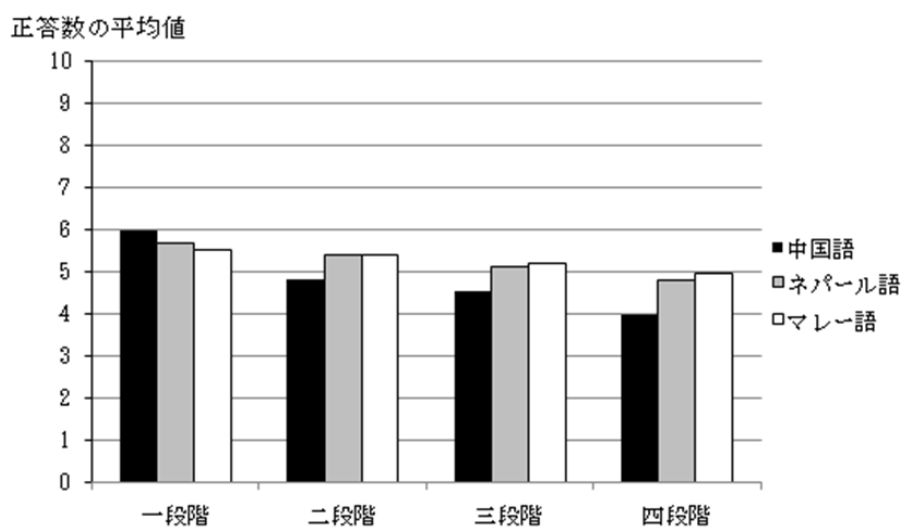
中国母語話者、ネパール語母語話者とマレー語母語話者の日本語学習者を対象に、漢語系形容動詞の習得順序を調査①と同じく、格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストという3つのテストを用いて調べた(付録七、八、九参照)。各テストにおける正答数の平均値及び標準偏差を表 4.10、表 4.11、表 4.12 にまとめる。

[表 4.10：格助詞との共起判断による正答数の平均値及び標準偏差]

典型性の段階分け	中国語話者		ネパール語話者		マレー語話者	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
一段階	5.98	0.701	5.69	0.463	5.54	0.488
二段階	4.83	1.293	5.42	0.756	5.39	0.732
三段階	4.56	0.944	5.13	0.835	5.21	0.690
四段階	3.98	1.079	4.81	0.820	4.95	0.900

(注:各段階の満点は10点である)

表 4.10 から、格助詞との共起判断テストでは、ネパール語母語話者とマレー語母語話者の正答数の平均値の差は小さく、「一」段階に示されている正答数の平均値以外に、両方とも中国語母語話者の正答数の平均値より高く、標準偏差は小さいことが分かる。また、形容動詞の典型性による段階ごとの正答数の平均値の変化傾向を図 4.3 に示す。



[図 4.3 : 格助詞との共起判断による正答数の平均値の段階的变化]

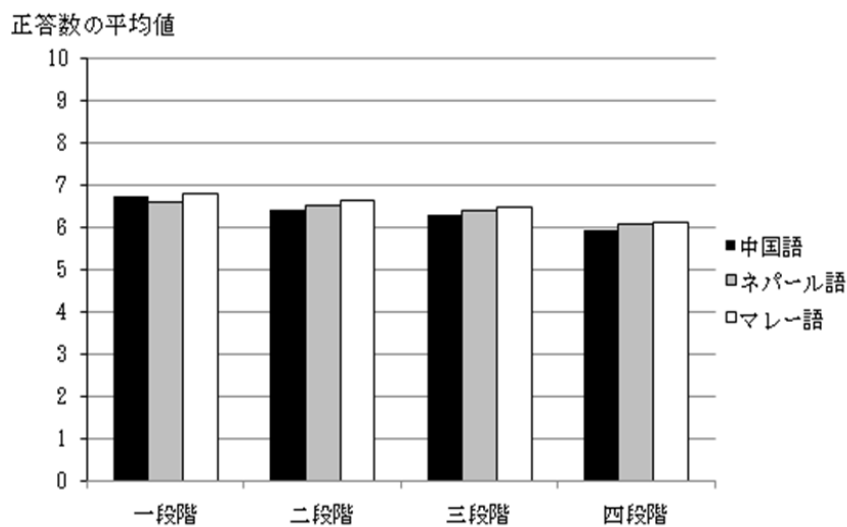
図 4.3 によると、形容動詞の典型性による段階分けで、母語に関わらず、「一」段階から「四」段階へ正答数の平均値は全体的に徐々に低くなる傾向があることが分かるが、母語に関わらず「二」段階と「三」段階の正答数の平均値に有意差は見られなかった ( $F(1, 4) = 1.604, n.s.$ )。また、中国語母語話者による正答数の平均値はネパール語・マレー語母語話者の正答数の平均値に比べ、「一」段階の正答数の平均値は有意に高いが ( $F(2, 23) = 4.809, p < .05$ )、「二」・「三」・「四」段階の正答数の平均値は後者より有意に低かった（「二」段階： $F(2, 23) = 5.419, p < .05$ ；「三」段階： $F(2, 23) = 3.810, p < .05$ ；「四」段階： $F(2, 23) = 5.908, p < .01$ ）。その原因を 4.1.5 で説明する。

[表 4.11：連体形「な」の接続による正答数の平均値及び標準偏差]

典型性の段階分け	中国語話者		ネパール語話者		マレー語話者	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
一段階	6.76	0.401	6.61	0.496	6.82	0.284
二段階	6.43	0.815	6.53	0.529	6.64	0.673
三段階	6.32	0.909	6.41	0.772	6.49	0.532
四段階	5.93	0.962	6.07	0.837	6.13	0.951

(注:各段階の満点は10点である)

表 4.11 は中国語、ネパール語、マレー語母語話者を対象にした、連体形「な」の接続による正答数の平均値及び標準偏差を示すものである。このテストはほかのテストに比べ、母語を問わず、すべての段階で標準偏差が小さく、正答数の平均値が高く見られた。形容動詞の典型性による段階ごとの正答数の平均値の変化傾向を図 4.4 に示す。



[図 4.4：連体形「な」の接続による正答数の平均値の段階的变化]

図 4.4 から、中国語母語話者による正答数の平均値がこのテストでは他言語母語話者と

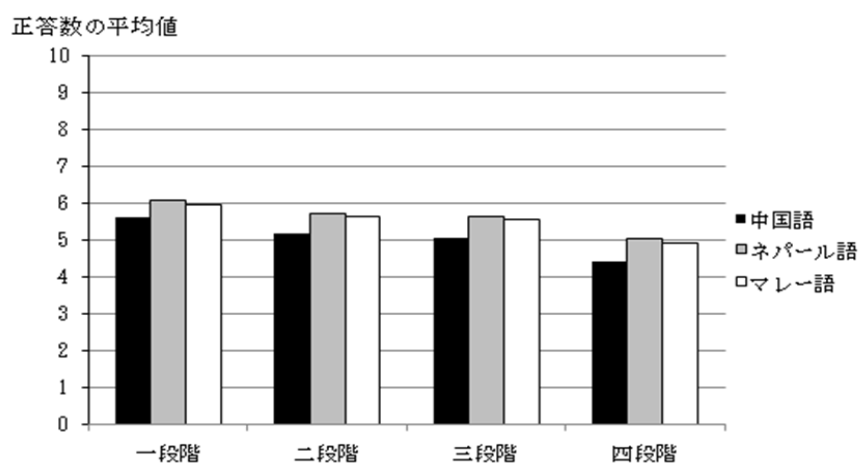
ともに高くなっていて、有意差が見られなかった ( $F(2, 23) = 0.817, n. s.$ )。全体的に、形容動詞の典型性による段階分けで生じた、「一」段階から「四」段階までのすべての正答数の平均値は徐々に低くなるが、その変化は極めて緩やかである。

[表 4.12 : 連体形「の」との共起による正答数の平均値及び標準偏差]

典型性の段階分け	中国語話者		ネパール語話者		マレー語話者	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
一段階	5.61	1.862	6.09	0.707	5.97	0.869
二段階	5.17	0.647	5.72	0.641	5.63	0.488
三段階	5.05	1.206	5.64	0.756	5.58	0.714
四段階	4.43	0.982	5.03	0.835	4.92	0.816

(注:各段階の満点は10点である)

表 4.12 は中国語、ネパール語、マレー語母語話者を対象にした、連体形「の」との共起による正答数の平均値と標準偏差をまとめたものである。このテストでは、中国語母語話者による正答数の平均値は「格助詞との共起判断テスト」の結果と同じく、他言語母語話者の正答数の平均値より低く、標準偏差が高く見られた。これらの結果から、形容動詞の典型性による段階ごとの正答数の平均値の変化傾向を示すと図 4.5 になる。



[図 4.5 : 連体形「の」との共起による正答数の平均値の段階的变化]

図 4.5 の正答数の平均値の変化傾向は図 4.3 と類似しており、中国語母語話者による正答数の平均値は他言語母語話者の正答数の平均値より有意に低い(「一」段階： $F(2, 23) = 3.988, p < .05$ ; 「二」段階： $F(2, 23) = 7.526, p < .05$ ; 「三」段階： $F(2, 23) = 4.077, p < .05$ ; 「四」段階： $F(2, 23) = 6.181, p < .05$ )。その原因は 5.7.1 で説明する。

また、形容動詞の典型性による段階分けで、「一」段階から「四」段階まですべて学習者の正答数の平均値が段階的に低くなる傾向があるが、母語に関わらず、「二」段階と「三」段階の正答数の平均値に有意差は見られなかった( $F(1, 4) = 0.108, n. s.$ )。

上述の調査結果から、3 つのテストで得られた正答数の平均値には差が見られ、また、形容動詞語彙メンバーの典型性によって分けた 4 つの段階においても、正答数の平均値に差があることが分かった。しかし、正答数の平均値の有意差がどの部分に現れたのかを確かめる必要があるため、次節では、調査結果に関わる多重比較を行うことにする。

#### 4.3.1 テストごとの正答数の平均値の多重比較

本節では、調査②の被験者の人数が少ないことを考慮し、調査①における中国語を母語とする日本語学習者(76名)を対象に行った格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストという 3 つのテストにおいて、テストごとに得られた正答平均値の有意差がどの部分に現れたのかを確かめるため、Tukey b<sup>36</sup>を用いて多重比較を行った。その結果、連体形「な」と連体形「の」・格助詞の文法性判断テストの正答数の平均値には有意差があり、正答数の平均値は連体形「な」>連体形「の」・格助詞という結果になった。具体的には表 4.13 に示す。

---

<sup>36</sup> 「Tukeyの方法は群間で全ての対比較を同時に検定するための多重比較法である」。この方法には、「HSD検定 (Tukey's honestly significant difference test) とWSD検定 (Tukey's wholly significant difference test) がある。HSD検定はTukeyのa法とかTukeyのq検定とも呼ばれ、WSD検定はTukeyのb法とも呼ばれる。一般にTukeyの方法というときにはHSD 検定の方を指し、ここではHSD検定をTukeyの方法とする」。Tukeyの方法では、母集団の正規分布及び比較対象となる全ての群の母分散の相等という2つの前提条件が満たされる必要がある」(対馬2001: 4)。

[表 4.13 : テストごとに正答数の平均値の多重比較]

テスト	「な」	「の」	「格」
「な」	—	16.93*	16.33*
「の」	-16.93*	—	—
格	-16.33*	—	—

(注 : 「\*」 = 5%水準で有意 ; 「—」 = 有意差なし)

第三章で述べたように、連体形「な」の使用は形容動詞の典型的な用法であり、一方、連体形「の」及び格助詞の使用は名詞の典型的な用法である。表 4.13 によると、母語を問わず、すべての学習者が形容動詞を習得する際、語彙メンバーの典型性変化が語彙の習得に影響を与えたと考えられる。また、格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストにおいて、格助詞との共起及び連体形「の」との共起の文法性判断テスト(典型的な名詞が示す統語的特徴に関わるテスト)の正答数の平均値は、連体形「な」の文法性判断テスト(典型的な形容動詞が示す統語的特徴に関わるテスト)の正答数の平均値より低く見られたことから、すべての学習者は漢語系形容動詞を習得する際、名詞の文法用法に影響を受けている可能性が否定できないと思われる。それゆえ、典型的な形容動詞の習得が定着してから、非典型的なものが習得されるという習得順序も推測できると考えられる。

以上の分析によると、中国語を母語とする日本語学習者は形容動詞を習得する過程で、他言語母語話者と同じく、連体形「な」の使用が基本であることを意識してはいるが、形容動詞語彙メンバーの典型性弱化の推移によって、名詞の統語的特徴(格助詞及び連体形「の」との共起)からの影響を受けるおそれがあると考えられる。すなわち、形容動詞語彙メンバーの名詞性が強くなるにつれ、学習者は名詞の統語的特徴からの影響を強く受けるため、誤用されやすい傾向があると考えられる。その結果、形容動詞の習得は典型的なメンバーから非典型的なメンバーへという順序を踏むことが推測できる。

#### 4.3.2 形容動詞の典型性による正答数の平均値の多重比較

形容動詞の典型性変化について、前節と同じように、調査①で中国語を母語とする日本語学習者(76名)を対象に行った格助詞との共起と「の」の文法性判断テストという2つの

テスト<sup>37</sup>において、正答平均値の有意差がどの段階に現れたのかを検定した。Tukey b を用いた多重比較によれば、「一」段階と「三・四」段階、「二」段階と「四」段階の正答数の平均値に有意差が見られた。そして、「二・三」段階は、語彙メンバーの品詞性が形容動詞性強から名詞性強へ転換する橋渡しの段階であるが、この2つの段階においては母語に関わらず、正答数の平均値の有意差が見られなかった。具体的には表 4.14 のとおりである。

[表 4.14：形容動詞の典型性の段階別による正答数の平均値の多重比較]

段階分け	一	二	三	四
一	—	—	3.37*	5.43*
二	—	—		3.03*
三	-3.37*		—	—
四	-5.43*	-3.03*	—	—

(注：「\*」=5%水準で有意；「—」=有意差なし；灰色部分は有意差が見られず、曖昧な境界を示す)

表 4.14 では、形容動詞の典型性によって分けられた4つの段階を横軸及び縦軸にそれぞれ並べた。表 4.14 における「一・二」段階と「三・四」段階の間には正答数の平均値に有意差があるが、「一・二」段階>「二・三」段階>「三・四」段階という結果になった。そして、前述したように、「一・二」段階と「三・四」段階の根本的な相違は語彙メンバーの品詞性が形容動詞性強と名詞性強のどちらにあるかになる。

#### 4.4 第四章のまとめ

今回の調査は形容動詞の典型性と習得順序の関連性を研究課題として、中国の大学で教室指導を受けている日本語学習者と日本国内で日本語を習得をしている日本語学習者を対象に、同じ内容で2回行った。調査の結果から、被験者の母語に関わらず、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの品詞性のゆれ、いわゆる典型性の変化が形容動詞の習得に影響を及ぼすことが分かった。具体的には、「一・二」段階>「二・三」段階>「三・四」段階という順序で、形容動詞性強のメンバーは名詞性強のメンバーより先に習得されるこ

<sup>37</sup> 形容動詞の典型性は形容動詞の名詞らしさと深く関係しているため、4.3.2 で名詞と関わりのある文法性判断テストの結果を用いて多重比較をかける。



とが明らかになった。また、形容動詞の典型性による段階分けにおいて、「二」段階と「三」段階の間は形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーの文法上の境界であるが、その境界線ははっきりしたものにならず曖昧であることも今回の調査によって明らかになった。それゆえ、形容動詞カテゴリーに属するすべての語彙メンバーは統一された統語的特徴でまとめられないため、学習者は形容動詞を習得する際、連体形「な」の使用が基本であることを意識しているが、形容動詞語彙メンバーの典型性弱化の推移によって、名詞の統語的特徴(格助詞及び連体形「の」との共起)からの影響を受けるおそれがあると考えられる。つまり、形容動詞の習得について、語彙メンバーの名詞性が強くなるにつれ、学習者は名詞の統語的特徴からの影響が強くなり、誤用が起きる可能性も高くなると考えられる。

## 第五章 漢語系形容動詞の習得 2 : 母語転移の可能性

### はじめに

前章の調査から、中国語を母語とする学習者は漢語系形容動詞の連体形「な」の接続による正答数の平均値は他言語母語話者との差がなかったが、名詞に関わる用法による正答数の平均値はほかの二者より著しく低くなることが分かった。この結果から、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する過程で、母語転移の可能性が否定できないと考えられる。そのため、本章では、「学習者は漢語系形容動詞を習得する際、母語の中国語からの干渉を受けるのか」、また、「形容動詞の習得状況について、上級学習者は中級学習者より必ず漢語系形容動詞の連体修飾語の習得が進んでいるのか」を研究課題にして、母語転移の可能性及び漢語系形容動詞の習得状況を中心に分析する。

### 5.1 誤用の種類及び要因

野呂 (1994 : 9) は「3 人の成人外国人<sup>38</sup>日本語学習者を対象に、8 回にわたって収集した発話を分析した結果」によって、「形容動詞に関する誤用のうち、ほとんど連体形であった」と述べた上で、誤りのパターンを 2 種類に分類している。

- A. 活用語尾「な」の省略による誤り<sup>39</sup>
  - 親切先生です。(親切な)
  - 簡単英語解ります。(簡単な)
  - きれい花貼ってあります。(きれいな)
- B. 活用語尾の選択の誤り (「な」→「の」)
  - ちょっと簡単の言葉。(簡単な)
  - 貧乏の子どもたち。(貧乏な)
  - 静かの熊ですね。(静かな)

(野呂 1994 : 9)

<sup>38</sup> 野呂(1994)は調査対象者である3人の日本語学習者の母語について言及していない。

<sup>39</sup> 本研究では、連体形の「省略による誤り」は連体形の脱落として扱うことにする。

また、羅(2005)は、『ふりがな和英辞典』(2001)、『New 斉藤和英大辞典』(1999)、『ラーナーズプログレッシブ和英辞典』(1997)に例示された漢語系形容動詞と名詞の連体修飾語を抽出した後、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者を対象に、連体形「な」か「の」を選択するアンケート調査を行った。羅(2005)は中国語を母語とする日本語学習者の選択傾向を以下のように述べている。

- A. 「ナ形容詞」にも「の」の選択が多くみられ、「ノ形容詞」にも「な」の選択が多く見られた。「ナ形容詞」と「ノ形容詞」を明確に区分できないことがわかる。一方、「ナ形容詞」では「な」が「の」より多く選択され、「ノ形容詞」では「の」が「な」より多く選択されている傾向も見られた。「ナ形容詞」と「ノ形容詞」はある程度違いが存在し、また認識できる可能性があると思われる。
- B. 同一語に対して、学習者の「両方」の選択が少なかったことが見て取れる。これは日本語教育では、「ナ形容詞」は形容詞、「ノ形容詞」は副詞や名詞、それぞれ類似性や連続性を持たない別の品詞として扱うことに由来すると考えられる。

(羅 2005 : 70)

スワン(1994 : 268)は、漢語系形容動詞の連体修飾語の習得において、「の」の誤用が「アジア系」の日本語学習者の間に多く見られたと指摘している。また、その誤用の原因について、学習者は形容動詞と名詞の品詞の区分が困難であり、形容動詞を名詞として認識するため、誤用が生じる可能性が高いと述べている。

一方、村松(2000 : 33-34)によれば、5名の中国人留学生を対象に、授業での口頭発表の録音データを分析した結果、「の」と「的」の相違点に関して現れたものが多く、誤用が観察された学習者の場合には中国語の干渉との関連性が高いと述べている。また、「上級の学習者では母語の干渉と誤用の関連性に個人差が見られる」(村松 2000 : 34)こと、さらに、学習者の問題点について、①名詞修飾名詞の場合、「の」の脱落が見られたこと、②形容詞修飾名詞、動詞修飾名詞の場合、「の」の過剰生成が現れること、③形容動詞と名詞の品詞の区別が困難であること、という3つの点を明示している。

これらの研究によると、中国語を母語とする日本語学習者は日中同形語の干渉で、漢語系形容動詞と名詞を区分するのが困難になるため、漢語系形容動詞の連体修飾の習得に誤用が多く産出される可能性が高いと考えられる。

一方、誤用の種類については、連体形「な」の誤用と脱落、また、「な」・「の」の混用現象が挙げられる。このような誤用の原因は大きく二つに分けられる。一つは日中同形漢語による語形と意味のズレによる誤用であり、もう一つは、中国語の助詞「的」と日本語の連体形「の」における文法上の類似性による誤用である。このうち「的」と「の」に関しては、先行研究の多くは、連体修飾句に見られるその誤用の原因を考察してきた(鈴木 1995, 迫田 1999, 奥野 2001 ; 2003 ; 2005 ; 2008, 張 2002, 高橋 2004 など)。次節では、連体修飾句に現れた「の」の誤用は中国語を母語とする日本語学習者のみに現れるのか、母語転移の可能性は存在するのかを明らかにする。

## 5.2 日中同形語による誤用の可能性

漢語系形容動詞の習得順序を調査する際の「格助詞との共起」を判断するテストにおいて、中国語母語話者による正答数の平均値は他言語母語話者の正答数の平均値より著しく低かった。このことから、日中同形語<sup>40</sup>による誤用の可能性は否定できないと考えられる。

### 5.2.1 日中同形語の差異

譚(2011)は、日中同形語の差異について、1)表記、2)語意、3)品詞性、4)喚情価値の差異、5)語感の強弱という5点を挙げている。

#### 1) 表記

譚(2011)は、日本語と中国語の同形語と呼ばれても、それらの語形は完全に一致しているわけではなく、語形の表記のあり方によってさらに3種類に分けられるとも述べている。

##### A. 語形が完全に一致する語

「食堂」、「作品」、「平日」など

---

<sup>40</sup> 日中同形語とは、日本語と中国語において、「いずれがいずれを借用したかを問わず、双方同じ漢字(簡体字は問わない)で表記されるもの」を指す(大河内 1997:180)。

B. 語形がほぼ一致する語

「企業」と“企业”、「銀行」と“银行”、「歴史」と“历史”など

C. 語形がまったく異なる語

「簡単」と“简单”、「鉛筆」と“铅笔”、「雑誌」と“杂志”など

譚(2011 : 155 の内容をもとに筆者が訳したものである)

2) 語意

日中同形語に備わる語意に基づいて、譚(2011)と覃(2013)は、以下のA. 同形同義語、B. 意味が部分的に同じである語、C. 意味がまったく異なる語の3種類に分類した。

A. 同形同義語

覃(2013)は、この種の日中同形語が最も多く見られ、日常生活で常に触れる物事から専門用語まで、幅広く使われていると述べている。

例 20 :

- a. 動植物の名称 : 猫、金魚、花、牡丹、百合、梨、樹木など
- b. 科学技術及び学術用語 : 数学、物理、気温、政治、革命、民主、絵画など
- c. ほかの動詞、名詞及び形容詞 : 標準、偏見、魅力、名義、冷戦、悪化、凝視、享受など
- d. 四文字熟語 : 一挙兩得、温故知新、小心翼翼、厚顔無恥、適者生存、一目瞭然など

覃(2013 : 98)

中国語を母語とする日本語学習者にとって、例 20 に挙げられているように、語形及び意味的に中国語とほぼ一致している語彙の習得は非常に有利で、母語からの正の転移で、目標言語をより効率的に習得することが可能である(覃 2013)。

B. 意味が部分的に同じである語

1つの語彙に2つ以上の意味がある日中同形語のことを指す。覃(2013)は以下の例を挙げている。

例 21 :

- a. 「新手」という語彙は日本語では3つの意味がある。
  - ① これから戦闘に投入される新鋭 ;

- ② 新しくそのグループ(組織)に入ってきた人；
  - ③ 新しい手段、方法。一方、中国語では「初心者」のみ意味している。
- b. 「夢中」という語彙も日本語での意味は3つある。
- ① 夢を見るとき；
  - ② 頑張っている様子(夢中で飛び込む)；
  - ③ 熱中する(夢中になって研究する)。しかし、中国語では①番の意味しかない。

それ以外に、「大家」、「家内」、「生气」などの同形語もこの種類になる。

### C. 意味がまったく異なる語

覃(2013)は、この種の語彙は、日本語も漢語で表記しているが、その意味は中国語とまったく異なると示している。「娘、勉強、大丈夫、元気、新聞」など中国語を母語とする日本語学習者が誤用を犯しやすい語彙が挙げられる。

(覃 2013 : 98 の内容を筆者が訳したものである)

覃(2013)は、B類とC類の日中同形語における相違は単なる意味上のばらつきだけではなく、語彙の抽象性と具体性による差異や、表す感情の程度の差異などさまざまであり、中国語を母語とする日本語学習者が起こした多くの誤りはこの2種類の日中同形語によるものであり、母語の干渉を受けた可能性が高いと指摘している。

### 3) 品詞性

譚(2011:155)によると、「日中同形語は同義であっても、品詞性の相違を疎かにすると、文法上の誤用になる」(筆者訳)という。また、品詞性の相違としては、主に、以下のような場合がある。

- A. 中国語は動詞であるが、日本語は名詞である。

例 22 : 根据词语的不同意思造句。

(語彙の異なる意味によって文を作る。)

判断の根拠に乏しい。

- B. 中国語では名詞以外に動詞の用法もあるが、日本語では名詞性しかない。

例 23 : 好的习惯使人终生受益。

(よい習慣は一生得るものをもたらす。)

我习惯睡觉睡到自然醒。

(私は自然に目が覚めるまで寝ることに慣れている)

土地の習慣に従う。

- C. 中国語では形容詞か副詞であるが、日本語では名詞である。

例 24: 他对生活持有乐观的态度。

(彼は生活に楽観的な態度を持っている。)

楽観を許さない状況。

- D. 中国語では形容詞か副詞であるが、日本語では動詞である。

例 25: 那时的交通十分发达。

(あの時の交通はとても便利だった。)

わが国の経済はまだ発達していない。

- E. 中国語では他動詞であるが、日本語では自動詞である。

例 26: 你的建议遭到大多数人的反对、看来你还需要改进阿!

(あなたの意見は大多数の人に反対されたため、さらに改善する必要がある。)

法案に反対する。

- F. 中国語では自・他動詞であるが、日本語では自動詞である。

例 27: 唯一的缺点是教材没有完全普及。

(唯一の欠点は教材が完全に普及されていないことだ。)

我们需要开办更多的科技讲座以及普及科学知识。

(我々はより多くの科学講座を開設し、科学知識を普及させる必要がある。)

知識が普及する。

(譚 2011: 155 但し二行目 ( ) の中の内容は筆者が訳したものである)

#### 4) 喚情価値の差<sup>41</sup>

日中同形語において、一部分の語彙は「ほぼ同じ意味で用いられても」、日中両国の異なる歴史、文化などの背景から、現れた「評価の善悪」に相違が見られる(大河内 1997: 192)。

例 28:

他们既有敏锐的洞察力、又有深刻的见解。

(彼らは鋭い洞察力だけではなく、深い見方も持っている。)

<sup>41</sup> 喚情価値の差はニュアンス、褒貶などの差を指す。

日本にとって最も深刻な緊急課題である。

(譚 2011 : 155 但し二行目 ( ) の部分は筆者が訳したものである)

この例から、「深刻」という語彙は中国語ではプラスのニュアンスを持つ語であるが、日本語ではマイナスの意味で多く用いられることが分かる(譚 2011)。

#### 5) 語感の強弱

一部の同形語は中国語では、その語感はややかであるが、日本語で用いられると、その語感は強くなる(譚 2011)。

例 29 :

有什么要求请告诉我们。

(何かご要望があったら、私たちに教えてください。)

何かご要望(×要求)がおありでしたら、どうぞおっしゃってください。

(譚 2011 : 155 但し二行目 ( ) の中の内容は筆者が訳したものである)

譚(2011 : 155)は、「日本語の『要求』が表す語気は中国語の“要求”より甚だしく強くなっている」(筆者訳)と述べている。

#### 5.2.2 誤用が生じる原因の分析

江(2010)は、中国語に訳された日中同形語の観察を通し、中国語には日本語の形容動詞という品詞が存在しないため、それらを中国語に訳す際には必ず対象語彙の品詞性を変えなければならないと指摘している。例えば、連体形「な」で名詞を修飾する形容動詞は、中国語に訳されると形容詞になる。また、連用形「に」で動詞を修飾する形容動詞は、中国語に訳されると副詞になるということである。

一方、譚(2011)は日中同形語の習得の際に生じる誤用の原因について、以下の2点を挙げている。

##### A. 中国語からの干渉

中国語を母語とする日本語学習者は日中同形語を習得する過程で、母語の漢語からの干渉を非常に受けやすく、「習得の難点の1つ」(譚 2011 : 154 筆者訳)になる。

覃(2013 : 98)は、日中両言語において大量の同形語が存在するため、中国語を母語とす



る日本語学習者はしばしば「無意識の内に母語の漢字知識で日中同形語を理解、活用し、中国語との微妙な差異が疎かになりがちである」(筆者訳)と指摘している。一方、大河内(1997:184)によれば、このような誤用は、「中国から大量の留学生を受け入れていた明治中期以降それが中国語として定着していった」からであると述べている。

つまり、これは、中国語を母語とする日本語学習者は中国語と同形の漢語系形容動詞を習得する過程で、母語の干渉から対象語彙の品詞性を明確に区分できない可能性が高いということである。

#### B. 意味領域の相違による誤用

譚(2011)は、日本語と中国語において、同じ語彙でも用いられる範囲がまったく異なると述べている。

例 30 :

##### a. 明朗

中国語：～的性格、～的态度(態度)、～的教室、形勢(情勢)～、～的天空、  
～的光线(光線)、～的月光

日本語：～な人柄、～な若者、～な家庭

譚(2011:154)は、「中国語における“明朗”という語彙は修飾語として用いられる範囲が広く、『性格』、『態度』などの面だけではなく、『空』、『光線』、『月光』など非常に具体的な内容まで修飾できる。一方、日本語では、この語は『人柄』などのより抽象的な内容しか修飾できない」(筆者訳)と指摘されている。

##### b. 險惡

中国語：～的形勢(情勢)、～的峭壁(崖)、环境(環境)～、病情(病状)～

日本語：～な雰囲気、～な関係、～な情勢

(譚 2011:154 ( ) の中の内容は筆者が訳したものである)

また、「中国語の“險惡”という語彙は主に『情勢』、『病状』の悪化を表すときに用いられるが、『山』、『崖』などの自然環境を修飾することも可能である。それに対して、日本語では、『險惡』は具体的な事物を修飾できず、抽象的な場合にしか使われない」(筆者訳)と譚(2011:154)に指摘されている。

以上の分析から、譚(2011:154-155)は「日本語の漢字は抽象的な物事を表すことが多

いが、中国語の同形語はその範囲を超え、常に具体的な事物を表す」(筆者訳)と述べている。

豊田(1980)は、日本語の「形容動詞を外国人が学習する場合、造語力が活発」(p. 85)であるので、誤りが生じやすい。「特に中国人はこれらの言葉の大部分を語いとしては共通にもっているか、漢語から意味の類推できるものが多い。しかも、それらが日本語では中国語と品詞が異なる場合がしばしばある。この場合は非常に誤りが生じやすい」(p. 86)と指摘している。

劉(2010 : 125)は、「日中両言語において同形語が多く存在することは中国語を母語とする日本語学習者にとって、他言語を母語とする日本語学習者より日中同形語の習得に優位に立っているが、これこそが誤用を犯しやすい原因であり、習得の難点になる」(筆者訳)と述べている。また、最も典型的な誤用は日中同形異義語の運用の際に、日本語の意味を理解せず、同形の中国語の意味をそのまま読み込んでしまうような場合であるとも述べている。

例 31 :

- a. 一人の老婆と一人の少女が一緒の家に住んでいました。

正訳： 一位老婆婆和一位少女居住在一起。

誤訳： 一个人的老婆和少女住在一起。(「妻」)

- b. 会社に行く途中、事故に遭って、怪我をした。

正訳： 上班的路上遇到事故受了点伤。

誤訳： 上班的路上遇到事故、原因怪我。(「私に責任がある」)

- c. すみませんが、明日子どもを遊園地に連れて行く約束をしたんですが。

正訳： 抱歉、约好了明天带孩子去游乐园。

誤訳： 抱歉、明天被孩子约束必须去游乐园。(「制限する」)

(劉 2010 : 125)

劉(2010 : 125)は、「以上の例文の中の同形語は日本語と中国語で表す意味が著しく異なるため、語形からその意味を判断すると語彙の持つ元々の意味が曲解され、コミュニケーションに影響を及ぼすことになる」(筆者訳)と指摘している。

一方、曲(1995 : 36-37)は、誤用は「日中同形語の意味が類似すればするほど生じやすくなる」(筆者訳)と指摘している。また、ほかの先行研究(豊田 1980, 譚 2011, 覃 2013

など)と同じく、「多くの中国語を母語とする日本語学習者は、母語の干渉から日中同形類義語の品詞性を正しく区分できない」(筆者訳)と述べている。さらに、その誤用は、通常、翻訳(書き言葉)と会話(話し言葉)のいずれにおいても見られ、「差別」と「習慣」の2つの語彙がその典型例であると指摘している。

例 32 :

- A. 男女の差別をなくす。
- B. すべての日本の国民は、法の下に平等であり、人種、信条、性別などによって差別されることはない。
- C. 欧米では、日本と違って、杜のままで部屋に入るのが習慣だ。

(曲 1995 : 37)

曲(1995 : 37)によると、「日本語の『差別』という語は名詞だけではなく、サ変動詞にもなれるが、中国語の“差別”は名詞にしかなれない」。それに対して、「中国語の“習慣”という語彙は名詞以外に、動詞にもなれるが、日本語の『習慣』は名詞しか用いられない」という。中国語を母語とする日本語学習者は母語の干渉で、「常に日本語の『習慣』という語彙を動詞にして用い、『～に習慣した』などのような文を作る」という。しかし、「学習者が上級になるにつれ、母語の干渉で産出された誤用は徐々に減少していく」(筆者訳)という。

### 5.2.3 日中同形語に関わる調査

劉(2010 : 124)は、日中同形語の比較研究を行うとき、一般的に従われる4つの原則を挙げている。

- A. 発音上の相違を考慮しない。
- B. 語順の相違を考慮しない。

例えば、「中国語の“语言”と日本語の『言語』は同じ意味であるが、文字の配列順序のみが異なる場合は日中同形語と見なされる」(劉 2010 : 124, 筆者訳)。

- C. 和語と軽声などの接尾語が付いている語彙は研究対象外とする。  
(「高い」、「静か」、「儿子」、「老头儿」など)

D. 中国語の簡体字と繁体字による字形上の区別は考慮しない。

(“決”と“決”は同じ漢字と見る)

(劉 2010 : 124 の内容をもとに筆者が訳したものである)

本研究も上述の4つの原則に従い、第四章の表 4.5 における調査対象となる漢語系形容動詞と対応する中国語の品詞性との関連性を調べた(表 5.1 参照)。

[表 5.1 : 日中同形語における品詞性の比較]

典型性の段階分け	語 彙 (40 語)				
一	1. 立派 (一)	2. 大切 (一)	3. 柔軟 (形)	4. 急激 (一)	5. 顕著 (形)
	6. 深刻 (形)	7. 単純 (形)	8. 嚴重 (形)	9. 強引 (一)	10. 呑気 (一)
二	11. 曖昧 (形)	12. 広大 (形)	13. 巨大 (形)	14. 容易 (形)	15. 微妙 (形)
	16. 粗末 (一)	17. 巧妙 (形)	18. 重大 (形)	19. 対等 (形)	20. 重要 (形)
三	21. 安泰 (形)	22. 清潔 (形)	23. 健康 (名・形)	24. 危険 (名・形)	25. 単調 (形)
	26. 幸福 (名・形)	27. 幸運 (名・形)	28. 安全 (名・形)	29. 好調 (一)	30. 公平 (名・形)
四	31. 不利 (形)	32. 不幸 (名・形)	33. 不便 (名・形)	34. 孤独 (形)	35. 無礼 (名・形)
	36. 本気 (一)	37. 無事 (名・形)	38. 無知 (形)	39. 平凡 (名・形)	40. 詳細 (形)

(注 : 「一」は対応する中国語が存在しないことを示す。)

表 5.1 は日中同形語における品詞性の比較を示したものである。その結果、「一、二」段階に属する語彙は辞書に記載されている「形動」であるのに対し、「三、四」段階に属する語彙は辞書に記載されている「名・形動」であるのが分かる。すなわち、日本語では、「一、二」段階に属する語彙は格助詞と共起できないが、「三、四」段階に属する語彙は格助詞と共起することができる。しかし、対応する中国語の場合、「一」段階では、「立派、大切、粗末」など中国語に存在しないもの以外の語彙は形容詞として用いられるため、格助詞と共起できないことは判断しやすい。したがって、第四章の表 4.10（格助詞との共起の文法性判断テスト）において、中国語母語日本語学習者は他言語母語日本語学習者より「一」段階に分類される語彙の正答数の平均値が高く見られたのは母語の正の転移であると考えられる。それに対して、「二」段階から「四」段階へ行くにしたがって、日本語と同形の中国語では、形容詞以外に、場合によって名詞として使える語彙の数も増える。そのため、中国語母語日本語学習者はテストに出題された語彙の品詞上の区別が困難となり、他言語母語日本語学習者より同テストにおける「二」段階・「三」段階・「四」段階に分類される語彙の正答数の平均値が低くなったと考えられる。これは母語の負の転移である。

### 5.3 中国語の形容詞と助詞「的」

中国語の形容詞は英語や日本語の形容詞と同じように、「形容詞+名詞」の語順で名詞を修飾する。

興水・島田(2009)は中国語の連体修飾構造について、以下のように述べている。

文の成分である修飾語には、名詞をはじめ名詞性の被修飾語に対する連体修飾語と、動詞や形容詞をはじめ述語性の被修飾語に対する連用修飾語がある。前者の「連体修飾語+中心語」は、直結できるものと、接続成分として修飾語の後に構造助詞「的」が必要なものがある。“的”は連体修飾語の標識にも感じられる。連体修飾語を伴う場合に組み立ては「名詞・代詞・数量詞・動詞（句）・形容詞（句）+“的”+中心語」となる。ところが、「連体修飾語+中心語」は、直結できるものと、接続成分“的”が必要なものがある。直結できる例にも、接続成分を用いてよいものと、用いてはいけないものがある。連体修飾語で接続成分“的”を必要としない場合の組み立ては「名詞・代詞・形容詞・数量詞連語+中心語」となる。

すなわち、形容詞が名詞を修飾する時、名詞の前に直接置かれる場合と、仲介役の「的(de)」が使われる場合がある。

守屋(1995)は、実質語やフレーズが修飾語になるときには、被修飾語と修飾語との間に通常、「的」を加えるが、修飾語が後にくる成分を修飾するときに、「的」を伴う場合と伴わない場合があると指摘している。連体修飾語としての「的」の使い方は表5.2のようにまとめられる。

[表5.2: 「的」の付け方 (名詞・形容詞が修飾語となる場合)]

分類	用例
「的」が使われる場合	名詞が修飾語である場合 冬天的夜晚 [冬の夜]
	形容詞が修飾語 (1) 二音節形容詞が単音節名詞を修飾する場合 好看的花 [きれいな花]
	(2) 形容詞の重ね型の場合 厚厚的地毯 [ぶ厚いじゅうたん]
	漂漂亮亮的绸衬衫 [美しいシルクのブラウス]
「的」を使わない場合	名詞が修飾語 (1) 名詞が後の人・物の性質を表す場合 玻璃杯 [ガラスのコップ] 塑料瓶 [プラスチック製のボトル]
	(2) 修飾語の名詞と修飾される名詞が固定した組み合わせの場合 中国菜 [中華料理] 北京烤鸭 [北京ダック]
	形容詞が修飾語 (1) 単音節形容詞の場合

	酸苹果 [すっぱいリンゴ] (2) 二音節形容詞と後の名詞の組み合わせが固定的である 場合 老实人 [まじめな人]
「的」があってもなくてもよい場合	形容詞が修飾語 二音節形容詞が二音節名詞を修飾する場合は、「的」 はあってもなくてもかまわない。 幸福(的)生活 [しあわせな暮らし]

(守屋1995 : 156-161の内容をもとに筆者作成)

表5.2から中国語の形容詞・名詞の連体修飾は、場合によって「的」の付け方が違うことが分かる。一般的には、形容詞（二音節形容詞）が単音節の名詞を修飾する時、また形容詞自体が形容詞の重ね型である時、「的」が使われる。一方、後の名詞の組み合わせが固定的である時、「的」は使われない。また、二音節名詞を修飾する時、「的」はあってもなくてもかまわない。

以上の研究によると、日本語の形容動詞に対応する同形の中国語は形容詞の下位分類として扱われ、物事の性質を表す機能を持つ。また、名詞修飾構造の場合には、一般に、中介役の助詞「的」が用いられるため、「的」は修飾語の目印と言える。しかし、場合によって「的」を伴うこともあれば伴わないこともある。

#### 5.4 日中連体修飾句の対照比較

本節では、高橋(2004)、奥野(2003)の研究をもとに、日本語と中国語の連体修飾句における相違点と類似点を明確にする。以下、語順及び「の」と「的」の必要性をめぐり、日中連体修飾句を対照分析する。

##### 5.4.1 語順の比較

高橋(2004)は、「日本語では修飾する語句と修飾される語句の語順は常に同じで、修飾部が被修飾部の直前に置かれるが、「これは修飾部がどんな品詞であっても同様である」(p. 149)こと、また、「中国語の基本的な語順はSVOで日本語と異なる」が、名詞・形容詞及び動詞の連体修飾句の語順は「日本語と同様である」(p. 150)と述べている。

例 33:

日本語	中国語	
通常 (N) の <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">業務</span>	通常的 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">业务</span>	・・・名詞の連体修飾句
↑	↑	
美味しい (A) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ケーキ</span>	好吃的 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">蛋糕</span>	・・・形容詞の連体修飾句
↑	↑	
有名な (NA) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">お寺</span>	有名的 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">寺庙</span>	・・・形容動詞の連体修飾句
↑	↑	
寝ている (V) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">赤ちゃん</span>	正在睡觉的 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">婴儿</span>	・・・動詞の連体修飾句
↑	↑	

(下線:修飾部; 矢印:被修飾部; 高橋(2004: 149-150)の例を参照した上で、筆者が作成したものである)

上の例から、名詞・形容詞・形容動詞・動詞の連体修飾句を見ると、日本語の連体修飾句と中国語の連体修飾句における修飾語と被修飾語の語順は同様であることが分かる。

しかし、上記の例によると、日本語の連体修飾句では修飾語と被修飾語の間に、連体形「の」と「な」の区分があるが、中国語の連体修飾句では連体形の区別は見られず、助詞「的」は両方の機能を担っていると見られる。

村松(2000: 32)は、「の」と「的」の必要性に関して、「形容詞と名詞、動詞と名詞を結ぶとき、日本語では『の』は用いないが、中国語では『的』は必要である」と述べている。また、形容動詞と名詞を結ぶとき、日本語では『の』ではなく、『な』を用いるが、中国語では『的』を用いる」と指摘している。

#### 5.4.2 「の」と「的」の比較

本節では、日中連体修飾句における「の」と「的」の必要性を明確にする。高橋(2004)は、連体修飾句において、「の」を例に挙げてその必要性の有無を表 5.3 に示している。同様に、中国語における「的」の必要性を、高橋の表を参考に筆者がまとめたものが表 5.4 である。



[表 5.3: 「の」の必要性(高橋 2004:149)]

連体修飾構造	「の」の有無	の	
		+	φ
(1) N1+N2	ローマの休日	○	
(2) IA+N	おいしい水		○
(3) NA+N	静かな湖畔		○
(4) V+N	国へ帰る人		○
(5) 連体詞+N	そんな約束		○
(6) 数詞+N	一杯のかけそば	○	
(7) 副詞+N	たくさんのお土産	○	
(8) X+助詞+N	父からの手紙	○	

(○:正用;+:「の」必要;φ:「の」不要。)

[表 5.4: 「的」の必要性]

連体修飾構造	「的」の有無	的	
		+	φ
(1) 名+名	罗马(的)假日	○	
(2) 形+名	好喝的水	○	
(3) 形動+名	安静的湖畔	○	
(4) 動+名	归国的人	○	
(5) 連体詞+名	那个约定		○
(6) 数詞+名	一杯水		○
(7) 副詞+名	很甜的苹果	○	
(8) 人代+助詞+名	爸爸来的信	○	

(○:正用;+:「的」必要;φ:「的」不要。)

表5.3と5.4における例文(1)から(4)までは、日本語の連体修飾句では名詞の連体修飾のみ、連体形「の」が必要になる。一方、中国語の連体修飾句では、日本語の形容詞、形容動詞に相当するもの、また、動詞が名詞を修飾するときには、通常「的」が付く。この結果は、以下の奥野(2003:98)の「名詞修飾構造に関する対照分析表」の結果と一致している。

奥野(2003)は、日本語、中国語、韓国語、英語の名詞修飾構造を対照分析し、表5.5のようにまとめている。

表5.5の「形容詞と被修飾部間の『の』に相当するものの有無」という項目には日本語の形容詞と形容動詞の両方が含まれている。また、名詞修飾構造の修飾語と被修飾語間の「の」に相当するものの有無に関する比較では、中国語の「的」はほかの言語より日本語の「の」との類似点が多く見られる。奥野(2005)は中国語を母語とする日本語学習者が、母語の「的」の干渉のため、他言語母語日本語学習者より連体修飾構造を習得する過程で、「の」の誤用が幅広く見られたと指摘している。

[表5.5：名詞修飾構造に関する対照分析表(奥野2003：82)]

比較項目 言語	「の」に相当するもの	修飾部と被修飾部の日本語との語順比較	形容詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無	動詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無	名詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無
日本語	の		×	×	○
中国語	的	同	○	○	△
韓国語	의	同	×	×	△
英語	of/'s/with, to, 他前置詞	異・一部同	×(語順同)	×(語順同)	○(語順異) ×/'s(語順同)

(注：表内の○は「の」に相当するものが必要、×は不必要、△は場合によって必要(不必要)、を示す。)

## 5.5 母語転移説

本節では、まず、Ellis(1997)の研究をもとに、「母語転移」の概念及び種類を説明した上で、母語転移賛成派と母語転移反対派という2つの観点から日本語の名詞修飾構造の習得研究を概観する。

### 5.5.1 母語転移賛成派

Ellis(1997)によれば、母語転移とは学習者の母語が第二言語の習得に影響を与えることを指す。Ellis(1997:51-52)は、この母語転移からの影響を正の転移、負の転移、回避、過剰使用という4つに分類した。具体的には、学習者の母語は第二言語習得の過程で、誤用を起す一種の原因であるとされているが、このような影響を負の転移と呼ぶ。一方、逆に、学習者の母語が第二言語の習得を促進する場合、そのような影響は正の転移と呼ばれる。さらに、母語転移は学習者の回避現象を引き起こすことがある。例えば、中国語と日本語には英語の関係節と同じ構造がないため、中国語や日本語を母語とする英語学習者は、英語関係節使用の回避が見られる。このような学習者の態度は回避と呼ばれる。また、中国語を母語とする英語学習者は、英語で謝罪するとき、母語の干渉から謝罪表現を過剰に使用すると言われるが、このように学習者に見られる特定の語彙や形式の過剰使用も、母語

転移の影響を受けたものと見なされる。

第四章ですでに言及したように、守屋(1995)は、中国語の連体修飾構造における修飾語と被修飾語の間では助詞「的」を加えるのが通常であると述べている。中国語の連体修飾構造におけるこの助詞「的」は、日本語の「の」と機能上非常に類似していることから、中国語を母語とする日本語学習者は日本語の連体修飾構造を習得する過程で、「的」の干渉による誤用を産出する可能性が高いと考えられる。それゆえ、従来多くの研究は「の」の過剰使用に注目してきた。

鈴木(1995)も、「川の向こうに高いの建物が見えます」という誤用例を引用しながら、「連体修飾構造を習得する過程で、母語の干渉で形容詞・形容動詞・動詞・助動詞の連体形にまで、執拗なくらい『の』をつける傾向が中国語話者にはある」(鈴木1995:157)と述べている。特に、「『書くの練習』『お風呂に入るの時間』『気をつけるのこと』『広がるのため』のように動詞の後に連体形『の』を付ける誤りが多く現れるのも、中国語では動詞の連体修飾句に『的』が多くつくことによる」(鈴木1995:158)と指摘している。

一方、迫田(1999)は、OPI<sup>42</sup>によってレベル分けされた日本語学習者の横断的な発話資料である KY コーパスを用いて「の」の過剰使用状況を調べ、その結果を以下のようにまとめている。

- A. 「の」の過剰使用は初級から出現し、どの母語のグループも中級に多く観察される。
- B. 上級レベルでは中国語母語話者は他の母語話者グループに比べ「の」の過剰使用する学習者が多い。
- C. 「の」の過剰使用の種類では、「\* iA<sup>43</sup>+の+NP」(例:\* 大きい自動車)の誤用が多い。
- D. 誤用と正用が同時に観察される場合が多い。
- E. 超級レベルではすべてのグループで「の」の過剰使用が消滅しており、名詞修飾には正用のみが観察される。

迫田(1999:331-332)

<sup>42</sup> 「OPI」とは、「“Oral Proficiency Interview”の略で、ACTFL(全米外国語教育協会)認定の口頭能力面接試験を指す」(『新版日本語教育事典』2005:800)。

<sup>43</sup> 「iA」はイ形容詞のことを指す。

なお、迫田(1999 : 332)は「中国語母語話者は他の韓国語母語話者・英語母語話者に比べて上級になっても半数以上の学習者に『の』の付加が見られたという結果が示され、特異な傾向が見られた」とも指摘している。

次に、奥野(2001)は、日本語の連体修飾構造において、学習者の「の」の過剰使用が母語の違いに関わらず見られたかどうかを研究課題としながら、22名の留学生(中国語母語話者11名、英語母語話者6名、仏語母語話者1名、西語母語話者1名、独語母語話者3名)を対象に調査を行った。その結果、中国語母語話者は上級になっても、「の」の過剰使用が依然として多く残り、他言語母語話者に比べ、形容詞、形容動詞や動詞など複数の種類の名詞修飾句に普遍的に見られたと指摘している。

また、奥野(2003 : 86)は、名詞句における「の」の過剰使用について、中国語・韓国語・英語を母語とする成人の上級学習者各10名を対象に、音声の提示での即時的な言語処理を求める文法性判断テストを行った。「その結果、特に動詞修飾の場合の『の』の過剰使用には中国語の負の転移及び韓国語の正の転移が関わっている可能性が高い」こと、また、中国語母語話者は「中国語の転移により、修飾語の品詞に拘らずより『の』を過剰使用する可能性がある」ことを指摘している。

さらに、奥野(2008 : 98)は「の」の過剰使用に関わる要因には、「格助詞『の』の過剰一般化」や、「ナ形容詞と名詞の区別の混乱」、「学習者の言語処理のストラテジー」、また、「言語転移」など「いろいろな要因が各習得レベルおよび言語処理過程において関与している」とも述べている。

以上の先行研究はいずれも、日本語の連体修飾を習得する過程において、中国語を母語とする日本語学習者は中国語「的」の干渉から「の」を過剰に使用する傾向があることを示唆するものである。

### 5.5.2 母語転移反対派

日本語の連体修飾構造の習得過程における「の」の過剰使用の原因については、前節でみた母語転移説を支持する研究に反対するものもある。それら母語転移反対派が根拠とするのは、「の」の過剰使用は中国語を母語とする日本語学習者のみならず、日本語母語話者の幼児及び中国語以外の母語話者の日本語学習者にも観察されるという事実である。

これまでL1研究における「の」の過剰使用の要因としては、Clancy(1985)、横山(1990)の提示した格助詞仮説、永野(1959)の準体助詞仮説、Murasugi(1991)の補文標識仮説の3

つがある。

Clancy(1985 : 459-460)は、日本語母語話者の幼児が連体修飾構造を獲得する過程で生じた「の」の過剰使用は名詞の連体修飾句から派生したとし、「『名詞の名詞』という構造を習得した後、幼児たちは常に修飾語となる形容詞と名詞の相違への注意が多くなり、連体修飾を同じ構造に統一するため、「の」の過剰使用が現れた」(筆者訳)と述べている。

横山(1990 : 8)は形容詞による連体修飾での連体形「の」の誤用は、名詞が名詞を修飾する際に用いる連体形「の」の「過度の一般化の結果である」と指摘している。

つまり、Clancy(1985)と横山(1990)は、連体修飾構造における「の」の過剰使用は名詞の連体修飾構造に用いられる連体形「の」を過剰一般化した結果であるとした点で一致している。

一方、永野(1959 : 395)は「赤いの花」という例を挙げ、「の」というような言い方は、「幼児に一般的な言い方(誤用)と見られるが、これは、準体助詞の『の』が固定し、多用されたあとで急に多く現れてくるところから見て、準体助詞の『の』からの発達と考えられる」と指摘している。

さらに、Murasugi(1991)は日本語の連体修飾構造に見られる「高いの信念」(Murasugi 1991 : 69)のような「の」の過剰使用は、関係節に補文標識として用いられる「の」を過剰一般化した結果であるとしている。

A. [[asoko de tabete orareru] no]<sup>44</sup> wa Tanaka sensei desu.

B. [[soko kara detekita] no] wa John da.

Murasugi(1991 : 96)

以上の母語転移反対派の各説を修飾語「面白い」と被修飾語「本」を例にしてまとめると、表5.6のようになる。

---

<sup>44</sup> 内側の括弧は具体的な動作や出来事を表す補文の命題を示す。一方、外側の括弧は名詞句のことを示す。

[表5.6 : 連体修飾構造における「の」の過剰使用の要因に関する母語転移反対派の各仮説]

先行研究	仮説	「の」の過剰使用の分析
Clancy (1985) 横山(1990)	格助詞仮説	面白い+の+本 → 面白いの本
永野(1959)	準体助詞仮説	本、面白いの。 → 面白いの本
Murasugi (1991)	補文標識仮説	「面白い」+本 → 面白いの本

(迫田1999 : 329の内容をもとに筆者作成)

### 5.5.2.1 日本語 L1 幼児の誤用に関する研究

Clancy(1985)は、日本語の名詞修飾句の獲得について、1歳11ヶ月の日本語母語話者の幼児1名を対象に、幼児の自発的発話を記録する方法で縦断研究を行い、その幼児に見られた正用と誤用の例を表5.7のように示している。

[表5.7 : 日本人の幼児に観察された正用及び誤用例]

観察時の幼児の年齢	正用及び誤用例	類型
1歳11ヶ月	赤い ブーブー	形容詞の名詞修飾の正用
	* ねいちゃん ブーブー	名詞の名詞修飾の誤用
2歳2ヶ月～2歳4ヶ月	大阪 の おじいちゃん	名詞の名詞修飾の正用
	* 青い の ブーブー	形容詞の名詞修飾の誤用
	* チッチャイ の ブーブー	

(Clancy1985 : 458-459の内容をもとに筆者作成)

上の表5.7から、被験者の日本語母語話者の幼児が連体修飾句を獲得する過程で、形容詞の名詞修飾語における助詞「の」の過剰使用が起こることが分かる。Clancy(1985 : 459)は日本語母語話者の幼児が形容詞の名詞修飾句を習得する過程で、「の」の過剰使用が多く見られたと述べている。

一方、横山(1990 : 5)は日本語の助詞の獲得について、日本人の幼児2名を対象に、その自発的発話を観察カードに記録する方法で縦断研究をした。その結果、27ヶ月間に得られ

た観察資料において、2人の間で「若干の違いはあったが、形容動詞、動詞、連体詞、指示代名詞といった形容詞以外の語による連体修飾にも助詞『ノ』の誤用」が見られたという。

また、伊藤(1998)は日本語の連体修飾構造において幼児に生じた「の」の過剰使用について、日本人の幼児1名に刺激絵を提示しながらその発話を記録したデータを基にした縦断研究を行った。その結果によれば、「の」の過剰使用は形容詞及び形容動詞の名詞修飾句だけに見られたという。同じく、伊藤(1999)は、日本人の幼児2名に刺激絵を提示しながら録音した発話データに基づく縦断研究をしている。その結果によれば、対象児のいずれにも形容詞の名詞修飾構造における「の」の過剰使用が見られ、その誤用の出現時及び消失時ははっきりしていたという。

しかし、この伊藤(1999)の調査研究に対して、2名の日本語母語の幼児を対象にした連体修飾構造の習得を扱った高橋(2004: 154)は、「の」の過剰使用は形容詞のみならず「様々な品詞の修飾」において生じることを指摘した。また、高橋(2004)は、誤用の「出現の時期に個人差はあるものの」、連体修飾構造の習得過程で日本語母語話者の幼児ほぼ全員に同じような誤用が観察されたと述べている。

#### 5.5.2.2 中国語以外を母語とする日本語 L2 学習者の誤用に関する研究

白畑(1993)は、4歳1ヶ月で来日した韓国語母語話者である1名の幼児を対象にして、日本滞在3ヶ月目から13ヶ月目までにおける日本語名詞句構造の発達過程を観察した。その結果、対象児から観察された「\* AP+ノ+NP」(p. 41)という「ノ」の誤用は、「名詞句構造習得の普通的発達過程」(p. 48)であり、母語転移に拠るとは考えられないと結論づけている。

しかし、高橋(2004: 157)は、この白畑(1993)の研究について、「転移に関しては不明な点が多く、転移があるとすればそれはどこに影響するのか(過剰使用においてなのか、脱落においてなのか)、負の転移なのか正の転移のかなど疑問が多い」。「被調査者1名」や「1言語の事例から言語転移について言及するのは難しい」と指摘している。

一方、白畑(1994)は、日本語における連体修飾構造の獲得過程について、成人のタイ人女性(1名)とマレーシア人男性1名を対象に、発話誘導の録音データを分析する方法で、18ヶ月間にわたり縦断的観察を行った。その結果、タイ語母語話者とマレーシア語母語話者にも「の」の過剰使用が見られたという。また、白畑は、この第二言語としての成人の

日本語学習者の連体修飾構造の習得過程を日本語母語話者の幼児及び第二言語日本語学習者の幼児のそれと比較し、名詞の連体修飾構造における「の」の脱落及び形容詞・動詞の連体修飾構造における「の」の過剰使用は成人の日本語学習者、日本語母語話者の幼児及び第二言語日本語学習者の幼児のいずれにおいても観察されたが、第二言語としての日本語成人学習者が名詞の連体修飾構造を習得する際の「の」の脱落の頻度は非常に低く、また、「の」の脱落と過剰使用が併用されていたと報告している。

さらに、白畑・久野(2005:48)は、幼児による日本語名詞句構造内での「の」の習得について、中国語母語(1名)、英語母語(2名)の男子幼児の発話データの縦断的観察を行っている。その結果、名詞句構造習得の発達過程は日本語母語話者の「幼児に見られる発達過程と同一のもの」であるが、「適格構造と不適格構造との長期に渡る混在や、『ノ』を他の助詞で代用される誤りなど、L2特有と考えられる習得過程も見出された」と述べている。また、「の」の過剰使用は、「英語をL1とする学習者の『AP+NP』構造からも出現したことから」、「の」の過剰使用を母語転移のみによって説明することは難しいことがさらに支持できたと結論付けている。

以上の研究以外に、小山(2003)も、名詞修飾節の習得過程における「の」の過剰使用は日本語母語話者の幼児や中国語以外の母語話者の日本語学習者にも誤用が見られることから母語転移以外の要因も無視できない、と述べている。

以上、日本語の連体修飾句を習得する過程で生じた誤用の要因については、調査対象や調査方法によって様々な見解が提示されてきたのを見た。しかしながら、日本語と中国語の連体修飾構造はその語順が同じであるばかりでなく、中国語の助詞「的」と日本語の連体形「の」の間に機能的類似性もある。また、中国語を母語とする日本語学習者は上級レベルになっても他言語母語日本語学習者より誤用が多く残るといふ。このような点を考慮するならば、中国語母語話者に見られる「の」の過剰使用は、「中国語に拠る母語転移の可能性が否定できない」(毛2011:64)と思われる。しかしその一方で、日本語母語話者の幼児にも日本語学習者と同じ誤用が観察されたということを考えるならば、「誤用の要因は必ずしも母語転移であるとも言い切れず、他の要因の可能性を含め、総合的に考察する必要がある」と思われる(毛2011:64)。



## 5.6 調査の手順と方法

上述の先行研究には2つの問題点があると考えられる。まず、漢語系形容動詞の連体修飾句の習得について、学習者の日本語レベル別の習得に関する調査はあまり実施されていないこと、そして、誤用の種類及び要因が解明されていないことである。これらの問題点を踏まえ、中国語を母語とする日本語学習者を対象にした漢語系形容動詞の連体修飾句の習得について、以下の課題を設定した。

- (1) 上級学習者は中級学習者より漢語系形容動詞の連体修飾句の習得が進んでいるのか。
- (2) 形容動詞を習得する際、抽象名詞と品詞の点で明確に区別できるのか。
- (3) 形容動詞を習得する過程で現れたそれぞれの誤用が起きた要因の観点から、どの種類の形容動詞が母語転移からの影響を最も受けやすいのか。

本研究が用いた調査票は、羅(2005)が日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者を対象に行った漢語系形容動詞の連体修飾句における連体形の選択テストの様式を基に作成した。調査の対象とした修飾語は旧日本語能力試験(1~4級)から抽出した形容動詞と抽象名詞の修飾語、各20個、合計40個である。調査結果の客観性を得るため、40個の連体修飾句の出題順序をランダムに変えた調査票を5つ作成した。その詳細は表5.8の通りである。

[表 5.8 : テストのバージョンと被験者人数の内訳]

バージョン	三年生	四年生
I	9名	10名
II	10名	11名
III	11名	10名
IV	11名	10名
V	8名	12名

被験者、調査用素材、調査の手続き、分析に関する詳細は、以下に示すとおりである。

### 5.6.1 調査対象者

調査対象者は中国の西安外国語大学に在籍する学部生 102 名(漢民族)である。なお、国籍は全員中国で、学年別内訳は 4 年生 53 名、3 年生 49 名、年齢層は 20～23 歳である。1 年生と 2 年生については、調査を行った時点で習得している漢語系形容動詞の数が非常に限られていたため、調査の対象にはしなかった。

事前に語学力レベルの判定は行わなかったが、使用教材(『新編日本語』中級、上級)から学習者の言語習熟度を推測すると、3 年生は難易度が旧日本語能力試験 2 級と同じレベルと思われる。一方、4 年生は難易度が旧日本語能力試験 1 級と同じレベルと推測される教材を使用していた。実際、49 名の 3 年生全員が旧日本語能力試験 2 級を、また、53 名の 4 年生のうち 44 名が旧日本語能力試験 1 級に合格し、残りの 9 名は全員 2 級に合格している。以上のことから、本研究は 3 年生を中級、4 年生を上級と見なした。被験者のレベル分けの具体的内訳は表 5.9 のようになる。

[表 5.9 : 被験者の語学力レベル分けの内訳]

被験者	教科書	日本語能力レベル	本研究
3 年生	『新編日本語』中級	2 級合格 : 49 名	中級
4 年生	『新編日本語』上級	1 級合格 : 44 名 2 級合格 : 9 名	上級

### 5.6.2 調査対象となる修飾語

形容動詞の習得に関わる調査にあたっては、旧日本語能力試験(1～4 級)の語彙表で扱われている形容動詞と抽象名詞の修飾語を用いた。また、正答と誤答を明確に判別するため、本研究では、正答が連体修飾の際は必ず形容動詞に対応する「な」となるように、修飾語と被修飾語を連体形として「な」をとるもののみを採用した。一方、正答が連体修飾の際は必ず抽象名詞に対応する「の」となるように、修飾語と被修飾語を連体形として「の」をとるもののみを採用した。この条件をもとに、旧日本語能力試験(1～4 級)の語彙表から漢語系形容動詞と抽象名詞それぞれ 20 個が選ばれた。表 5.10 は調査対象となる連体修飾語のリストであり、形容動詞(連体形「な」のみ適用可能)と抽象名詞(連体形「の」のみ適用可能)を挙げている。また、これらの語彙に対応する中国語での品詞性は『現代中国語

辞典』(1982)による分類を基準にして示している。表 5.11 は調査対象となる修飾語の難易度語数を示したものである。

[表 5.10 : 調査対象となる修飾語]

日本語 : 形容動詞	中国語 : 形容詞 (20 個)	日本語 : 抽象名詞	中国語 : 形容詞 (20 個)
豪華、大胆、純粹、巧妙、旺盛、濃厚、 奇妙、豊富、円滑、猛烈、有名、強烈、 有効、貧弱、貴重、率直、柔軟、簡潔、 勤勉、親切		永遠、初級、唯一、基本、個別、無色、 原始、万能、匿名、絶好、合理、未婚、 慢性、最新、一流、公共、未知、無名、 無償、一般	

[表 5.11 : 調査対象となる語彙難易度の内訳]

レベル	1 級	2 級	3 級	4 級
語彙数	11	24	2	3

(注 : 1~4 級は旧日本語能力試験の出題基準による難易度である。)

### 5.6.3 調査票

調査票は全 2 ページで、内容は同じであるが、出題の順番の違いによって、5 つのバージョンがある。構成は以下の通りである。(付録十、十一参照)

- p.1 学習背景に関する質問
- p.2 連体形の選択テスト

学習背景に関する質問では、被験者の年齢、民族、旧日本語能力試験の合否及び合格級を聞いた。今回の調査では被験者に対して、連体修飾句に修飾語と被修飾語の間にどの連体形を入れるかを質問した。回答方法は被験者にとって、最も適切である連体形を○で囲む方法をとった。

なお、今回の調査では、連体形「な」か「の」一つしか正答になれないが、学習者による連体形「な」と「の」の混用の有無を考察するため、「な・の」両方の適用という選択肢も設定している。

#### 5.6.4 手続き

調査は被験者をクラス別に集め、授業中に行った。所要時間は15分間であった。まず、筆者が自己紹介、調査の目的を述べる一方、授業担当の教師は調査の流れを説明した。また、被験者に心理上の負担をかけないように、今回の調査は成績と関係がないことを伝えた。さらに、5つのバージョンの調査票をランダムに配布した。被験者は挙げられた例を理解した上で、連体修飾句の連体形選択テストを始めた。

約15分後、全員終了してから、調査票が回収された。調査に関する説明は事前にすべて中国語に訳したプリントを作成した。プリントに記載されていない補足説明及び被験者からの質問などはそのたびに答えた。

#### 5.6.5 分析方法

以上の方法で実施した調査の結果は2要因分散分析の手法（中級・上級学習者×形容動詞・名詞）で分析された。分析の観点は形容動詞と抽象名詞の連体修飾句とし、中・上級の学習者の誤答数の平均値から、形容動詞及び抽象名詞の連体修飾句の習得を考察する。そして、品詞別に誤用要因の可能性を分析する。

### 5.7 結果と分析

形容動詞と抽象名詞の連体修飾句における連体形の選択に関して、誤答数の平均値を分析する観点は、日本語能力レベルでの誤答数の平均値と品詞別での誤答数の平均値の2つの部分から構成される。

#### 5.7.1 日本語能力レベルでの誤答数の平均値

まず、形容動詞と抽象名詞の連体修飾句に対する誤答数を日本語能力レベルごとの被験者の人数で割り、平均点を算出した。形容動詞の連体修飾句に対しては、修飾語と被修飾語の間に連体形「の」、「な・の」の選択、抽象名詞の連体修飾句に対しては、修飾語と被修飾語の間に連体形「な」、「な・の」という選択を誤答と定義した。誤答数の平均値の計算については、総点20点で、点数が高ければ、誤答が多いということになる。

中・上級学習者を対象にした形容動詞の連体修飾句における連体形選択の誤答数の平均値を表5.12にまとめる。

[表 5.12 : 形容動詞と抽象名詞の連体修飾句における誤答数の平均値及び標準偏差]

条件	誤用例	中級学習者 (n : 49)		上級学習者 (n : 53)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
形容動詞	簡単 <u>な</u> 方法／柔軟な・ <u>の</u> 態度	5.45	3.03	5.51	3.08
名詞	永遠 <u>な</u> 愛／唯一 <u>な</u> ・の要求	8.04	4.97	3.45	1.57

(注：誤答数の総和は 20 点であり、下線の部分は誤用である。)

表 5.12 から、形容動詞の連体修飾語の習得に関しては、中・上級学習者の誤答数の平均値に有意差は見られなかった。一方、名詞の連体修飾語の習得に関しては、中級学習者の誤答数の平均値が上級学習者の誤答数の平均より有意に高かった ( $F(1, 100)=8.16$ ,  $p < .01$ )。つまり、学習者の日本語能力の向上に従い、名詞の連体修飾語の習得が進んでいるように見えるが、その変化は形容動詞の連体修飾語の習得には見られなかった。そのため、形容動詞の連体修飾語の習得の場合、学習者は上級になっても誤用が依然として多く残る可能性が高いと考えられる。

### 5.7.2 品詞別の誤答数の平均値

本節では、中・上級学習者を対象にした形容動詞と名詞の連体修飾語における各選択肢の誤答数の平均値の有意差を測定する。

#### 5.7.2.1 形容動詞の連体修飾句における誤用

まず、形容動詞の連体修飾句に対する誤答数を被験者の日本語能力レベル別人数で割り、平均点を算出した。形容動詞の連体修飾句については、連体形「な」を選択すべきところに、「の」や「な・の」を選択した場合を誤答とした。中・上級学習者の形容動詞の連体修飾句における連体形「の」、「な・の」の誤答数の平均値を示すと表 5.13 になる。

[表 5.13 : 形容動詞の連体修飾句における誤答数の平均値]

条件	誤用例	中級学習者 (n : 49)		上級学習者 (n : 53)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
「の」	豪華のホテル	4.61	2.99	4.28	2.73
「な・の」	旺盛な・の好奇心	1.57	0.84	1.86	1.23

(注 : 誤答数の総和は 20 点である)

前節では、形容動詞の連体修飾句における連体形の選択について、学習者の日本語能力のレベルの相違では、誤答数の平均値に有意差が見られないことを見た。しかし、表 5.13 によれば、選択肢の種類による誤答数の平均値については、「の」の誤用が「な・の」の混用より有意に高く見られた ( $p < .001$ )。

つまり、「～な」形容動詞の連体修飾句における連体形の選択に、中級学習者と上級学習者に誤答平均点の有意差は見られなかったが、一方で、選択肢の種類（「の」、「な・の」）による誤答平均点の有意差は明らかに高かったということである。

#### 5.7.2.2 抽象名詞の連体修飾句における誤用

本節では、中・上級学習者を対象にした抽象名詞の連体修飾句における各選択肢（「な」、「な・の」）の誤答数の平均値の有意差を考察する。

まず、抽象名詞の連体修飾句に対する誤答数を被験者の日本語能力レベル別人数で割り、平均点を算出した。抽象名詞の連体修飾句に、「の」を選択すべきところに、「の」や「な・の」を選択した場合を誤答とした。中・上級学習者の抽象名詞の連体修飾句における連体形「な」、「な・の」の誤答数の平均値を示すと表 5.14 になる。

[表 5.14 : 抽象名詞の連体修飾句における誤答数の平均値]

条件	誤用例	中級学習者 (n : 49)		上級学習者 (n : 53)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
「な」	無償な愛	6.98	4.57	4.04	2.74
「な・の」	絶好な・のチャンス	1.58	1.06	1.73	1.36

(注 : 誤答数の総和は 20 点である)

その結果、抽象名詞の連体修飾句における連体形「な」の選択による誤用においては、中級学習者の誤答数の平均値は上級学習者のそれよりも有意に高いことが明らかとなった ( $F(1, 100) = 10.172, p < .005$ )。また、「な」の誤用は、「な・の」の混用よりも有意に高いことも分かる ( $F(1, 100) = 110.63, p < .001$ )。さらに、2 要因 (被験者の日本語能力レベルと選択肢の種類) による交互作用に有意差を検出した ( $F(1, 100) = 15.7, p < .001$ )。つまり、学習者の日本語能力レベルが上がるにつれ、抽象名詞の連体修飾句における連体形「な」の選択による誤答数が有意に少なくなる傾向が見られた。

## 5.8 誤用ごとの要因の分析

形容動詞と抽象名詞の連体修飾句の習得過程で生じた誤用は主に「の」の誤用、「な」・「の」の混用及び連体形の脱落の 3 種類である。しかし、この 3 種類の誤用において、どのような形容動詞が母語転移からの影響を最も受けやすいのかを示す研究はまだ行われていないようである。そのため、本節では、「形容動詞の連体修飾を習得する過程で、どのような形容動詞が母語転移からの影響を最も受けやすいのか」ということを研究課題にして、形容動詞の習得に関わる誤用の要因の分析を進める。

### 5.8.1 「の」か「な」の誤用

形容動詞の連体修飾句において修飾語と被修飾語の間に連体形「な」を選択せず、「の」を選んでしまった誤用の要因については以下の 2 つの可能性が考えられるが、それは龔 (2012) の主張と一致している。

一つは、連体修飾句の習得研究が一般に指摘しているように、中国語の「的」の干渉に因るという説である。中国語から見ると、日本語の漢語系形容動詞は主に「二音節形容詞」

であり、漢語語幹が二文字以上の場合には、「多音節形容詞」となる。一方、守屋(1995)は、中国語では通常単音節形容詞の場合だけ、修飾語と被修飾語の間の「的」が省略できると述べている。すなわち、中国語では単音節形容詞は「的」が省略できないものが少ないが、二音節形容詞は「的」が省略できないものがほとんどであるということである。この守屋の説に従うならば、学習者は日本語の形容動詞の連体修飾句を習得する際、中国語の「的」の干渉で、「の」を過剰に使用した結果、連体形「な」の代わりに、「の」を誤って使う可能性があると考えられる。

例 34:

語彙	日本語	中国語	負の転移	誤用
有力	有力 <u>な</u> 証拠	有力 <u>的</u> 证据	「的」→「の」	有力 <u>の</u> 証拠

もう一つは漢語系形容動詞の習得に関する諸研究が示しているように、母語である漢語の干渉に基づく、形容動詞と抽象名詞の品詞性の区別の困難さによる誤用である(豊田1980, 曲1995, 譚2011, 覃2013など)。日本語における漢語系形容動詞の語幹はすべて漢語を組み合わせたものなので、学習者は母語の漢語の干渉から、形容動詞と抽象名詞の区別が困難になる可能性がある。

一方、日本語の形容動詞は日本語教育では「ナ形容詞」という名称で指導されており、劉(1997:36)によれば、形容動詞は通常「形容詞の下位分類」として扱われていると指摘されている。これらのことを考慮するならば、少なくとも学習者にとって、形容動詞の品詞性は抽象名詞より形容詞に近いと認識されていると考えられる。そのため、日本語の漢語系形容動詞の語幹と中国語の形容詞の語形が同じ場合には、学習者は品詞性も同じと推測すると思われる。つまり、日本語の漢語系形容動詞の語幹が中国語の形容詞と同形である場合、品詞の区別による誤用の可能性は低いと予想されるということである。一方、「的」の干渉による「の」の過剰生成の可能性が高いのは、中国語の二音節形容詞の連体修飾句における統語的特徴の影響を受けたものとも言えよう。

例 35:

語彙	日本語として の品詞性	中国語として の品詞性	正の転移	正用
曖昧	形容動詞(ナ形容詞)	形容詞	品詞性の一致	曖昧 <u>な</u> 返事



それに対して、抽象名詞の連体修飾句において修飾語と被修飾語の間に連体形「の」の代わりに「な」を選択する誤用がある。詳しくは表 5.15 を参照されたい。

[表 5.15：日中同形語における品詞のズレによる連体形の誤用]

語彙	日本語の品詞性	中国語の品詞性	負の転移	誤用例
唯一	名詞	形容詞	品詞性のズレ	* 唯一 <u>な</u> 要求
応急	名詞	形容詞	品詞性のズレ	* 応急 <u>な</u> 処置
未知	名詞	形容詞	品詞性のズレ	* 未知 <u>な</u> 分野

羅(2005)は、日本語で修飾機能を持つ抽象名詞が中国語と同形である場合、中国語では通常形容詞として扱われると指摘している。それに従うならば、今回の調査に用いた修飾機能を持つ抽象名詞は中国語と同形であるため、品詞のズレが生じる可能性があると思われる。つまり、中国語を母語とする学習者が日本語の名詞連体修飾句を習得する際には、日中同形語の干渉により名詞と形容動詞の品詞上の区別が困難となり、連体形「の」を「な」にする誤用が起きやすいということである。

### 5.8.2 「な・の」の混用

このタイプの誤用は、形容動詞と抽象名詞の両方の連体修飾句に現れたが、その誤答数の平均値は非常に低かった(表 5.12 及び表 5.13 を参照)。「な・の」の混用が生じた要因は、前節で述べたように、やはり日中同形語の干渉により、抽象名詞と形容動詞の品詞上の区別が困難であったためと考えられる。すなわち、学習者は修飾語が抽象名詞であるか形容動詞であるかを明確に区別できなかつたため、連体形「な」と「の」両方とも選択してしまつたのである。また、この種の誤用は形容動詞の連体修飾句だけではなく、名詞の連体修飾句にもなり得ると考えられる。

### 5.8.3 連体形の脱落現象

中国語を母語とする日本語学習者を対象とした語彙の習得調査に関わる誤用分析において、先行研究で最も多く指摘されたのは母語の干渉である(野呂 1994 ; 張 2002 ; 龔 2012 など)。本節では、漢語系形容動詞の習得における連体形の脱落現象を中心に、中国語から

の負の転移を確認していく。(この調査は中国と日本で2回行った。初回の調査は中国の西安外国語大学で、第四章で述べた調査と同時に行ったものである。)

### 5.8.3.1 調査の手順と方法

張(2002)は中国語からの母語転移に関して、以下のように述べている。

留学生と話していて「あの背の高いの人は私のアメリカ友達です」のような言い方を耳にすることがあります。この留学生は「背の高い人」と言いたいのを形容詞と名詞の間に余計に「の」を一つ入れ、一方「アメリカ人の友達」と言うべきところを「アメリカ友達」と言って「の」を抜かしてしまったのです。このように「の」を使うべきところでそれを使わず、使ってはいけないところでそれを使ってしまうのは中国語の「的」の悪影響です。

張(2002 : 36)

この誤用例から分かるのは、中国語を母語とする日本語学習者は日本語の連体修飾句を習得する過程で、母語「的」の干渉により、日本語の「の」をつけてはいけないところに「の」をつけてしまったり、逆に、日本語の「の」が必要なところに「の」をつけなかったりということが見られるということである。つまり、「の」の誤用は過剰使用のみならず、脱落も同時に見られる可能性があるということである。

また、龔(2012 : 209)は初級から上級まで80人の中国語を母語とする日本語学習者を対象に、連体形「の」の使用状況に関する文法性判断テストを行っている。その結果、学習者が上級になっても連体形の脱落現象は残っていたと指摘し、中でも、「沖縄の音楽」を「沖縄音楽」<sup>45</sup>にした誤用率が最も高かったと述べている。龔はその要因として、中国語では「沖縄的音楽」より「沖縄音楽」の方がより自然であることを挙げ、結局、「の」の脱落は母語の干渉により生じたとしている。

本研究でいう連体形の脱落とは、学習者が日本語の形容動詞の連体修飾句を習得する過程で、母語の中国語の干渉で連体形「な」を脱落させる誤用を指す。この誤用を調査する

---

<sup>45</sup> 「琉球音楽」とふつうに言うが、「沖縄音楽」も日本語として不自然ではないと感じる日本語母語話者もいる。

ため、第四章の表4.5で挙げた40個の調査対象となる形容動詞において、連体形「な」抜き連体修飾表現を、中国語を母語とする日本語学習者の意味理解の度合を基準にして、3つのグループに分類した。この意味理解の度合は、中国語との語形上の対応の程度によって決まる。連体形の脱落現象について本研究が調査対象とする表現は、表5.16のとおりである。また、この調査は第四章における連体形「な」と「の」の文法性判断テストと同時に行われた。具体的には付録九を参照されたい。

[表 5.16 : 中国語母語話者の意味理解度による「な」抜き連体修飾表現の分類]

項目	意味的に理解可能	意味的に推測可能	意味的に推測不可能
表現	曖昧関係、平凡人生、 幸運女神、安全場所、 幸福人生、孤独生活、 重要地域、微妙関係、 重大過失、巨大影響、 対等関係、無礼態度、 単調生活、詳細内容、	不利立場、清潔服装、 公平裁判、不幸生活、 安泰国、広大土地、 健康身体、顕著業績、 巧妙方法、柔軟態度、 急激変化、危険事、 容易事	立派業績、大切書類、 粗末食事、好調出足、 厳重監視、深刻表情、 単純機械、本気人、 無事顔、無知人間、 呑気人、不便家、 強引方法
合計	14 問	13 問	13 問

表 5.16 のうち、まず、中国語と語形上完全に一致している表現は「幸運女神」、「曖昧関係」、「巨大影響」などである。これらは、日本語ではそのまま用いられることはないが、中国語では基本的に四文字言葉として使用され、語形どおりの意味を表す表現のため十分理解することが可能である。次に、「安泰国」、「健康身体」、「巧妙方法」などは、中国語としてはそのまま使えないが、「国家安泰」、「身体健康」、「健康的身体」、「巧妙的方法」のように語順を倒置したり、類義語を置換したり、修飾語と被修飾語の間に助詞「的」を入れたりすることによって、意味の推測が可能な表現である。さらに、「呑気人」、「大切書類」、「粗末食事」などは中国語にはない表現で、意味の推測も難しいものである。

### 5.8.3.2 結果と考察

中国語母語話者、ネパール語母語話者、マレー語母語話者の日本語学習者を対象に、連体形「な」の脱落に関する誤用を調査した結果、正答数の平均値と標準偏差は表 5.17 のようになった。

[表 5.17 : 連体形「な」の脱落に関する正答数の平均値]

条 件	(中①)		(中②)		(ネ)		(マ)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
意味的に理解可能	2.57	1.90	2.14	1.75	4.80	1.52	4.32	1.81
意味的に推測可能	4.10	1.66	4.59	1.43	3.23	1.29	4.76	1.46
意味的に推測不可能	5.09	1.45	5.26	1.26	4.14	1.31	4.02	1.65

(注：条件ごとに満点は10点である。中①＝調査①の中国語母語話者；中②＝調査②の中国語母語話者；(ネ)＝ネパール語母語話者；(マ)＝マレー語母語話者)

表 5.17 によると、中国語母語話者(中①及び中②)の場合、彼らの意味理解の度合によって分類した3つのグループにおいて、正答数の平均値の差が有意である( $F(2, 37) = 8.033$ ,  $p < .01$ ;  $F(2, 37) = 7.594$ ,  $p < .01$ )。一方、ネパール語母語話者とマレー語母語話者の日本語学習者では、正答数の平均値の差が有意ではなかった( $F(2, 37) = 1.829$ ,  $n. s.$ )。条件ごとに正答数の平均値の変化を観察すると、中国語にない表現の正答数の平均値が最も高く、一方、中国語と語形が一致し、且つ意味も通じている表現の正答数の平均値は一番低くなっている。この結果から、中国語を母語とする日本語学習者は形容動詞の連体修飾句を習得する際、母語からの干渉を受けている可能性が高いと考えられる。

Tukey b での多重比較によると、表 5.17 における日本語学習者グループ間に有意差が検出され、また、3つの条件において、「意味的に理解可能な表現」と「意味的に推測不可能な表現」の間に正答数の平均値の有意差が見られた。つまり、中国語と同形の表現である場合、母語からの干渉が最も強くなり、連体形の脱落の誤用になる可能性が最も高くなると考えられる。それに対して、意味的に推測不可能な表現の場合、母語からの干渉が最も弱くなるため、連体形の脱落による誤用になる可能性も一番低くなると考えられる。この結果は、中国語を母語とする日本語学習者に対して中国語と同形である形容動詞の連体修

飾句の指導する際には、連体形の接続と当該表現に対する意味理解の関連性を強調した方がより効果的になることを示唆するものである。

## 5.9 第五章のまとめ

以上、形容動詞と抽象名詞の連体修飾句における連体形の誤用について、被験者の日本語能力レベルと選択肢の種類による誤答数の平均値を比較した。その結果、中・上級学習者を対象とした形容動詞の連体修飾句における連体形の選択での誤答数の平均値は、有意差が見られなかったこと、また、「の」の選択での誤答数の平均値は「な・の」の誤答数の平均より多く見られたことが明らかになった。

一方、抽象名詞の連体修飾句における連体形の選択での誤答数の平均値は、上級学習者と中級学習者との間に高い有意差が見られた。また、「な」の選択における誤答数の平均値は「な・の」の誤答数の平均よりも高いこと、さらに、「な」の選択における中級学習者の誤答数の平均値が上級学習者の誤答数の平均より有意に高いことが確認された。

つまり、形容動詞と抽象名詞の連体修飾句における「の」あるいは「な」の選択における誤答数の平均値は混用の誤答数の平均値よりも有意に高いということになる。この結果は羅（2005：75）による「形容動詞にも『の』の選択が多くみられ、名詞にも『な』の選択が多くみられた。同一語に対して、学習者の『な・の』両方の選択が少なかった」という結果と一致したものと言える。また、抽象名詞の連体修飾句について、中級学習者の「な」の選択における誤答数の平均値は上級学習者の誤答数のそれより有意に高いこと、さらに、学習者のレベルが上昇しても、形容動詞の連体修飾句の習得は、抽象名詞の連体修飾句の習得ほど進んでいないことが明らかになった(毛 2013a)。最後に、中国語と同形の表現である場合、母語からの干渉が最も強くなるため、連体形の脱落による誤用になる可能性も最も高くなると考えられる。このことは、中国語を母語とする日本語学習者に対して中国語と同形である形容動詞の連体修飾句の指導する際には、多くの用例を用いながら、連体形「な」あるいは「の」の接続と当該表現に対する意味理解の関連性を強調した方がより効果的であることを示唆するものである。

## 第六章 漢語系形容動詞の習得3：そのほかの誤用要因の可能性

### はじめに

本研究が行った格助詞との共起、連体形「な」と「の」の文法性判断テストの得点に影響を与えた要因には、母語からの転移以外に、形容動詞の日常的な出現頻度、学習者要因、日本語教師による指導法や語彙の習得環境など、様々なものが考えられる。そこで本章では、語彙調査から得られた結果の信頼性と妥当性を確認するため、上記の要因がテストの得点に影響したか否かを検証する。

### 6.1 形容動詞の出現頻度による影響の可能性

形容動詞の習得を調査する際、語彙の出現頻度は、その結果に影響を及ぼすひとつの要因であると考えられる。そこで、本研究は、今回の調査対象語彙の日常的な出現頻度が調査結果に何らかの影響を与えたのか否かを確かめるため、『分類語彙表』（1964）に記載された調査対象語彙の出現頻度を変動要因にし、各テストの正答数の平均値との相関を調べた。

[表 6.1：調査対象となる形容動詞の出現頻度]

1. 立派 (.0447)	<b>2. 大切</b> (.2180)	3. 柔軟 (.0311)	4. 広大 (.0081)	5. 曖昧 (.0163)	<b>6. 粗末</b> (.0014)	7. 単純 (.0054)	8. <b>嚴重</b> (.0027)
9. 顯著 (.0921)	10. 急激 (.0190)	11. 巨大 (.0352)	12. 微妙 (.0460)	13. 深刻 (.0257)	14. 巧妙 (.0068)	15. 対等 (.0081)	16. <b>無礼</b> (.0014)
17. 清潔 (.0311)	<b>18. 健康</b> (.2045)	19. 単調 (.0108)	20. 幸福 (.0271)	21. 不利 (.0135)	22. 不幸 (.0149)	<b>23. 安全</b> (.1273)	24. 好調 (.0352)
25. 公平 (.0068)	26. 孤独 (.0176)	27. <b>安泰</b> (.0027)	28. 無知 (.0041)	29. 平凡 (.0122)	30. 幸運 (.0311)	31. 強引 (.0054)	32. 無事 (.0230)
33. 容易 (.0203)	34. 危険 (.0515)	35. 重大 (.0190)	36. 詳細 (.0786)	37. 呑気 (.0095)	38. 単調 (.0108)	39. 有望 (.0232)	40. 本気 (.0163)

(注:表 6.1 に挙げているデータは本研究が調査対象とした語彙とそれが現代雑誌 90 種の語彙調査に

において出現した割合である。出現率の単位はパーミル(‰)である。すなわち1000語につき当該語彙が出現する割合である。)

表 6.1 の形容動詞の出現頻度には、語彙ごとに相違が見られる。その中でも、「大切、健康、安全」の出現頻度は0.1より高いため、特に、高く(太字表記)、一方、「粗末、嚴重、無礼、安泰」の出現頻度は0.003より低いため、特に、低くかった(影表記)。これらの調査対象となる形容動詞の出現頻度が正答数の平均値に影響を及ぼしているか否かを確認するため、各テストにおける調査対象語彙の正答数の平均値と出現頻度との相関を分析した。その詳細は表 6.2 のようになる。

[表 6.2 : 各テストにおける正答数の平均値と出現頻度との相関]

テスト	誤用例	相関係数 $r$	有意確率 $p < .05$	結果
格助詞との共起	曖昧を変える・容易を見せる	.094	.566	<i>n. s.</i>
「な」の文法性判断	立派の業績・深刻の表情	-.178	.273	<i>n. s.</i>
「の」の文法性判断	安泰の国・幸運の人	.048	.767	<i>n. s.</i>
連体形の脱落	単調生活・健康身体	.350	.058	<i>n. s.</i>

その結果、各テストの正答数の平均値と当該語彙の出現頻度の相関について、いずれも有意ではなかった。つまり、調査対象語彙の出現頻度は今回の調査結果に影響を及ぼしていないということである。

## 6.2 学習者要因と日本語指導による影響の可能性

形容動詞の習得に影響を与えるものとしては、母語転移、調査対象語彙の出現頻度のほかにも、学習適性、学習の動機付けなど学習者に関わる要因、また、日本語教師による指導に関わる要因が考えられる。そこで、本研究は、中国の西安外国語大学で76名の中国語を母語とする日本語学習者を対象に実施した語彙調査が終了後、形容動詞の習得について、5段階評価の形式でアンケート調査をした(中国語バージョンは付録六を参照されたい)。

[表 6.3 : 形容動詞の習得及び指導に関わる 5 段階評価の内容]

問 題 \ 段 階	①	②	③	④	⑤
1. アンケート調査 1 における格助詞との共起による表現の正誤を明確に判断できるか。	非常に明確に判断できる	判断できる	どちらとも言えない	あまり判断できない	全く判断できない
2. 形容動詞と名詞の品詞性を明確に区分できるか。	非常に明確に区分できる	区分できる	どちらとも言えない	あまり区分できない	全く区分できない
3. アンケート調査 2 における連体形「な」と「の」の使用を明確に区分できるか。	非常に明確に区分できる	区分できる	どちらとも言えない	あまり区分できない	全く区分できない
4. 日本語の形容動詞の習得が難しいか。	非常に難しい	やや難しい	普通	簡単	非常に簡単である
5. 日本語の習得に興味があるか。	非常に興味がある	興味がある	普通	あまり興味がない	全く興味がない
6. 教室指導で、日本語教師は学習者に形容動詞と名詞の相違点を明示したことがあるか。	明確に明示したことがある	常に明示している	時々明示する	あまり明示していない	全く明示していない
7. 教室指導で、形容動詞の文法的特徴及び名詞との区別を明示する必要があるか。	非常に必要がある	必要がある	どちらとも言えない	あまり必要がない	全く必要がない

表 6.3 のうち、上から 5 番目までは、形容動詞学習の難易度や日本語学習に対する興味など、形容動詞の習得において学習者要因と見なされる質問である。一方、残りの 2 つは



形容動詞の習得における指導に関する質問である。被験者には、すべての質問に対して 5 段階中最も相応しいと思う段階を選ばせた。その結果は表 6.4 のとおりである。

[表 6.4 : 形容動詞の習得及び指導に関わる 5 段階評価の結果]

問 題 \ 段 階	①	②	③	④	⑤
1. 格助詞との共起表現に対する正誤判断	2 (2.63%)	4 (5.26%)	28 (36.85%)	42 (55.26%)	0 (0.00%)
2. 形容動詞と名詞の区分	2 (2.63%)	7 (9.21%)	24 (31.58%)	42 (55.26%)	1 (1.32%)
3. 「な」と「の」の区分	1 (1.32%)	13 (17.11%)	23 (30.25%)	39 (51.32%)	0 (0.00%)
4. 形容動詞習得の難易度	0 (0.00%)	43 (56.58%)	23 (30.26%)	8 (10.53%)	2 (2.63%)
5. 日本語習得への興味	24 (31.58%)	41 (53.95%)	9 (11.84%)	2 (2.63%)	0 (0.00%)
6. 日本語教師による指導	1 (1.32%)	17 (22.37%)	12 (15.78%)	43 (56.58%)	3 (3.95%)
7. 文法指導の必要性	17 (22.37%)	46 (60.53%)	7 (9.21%)	6 (7.89%)	0 (0.00%)

(注：括弧の中の数字は当該評価を選んだ人数が調査対象者全員に占める比率である。また、各問題に最も多く評価された段階が太線で囲まれている。影部分は分析に用いられるデータである。)

表 6.4 から、76 名の被験者による評価の比率から見ると、8 割以上 (85.53%) の学習者は日本語学習へ強く興味を持っているが、過半数 (56.58%) の学習者は形容動詞と名詞の品詞性を区分できず、形容動詞の習得を難しく感じている。具体的には、51.32% の学習者は連体形修飾句に「な」と「の」の使用を区別できず、55.26% の学習者は格助詞との共起によ

る文法適性が明確に判断できないという結果だった。また、形容動詞と名詞の区別による文法指導については、6割(60.53%)の学習者は日本語教師から授業中両者の区別をはっきり指導されていないと答えた。さらに、8割以上(82.90%)の被験者は文法指導の必要性があると答えた。

次に、これらの要因のうち、どれが実際の調査結果に影響を及ぼしているのかを確かめるため、上述の5段階評価形式でアンケート調査に参加した76名の被験者が7つの問題に対して、選んだ段階の番号を点数化した上で(①～⑤の段階はそれぞれ1～5点)、文法性判断テストにおける各被験者から得られた点数との相関を調べた。

[表 6.5 : 文法性判断テストの点数と学習者要因及び指導法との相関]

要因		テストの点数		格助詞との共起		「な」		「の」		結果
		<i>r</i>	<i>p</i>	<i>r</i>	<i>p</i>	<i>r</i>	<i>p</i>			
学習者 要因	1. 格助詞との共起 表現に対する正 誤判断	.090	.441	.144	.216	.195	.091	<i>n. s.</i>		
	2. 形動と名詞 の区分	.028	.813	.379**	.001	.209	.070	「な」が有意		
	3. 「な」と「の」 の区分	.020	.861	.345**	.002	.166	.152	「な」が有意		
	4. 形容動詞習得 の難易度	-.158	.173	-.146	.207	-.084	.472	<i>n. s.</i>		
	5. 日本語習得 への興味	.056	.631	.157	.176	.108	.353	<i>n. s.</i>		
指導法	6. 日本語教師に よる指導	.017	.887	.295**	.010	.110	.343	「な」が有意		
	7. 文法指導の 必要性	.039	.740	.032	.787	.171	.140	<i>n. s.</i>		

(注： *r* = 相関係数； *p* = 有意確率； \*\*相関水準は1%で有意)

表 6.5 において、1%有意水準で、「形容動詞と名詞の品詞性区分」、「連体形『な』と『の』

の使用上の区別」及び「日本語教師による文法指導」の3つの要因は連体形「な」の文法性判断テストの成績と正の相関が見られた。それに対して、格助詞との共起適性判断テストと連体形「の」文法性判断テストという名詞が示す文法的特徴のテストにおける成績はいずれも上述の要因と有意な相関が見られなかった。また、学習者要因と教師による文法指導といった要因は連体形「な」の文法性判断テストの成績のみと有意な相関が見られたことから、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する過程、及び、日本語教師は形容動詞を指導する過程で、連体形「な」の使用が形容動詞の最も顕著な特徴であることを重視しているが、品詞上、形容動詞が持つ名詞との関連性はそれほど意識されていないと推測される。したがって、学習者にとっては、上級になっても、形容動詞の習得は依然として難しく感じられ、名詞との区分に関わる詳しい文法指導が求められる。

### 6.3 習得環境からの影響の可能性

本節では、習得環境が形容動詞の習得に与える影響について考察する。具体的には、中国の西安外国語大学で日本語を習得する学習者と日本で日本語を習得する学習者を対象に、同じ調査法で「格助詞との共起」、「連体形『な』の使用」及び「連体形『の』との共起」の3つのテストで得られた正答数の平均値と習得環境との関連性を一元分散分析にかけた。その結果は表 6.6 のようになる。

[表 6.6 : 習得環境の各テストに対する影響]

テスト	要因	平方和	自由度	F 値	有意水準	結果
格助詞 との共起	級間要因(格×「な」・「の」)	.366	1	.369	.566	<i>n. s.</i>
	級内要因(誤差)	5.941	6			
	全体	6.307				
連体形「な」 の使用	級間要因(「な」×格・「の」)	.667	1	6.108	.047	$p < .05$
	級内要因(誤差)	.832	6			
	全体	1.499				
連体形「の」 の使用	級間要因(「の」×格・「な」)	.013	1	.032	.864	<i>n. s.</i>
	級内要因(誤差)	2.405	6			
	全体	2.418				

表 6.6 から分かるように、「連体形『な』の使用」に関する文法性判断テストにおいてのみ正答数の平均値に有意差が見られるが、「格助詞及び『の』との共起」という名詞の文法規則に関わるテストでは正答数の平均値の差は有意ではない。このことから、母語である中国語の環境で日本語を習得する学習者は日本語環境で日本語を習得する学習者より、連体形「な」の使用に注目する傾向があることが分かる。この現象が現れる原因としては、文法性判断テストの成績と学習者要因及び指導法の相関で見たように、日本語教師による指導法が連体形「な」の使用に焦点を当てることと深く関係しているように思われる。

#### 6.4 第六章のまとめ

本章では、形容動詞の出現頻度、学習者要因及び指導法、習得環境といった、母語転移以外に形容動詞の習得に影響を与えると思われる要因の実際を分析した。その結果は以下のようにまとめられる。

まず、調査対象となる形容動詞の出現頻度は、今回の調査結果に対して影響は与えていなかった。次に、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する過程で、また、日本語教師は形容動詞を指導する際に、連体形「な」の使用が形容動詞の最も顕著な特徴であることを認識しているが、品詞上、形容動詞が名詞に対して持つ関連性はそれほど意識していないということが推測された。さらに、母語である中国語環境で日本語を習得する学習者は日本語環境で日本語を習得する学習者より、連体形「な」の使用に注目する傾向があることも分かった。以上の結果から、中国語を母語とする日本語学習者が日本語の形容動詞を習得する際、また、中国語を母語とする日本語教師が日本語の形容動詞を指導する際には、連体形「な」の使用に焦点を当てるばかりで、名詞との関連性には注意を払っていないと言えよう。このことは、中国語を母語とする日本語学習者が上級になっても、形容動詞と名詞を明確に区分できず、形容動詞の習得を依然として難しく感じることに関係するものである。中国語を母語とする日本語学習者に対する正しい形容動詞の指導には、特に、名詞との違いに焦点を当てるような指導方法が求められる所以である。

## 第七章 結 論

本研究は、形容動詞に関わる語彙研究、理論研究、習得研究の3つの部分で構成されたものであった。まず、語彙研究については、第一章で形容動詞に備わる特殊な品詞性を解明した。次に、理論研究については、第二章で形容動詞カテゴリーの内部構造に分析の視点を置き、形容動詞カテゴリーに典型性が備わる原因を説明するため、プロトタイプ理論を紹介した上で、プロトタイプ理論を補完するものとして動的文法理論を説明した。また、第三章では、語彙研究と理論研究を結合した上で、プロトタイプ理論と動的文法理論の観点から、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴及び統語的特徴を再解釈した。さらに、形容動詞の習得研究については、第四章で形容動詞の典型性による習得順序を解明した上で、第五章で母語転移の可能性、また、第六章で母語転移以外の誤用の要因の可能性を分析した。

### 7.1 総合的考察

第一章では、形容動詞という品詞の由来、品詞分類における位置づけ、語形上の変遷や他品詞との関連など、様々な角度から形容動詞の特徴を明らかにした。形容動詞の誕生は、指定辞「だ」の形成に強く関係しており、助動詞「だ」の成立が形容動詞を生んだことができる。また、連体形「な」の形成過程は助動詞「だ」の形成過程と同じく、空間概念に基づくメタファーによる拡張によって成立したものである。さらに、形容動詞は名詞が示す「もの概念」から形容詞が示す「性状概念」への意味変化を通し、抽象名詞から変化したものでもある。語形上の変遷や他品詞との関連という点については、品詞性の変遷による証拠を得ている。但し、典型性変化の程度は語彙ごとに差があったため、多くの形容動詞は名詞カテゴリーと明確な境界を持たず、辞書には「名・形動」と記載されることになった。つまり、形容動詞という品詞は、そもそも日本語固有のものではなく、長い年月及び様々な変化を経て、ようやく一品詞に至ったものであるが、名詞カテゴリーとの曖昧さは依然として残り、独立した品詞としての完全性が十分に確立されていないということである。この現象は形容動詞カテゴリーに典型性が備わることの根本的な原因になると考えられる。

続く第二章、第三章では、プロトタイプ理論の誕生、その特徴、言語学におけるその応用、同理論の発展及びその問題点を指摘した上で、認知言語学におけるプロトタイプ理論を補完するものとして動的文法理論を援用した。本研究がこの動的文法理論を援用したのは、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴と統語的特徴を十分解釈するには認知言語学のプロトタイプ理論だけでは不十分であったからで、本研究はプロトタイプ理論と動的文法理論を統合することによりその問題点を解決することができた。以下、それを具体的に示す。

意味的観点から見ると、形容動詞カテゴリーは、「性状概念」という典型性の変化に伴い抽象名詞カテゴリーに拡張したといえることができる。この点からすると、「名・形動」は形容動詞カテゴリーの非典型的な語彙メンバーということになる。また、形容動詞カテゴリーの語彙メンバーの意味的特徴が同質ではなく、「性状概念」の表示に関して語彙ごとにそれぞれ差が見られるのも以上の結果と考えることができる。

一方、統語的観点からは、「名・形動」が抽象名詞カテゴリーが示す文法的特徴の典型性の変化とともに形容動詞カテゴリーに至った。このとき、典型的な形容動詞が示す統語的特徴は非典型的な抽象名詞のそれと同一であったため、形容動詞は抽象名詞カテゴリーの非典型的な語彙メンバーになることができた。これは、形容動詞の通時的な変遷からも分かるように、形容動詞の多くは抽象名詞から変化してきたことを意味する。形容動詞が統語的に抽象名詞と類似する点が多いのはそのためである。

以上のことをまとめるならば、意味的観点からの典型性の変化では、形容動詞カテゴリーから抽象名詞カテゴリーへの拡張が、また、統語的観点からの典型性の変化では、抽象名詞カテゴリーから形容動詞カテゴリーへの拡張が行われたということであり、形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーの拡張の方向は、その典型性の変化の観点の違いにより逆になるということである。さらに、この正反対の典型性の拡張方向により、「名・形動」は形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴の非典型的メンバーから抽象名詞カテゴリーが示す統語的特徴の典型的メンバーに逆転するが、形容動詞カテゴリー自体の典型性はこの「名・形動」の典型性の逆転によってもたらされたと考えられる。

さらに、第四章から第六章では、中国語を母語とする日本語学習者における漢語系形容動詞の習得についての調査・分析について述べた。

まず、日本語の漢語系形容動詞の習得については、その母語の如何を問わず、いずれの学習者においても、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性はその習得に影響

を及ぼすことが分かった。また、いずれの学習者においても連体形「な」の文法性判断テストの正答数の平均値が最も高いことから「な」の使用が基本ではあるが、形容動詞の語彙メンバーは、その形容動詞性が弱化し名詞性が強くなるにつれ、名詞の用法の影響を受けることになるため、学習者の習得は典型的な形容動詞から非典型的な形容動詞へ進んでいくと推測された。さらに、中国語を母語とする日本語学習者は、漢語系形容動詞を習得する際に、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者より強く母語転移の影響を受けるとも推測された。具体的には、「格助詞との共起」による品詞性の判断テストでは、日中同形語で品詞性が一致している場合、中国語の正の転移で正答数の平均値が中国語以外の言語を母語とする日本語学習者より高く見られたが、日中同形語で品詞性にズレが生じる場合には、中国語の負の転移で正答数の平均値が低くなった。また、「連体形『の』との共起」による文法性判断テストでも、中国語の「的」の干渉から連体形「な」の代わりに「の」が使用されたことが確認された。以上のことから、中国語を母語とする日本語学習者は、漢語系形容動詞を習得する際に強く母語である中国語の干渉を受けると推測される。

漢字系形容動詞の習得については、序章で設定した6つの課題に従い、第一章から第六章で述べた本研究の分析結果を基に、以下のようにまとめられる。

#### 課題① 形容動詞カテゴリーに典型性が備わる原因

本研究の第一の課題は、なぜ形容動詞カテゴリーに典型性が備わるのかという問いを解明することであった。この研究課題は本研究を始めるきっかけであったと同時に、形容動詞カテゴリーが形成されるメカニズムの解明を意味するものでもあった。第一章では、形容動詞という品詞と名詞との特殊な関係に注目し、形容動詞の由来、漢語語幹の特徴、連体形「な」の形成など、様々な角度で分析した。その結果、形容動詞という品詞は古代からの日本語固有のものではなく、長い年月及び様々な変化を経て、抽象名詞から変化したものであることが分かった。しかし、変化の程度は語彙ごとに差があるため、近代になっても、形容動詞カテゴリーは名詞カテゴリーと曖昧な境界を持っている。この現象は、形容動詞カテゴリーに典型性が備わる根本的な原因になると考えられる。また、第二章と第三章では、プロトタイプ理論に動的文法理論の観点を援用した上で、形容動詞カテゴリーの内部構造に焦点を当てた。分析の結果によると、形容動詞カテゴリーは名詞カテゴリーの下位分類である抽象名詞カテゴリーとの境界線が明確でないことを解明した。さらに、形容動詞カテゴリーに典型性が備わるのは、辞書に「名・形動」と記載されている語彙の

存在に深く関係していることが分かった。

## 課題② 漢語系形容動詞の習得順序

本研究の第二の課題は、形容動詞カテゴリーに備わる典型性が語彙メンバーの習得順序にどのように影響するのかを分析することであった。この研究課題が本研究の主な課題であったため、第四章では、文法性判断テストを用いて、中国語、ネパール語、マレー語を母語とする日本語学習者を対象に2回調査を実施し、形容動詞カテゴリーに備わる典型性と語彙メンバーの習得順序の関係を明らかにした。その結果、学習者の母語に関わらず、形容動詞の習得は、語彙メンバーの典型性の変化に影響されることが分かった。具体的には、いずれの学習者においても連体形「な」の文法性判断テストの正答数の平均値が最も高いことから、学習者は「な」の使用が基本であることを意識している。しかし、形容動詞語彙メンバーの形容動詞性の弱化の推移によって、名詞性が強くなるにつれ、学習者は名詞の統語的特徴の影響を受けることになる。それゆえ、形容動詞の習得は典型的なものから非典型的なものへ進んでいくと推測された。この習得順序は従来のプロトタイプ理論に示された習得順序と一致している。さらに、Tukey bを用いた多重比較の結果、「一、二」段階>「二、三」段階>「三、四」段階という習得順序が捉えられた。この結果から、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性によって分けられた段階間は明確な境界線を持たず、互いに曖昧で連続しているものであることが明らかになった。この特徴も第二章で言及した従来のプロトタイプ理論で指摘されたプロトタイプカテゴリーの特徴と一致している。これらの調査結果は、形容動詞カテゴリーに典型性が備わっていることを示す新たな証拠である。

## 課題③ 漢語系形容動詞の習得状況

第三の研究課題「漢語系形容動詞の習得状況」について、本研究は第四章で、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、形容動詞と抽象名詞の連体修飾句に関する連体形を選択テストを用いて調査した。

その結果、抽象名詞の連体修飾句について、中級学習者の「な」の選択における誤答数の平均値は上級学習者の誤答数の平均より有意に高いが、学習者のレベルの上昇との関係において、形容動詞の連体修飾句の習得は、名詞の連体修飾句の習得ほど進んでいないことが明らかになった。つまり、中国語を母語とする日本語学習者が形容動詞を習得する際



には、上級になっても誤用が依然として多く残るということである。この結果は、中国語を母語とする日本語学習者の漢語系形容動詞の習得における母語転移の可能性を示唆するものである。

#### 課題④ 母語転移の可能性

第四の研究課題は中国語を母語とする日本語学習者が漢語系形容動詞を習得する過程で、母語転移を受ける可能性を確かめることであった。第五章では、中国語、ネパール語、マレー語の3カ国語母語日本語学習者を対象に、文法性判断テストをした結果、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する際、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者より母語転移からの影響を強く受けていることが明らかになった。具体的には、「格助詞との共起」による品詞性判断テストでは、日中同形語で品詞性が一致している場合、中国語の正の転移で正答数の平均値が他言語母語日本語学習者より高く見られた。一方、日中同形語で品詞性にズレが生じる場合には、中国語の負の転移で正答数の平均値が低くなった。また、「連体形『の』との共起」による文法性判断テストでも、中国語の「的」の干渉から連体形「な」の代わりに「の」が使用されたことが確認された。

以上のことから、中国語を母語とする日本語学習者は、漢語系形容動詞を習得する際に強く母語である中国語の干渉を受けると結論づけられる。

#### 課題⑤ 誤用の種類及びその要因

第五の研究課題は、中国語を母語とする日本語学習者が形容動詞を習得する過程で産出された誤用の種類及びその誤用の要因を分析することであった。第五章での分析によると、まず、連体形「な」を「の」としてしまう誤用では、日本語の漢語系形容動詞の語幹が中国語の形容詞と同形である場合、中国語の二音節形容詞の連体修飾句における文法規則の影響を受け、「的」の干渉による「の」の過剰生成の可能性が高い。また、「な・の」の混用が生じた要因についても同様に、日中同形語の干渉が考えられる。さらに、連体形「な」の脱落による誤用も、次に示すように、同形の中国語からの干渉を強く受けたものと思われる。すなわち、当該語彙が中国語と同形の場合には、中国語からの負の転移が最も強くなり、それが連体形の脱落に繋がる。一方、当該語彙が中国語にない場合には、中国語からの負の転移は最も弱くなるため、連体形の脱落の誤用は生じにくくなるということである。これらの結果から、中国語を母語とする日本語学習者が漢語系形容動詞を習得する過

程において、日中同形語である形容動詞は母語からの負の転移の影響を最も強く受け誤用が生じやすい、ということができる。

#### 課題⑥ そのほかの誤用要因

調査結果の妥当性と信頼性を求めるため、第六章では、母語からの転移以外に、形容動詞の出現頻度、学習者要因、日本語教師による指導法や語彙の習得環境など、テストの得点に影響を与える様々な要因の可能性を確かめた。

調査対象となる語彙の出現頻度は今回の結果には影響を及ぼしていなかったが、学習者要因と日本語教師による文法指導といった要因は、連体形「な」の文法性判断テストの正答数の平均値のみと有意な相関が見られたことから、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する過程で、また、日本語教師は形容動詞を指導する際に、連体形「な」の使用が形容動詞の最も顕著な特徴であることを重視してはいるものの、品詞上の形容動詞と名詞との関連性をあまり認識していないことが推測できた。このことは、中国語を母語とする日本語学習が上級になっても形容動詞と名詞を明確に区分できず、形容動詞の習得を依然として難しく感じることに関係するものである。したがって、中国語を母語とする日本語学習者に対する正しい形容動詞の指導には、特に、名詞との違いに焦点を当てるといったような指導方法が求められる。

以上の課題①～⑥で得られた結果から導かれる結論は、次のとおりである。

- ① 漢語系形容動詞の習得過程で、学習者はその母語の如何を問わず、典型的な語彙から非典型的な語彙へという順序で習得していくことから、形容動詞の典型性が習得順序に影響を及ぼすことが明らかになった。また、本研究は形容動詞をその典型性によって第一段階から第四段階に分けたが、学習者の「一、二」段階>「二、三」段階>「三、四」段階という習得順序は、形容動詞カテゴリーに備わる典型性による段階分けの境界線が互いに曖昧で連続的なものであることを支持するものである。
- ② 中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する際、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者より母語転移の影響を強く受けている傾向が見られた。その結果、中国語を母語とする日本語学習者には上級になっても形容動詞の誤用が依

然として多く残る。また、語彙の品詞性判断においては、日中同形語で品詞性が一致する場合には母語の正の転移が見られるが、日中同形語で品詞性にズレが生じる場合には母語の負の転移が見られる。さらに、形容動詞の習得過程で現れた主な3種類の誤用における要因の分析でも、日中同形語である漢語系形容動詞の習得は母語からの干渉の影響を最も強く受け、誤用が生じやすいことが明らかになった。つまり、中国語を母語とする日本語学習者にとって、日中同形語である漢語系形容動詞の習得は、母語の強い影響を受け、困難になるということである。

- ③ 母語である中国語環境で漢語系形容動詞を習得及び指導する際に、中国語を母語とする日本語学習者及び日本語教師は連体形「な」の使用のみに注目し、品詞上の形容動詞と名詞との関連性を重視していない。このことは、中国語を母語とする日本語学習は上級になっても形容動詞と名詞を明確に区分できず、形容動詞の習得を依然として難しく感じることに深く関係するものである。それゆえ、中国語を母語とする日本語学習者に対する正しい形容動詞の指導には、名詞との違いに焦点を当てるような指導方法が求められる。

## 7.2 今後の課題

以上、本研究は、形容動詞の典型性に基づき、日本語学習者、とりわけ、中国語を母語とする日本語学習者が漢語系形容動詞を習得する際、どのような順序で習得していくのか、また、どのような要因の影響から誤用が生じるのかを明らかにした。しかし、本研究には、以下に挙げるような、解決すべき問題が残っている。

まず、形容動詞に関わる品詞性の分類基準は現在統一された見解がなく、日本語母語話者による個人差だけではなく、辞書による分類法にも相違が見られる。このような状況から、本研究が試みた形容動詞カテゴリーに備わる典型性による段階分けも、各段階に属する語彙メンバーの分類は辞書ごとに異なり客観性を欠くという批判を受ける可能性がある。したがって、形容動詞と名詞の両方を兼ねる語彙の品詞性をどのような方法で統一するのが今後の課題の一つとなる。しかし、そのような辞書によってその分類が異なる語彙メンバーこそ、分類上、形容動詞あるいは名詞の境界線でゆれているものであり、典型性の変化・拡張という観点からは最も関心を引くものでもある。本研究は、そのような観点から、今後、形容動詞と名詞の間でゆれ動いている語彙に特に注目し、それらの拡張の方向

性を追跡・確認すると同時に、形容動詞カテゴリーに備わる典型性が今後いかに確立されていくかを明らかにしていきたい。

また、本研究の調査では主に文法性判断テストを用いたが、今後は発話調査や作文調査など、多様な調査法で形容動詞の習得データを収集し、より詳細な観察・分析を行う必要もあると考える。

さらに、最近では、スニーラット(2001)の条件表現の習得、菅谷(2002)のイク・クル、テイル・テクルの習得など、日本語習得の分野でも認知言語学のプロトタイプ理論に基づく研究が盛んに行われるようになってきている。しかし、本研究はそのようなプロトタイプ理論の有効性は認めるものの、それには限界があることも指摘した。したがって、今後はプロトタイプ理論の有効性と限界性を踏まえつつ、形容動詞以外の文法事項もその射程に入れながら、日本語の習得の実際をよりの確に説明することのできる原理を考察していきたい。

最後に、本研究では文法性判断テストを用いて漢語系形容動詞を中心にプロトタイプ理論と習得との関係を検証したが、今後漢語系形容動詞に限らず実際に日本語の習得に現れた誤用の産出面も様々なコーパスなどによって分類した上で、調査対象となるカテゴリーに属するメンバー間の典型性や母語転移がどの程度反映される傾向があるかを検証していきたい。

### 7.3 日本語教育への示唆

最後に、本研究で明らかにした結果から、日本語教育の現場にどのように貢献できるかについて述べる。

まず、本研究の結果は、これまであまり注目されなかった形容動詞の導入の仕方に、次のような指針を提供することができる。日本語学習者に形容動詞の習得を指導する際には、形容動詞カテゴリーに備わる典型性と習得順序の関連性、すなわち、学習者はその母語の如何を問わず、典型的な形容動詞から非典型的な形容動詞という順序で習得するということを認識した上で、学習者には、まず、典型的な形容動詞を十分にインプットし、その後、名詞と共有する統語的特徴を加えた上で、学習者自らが非典型的な形容動詞を自然に導き出せるような効果的な指導法を確立すべきである。

また、学習者には、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性の変化による統語的特徴の区別を段階的に強調する必要もあろう。具体的には、本研究の「一、二」段階

に属する語彙メンバーは形容動詞性が強いため、形容動詞としての用法を中心に教えるとよいだろう。それに対して、「三、四」段階に属する語彙メンバーは形容動詞性よりも名詞性が強いことを強調した上で、名詞としての用法を中心に教えるべきである。また、「二、三」段階の語彙メンバーは形容動詞から名詞への中間的な存在であるため、形容動詞の用法以外に名詞としての用法も例示する必要があるであろう。

次に、本研究の結果は、特に、中国語を母語とする日本語学習者に対する形容動詞の教授方法に一定の指針を与えることができる。上でも見たように、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する際に、特に、日中同形語からの影響を強く受ける。とりわけ、当該形容動詞が中国語と同形であり、かつ、その品詞性にズレがある場合、学習者は当該形容動詞をそれと正しく判断することができない。日本語教師はそのような語彙に対しては、日本語での品詞性、すなわち、それが形容動詞であることを強調する必要があるだろう。また、当該形容動詞と対応する中国語の間に品詞性のズレがなくても、日中同形語である形容動詞を扱う際には、連体形「の」の誤用、連体形「な・の」の混用及び連体形の脱落といった母語の干渉による誤用の可能性を常に意識しながら、指導を行うべきである。

最後に、すでに繰り返し述べたように、中国語を母語とする日本語学習者、また、日本語教師は、連体形「な」の使用が形容動詞の最も顕著な特徴であることに注目しているが、品詞上の形容動詞と名詞との関連性はそれほど意識していない。しかし、これまで見てきたように、日本語の形容動詞カテゴリーは抽象名詞カテゴリーと深い繋がりを持っていることから、形容動詞の指導では、形容動詞カテゴリーと抽象名詞カテゴリーとの関連性、また、そこから生じがちな誤用についての説明と用例の提示が不可欠である。

## 参考文献

- 有田節子 (1999) 「プロトタイプから見た日本語の条件文」 『言語研究』 115 : 77-108  
日本言語学会
- 飯豊毅一 (1973) 「形容詞・形容動詞の語幹・各活用法の用法」 『品詞別日本文法講座 4 形容詞・形容動詞』 164-203 明治書院
- 伊藤友彦 (1998) 「過剰使用される『ノ』の統語カテゴリー—幼児一例の縦断研究—」  
『東京学芸大学紀要』 第一部門 49 : 143-149 東京学芸大学
- 伊藤友彦 (1999) 「幼児 2 例に生じた『ノ』の過剰使用の出現・消失メカニズム」 『東京学芸大学紀要』 第一部門 50 : 159-168 東京学芸大学
- 今田水穂 (2006) 「日本語同定文の主語名詞句の意味論上の取り扱いについて」 『筑波応用言語学研究』 13 : 71-84 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース
- ウェイリー、リンゼイ・J. (2006) 『言語類型論入門：言語の普遍性と多様性』 (大堀壽夫、古賀裕章、山泉実(訳)) 岩波書店 (Lindsay J. Whaley, 1997. *Introduction to typology: the unity and diversity of language*, Thousand Oaks, Calif., United States.)
- 上原聡 (2002) 「日本語における語彙のカテゴリー化—形容詞と形容動詞の差について—」  
大堀壽夫(編) 『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』(「シリーズ言語科学 3」) 81-103 東京大学出版会
- 上原聡 (2003) 「何故プロトタイプ理論構造か：日本語の『形容動詞』に見るプロトタイプ構造形成の歴史的考察」 『認知言語学論考』 51-91 ひつじ書房
- 上原聡 (2010) 「名詞化と名詞性—その意味と形—」 『日本語学』 29(11) : 24-38 明治書院
- 大河内康憲 (1997) 「日本語と中国語の同形語」 大河内康憲(編) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 411-447 くろしお出版
- 岡田伸夫 (1988) 「生成文法と今後の英語教育(3)」 『京都教育大学紀要』 73-88 京都教育大学
- 荻野綱男 (2006) 「形容動詞連体形における『な/の』選択について—田野村氏の結果をWWWで調べる—」 『計量国語学』 25(7) : 309-319 計量国語学会

- 奥津敬一郎 (1993) 『「ボクハウナギダ」の文法：ダとノ』 第8版 くろしお出版
- 奥野由紀子 (2001) 「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察—縦断的な発話調査に基づいて—」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 50 : 187-195  
広島大学教育学研究科
- 奥野由紀子 (2003) 「上級学習者における言語転移の可能性—『の』の過剰使用に関する文法判断テストについて—」 『日本語教育』 116 : 79-88 日本語教育学会
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による『の』の過剰使用を対象に—』 風間書房
- 奥野由紀子 (2008) 「第二言語習得過程における言語転移の認証を求めて—連体修飾における『の』を中心に—」 『言語文化と日本語教育』 2008年11月増刊特集 86-10 日本言語文化学会
- 香坂順一 (1982) 『現代中国語辞典』 光生堂
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎 (2010) 「動詞の文法から名詞の文法へ」 『日本語学』 29(11) : 16-23 明治書院
- 柏谷嘉弘 (1973) 「『形容動詞』の成立と展開」 『品詞別日本文法講座 4 形容詞・形容動詞』 96-163 明治書院
- 梶田優 (1982) 「英語教育と今後の生成文法」 昭和57・58年度科学研究費補助金一般研究(課題番号57450040) 研究成果報告書 『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究』 60-94.
- 加藤重広 (2001) 『日本語学のしくみ』 研究社
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、言語転移理論の観点から—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 8 : 5-23 凡人社
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社
- 萱原雅弘 (2003) 「統語変化の理論に関する一考察」 『東京家政学院大学紀要』 43 : 175-193 東京家政学院大学
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究—プロトタイプ理論の観点から—」 『言語文化と日本語教育』 23 : 66-79 日本言語文化学会
- 菅谷奈津恵 (2004) 「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得教育」 『第二言

- 語としての日本語の習得研究』 7 : 120-139 凡人社
- 菊池恵輔 (2002) 「連体修飾表現『～な』『～の』のゆれと問題点『の形容詞』の可能性」  
『日本語教育論集』 11 : 36-47 姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育領域
- 北村弘明 (1991) 「語幹からみた『ナ形容詞』の一考察」 『聖徳大学研究紀要・人文学部』  
第一分冊 2 : 127-135 聖徳大学
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』 秀英出版
- 興水優・島田亜実 (2009) 『中国語わかる文法』 大修館書店
- 小山悟 (2003) 「連体修飾構造の習得における母語の影響について—過程的転移としての『の』の過剰使用—」 『日本語教育論集』 19 : 41-51 国立国語研究所日本語教育センター
- 三枝令子 (1996) 「『小さな旅』と『小さい旅』」 『言語文化』 33 : 97-108 一橋大学語学研究室
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』 角川書店
- 坂原茂 (2004) 「認知的アプローチ」 『岩波講座言語の科学 4 意味』 83-123 岩波書店
- 桜井光昭 (1964) 「『名誉の』と『名誉な』」 『口語文法講座 3 ゆれている文法』 34-44  
明治書院
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による『の』の付加に関する誤用」 『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』 327-334 平成 8-10 年度 科学研究費補助金研究成果報告書
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク
- 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」 『日本語学』 4(10) : 4-16 明治書院
- 島田雅晴 (2001) 「述語名詞の『な』と『の』の選択に関する一考察」 『意味と形のインターフェース』 下巻 677-687 くろしお出版
- 清水裕子 (2003) 「英語文法能力標準テストの妥当性・信頼性の検証と新英語文法能力テスト Measure of English Grammar (MEG)」 『政策科学』 10(3) : 59-68 立命館大学政策科学部
- 志村良治 (1982) 「日本語の語彙と中国語の語彙」 『講座日本語の語彙② 日本語の語彙の特色』 201-236 明治書院
- 白井恭弘 (1998) 「言語学習とプロトタイプ理論」 奥田祥子(編) 『ボーダーレス時代の外国語教育』 69-108 未来社



- 白畑知彦（1993）「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰使用—韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』 81：104-115 日本語教育学会
- 白畑知彦（1994）「成人第2言語学習者の日本語の連体修飾構造獲得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編)』 44：175-190 静岡大学教育学部
- 白畑知彦・久野美津子（2005）「L2 児童による日本語名詞句構造内での『ノ』の習得」**Second Language Vol.4**、29-50 日本第二言語習得学会
- 新村出（編）（1998）『広辞苑』（第五版）岩波書店
- 鈴木重幸（1980）「品詞をめぐって」『教育国語』 62：2-20 教育科学研究会国語部会  
麦書房
- 鈴木忍（1995）『文法 I 教師用日本語教育ハンドブック③』 157-159 凡人社
- 鈴木英夫（1986）「『形容動詞』をめぐる二、三の問題」『築島裕博士還暦記念国語学論集』 491-517 明治書院
- 鈴木康之（1978-1979）「の格名詞と名詞の組み合わせ」『教育国語』 56-59 むぎ書房
- スニーラット、ニンジャロースック（2001）「OPI データにおける『条件表現』の習得研究」『日本語教育』 111：26-35 日本語教育学会
- スワン彰子（1994）「形容動詞＋『な』／『の』について」『講座日本語』 245-269  
早稲田大学日本語教育センター
- 高見澤孟（2004）『新・はじめての日本語教育 基本用語辞典』 アスク
- 高橋織恵（2004）「連体修飾構造の習得過程に関する研究概観—『の』の過剰使用と脱落を中心に—」『言語文化と日本語教育』 2004年11月増刊特集号 147-166 日本語文化学会
- 高橋太郎（1997）「連体機能をめぐって」『日本語文法：体系と方法』 39-54 ひつじ書房
- 田中茂範（1987）『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』 三友社出版
- 田中茂範（1990）『認知意味論：英語動詞の多義の構造』 三友社出版
- 田野村忠温（2002）「形容動詞連体形における『な／の』選択の一要因—『有名な』と『無名の』—」『計量国語学』 23(4)：207-213 計量国語学会
- 張麟声（2002）『日本語教育のための誤用分析』 スリーエーネットワーク
- 対馬栄輝（2001）「統計的検定資料①多重比較」(<http://www.hs.hirosaki-u.ac.jp/~pte>)

- iki/research/stat/multi.pdf#search='Tukey+b') 2013. 12. 27
- 塚原鉄雄 (1964) 『『暖かい』と『暖かだ』』 『口語文法講座 3 ゆれている文法』 23-33  
明治書院
- テイラー、ジョン・R. (1996) 『認知言語学のための 14 章』 辻幸夫[ほか]訳 紀伊国屋書店 (John R. Taylor, 1995. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, 2<sup>nd</sup> edition. Oxford: Clarendon Press.)
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 第 I 巻 くろしお出版社
- 豊田豊子 (1980) 「漢語構成の『な形容詞』(形容動詞)」 『日本語学校論集』 7 : 85-98  
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 中野博幸・田中敏 (2012) 「フリーソフト js-STAR でかんたん統計データ分析」技術評論社
- 中山陽介 (2004) 「『特別な思い』と『特別の思い』—〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れについて」 『阪大日本語研究』 16 : 131-158 大阪大学文学部日本学科(言語系)
- 永澤済 (2011) 「漢語『—な』型形容詞の伸張—日本語への同化—」 『東京大学言語学論集』 31 : 135-164 東京大学文学部言語学研究室
- 永野賢 (1959) 「—幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」 『国立国語研究所論集』 1 : 383-396 国立国語研究所
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』 大修館書店
- 野呂幾久子 (1994) 「日本語教育における『形容動詞』の取り扱いに関する一考察」 『静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇』 25 : 1-11 静岡大学教育学部
- 芳賀矢一 (1905) 『中等教科明治文典』 3 : 1-5 富士房
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』 98-112 岩波書店
- 花城可武 (2010) 「文法性判断テストを使った条件文の習得状況—正解率と確信度スケールを用いて—」 『南山大学国際教育センター紀要』 11 : 51-68 南山大学国際教育センター
- 原田登美 (2001) 「漢語形容動詞についての一考察」 『言語と文化』 5 : 101-117 甲南大学国際言語文化センター
- 福地肇 (1987) 「動的文法理論の提案」 『言語』 16(12) : 46-53 大修館書店
- 白以然 (2007) 「プロトタイプ理論を用いた多義語分析と語彙習得」 『「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成 : 平成 18 年度版活動報告書』 113-116 お茶の水女子大学

- 松香敏彦・本田秀仁・吉川詩乃（2010）「プロトタイプ理論再考」『認知科学』 17(1) : 95-109 日本認知科学会
- 松下厚（1975）「『自由の女神』と『自由な女神』—名詞と形容動詞—」『新・日本語講座 2:日本文法の見えてくる本』 97-109 汐文社
- 松本純一（1995）「プロトタイプ理論と動的文法理論」『東洋女子短期大学紀要』 31 : 1-6 東洋女子短期大学
- 村木新次郎（1998）「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』 27(3):44-49 大修館書店
- 村木新次郎（2003）「第三形容詞とその意味分類」『日本語日本文学』 15:1-28 同志社女子大学
- 村崎恭子（1977）「『名詞形容詞』について—いわゆる形容動詞の扱い方—」『日本語学 校論集』 4 : 96-103 東京外国語大学附属日本語学校
- 村田菜穂子（2001）「平安時代の形容動詞—～ゲナリと～カナリ—」『国語学』 52(1) : 16-30 国語学会
- 村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』 和泉書院
- 村松由起子（2000）「中国人日本語学習者にとっての『の』問題点—連体修飾の場合—」『雲雀野 豊橋技術科学大学人文・社会工学系紀要』 22 : 28-35 豊橋技術科学大学
- 毛瑩（2011）「日本語の連体修飾句に関する習得研究概観」『比較社会文化研究』 31 : 59-66 九州大学大学院比較社会文化学府
- 毛瑩（2012）「動的文法理論から見る可能な文法」『比較社会文化研究』 32 : 19-28 九州大学大学院比較社会文化学府
- 毛瑩（2013a）「漢語系形容動詞の連体修飾語の習得に関する一考察—中国語を母語とする日本語学習者を対象に—」『比較文化研究』 105 : 97-107 日本比較文化学会
- 毛瑩（2013b）「プロトタイプ理論から見る日本語の形容動詞」『比較文化研究』 107 : 171-182 日本比較文化学会
- 榎山洋介（2010）『認知言語学入門』 研究社
- 森田良行（2008）『動詞・形容詞・副詞の事典』 東京堂出版
- 守屋宏則（1995）『やさしくくわしい中国語の文法』 東方書店
- 森山新（2004）「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会 論文集』 4 : 66-76 日本認知言語学会
- 柳沢好昭（1984）「後接辞による『な形容詞』の分類—特に『な』『の』のつき方から見

- て一』『日本語教育論集』 21-28 国立国語研究所日本語教育センター
- 山下利之 (1993) 「ファジィ理論の周辺—心理学におけるプロトタイプ理論から—」 『日本ファジィ学会誌』 5(4) : 677-688 日本ファジィ学会
- 山橋幸子 (2009) 「和語における『形容詞』と『形容動詞』の区別—形式と意味との関わりを中心に—」 『札幌大学文化学部紀要』 23 : 149-162 札幌大学文化学部
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞『ノ』の誤用」 『発達心理学研究』 1(1) : 2-9 日本発達心理学会
- 吉沢義則 (1932) 「所謂形容動詞に就いて」 京都大学国文学会(編) 『国語国文』 2(1) : 1-37 中央図書出版
- ラネカー、ロナルド (2000) 「動的使用依拠モデル」 (坪井栄治郎(訳)『認知言語学の発展』) 61-141 ひつじ書房 (Ronald W. Langacker, 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol2, Descriptive Application. Stanford, California: Stanford University Press.)
- 羅蓮萍 (2004) 「日本語教育における『ノ形容詞』の扱いについて」 『山口国文』 27 : 70-76 山口大学人文学部国語国文学会
- 羅蓮萍 (2005) 「『ナ形容詞』と『ノ形容詞』—中国人学習者の選択傾向—」 『山口国文』 28 : 67-76 山口大学人文学部国語国文学会
- 李在鎬 (2010) 『認知言語学への誘い—意味と文法の世界—』 開拓社
- 劉懿珍 (1997) 「いわゆる形容動詞と漢語との関係—中国語との比較対照の視点から見る—」 『台湾日本語文学報』 10 : 35-69 中華民國日本語文学会
- レイコフ、ジョージ (1993) 『認知意味論：言語から見た人間の心』 (池上嘉彦他(訳)1993) 紀伊国屋書店 (George Lakoff, 1987. *Woman, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press.)
- 佟玲 (2012) 「日语学习者在写作中容易出现的错误」 『時代教育』 21 : 131.
- 龚先洁 (2012) 「关于中国人日语学习者对格助词“の”的误用情况—以“の”和“的”的使用为中心—」 『語言研究』 10 : 208-209.
- 何午 (1995) 「从词汇的主客观性谈日语形容词・形容动词的分类」 『日語學習与研究』 1 : 14-17 对外經濟貿易大学
- 江慧浩 (2010) 「对中日同形词汉译中词性转换的探讨」 『文学界(理論版)』 3 : 86-87.

- 劉多勤 (1983) 「关于日语中所谓形容词的词性问题」『外語學刊』 3 : 22-24.
- 劉桂敏 (1989) 「日语形容词的摇摆性」『外語与外語教學』 42 : 20-24 大連外國語學院
- 劉偉 (2010) 「中日同形詞的比較研究」『科技文匯』 4 月上旬刊 124-125.
- 邱根成 (2003) 「论“タリ”文語形容詞」『日語學習与研究』 112 : 15-19 對外經濟貿易大學
- 曲維 (1995) 「中日同形詞的比較研究」『遼寧師範大學學報(社科版)』 6 : 34-37 遼寧師範大學
- 沈德余 (1985) 「“自由ナ女神”与“自由ノ女神」『日語學習与研究』 5 : 33-34 對外經濟貿易大學
- 孫海英 (2012) 「关于日语的形容词及形容词连续性之考察—以连体用法为中心—」『大家』 12 : 231.
- 譚睿 (2011) 「探究日语教学中的中日同形詞」『長春理工大學學報』 6(11) : 154-155 長春理工大學
- 覃振桃 (2013) 「基于语言迁移理论的中日同形詞习得问题探析」『中国校外教育』 4 月下旬刊 98.
- 杨佳 (2010) 「关于连体修饰中摇摆现象的研究」上海外國語大學未刊行修士論文
- 宓驥 (1988) 「情态词作定语时用『の』与用『な』的区别」『外語与外語教學』 37 : 23-26
- 曾露璐 (2013) 「日语形容词的再界定」『科技文匯』 239 : 113-114.
- 趙博源 (1995) 「形容词杂议」『日語知識』 5 : 2-5.
- 張慧明 (2008) 「词类特征与词汇的体系建构—日语“形容词”词类问题研究—」『廣東外語外貿大學學報』 19(4) : 36-40 廣東外語外貿大學
- 張升余 (1995) 「接尾词“さ”、“み”、“め”、“は」『日語學習与研究』 1 : 37-41 對外經濟貿易大學
- 張雪梅 (2011) 「考察日语的形容词和形容词的关系—以“形态”为中心—」『科技信息』 7 : 626.
- Backhouse, A. E. (1984) Have all the adjectives gone? *Lingua*, 62, 169-186.
- Clancy, P. M. (1985) The acquisition of Japanese. In Slobin, I. D. (Ed.) *The cross linguistic study of language acquisition, 1*, 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence

Erlbaum Associates Publishers

- Dixon, R. M. W. (1977) Where have all the adjectives gone? *Studies in Language*, 1, 19-80.
- Ellis, R. (1997) *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Kajita, M. (1977) Towards a dynamic model of syntax. *Studies in English Linguistics*, 5, 44-76.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar vol.1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Murasugi, K. (1991) Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, Learnability and Acquisition. Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Connecticut
- Rosch, E. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories. In T. E. Moore (ed). *Cognitive development and the acquisition of language*, 111-144.  
New York: Academic Press.
- Rosch & Mervis (1975) Family resemblances: Studies in the internal structure of categories, *Cognitive Psychology*, 8, 382-439.
- Uehara, Satoshi (1998) Syntactic categories in Japanese : A cognitive and typological introduction. くろしお出版

〈付録一〉

[分類語彙表(1964)による形容動詞の語系上の分類]

名・形動 (合計 425 語)	
漢語系(240)	可能、健康、最高、自由、経済、安心、非常、心配、完全、便利、不思議、安全、有効、元気、不安、満足、最適、大事、不足、上手、共通、
内：	強力、詳細、反対、独自、有限、主要、不要、不要、特殊、抜群、
1 字漢語=1	正確、独特、苦勞、軽量、贅沢、秘密、危険、平和、自在、微妙、必要、
2 字漢語=233	有名、無理、複雑、不満、面倒、永遠、得意、異常、高度、馬鹿、最低、
3 字漢語=4	素朴、純正、大胆、軽快、太平、極端、好調、極上、困難、強調、傑作、
4 字漢語=2	適度、大気、幸運、小量、清潔、粹、迷惑、優雅、幸福、正直、熱心、 不明、名誉、余分、高等、親切、平行、地味、同一、無事、過剰、強度、 高価、斬新、純粹、神秘、万全、不良、夢中、肝心、機嫌、始末、正常、 頻繁、公正、新規、美味、冷静、公明、孤独、四角、邪魔、平等、平気、 曖昧、意気、華麗、緊急、最悪、最良、垂直、任意、貧乏、不調、平行、 本気、無限、愉快、良質、壮大、悲惨、不幸、明瞭、陽気、空白、健在、 厳正、好奇、清楚、適正、判明、不利、無用、感心、高額、種々、慎重、 正式、退屈、妥当、多用、着実、必須、不便、平凡、別々、膨大、猛烈、 永久、気楽、均等、重厚、誠実、単調、同等、人柄、不快、無難、無力、 綿密、優美、阿呆、臆病、極小、空腹、健全、合同、残酷、縦横、淡泊、 著名、濃厚、呑気、発明、不全、無効、無数、寒冷、極大、硬質、極秘、 混沌、潤滑、上上、壯観、内緒、内所、内証、不順、不振、不滅、平坦、 有害、安価、異質、均一、苦痛、公平、固有、懇切、細心、親密、達者、 多量、同然、年少、貧困、不運、不詳、無慚、憂鬱、優勢、雄弁、暗黒、 安楽、一刻、希薄、強度、巨額、好色、質実、洒脱、上等、神聖、静寂、 脆弱、絶倫、荘厳、多忙、典雅、特大、難解、濃密、非凡、非力、不当、 不審、豊饒、奔放、密接、無敵、優位、優良、勇壮、勇猛、幽玄、陽光、 陽気、律儀、廉価、猥褻、遺憾、一心、過小、寡黙、簡潔、寛容、虚無、 軽度、剛健、高名、古風、実直、執拗、至難、純白、俊敏、清純、盛大、 絶佳、卓抜、短期、珍重、徳用、繁華、微細、非情、不意、不遇、不潔、 不純、不適、不同、不変、不毛、不法、無頼、平穩、芳醇、朴訥、骨太、

	<p>未熟、未練、無為、無知、無垢、明細、野蛮、有用、露骨、悪質、安泰、一途、一樣、異例、胡散、有頂天、怪奇、過多、過度、華美、過密、過労、簡素、強壯、虚心、軽妙、下種、潔白、堅調、剛毅、孝行、恍惚、好適、高率、互角、孤高、滑稽、残虐、質素、弱体、迅速、辛辣、崇高、杜撰、凄惨、静肃、精緻、寂寥、早熟、多難、単一、低調、鈍感、貪欲、軟弱、柔和、如実、年長、破格、悲壯、肥大、貧弱、敏捷、不吉、不整、不定、不能、不服、平易、平静、平板、変則、豊満、凡庸、無常、悠久、有能、乱雑、利口、利便、劣勢、一徹、因果、淫乱、有耶無耶、艶美、横暴、下等、果報、簡便、几帳面、危篤、旧式、強大、均質、愚直、愚鈍、愚昧、軽薄、激越、潔癖、下品、下劣、健脚、謙遜、光荣、高邁、酷薄、極貧、酷烈、細密、至純、邪悪、弱小、笑止、小食、饒舌、尚早、酔狂、清閑、精巧、清澄、静謐、清和、殺生、専横、壮健、壮烈、疎遠、息災、即妙、粗相、大身、怠惰、達筆、短命、端麗、中和、重畳、通俗、痛烈、適格、適法、透明、永遠、薄幸、破廉恥、繁雑、卑俗、悲痛、病弱、微力、貧相、不易、不可解、不可思議、不覚、無粹、不正、不遜、不敏、不平、無礼、不和、平滑、閉口、平明、別個、偏重、変哲、扁平、放埒、満腹、無害、無情、無情、無心、無能、無比、無謀、無量、無類、明晰、明媚、悶悶、有閑、裕福、利根、隆盛、伶俐、狼藉、論外、矮小</p>
和語系 (127)	<p>好き、幸せ、無駄、勝手、当たり前、大幅、まっすぐ、身近、派手、嫌い、久しぶり、真面目、斜め、下手、苦手、堪能、黄色、間近、まとも、わがまま、割安、小振り、とりどり、薄手、大振り、愚か、小粒、邪魔、真っ白、色白、大柄、似合い、真っ黒、まばら、惨め、いびつ、打って付け、裏腹、大笑い、ぎざぎざ、でぶ、程々、まだら、幅広、むき出し、逆さ、せっかち、徒然、でたらめ、間抜け、まちまち、やくざ、やんちゃ、あだ、在り来たり、嫌味、いんちき、大急ぎ、大粒、生成り、ぐうたら、けち、小作り、品薄、ずぼら、縦長、ちび、凹凸、蔑ろ、真っ盛り、見えっ張り、むちゃ、むちゃむちゃ、ものぐさ、安上がり、やぼ、割高、あてずっぽう、色黒、薄っぺら、空ろ、大慌て、大げさ、大助かり、大掴み、大童、お手上げ、お転婆、面伏せ、面長、おんぼろ、空っぽ、切れ切れ、苦し紛れ、</p>



	けた違い、けた外れ、腰高、小太り、逆さ、逆様、しみったれ、すかたん、底抜け、伊達、力任せ、筒抜け、粒揃い、つるつるてん、手薄、手近、仲良し、根暗、ハチャメチャ、早口、等し並み、秘密、筆まめ、へそ曲がり、ほやほや、真っ平ら、的はずれ、まん丸、雅、目障り、めっちゃ、物好き、安手
混語系 (30)	駄目、浮気、半端、激安、強気、気まぐれ、半生、おおげさ、凝り性、節介、茶目、極太、堅気、極細、風変わり、付しつけ、不ぞろい、無口、内気、おざなり、気障、気弱、食いしん坊、度外れ、無様、不慣れ、腑抜け、べら棒、助兵衛、不向き
外来語系 (35)	コンパクト、クラシック、ワイド、デジタル、トータル、ホット、フラット、ジャンボ、ポピュラー、マテリアル、オールマイティー、メカニック、イコール、ハンサム、プレーン、ハイカラ、アンバランス、キッシュ、サイケ、ジューシー、ソウルフル、ダンディー、クラマー、グロテスク、シナプス、ランダム、アプリア、オーバー、サイケデリック、ジムダンディ、ジャーナリスティック、スタンダード、ニュートラル、ヒステリック、ファンシー
形動・名 (合計 26 語)	
漢語系 (4)	風雅・尋常・突飛・歴歴
和語系 (5)	俄か・巧み・平ら・小柄・おぼろ
外来語系 (17)	パーマネント・ソフト・インタナショナル・ロマンチック・クール・クリア・ドライ・ハード・オーソドックス・アクティブ・ポジティブ・メジャー・マイナー・タイト・コンスタント・リベラル・アブストラクト
名・形動・副・感 (1 語)	
漢語系 (1)	本当
形動・副 (合計 66 語)	
漢語系 (22)	特別・十分・沢山・大丈夫・随分・堂堂・断然・案外・格別・散々・適宜・皆無・断固・延延・大層・判然・切切・漫然・敢然・仰山・忽然・内内

和語系 (43)	いろいろ・確か・たっぷり・見事・僅か・ぴったり・遙か・すぐ・そっくり・やたら・久久・ばらばら・ふらふら・ぼろぼろ・まずまず・ごちゃごちゃ・強か・とんとん・ばさばさ・ひたひた・かさかさ・ぐずぐず・ぺこぺこ・ぼさぼさ・生憎・がさがさ・がりがり・ぐちゃぐちゃ・ごわごわ・ふかふか・ぶよぶよ・ぺらぺら・かつかつ・漫ろ・たまさか・途切れ途切れ・飛び飛び・ぴっちり・ふかふか・ぺちゃぺちゃ・ぺらぺらぺら・ぼそぼそ・緩緩
混語系 (1)	かなり
名・形動・造 (合計 14 語)	
漢語系 (13)	別・逆・高級・楽・美・妙・損・不可・異・珍・奇・密・優
外来語系 (1)	ナチュラル
形動 (合計 391 語)	
漢語系 (126) 内： 2 字漢語 = 123 3 字漢語 = 3	奇麗・大切・重要・豊富・同様・快適・意外・新鮮・残念・確実・豪華・優秀・懸命・完璧・簡単・単純・立派・繊細・多様・丁寧・敏感・多彩・巨大・適当・強烈・柔軟・絶妙・深刻・鮮明・明確・頑固・有力・簡易・容易・急激・重大・順調・爽快・特有・雄大・過酷・可憐・適切・不可欠・希少・的確・幼稚・偉大・絶好・絶大・特異・依然・過激・豪快・果敢・堅牢・鮮烈・澁刺・黙黙・旺盛・過敏・頑丈・窮屈・強靱・真挚・精密・丹念・漠然・明快・悠悠・良好・安易・快調・奇妙・器用・謙虚・厳密・広大・清浄・相応・率直・対等・多大・淡淡・熱烈・有望・両全・異様・温暖・虚弱・賢明・公然・巧妙・唐突・剽軽・呆然・歴然・過大・確固・奇怪・強硬・顕著・絢爛・強引・些細・雑談・熾烈・整然・切実・壮絶・端正・入念・爛漫・朗朗・閑静・肝要・毅然・機敏・稀有・厳格・渾然・津津・凄絶・清涼・善良・陳腐・痛快・無骨・髣髴・流麗・藹藹・啞然・一概・一本気・陰気・迂闊・円満・穩健・愕然・閑散・緩慢・簡略・奇抜・強大・凶暴・緊密・怪訝・險悪・堅実・嚴重・堅固・嚴然・克明・昏昏・殺伐・燦燦・燦然・穢然・周到・十二分・神妙・生鮮・清廉・粗大・多才・鈍重・莫大・満満・脈脈・妖艶・揚揚・不断・連綿・安直・唯唯・陰湿・隠然・淫猥・鬱々・鬱蒼・遠大・鷹揚・温和・快活・

	<p>赫赫・豁然・佳良・頑強・頑健・甘美・感奮・嬉嬉・奇特・華奢・汲々・凶悪・恐恐・狂暴・屈強・嚴肅・豪奢・高尚・豪勢・剛直・荒涼・乞乞・小体・雜然・雜多・瑣末・慘憺・散漫・肅然・出色・純然・順当・瀟洒・心外・甚深・甚大・精悍・精細・晴朗・先鋭・浅薄・粗悪・壯快・騒然・踳踉・粗末・諾諾・遲遲・緻密・長大・丁重・陶然・獐猛・訥訥・微弱・卑小・不穩・平然・片片・茫茫・茫洋・明白・綿綿・勿怪・悠揚・爛然・繚乱・烈烈・恋恋・有利</p>
和語系(124)	<p>様々・豊か・嫌・静か・新た・主・明らか・滑らか・爽やか・手軽・華やか・鮮やか・素直・しなやか・手ごろ・穏やか・軽やか・緩やか・盛ん・微か・真っ赤・まれ・えっち・可哀そう・賑やか・細か・艶やか・密か・大らか・頑な・細やか・定か・こまめ・細やか・真っ青・まめ・円やか・むやみ・健やか・のどか・伸びやか・あらわ・思い通り・直向・安らか・熱々・大掛かり・清らか・高らか・なだらか・ふくよか・仄か・めちやくちや・闇雲・艶やか・いたずら・色鮮やか・麗らか・上の空・きらびやか・くたくた・早急・にこやか・晴れやか・おおまか・くしゃくしゃ・けな気・さら・淑やか・しどろもどろ・速やか・和やか・密やか・引っ切り無し・紛紛・見え見え・めちやめちや・もうもう・柔・あからさま・足早・汗だく・汗まみれ・甘ったれ・あやふや・大っぴら・厳か・疎か・がさつ・がら空き・きてれつ・切れ長・ぐしゃぐしゃ・懲り懲り・ぎつくばらん・すかすか・涼やか・ずばびた・妙・たおやか・たけなわ・ちぐはぐ・血まみれ・手短・なおざり・無げ・なよやか・乗り乗り・ひたぶる・冷ややか・広やか・ぶっきら棒・ぺちゃんこ・へべれけ・へろへろ・ほうふつ・誇らか・まことしやか・全う・まるやか・雅やか・めっきり・矢継ぎ早・よれよれ</p>
混語系(18)	<p>気軽・素敵・大好き・格安・小意気・気まま・不確か・地道・念入り・気長・我武者ら・台無し・小癩・肉厚・斯様・大形・気さく・大嫌い</p>
	<p>カジュアル・メランコリック・リズミック・リリカル・リリック・レア・レクリエーション・スペクタキュウラー・スポンテニアス・スモーキー・ドメスチック・ドラスティック・トリッキー・トルクフル・モーダル・パ</p>

外来語系 (123)	ーミング・パンキッシュ・ピーキー・ビジネスライク・ファンタスティック・プラトニック・ボーイッシュ・フル・コンテンポラリー・コントラブル・センシティブ・センシユアル・サイコロジカル・グラフィカル・グラマラス・ショッキング・シリアス・エキセントリック・エコロジカル・エネルギー・エロチック・グルービー・グレージー・セミライト・デンジャラス・リフレクティブ・レーシー・グレージー・クリエイティブ・コケティッシュ・コミカル・コンテンポラリー・スタイリッシュ・ダンスブル・ナーバス・ファジー・フランク・ユニーク・ノーマル・ロマンチック・モダン・スポーティー・エレガント・ダイナミック・キュート・シック・デリケート・パーフェクト・ユニバーサル・ゴージャス・ダイレクト・フレッシュ・エキサイティング・スピーディー・リーズナブル・リッチ・イージー・スリム・スリリング・ハッピー・ウエット・カラフル・エスニック・クリーン・パーソナル・オフィシャル・トラッド・ノスタルジック・フォーマル・ユーモラス・クリーミー・スマート・チャーミング・マイルド・ワイルド・アバウト・インスタント・エキゾチック・グローバル・トラディショナル・ハンディー、ヒューマン・ジェントル・シビア・タフ・トレンディー・ナイーブ・ファッシュナブル・レンタル・ビビッド・ミステリアス・ラジカル・リズムカル・ウオーム・スインギー・センセーショナル・クラジック・アナーキー・シック・ストイック・スロー・セルフイッシュ・ワールドワイド・アンビシャス・インフォーマル・オイリー・オリジナル・カジュアルバッグ
名・形動・副 (合計 16 語)	
漢語系(11)	普通・大変・当然・結構・相当・自然・余計・真実・偶然・存分・観面
和語系(5)	幸い・がらがら・かちかち・一通り・只
形動・形 (合計 7 語)	
和語系(4)	柔らか、柔らかい・暖か、暖かい
外来語系(3)	ビジュアル・センチメンタル・セクシャル
名・形動・尾 (合計 2 語)	
漢語系(1)	格好

和語系(1)	向き
名・形動・副・尾 (合計 1 語)	
和語系(1)	あまり
名・形動・頭 (合計 4 語)	
漢語系(1)	没
和語系(1)	生
外来語系(2)	ミニ・シユール
連体・形動・形・副 (合計 1 語)	
和語系(1)	同じ
形動・名／形・名 (合計 3 語)	
外来語系(3)	オリジナル・スタンダード・クラシカル
形動・造・頭 (合計 1 語)	
漢語系(1)	純
形動／形・名 (合計 7 語)	
外来語系(7)	シンプル・プライベート・ラッキー・ナショナル・プロフェッショナル・ メタリック・フレキシブル
名・形動／形・副・名 (合計 2 語)	
外来語系(2)	ストレート・スイート
名・形動・感 (合計 2 語)	
漢語系(1)	失礼
外来語系(1)	ナンセンス
形・形動／形・副・動 (合計 1 語)	
外来語系(1)	フリー
形動／形・名・動	
外来語系(1)	スムーズ
形動・接 (合計 1 語)	
和語系(1)	最も
名・形動／形・名・動 (合計 1 語)	

外来語系(1)	コンクリート
形動・名／形・名・副・動 (合計 1 語)	
外来語系(1)	ラフ
形動／形・副・名・動 (合計 2 語)	
外来語系(2)	ベター・ルーズ
形動／形・副 (合計 1 語)	
外来語系(1)	デラックス
形動・造 (合計 4 語)	
漢語系(4)	碌・凜・艶・酷
名・形動・動／形・副・名・動 (合計 1 語)	
外来語系(1)	クリヤー
形動・副・感 (合計 1 語)	
混語系(1)	然様
形動・頭 (合計 1 語)	
漢語系(1)	朦朧

(注：括弧の中の数字は当該項目の語数である)

〈付録二〉 [形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による記号表記]

語彙	格	の	さ	語彙	格	の	さ	語彙	格	の	さ	語彙	格	の	さ
活発	1	(1)	①	軽快	1	(1)	③	顕著	1	(1)	②	健全	2	(1)	③
強烈	1	(1)	③	明白	1	(1)	③	明確	1	(1)	③	明朗	1	(1)	③
濃厚	1	(1)	①	旺盛	1	(2)	③	立派	1	(1)	①	粗末	1	(4)	③
微妙	1	(4)	③	独特	1	(4)	③	独自	1	(4)	③	同様	1	(4)	②
無数	1	(4)	②	無慚	1	(2)	②	深刻	1	(1)	③	対等	2	(3)	②
適当	1	(4)	②	容易	1	(4)	③	有効	3	(2)	③	有利	3	(2)	③
本気	5	(4)	④	不幸	4	(4)	②	複雑	1	(1)	③	簡易	1	(1)	③
健康	5	(1)	③	賢明	1	(1)	③	堅実	1	(1)	③	危険	5	(1)	④
幸福	5	(1)	③	好調	4	(1)	③	極端	1	(1)	③	利口	1	(1)	③
冷静	5	(1)	③	親切	3	(1)	③	慎重	5	(4)	③	水平	5	(4)	④
重宝	5	(1)	③	忠実	5	(1)	③	愉快	5	(1)	③	有益	1	(1)	②
上手	2	(2)	③	純粹	5	(4)	③	順調	5	(1)	③	敏感	1	(1)	③
安泰	3	(2)	②	便利	4	(4)	③	無礼	4	(4)	②	平等	5	(4)	②
平凡	5	(4)	③	平気	5	(4)	②	必要	3	(4)	②	不便	4	(4)	③
寛容	5	(1)	③	孤独	4	(4)	③	広大	1	(4)	③	高価	5	(4)	②
無効	3	(4)	②	無知	4	(4)	②	夢中	1	(1)	②	無用	2	(4)	②
正当	1	(4)	②	静寂	4	(4)	③	強力	4	(1)	③	神秘	3	(4)	③
特異	1	(4)	②	得意	4	(4)	③	特殊	1	(4)	②	直接	1	(4)	②
優秀	2	(2)	③	残念	5	(4)	③	純情	3	(1)	③	重大	1	(4)	③
正式	1	(4)	②	確実	1	(2)	③	主要	4	(4)	②	有望	1	(2)	③
多忙	5	(4)	②	器用	1	(1)	③	曖昧	1	(4)	③	大胆	1	(1)	③
有名	1	(2)	②	呑気	1	(1)	③	豊富	1	(1)	③	安全	5	(2)	④
適切	5	(1)	③	露骨	1	(1)	③	奇麗	1	(1)	①	緊急	5	(4)	②
反対	4	(4)	②	懸命	1	(4)	①	猛烈	1	(1)	①	窮屈	5	(1)	③
不良	2	(2)	②	豪華	1	(1)	③	大切	1	(1)	①	清潔	4	(1)	③
肝心	1	(4)	②	簡単	1	(1)	③	一様	1	(4)	②	単調	4	(1)	③

面倒	5	(1)	③	気楽	1	(1)	③	適度	1	(4)	③	地味	5	(1)	②
貧弱	1	(1)	③	急速	1	(1)	②	不明	4	(2)	③	無事	4	(4)	②
完全	1	(1)	②	正常	5	(4)	②	幸運	5	(1)	④	同一	2	(4)	②
公平	4	(1)	③	単純	1	(1)	③	冷酷	3	(1)	③	巨大	1	(4)	③
熱心	5	(1)	③	嚴重	1	(1)	③	新鮮	1	(1)	③	良好	1	(4)	③
綺麗	1	(1)	①	阿呆	5	(1)	③	著名	1	(2)	②	素朴	5	(1)	③
丁寧	1	(1)	③	不利	4	(3)	②	重要	1	(4)	③	幼稚	3	(1)	③
詳細	4	(4)	④	可能	3	(2)	②	贅沢	4	(1)	③	急激	1	(1)	①
巧妙	1	(4)	③	共通	2	(4)	②	無難	1	(1)	②	適宜	1	(4)	②
柔軟	1	(1)	①	円滑	2	(1)	③	妥当	5	(4)	②	率直	1	(1)	③
強引	1	(1)	③	奇妙	1	(1)	③	明瞭	1	(1)	③	正確	4	(2)	③
意外	1	(1)	③	沢山	1	(4)	②	有力	1	(2)	①				



〈付録三〉 [形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による分類]

1 (1) ①	活発、濃厚、奇麗、 柔軟、綺麗、立派、 猛烈、一切、急激	3 (1) ①	—	5 (1) ①	—
1 (1) ②	完全、急速、顕著、 夢中、無難、有益	3 (1) ②	—	5 (1) ②	地味
1 (1) ③	強烈、貧弱、丁寧、 強引、意外、軽快、 明白、懸命、器用、 呑気、露骨、豪華、 簡単、気楽、単純、 嚴重、奇妙、明確、 深刻、複雑、極端、 堅実、豊富、新鮮、 明瞭、明朗、簡易、 利口、敏感、大胆、 率直	3 (1) ③	親切、純情、 冷酷、幼稚	5 (1) ③	健康、幸福、冷静、 重宝、寛容、適切、 熱心、忠実、阿呆、 愉快、順調、窮屈、 素朴、面倒
1 (1) ④	—	3 (1) ④	—	5 (1) ④	幸運、危険
1 (2) ①	有力	3 (2) ①	—	5 (2) ①	—
1 (2) ②	無惨、著名、有名	3 (2) ②	安泰、可能	5 (2) ②	—
1 (2) ③	旺盛、確実、有望	3 (2) ③	有利、有効	5 (2) ③	—
1 (2) ④	—	3 (2) ④	—	5 (2) ④	安全
1 (3) ①	—	3 (3) ①	—	5 (3) ①	—
1 (3) ②	—	3 (3) ②	—	5 (3) ②	—
1 (3) ③	—	3 (3) ③	—	5 (3) ③	—
1 (3) ④	—	3 (3) ④	—	5 (3) ④	—
1 (4) ①	懸命	3 (4) ①	—	5 (4) ①	—
1 (4) ②	無数、適當、正当、 特異、正式、肝心、	3 (4) ②	無効、必要	5 (4) ②	多忙、平気、正常、 妥当、平等、高価、

	沢山、特殊、 一様、同様、 直接、適宜				緊急
1 (4) ③	微妙、巧妙、独特、 容易、広大、曖昧、 重要、粗末、重大、 巨大、良好、独自、 適度	3 (4) ③	神秘	5 (4) ③	平凡、純粹、残念、 慎重
1 (4) ④	—	3 (4) ④	—	5 (4) ④	本気、水平
2 (1) ①	—	4 (1) ①	—		
2 (1) ②	—	4 (1) ②	—		
2 (1) ③	円滑、健全	4 (1) ③	公平、贅沢、 清潔、単調、 好調、強力		
2 (1) ④	—	4 (1) ④	—		
2 (2) ①	—	4 (2) ①	—		
2 (2) ②	不良	4 (2) ②	—		
2 (2) ③	上手、優秀	4 (2) ③	不明、正確		
2 (2) ④	—	4 (2) ④	—		
2 (3) ①	—	4 (3) ①	—		
2 (3) ②	対等	4 (3) ②	不利		
2 (3) ③	—	4 (3) ③	—		
2 (3) ④	—	4 (3) ④	—		
2 (4) ①	—	4 (4) ①	—		
2 (4) ②	共通、無用、同一	4 (4) ②	反対、不幸、 無知、無礼、 主要、無事		
2 (4) ③	—	4 (4) ③	便利、孤独、 静寂、得意、		

			不便		
2 (4) ④	—	4 (4) ④	詳細		

〈付録四〉 [形容動詞語彙メンバーが示す統語的特徴による段階わけ]

語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
一段階					
活発	形動	活発な子供・ 議論	×	○	×
綺麗 (奇麗)	形動	綺麗な花・女性	×	○	×
立派	形動	立派な邸宅・ 業績・大人	×	○	×
大切	形動	大切な書類・ 条件	×	○	×
柔軟	形動	柔軟な態度	×	○	×
濃厚	形動	濃厚な香り・牛乳	×	○	×
急激	形動	急激な変化	×	○	×
意外	名・形動	意外な展開	×	○	×
深刻	名・形動	深刻な表情	×	○	×
大胆	名・形動	大胆なデザイン	×	○	×
貧弱	名・形動	貧弱な体躯	×	○	×
嚴重	名・形動	嚴重な監視	×	○	×
強引	名・形動	強引なやり方	×	○	×
有力	形動	有力な候補	×	○	×
豊富	名・形動	豊富な資源・知識	×	○	×
簡易	名・形動	簡易な包装	×	○	×
豪華	名・形動	豪華な衣装	×	○	×
奇妙	名・形動	奇妙な現象	×	○	×
器用	名・形動	器用な人	×	○	×
気楽	名・形動	気楽な身分	×	○	×

語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
露骨	名・形動	露骨な干渉	×	○	×
賢明	名・形動	賢明な処置	×	○	×
急速	名・形動	急速な変化	×	×	×
複雑	名・形動	複雑な気持ち・仕 組み	×	○	×
簡単	名・形動	簡単な説明	×	○	×
強烈	名・形動	強烈な個性	×	○	×
明白	名・形動	明白な証拠	×	○	×
明確	名・形動	明確な指示	×	○	×
明朗	名・形動	明朗な青年・生活	×	○	×
明瞭	名・形動	明瞭な発音	×	○	×
呑気	名・形動	呑気な人	×	○	×
率直	名・形動	率直な意見	×	○	×
軽快	名・形動 (スル)	軽快なリズム	×	○	×
敏感	名・形動	敏感な肌	×	○	×
単純	名・形動	単純な機械	×	○	×
丁寧	名・形動	丁寧な言葉遣い	×	○	×
堅実	名・形動	堅実な手段	×	○	×
有望	名・形動	有望な研究者	×	○	×
極端	名・形動	極端な言い方	×	○	×
健全	名・形動	健全な発達	×	○	×
円滑	名・形動	円滑な経営	×	○	×
新鮮	名・形動	新鮮な空気・果物	×	○	×
利口	名・形動	利口な犬	×	○	×
上手	名・形動	上手な人	×	○	×
無難	名・形動	無難な日	×	×	×

完全	名・形動 (スル)	完全な形	×	×	×
有益	名・形動	有益なアドバイス	×	×	×
顕著	形動	顕著な業績	×	×	×
夢中	名・形動		×	×	×
無残	名・形動	無残な光景	×	×	×
有名	名・形動	有名な俳優	×	×	×
旺盛	名・形動	旺盛な好奇心	探究心 旺盛の 子供	○	×
確実	名・形動	確実な情報	当選確 実の発 表	○	×
著名	名・形動	著名な芸術家	海外著 名の作 家	×	×
主要	名・形動	主要なメンバー・ 事項	主要の 砲身・ 割り面	×	×
優秀	名・形動	優秀な人材	成績優 秀の人	○	学術優秀を認める
不良	名・形動	不良な品	動作不 良の修 理・体 調不良 の人	×	○○不良を訴える・起こす

二段階					
語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
曖昧	名・形動	曖昧な答え	曖昧の部 分・答え	○	×
巧妙	名・形動	巧妙な手口	巧妙の一言	○	×
粗末	名・形動	粗末な家・食 事	粗末のもの の・垣	○	×
懸命	形動	懸命な努力	懸命の努 力・闘い・ 調整	○	×
重要	名・形動	重要な地域	重要な課題	○	×
容易	名・形動	容易なこと	容易の業	○	×
良好	名・形動	良好な成績	～良好の商 品	○	×
巨大	名・形動	巨大な船体	巨大のもの	○	×
微妙	名・形動	微妙な関係	微妙の味わ い	○	×
重大	名・形動	重大な局面	〇〇重大の 仕事(責任)	○	×
広大	名・形動	広大な家屋敷	広大の領土	○	×
独特	名・形動	独特な(の)雰囲気		○	×
沢山	名・形動	な(の)贈り 物	沢山のこ と・お店	×	×
一様	名・形動	一様な行動	一様の感 想・起因	×	×
特異	名・形動	特異な現象	特異の才能	×	×
特殊	名・形動	特殊な技能・ 原理	特殊の関 係・地位	×	×

語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
適当	名・形動 (スル)	適当な土地・ 返事	適 当 な 時 期・場所	×	×
同一	名・形動	同一な存在・ 扱い	同 一 の 条 件・内容・ 効果	×	×
正当	名・形動	正当な(の)理由		×	×
正式	名・形動	正式な(の)要請・名称		×	×
独自	名・形動	独自な(の)文体		×	×
直接	名・形動 (スル)	直接的な(の)交渉		×	×
同様	名・形動	同様な(の)手口		×	×
無数	名・形動	無数な(の)星		×	×
適度	名・形動	適度な(の)運動・湿度		×	×
肝心	名・形動	肝心な(の)話		×	×
適宜	名・形動	適宜な(の)処理		×	×
共通	名・形動 (スル)	共通な意見	共通の理解	×	〇〇が共通をいたす
対等	名・形動	対等な(の)立場		×	〇〇対等を基調とする
無用	名・形動	無用な(の)臓器		×	〇〇無用を提言する
三段階					
語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
有効	名・形動	有効な手段	〇〇有効の切 符(2年)	×	〇〇の有効を認める・主張す る
有利	名・形動	有利な取引	〇〇有利の 時代	○	〇〇有利を強調する
可能	名・形動	実現可能な(の)計画		×	〇〇可能を信じる・必要とす る・説く



語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
不明	名・形動	不明な(の)点		×	〇〇の不明を恥じる
好調	名・形動	好調な出足	×	×	好調を維持する・支える
安泰	名・形動	安泰な国	安泰の時代	×	安泰を祈る・保つ・図る
地味	名・形動	地味な服装	×	×	地味を豊かにする・肥やす
純情	名・形動	純情な少年	×	○	若者の純情を引き出す
贅沢	名・形動 (スル)	贅沢な暮ら し・望み	×	○	贅沢を尽くす・言う
愉快	名・形動	愉快な話	×	○	愉快を感じる
素朴	名・形動	素朴な疑 問・人柄	×	○	素朴を装う
熱心	名・形動 (スル)	熱心な仕事 ぶり	×	○	熱心をもつ
強力	名・形動	強力な味方	強力な男	○	強力をもつ・得る
適切	名・形動	適切な表現	×	○	適切を欠く
順調	名・形動	順調な売り 行	×	○	順調を祈る
幼稚	名・形動	幼稚なアイ デア	×	○	表現の幼稚を超える
寛容	名・形動 (スル)	寛容な態度	×	○	寛容を示す
冷酷	名・形動	冷酷な男	×	○	冷酷を極める・演じる?
正確	名・形動	正確な時刻	×	○	正確を期する
健康	名・形動	健康な肉体	×	○	健康を保つ 健康がすぐれない
清潔	名・形動	清潔な服	×	○	清潔を心がける・維持する 清潔が保たれる・一番
親切	名・形動	親切な応対	×	○	親切を無にする

語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
単調	名・形動	単調な毎日	×	○	単調を嫌う
公平	名・形動	公平な判定	×	○	公平を期する
重宝	名・形動 (スル)	重宝な道具	×	○	重宝を奪う・飾る
阿呆	名・形動	阿呆な話	×	○	阿呆を装う
幸福	名・形動	幸福な人生	×	○	幸福を祈る
窮屈	名・形動	窮屈な服	×	○	窮屈を感じる
冷静	名・形動	冷静な判断	×	○	冷静を取り戻す・保つ
忠実	名・形動	忠実な臣下	×	○	忠実を誓う
面倒	名・形動	面倒な手続き・こと	×	○	面倒を起こす・願う
危険	名・形動	危険な作業	×	—	危険を冒す・伴う・回避する 危険が迫る・ある
幸運	名・形動	幸運な人	×	—	幸運を招く・もたらす・呼ぶ 幸運が集まる
安全	名・形動	安全な隠れ家	安心安全の農産物・建物作り	—	～の安全を祈る 安全を保障する
四段階					
語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
反対	名・形動 (スル)	反対な方向	反対の方向・立場・生き方	×	○○反対を主張する
必要	名・形動	必要な(の)品々		×	○○必要を感じる
無効	名・形動	無効な(の)もの		×	～の無効を確認する・訴える
神秘	名・形動	神秘的な美	神秘の扉・力	○	宇宙の神秘を探る
静寂	名・形動	静寂な境内	静寂の世界	○	夜の静寂を破る
高価	名・形動	高価な品物	○○不明のトランプル	×	高価を貪っていた

語彙	品詞性	な	の	さ	格助詞
不便	名・形動	不便な家	〇〇不便の地 (交通)	〇	不便を感じる・解消する
残念	名・形動	残念なこと	残念のお知らせ	〇	残念をする
平凡	名・形動	平凡な作品	平凡の常人	〇	平凡を感じる・逸する
得意	名・形動	得意な顔	得意の絶頂	〇	得意を伸ばす
孤独	名・形動	孤独な生活	孤独の戦士・ 期間・日	〇	孤独を表す・癒す・感じる
便利	名・形動	便利な所	便利の構造	〇	便利をもたらす
平気	名・形動	平気なふり	平気の人	×	平気を装う
無礼	名・形動	無礼な態度	無礼の一言	×	無礼をする・咎められる
妥当	名・形動 (スル)	妥当な方法	妥当の根拠	×	妥当を欠く・もたらす
本気	名・形動	本気な人	本気の様子・ 話・告白	×	本気を出す 本気で取り組む
純粹	名・形動	純粹な(の)アルコール・ 秋田犬		〇	純粹を演じる・象徴する
慎重	名・形動	慎重な(の)態度		〇	慎重を期する・要する
不幸	名・形動	不幸な境遇	不幸の子・状 況	×	～の不幸を聞かされる 不幸を背負う・許す
無知	名・形動	無知な人間	無知の分野・ 領域	×	～の無知を知る・差し置く 無知を恥じる・自覚する
無事	名・形動	無事な姿・ 出産	無事のお便り	×	～の無事を祈る 無事を知らせる
不利	名・形動	不利な(の)状態		×	不利を被る
緊急	名・形動	緊急な(の)用事		×	緊急を要する
平等	名・形動	平等な(の)機会		×	平等を欠く・実現する
正常	名・形動	正常な(の)状態		×	～の正常を計る・維持する

				正常を保つ・示す
多忙	名・形動	多忙な(の)身・日	×	～の多忙を気遣う 多忙を極める
水平	名・形動	水平な(の)状態	—	～の水平を測る・保つ 水平をとる・確認する・保つ
詳細	名・形動	詳細な(の)事情	—	～の詳細を聞く・練る 詳細を見る・調べる・語る

〈付録五〉

问卷调查封面（調査①）

@中国 X 大学

2012 年 12 月 19 日

注意：

- ① 此次调查并非考试、不记名且完全不影响个人成绩、请大家心情放松、冷静答题。为掌握当前日语学习者的真实水平、调查对象切勿查看字典或交头接耳。
- ② 此次调查用幻灯片放映、每道题 7 秒跳过、答题纸上只有题号、请务必看清题号、对号判断正误、以免引起混乱。

1. 年龄\_\_\_\_\_

2. 性别：男 · 女

3. 民族\_\_\_\_\_

4. 家乡：\_\_\_\_\_省\_\_\_\_\_市

5. 日语能力测试\_\_\_\_\_级合格

6. 平均每天学习日语\_\_\_\_\_小时

7. 有无日本留学经验\_\_\_\_\_

（有留学经验者请回答、留学时间\_\_\_\_\_年\_\_\_\_\_月）

8. 除课堂学习外、平时用什么方法学习日语(画圈选择或填写)

看日剧、 听日语歌曲、 看日本漫画、 参加日语角、 写日记、 其他\_\_\_\_\_

〈付録六〉

調査後アンケート（中①のみ）

这套问卷调查已经做完了、最后请大家最后回答几个问题。每个问题都有五个选项、请你用圆圈符号标示出最符合心理感受的一项。

1. 你能够明确判断问卷调查 1 中格助词接续表现的正誤吗？  
①能够非常明确判断    ②可以判断    ③不好说    ④不能判断    ⑤完全不能区分
  
2. 你能够明确区分形容动词和名词的词性吗？  
①能够非常明确判断    ②可以区分    ③不好说    ④不能区分    ⑤完全不能区分
  
3. 你能否明确区分问卷调查 2 中连体形「な」和「の」的使用吗？  
①能够非常明确判断    ②可以区分    ③不好说    ④不能区分    ⑤完全不能区分
  
4. 你觉得日语形容动词的学习难吗？  
①非常难    ②比较难    ③一般    ④简单    ⑤非常简单
  
5. 你对学习日语有兴趣吗？  
①非常感兴趣    ②感兴趣    ③一般    ④兴趣不大    ⑤完全没有兴趣
  
6. 在课堂教学中、日语教师是否向大家明确指出过形容动词和名词的不同点？  
①明确指出过    ②经常明确指出    ③偶尔提到    ④很少提到    ⑤完全没有提到
  
7. 你觉得有必要将形容动词的语法特点以及和名词的区别在课堂上进行詳細讲解吗？  
①非常有必要    ②有必要    ③不好说    ④必要性不大    ⑤完全没有必要

非常感谢您对本次调查的参与和支持！！

〈付録七〉

アンケート調査表紙（調査②）

@福岡

注意：

- ① 今回の調査は試験ではなく、個人成績に一切影響が出ないため、お気軽に教えてください。
- ② 今回の調査はパワーポイント(PPT)形式で出題され、1問ずつ7秒間で提示され、その後、画面が自動的に次の問題に転換されます。なお、解答用紙には問題番号だけが書かれているため、混乱を起ささないように必ず問題の番号を合わせてからお答えください。

1. 年齢 \_\_\_\_\_

2. 性別：男 ・ 女

3. 国籍 \_\_\_\_\_

4. 母語 \_\_\_\_\_

5. 旧日本語能力試験 \_\_\_\_\_ 級合格

6. 日本での滞在時間 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月間

7. 日本語はいつから勉強を始めましたか。

\_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月

8. 学校 \_\_\_\_\_

専攻 \_\_\_\_\_

〈付録八〉 格助詞との共起による文法性判断テスト(PPTによる問題)

日本語の格助詞「を」は名詞にしか後接できない(例:ご飯を食べる○、元気を出す○)、形容動詞に後接できない(例:綺麗をする×、活発をする×)。以下の問題は1つずつ7秒間だけ提示され、提示番号と合わせてから文法性の正誤判断をしてください。横線に正しいのを「○」、間違っているのを「×」で書いてください。

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 曖昧を変える   | 21 粗末をする   |
| 2 無事を知らせる  | 22 無知を悟る   |
| 3 好調を支える   | 23 公平を期する  |
| 4 立派を変える   | 24 大切に扱う   |
| 5 対等を感じる   | 25 重要を感じる  |
| 6 重大を考える   | 26 広大を好む   |
| 7 不便を解消する  | 27 孤独を表す   |
| 8 巨大を変える   | 28 容易を見せる  |
| 9 平凡を感じる   | 29 幸運を招く   |
| 10 微妙を察する  | 30 深刻を感じる  |
| 11 不利を被る   | 31 不幸を嘆く   |
| 12 無礼を詫びる  | 32 清潔を保つ   |
| 13 単調を嫌う   | 33 幸福を祈る   |
| 14 安泰を願う   | 34 本気を出す   |
| 15 詳細を見る   | 35 安全を保障する |
| 16 柔軟を対応する | 36 巧妙を楽しむ  |



17 健康を維持する

18 強引を進める

19 単純を装う

20 顕著を変える

37 危険を伴う

38 呑気を暮す

39 嚴重をする

40 急激を変える

〈付録九〉 連体形「な」と「の」の適用による文法性判断テスト(PPTによる問題)

日本語の形容動詞は名詞を修飾する際連体形「な」が使われる(「綺麗な部屋、敏感な肌」)。しかし、名詞修飾名詞の場合、連体形「の」が用いられる(「永遠の愛、匿名の電話」)。場合によって、「な」と「の」両方とも省略できる(「敏感肌、匿名電話」)。以下の問題は1つずつ7秒間だけ提示され、提示番号と合わせてから文法性の正誤判断をしてください。横線に正しいのを「○」、間違っているのを「×」で書いてください。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 本気の人   | 61. 曖昧関係  |
| 2. 対等な関係  | 62. 対等の関係 |
| 3. 微妙関係   | 63. 本気人   |
| 4. 曖昧の関係  | 64. 幸福な人生 |
| 5. 無知な人間  | 65. 微妙の関係 |
| 6. 公平な裁判  | 66. 単調の生活 |
| 7. 幸福の人生  | 67. 本気な人  |
| 8. 安全場所   | 68. 強引方法  |
| 9. 不便な家   | 69. 詳細内容  |
| 10. 無事な顔  | 70. 好調出足  |
| 11. 単調生活  | 71. 立派な業績 |
| 12. 巨大な影響 | 72. 巨大の影響 |
| 13. 立派の業績 | 73. 幸福人生  |
| 14. 大切な書類 | 74. 不便の家  |
| 15. 対等関係  | 75. 無知の人間 |
| 16. 強引の方法 | 76. 曖昧な関係 |
| 17. 単調な生活 | 77. 平凡な人生 |
| 18. 巨大影響  | 78. 健康身体  |
| 19. 巧妙の方法 | 79. 平凡人生  |
| 20. 単純な機械 | 80. 公平裁判  |
| 21. 不便家   | 81. 無事の顔  |

- |           |            |
|-----------|------------|
| 22. 不幸生活  | 82. 単純の機械  |
| 23. 平凡の人生 | 83. 顕著な業績  |
| 24. 重要な地域 | 84. 不幸の生活  |
| 25. 好調の出足 | 85. 危険事    |
| 26. 孤独の生活 | 86. 孤独な生活  |
| 27. 不幸な生活 | 87. 立派業績   |
| 28. 重大の過失 | 88. 重大な過失  |
| 29. 健康な体  | 89. 顕著業績   |
| 30. 柔軟態度  | 90. 重大過失   |
| 31. 深刻な表情 | 91. 呑気人    |
| 32. 呑気の人  | 92. 単純機械   |
| 33. 顕著の業績 | 93. 深刻の表情  |
| 34. 無事顔   | 94. 柔軟の態度  |
| 35. 巧妙な方法 | 95. 公平の裁判  |
| 36. 柔軟な態度 | 96. 重要の地域  |
| 37. 深刻表情  | 97. 呑気な人   |
| 38. 健康の体  | 98. 孤独生活   |
| 39. 好調な出足 | 99. 清潔な服   |
| 40. 容易の事  | 100. 粗末の食事 |
| 41. 幸運女神  | 101. 広大な土地 |
| 42. 危険の事  | 102. 安泰な国  |
| 43. 詳細な内容 | 103. 容易な事  |
| 44. 無知人間  | 104. 危険な事  |
| 45. 微妙な関係 | 105. 不利の立場 |
| 46. 不利な立場 | 106. 重要地域  |
| 47. 急激変化  | 107. 急激の変化 |
| 48. 広大土地  | 108. 嚴重監視  |
| 49. 嚴重の監視 | 109. 粗末な食事 |
| 50. 幸運の人  | 110. 安泰の国  |
| 51. 大切書類  | 111. 大切の書類 |

- |           |            |
|-----------|------------|
| 52. 無礼の態度 | 112. 不利立場  |
| 53. 安泰国   | 113. 無礼な態度 |
| 54. 広大の土地 | 114. 幸運な人  |
| 55. 急激な変化 | 115. 厳重な監視 |
| 56. 清潔の服  | 116. 安全の場所 |
| 57. 安全な場所 | 117. 詳細の内容 |
| 58. 粗末食事  | 118. 無礼態度  |
| 59. 強引な方法 | 119. 容易事   |
| 60. 巧妙方法  | 120. 清潔服装  |

〈付録十〉

アンケート調査表紙

調査対象：中国語を母語とする日本語学習者

調査場所：中国X大学

2009年9月28日

被験者情報

1. 年齢：

2. 故郷：\_\_\_\_\_省\_\_\_\_\_市

3. 民族：\_\_\_\_\_族

4. 学部\_\_\_\_\_年生

5. 語学レベル：旧日本語能力試験1級・2級・3級・4級 合格/未受験

〈付録十一〉

アンケート I

以下の語句の（ ）の中に「な」を入れるのが自然ですか、「の」を入れるのが自然ですか、それとも「な・の」両方を入れた方が自然ですか。例に習って、当てはまるものを○で囲んで、15分程度気軽に回答してください。

例：

簡単 (な)の/両方) 方法 (「な」が自然)  
本当 (な/の)両方) こと (「の」が自然)  
無数 (な/の/両方) 星 (「な・の」両方とも自然)

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1 強烈 (な/の/両方) 個性  | 2 個別 (な/の/両方) 感想    |
| 3 無償 (な/の/両方) 奉仕  | 4 有名 (な/の/両方) お寺    |
| 5 大胆 (な/の/両方) 行動  | 6 貴重 (な/の/両方) 体験    |
| 7 一般 (な/の/両方) 人々  | 8 豊富 (な/の/両方) 資源    |
| 9 万能 (な/の/両方) 天才  | 10 唯一 (な/の/両方) 要求   |
| 11 勤勉 (な/の/両方) 学生 | 12 絶好 (な/の/両方) チャンス |
| 13 最新 (な/の/両方) 情報 | 14 一流 (な/の/両方) 評論家  |
| 15 永遠 (な/の/両方) 愛  | 16 猛烈 (な/の/両方) 寒波   |
| 17 濃厚 (な/の/両方) 香り | 18 有効 (な/の/両方) 手段   |
| 19 率直 (な/の/両方) 意見 | 20 奇妙 (な/の/両方) 体験   |
| 21 公共 (な/の/両方) 建物 | 22 柔軟 (な/の/両方) 態度   |
| 23 無名 (な/の/両方) 小島 | 24 未婚 (な/の/両方) 方    |
| 25 純粹 (な/の/両方) 心  | 26 円滑 (な/の/両方) 運営   |
| 27 合理 (な/の/両方) 原則 | 28 慢性 (な/の/両方) 痛み   |
| 29 親切 (な/の/両方) 応対 | 30 匿名 (な/の/両方) 発言   |
| 31 初級 (な/の/両方) 技  | 32 豪華 (な/の/両方) ホテル  |

33 原始 (な/の/両方) 地球

34 巧妙 (な/の/両方) 手口

35 基本 (な/の/両方) 料理

36 無色 (な/の/両方) 液体

37 未知 (な/の/両方) 分野

38 簡潔 (な/の/両方) 表現

39 旺盛 (な/の/両方) 好奇心

40 貧弱 (な/の/両方) 体躯

(バージョンⅡ～Ⅴは略)

〈付録十二〉 [KOTONOHA コーパスによる漢語系形容動詞の文法用法に関わる用例]

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
(4) 曖昧													
2	何となく	曖昧の	部分あり、明確を欠きところありしやに思う。	真崎甚三郎(著)	1870	男	書籍/2 歴史	「文芸春秋」にみる昭和史		第1巻	文芸春秋 編	文芸春秋	1988
3	これが	曖昧の	答えた。	風魔忍(著)	1960	男	書籍/0 総記	ハチャハチャ神との対話			風魔忍 著	碧天舎	2005
大胆(1)	なし												
円滑(1)	なし												
嚴重(1)	なし												
強引(1)	なし												
豊富(1)	なし												
確実(2)													
1	これまで優勝	確実の	位置につけていながら、優勝のハートは「競者」「争かから優勝者へ」を	ジョン・フェインSTEIN(著)/大地舜(訳)	1950/ 1940	男/ 男	書籍/7 芸術・美術	苦悩の散歩道	PGAツアー・トップたちの実像ニック・ファルド		ジョン・フェインSTEIN著;大地舜 訳	小池書院	1996
軽快(1)	なし												
顕著(1)	なし												
健全(1)	なし												
奇妙(1)	なし												
奇麗(1)	なし												
器用(1)	なし												
巧妙(4)													
表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	にブームで売れ、消えていくアイドルより、長く生き残れる可能性があるんですよ」一	巧妙の	ひとことだ。さすがだよ。	今村莊三(著)		男	書籍/7 芸術・美術	笑う大阪人			今村莊三 著	東方出版	1998
強烈(1)	なし												
明白(1)	なし												
明確(1)	なし												
明朗(1)	なし												
明瞭(1)	なし												
猛烈(1)	なし												
呑気(1)	なし												
濃厚(1)	なし												
旺盛(2)													



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	探究心	旺盛の	彼はあちこち探りまわる	渡辺麻紀(著)/相馬学(著)	/	女/男	雑誌/総合/一般	Weeklyびあ		2005年7月28日号(第34巻第29号、通巻1111号)		びあ	2005
4	精力	旺盛の	スカルノはこの戒律だけは守らない。	深田祐介(著)	1930	男	書籍/9文学	神鷲商人		下	深田祐介 著	文芸春秋	2001
立派(1)	なし												
粗末(4)													
表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	「巖」というのは	粗末の	もの、まずいもの、悪いものことであり、	青山俊董(著)	1930	女	書籍/1哲学	道元禅師に学ぶ人生	典座教訓をよむ		青山俊董 著	日本放送出版協会	2005
4	苟も学校の生徒たる以上は如何に	粗末の	垣でも垣と云う名がついて、分界区域さえ判然すれば決して乱入される気遣はない	夏目漱石(著)	1860	男	書籍/9文学	吾輩は猫である			夏目漱石 著	新潮社	2003
5	原稿は録音のため真に自己の手覚として記せしものにて、他人はこれを読み下し難きほど	粗末の	ものであった。	真崎甚三郎(著)	1870	男	書籍/2歴史	「文芸春秋」にみる昭和史		第1巻	文芸春秋 編	文芸春秋	1988
6	も随分楽だっただろうと今更に始まらないが、酒に全部変ってしまつたお	粗末の	一語だ。	和久田誠男(著)		男	書籍/0総記	古本屋の来客簿	店主たちの人間観察		高橋輝次 編	燃焼社	1997

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
率直(1)	なし												
大切(1)	なし												
柔軟(1)	なし												
微妙(4)													
2	剣術もおなじで、この稽古の積み、師匠の教えをそらしておれば、おから	微妙の	域へ立ちのるものじゃないを、つめて持った者にも、簡明を得た助言を	津本陽(著)	1920	男	書籍/9 文学	津本陽 歴史長 篇全集		第12巻	津本陽 著	角川書 店	1999
3	の洗練されたみやびやかな言葉を、調べる、正しく、楽器と松の感応する	微妙の	瞬間が捉えられている。	清水好子(著)	1920	女	書籍/3 社会科学	人物日 本の女 性史		第1巻		集英社	1977
5	前線ができるかできないか	微妙の	こともしばしばである。	嶋村克(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	天気の不 思議がわ かる本			嶋村克、 山内豊太 郎 著	廣済堂 出版	2002
独特(4)	(1700件用例の中一部だけ表示)												
表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	年齢に応じて身につけていく日本語	独特の	使い方が、この生活身につかないのです。	箕浦康子(著)	1930	女	書籍/3 社会科学	子供の異 文化体 験			箕浦康 子 著	思索社	1991
4	角的なガラス温室が連なる風景は、異様ではあるが、幾何学的な模様を作り出して、	独特の	美観にもなっている。	中村靖彦(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	遺伝子組 み換え食 品を検証 する	ジャー ナリス トの取 材ノー ト		中村靖 彦 著	日本放 送出版 協会	1999

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	う。シェイクスピアは、音楽のように心地よい台詞をた「無韻詩」という	<b>独特の</b>	韻文形式を用いたといわれる	横井久美子(著)	1940	女	書籍/0 総記	ゆるゆるふりくり			横井久美子 著	新日本出版社	2002
9	「森の中には殺菌力を持つ	<b>独特の</b>	芳香がたよい	宮崎良文(著)		男	書籍/6 産業	木と森の快適さを科学する			宮崎良文 著	全国林業改良普及協会	2002
10	生物反応を利用する治療には	<b>独特の</b>	瘻があり、	パレンチナ・オスタペンコ(著)/宮澤正顯(著)/林昭(著)	/ 1950/	女/男/ 男	書籍/4 自然科学	からだをなおす			上田公介, 中井吉英 編	昭和堂	2003
11	風日に乾き古きあれ細部まで造りて	<b>独特の</b>	風格にあり。	藤氏晴風(著)	1930	男	書籍/2 歴史	西域道遙記			藤氏晴風 著	白地社	2004
12	最高峰の高級腕時計というポジションと	<b>独特の</b>	スタイルを維持しながらもより身近な存在になりつつあるデイト。	津久井幹永(著)/高橋智(著)	1970/	男/男	書籍/分 類なし	ロレックスバイヤーズガイド				パウハウス	2004
<b>独自(4)</b>	(2561件用例の中一部だけ表示)												
2	クレーム・ドカシス・ドジョン完熟シスの実を、	<b>独自の</b>	製法によってフルーティで甘さひかえめに仕上げたリキュール。	実著者不明			書籍/5 技術・工学	リキュール&カクテル大事典	決定版		渡辺一也 監修	ナツメ社	2004
3	S O N Y に限ってはメモステックという	<b>独自の</b>	メモリーを使用するため、こうした機器が使いません。	園田誠(著)	1960	男	書籍/7 芸術・美術	デジタルカメラ100の技	読んで納得！うまくなる！		園田誠 著	技術評論社	2001

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	求められているのは他社見合いでない、独自の判断に基づく、	独自の	取材であり、独自の紙面だろう。	宮沢之祐(著)		男	書籍/3社会科学	報道される側の人権	メディアと犯罪の被害者・被疑者		飯室勝彦, 田島泰彦, 渡邊眞次   編	明石書店	1999
5	また銘柄の選択も(株)アスリム	独自の	判断で行なっており、				Yahoo! ブログ / Yahoo! サービス / Yahoo! ブログ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
7	上杉軍の強さの秘訣は、上杉軍	独自の	掟があつたからだ。	龍虎俊輔(著)	1970	男	書籍/2歴史	川中島合戦	徹底検証・徹底分析戦国期の源平合戦		龍虎俊輔   著	文芸社	2004
8	妄想, 体格・性格, 精神療法に	独自の	学問体系を打ち立てた。	蘭香代子(著)	1940	女	書籍/3社会科学	介護福祉士養成講座		7	福祉士養成講座編集委員会   編	中央法規出版	2001
同様(4) (2626件用例の中一部だけ表示)													
2	ローンの返済などの多くをその銀行の口座を通じている」という程度の意味です。	同様の	意味で、さまざまな「メ×××」が豊富に存在します。	J・マーク・ラムザイヤー(著)/三輪芳朗(訳)	1950/ 1940	男/ 男	書籍/3社会科学	日本経済論の誤解	「系列」の呪縛からの解放		三輪芳朗, J.マーク・ラムザイヤー   著	東洋経済新報社	2001
3	呪術師の配偶者がこれにあたるというが、	同様の	誼は著者も収めている。	春日直樹(著)	1950	男	書籍/2歴史	太平洋のラスプーチン	ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学		春日直樹   著	世界思想社	2001
4	立法的に解決され、一九九の改正地方自治法によってさらに明確に特別区は市と	同様の	基礎的 地方公共団体とされるところである。	妹尾克敏(著)	1950	男	書籍/3社会科学	新基本法学			手島孝   監修; 安藤高行   編	法律文化社	2002

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	山恵也『日本の経営構造とピエ』日本評論社、一九八九年、一六二ページ	同様の	ことを「日経組織を解しよと植村は、本組織の三、日本の特徴としてこの	大野正和(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	過労死・過労自殺の心理と職場			大野正和 著	青弓社	2003
6	ことはメリッが多いにも思える。しかし、気軽に発せられるようになったため、	同様の	図面を数社に送っても見取りを取り、価格競争の末に一番安い工場へ注文が流れるという	門田和雄(著)	1960	男	書籍/3 社会科学	実践情報科教育法	「ものづくり」から学ぶ		坂口謙一 ほか 編著	東京電機大学出版社	2004
2	今は外国煙草も多種だが、吸ってみるとみな	一様の	味がする。	右達俊郎(著)	1920	男	書籍/9 文学	桜橋			右達俊郎 著	本の泉社	2003
5	るが、一区画に集中して住宅建設が行われる一方、広範なオープンスペースがあるなど、	一様の	市街化が生じていない。				白書/国土交通	建設白書	昭和57年版		建設省	大蔵省印刷局	1982
6	いまその詩の多様性が、彼の眼には	一様の	努力の等質の所産と映る。	加藤典洋(著)	1940	男	書籍/9 文学	批評へ			加藤典洋 著	弓立社	1987
8	子どもたちを守るには地域において連携を強化しなければならないというが	一様の	意見でした				Yahoo! ブログ/学校と教育/学校	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
懸命(4)	(89件用例のうち一部だけ表示)												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	由な政策展開できるような基礎をつくるのが今でございまして、我々としては、	懸命の	努力を国民の御理解をいたしてやりたいとおっています。	国務大臣（中曾根康弘君）			国会会議録/参議院/本会議	国会会議録		第104回国会			1986
9	故障が癒えたシーズン後半から戦列に復帰。	懸命の	スイングを見せ、夏場は代打で連続安打を打ち、好機を拡大する渋い一打を見せた。	京都新聞社（著）/今岡誠（著）/内川和則（著）	/ /	/ 男 / 男	新聞/地方紙	京都新聞	朝刊	2005/9/30		京都新聞社	2005
10	ストは仕方がないけど、やはり試合はいですね」と、左翼広席でファンと	懸命の	声援を送っていた。	中国新聞社（著）			新聞/地方紙	中国新聞	朝刊	2004/9/21		中国新聞社	2004
14	体調を一変一激しい下痢の症状を治らず動物病院へ入院して点滴をはじめる	懸命の	治療の甲斐なく、僅か2日の晩に亡くなってしまった。	桑原たかし（著）	1940	男	雑誌/総合/レジャー/趣味	愛犬の友		2001年11月号（第50巻第11号、通巻609号）		誠文堂新光社	2001
17	十九世紀以来の入植ユダヤ人の	懸命の	干拓によって、いまのガララヤはパレスチナで最高の農耕地となっている。	小塩節（著）	1930	男	書籍/1哲学	聖書に聴く			小塩節   著	青娥書房	2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
18	原因は右前輪の空気圧低下とわかり、8秒でコースに復帰し、その後ベルガーは	懸命の	追いで6位でゴールする	中島秀之(著)		男	書籍/分類なし	Car magazine memorie s Ferrari		2		ネコ・パブリッシング	2004
20	[中略]是の弁を推して、以て名実を正天下を化せんと欲す(跡府と	懸命の	弁護を試みた。	浅野裕一(著)	1940	男	書籍/1哲学	諸子百家			浅野裕一 著	講談社	2004
21	“霧”そのものはワースとヴァネッサによる	懸命の	作業で除去できなかったもの、その後始末は煩瑣を極めた。	吉田直(著)	1960	男	書籍/9文学	トリニティ・ブラッド	reborn on the Mars	6	吉田直 著	角川書店	2003
25	忠敬は天明の飢饉に際して、佐原村から餓死者の多いよう	懸命の	工夫をこらし、同時に巨万の利益をあげた。	加来耕三(著)	1950	男	書籍/2歴史	日本創始者列伝	歴史にみる先駆者の条件		加来耕三 著	学陽書房	2002
30	坪内衆が引きなかつた洲侯築壘を、と小六右衛門に納得させるのに、藤吉郎は	懸命の	弁舌をふるった。	津本陽(著)	1920	男	書籍/9文学	下天は夢か		2	津本陽 著	日本経済新聞社	1989
31	センターでは、浅沼助教授を始め多くの専門医たちの	懸命の	処置により一命は取りとめた	志賀貢(著)	1930	男	書籍/9文学	主治医	文庫書下ろし/長編小説		志賀貢 著	光文社	2005
急激(1)	なし												
無数(4)	(858件用例の中一部だけ表示)												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	そのことが、多くの詩人や文人たちの心を動かしたに違いない。	無数の	詩や戯曲など文学作品が後世つづられた	実著者不明			書籍/2 歴史	NHK大黄河		第2巻		日本放送出版協会	1986
2	的な挑戦と馬槍試合、一般的な決闘、特に「御前試合」、選抜された同数の戦士による	無数の	競技のような応酬に明らかである	フロイド・メイソン(著)/A・モンタギュー(著)/中野収(訳)	1920/ 1900/ 1930	男/男/ 男	書籍/3 社会科学	「非人間化」の時代			アシュレー・モンタギュー, フロイド・メイソン 著;中野収 訳	ティビーエス・ブリタニカ	1986
3	, 日本の各地で上映されたソ連映画, アレクサンデル・プトゥシコ監督の「石の花」は,	無数の	水晶がきらめく大きな洞穴が、舞台になっています。	中山勇(著)	1910	男	書籍/4 自然科学	石の文明と科学			中山勇 著	啓文社	1986
5	大多数の暗愚な人間どもは	無数の	謎に気つきもしない。現実がすべて思いこんでいる。	谷恒生(著)	1940	男	書籍/9 文学	妖少女	長編超伝奇小説		谷恒生 著	祥伝社	1986
6	気体のように稀薄な男が、いきなり漆黒の虚無と化し、その暗部から白くとぶ	無数の	雪片が、冷酷な殺意の刺をたぎらせてだれかかてきたのだ。	谷恒生(著)	1940	男	書籍/9 文学	妖少女	長編超伝奇小説		谷恒生 著	祥伝社	1986
7	無論、檜山が市場原を持ちこる過程にあつては	無数の	敵を葬らねばならなかった。	小林恭二(著)	1950	男	書籍/9 文学	小説伝・純愛伝			小林恭二 著	福武書店	1986
無残(2)													



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	「聖教の教えを知らず、また、浄土の教えも知らず、 <u>放逸</u>	<u>無慚</u>	<u>念仏者</u> の中には、悪はやりたいたげやれ、 <u>と</u> 言っている <u>と</u> いうことは、まったく許し難い	笠原一男(著)	1910	男	書籍/1 哲学	悪人正生 機を生きる	親鸞の 世界		梅原猛 ほか著	ブレジ デント 社	1995
深刻(1) 対等(3)	なし (168件用例の中一部だけ表示)												
2	よろしくお願 いします」 学内随 一の俊 英に、	<u>対等の</u>	<u>立場</u> で 激励さ れて、 キオは どうし ても押 されて いる。	中里 融司 (著)	1950	男	書籍/9 文学	星忍母 艦テン プレイ ブ		1	中里融 司 著	エンタ ープレ イン	2003
3	るわ、 国務長 官は入 ってくる わ、一 対四 急遽た でそ ありま すが、 こうの ものは	<u>対等の</u>	<u>国の外 交関係</u> ではそ もそ もでき ないこ じやな すか。	正森委 員			国会会 議録/ 衆議 院常 任委員 会	国会会 議録		第126回 国会			1993
4	「あ の車 で、 コン ピニ の前 に乗 り付 けた んだ 」と 頁一 とは、 今は	<u>対等の</u>	<u>口のき き方</u> をして いた。	竹河 聖(著)		女	書籍/9 文学	闇に光 る眼			竹河聖  著	角川書 店	1999
5	癒しと の夫 婦	<u>対等の</u>	<u>結婚</u> 長い結 婚生活 、夫婦 なら誰 しも難 しい要 求に頭 を抱え るもの である 。	ペッパ ー・シ ュワ ルツ(著) // 悦子 (訳)		女/女	書籍/3 社会科学	結婚の 新しい かたち	アメリ カの夫 婦57組 の生活		ペッパ ー・シ ュワ ルツ 著; 豊川 輝、け い悦 子、豊 川典子  訳	明石書 店	2003
6	刑事訴 訟法で 当事者	<u>対等の</u>	<u>原則</u> という が一体 どこま で認め られる	稲葉 (誠) 委員			国会会 議録/ 衆議 院常 任委員 会	国会会 議録		第108回 国会			1987

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア ア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者 等*	出版者	出版年	
7	として臨んでいるわけであり、一歩ゆずって中国と外交関係をひらけくわからだから、当然、	<b>対等の</b>	<b>立場</b> で握手しようとするのだが、中国側はそれを認めない。	松本健一(著)	1940	男	書籍/2 歴史	「日の丸・君が代」の話			松本健一 著	PHP研究所	1999	
<b>沢山(4)</b> (660件用例の中一部だけ表示)														
1	まず	<b>沢山の</b>	<b>こと</b> に興味を持つ事から始めて下さい。				Yahoo! 知恵袋/ 教養と 学問、 サイエ ンス/ 一般教 養	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005	
3		<b>沢山の</b>	<b>都市伝説</b> が存在します				Yahoo! 知恵袋/ 教養と 学問、 サイエ ンス/ 一般教 養	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005	
4	ビスカージャ出身の彼は○万ペソを超える財産と	<b>沢山の</b>	<b>銀</b> が採れる山の持ち主という資産家だった。	ベルナル・ディーアス・デル・カステイリョ(著)/小林一宏(訳)	1490/ 1930	男/ 男	書籍/2 歴史	メキシコ征服記		3	ベルナル・ディーアス・デル・カステイリョ 著;小林一宏 訳	岩波書店	1987	
6	パンツの姿は、とろどろ破れはしたが、身にはかすり傷ひとつ負っていません。	<b>沢山の</b>	<b>ドライバー</b> 、歩行者などが、狐につままれたような表情で、その姿を眺めた。	羽山信樹(著)	1940	男	書籍/9 文学	大統領の午前零時				羽山信樹 著	角川書店	1987
7	マンマーカーカス」・「MACY'S」に多数有ります! サプリメントは・・・ワイキキには	<b>沢山の</b>	<b>お店</b> が有りますが、お薦めは「KEY OF LIFE」と「NEOPAZA」です				Yahoo! 知恵袋/ 地域、 旅行、 お出か け/海外	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005	

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
8	歴史の研究者だから	沢山の	資料がある。	奈良本辰也(著)	1910	男	書籍/2 歴史	服部之総・人と学問			小西四郎, 遠山茂樹編	日本経済評論社	1988
適度(4)													
1		適度の	運動は筋力を高め、血管内の脂肪や汗を燃やして流すことで血液循環を良く、新陳代謝を	須藤和廣(著)	1940	男	書籍/5 技術・工学	めざせ!健康美容師	「美」は「快」を生み、「快」は「健康」を生む		須藤和廣 著	知道出版	2004
3	何かと便を図り、手伝わたり、伝ってくれたことには、大変感謝していますが、要は「	適度の	距離を置く」ということには、大変感謝していますが、要は「	舛添要一(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	母に襟あてをき	介護の日常		舛添要一 著	中央公論社	1998
4	方策を続けていくことはいかか存じます。臨調自身、財政規模の圧縮については	適度の	経済成長を前提とする提言である旨述べておられますし、経済がデフレ化する中で歳出	上田稔君			国会会議録/参議院/本会議	国会会議録		第104回国会			1986
6	ません。そこで、一つの考え方で、あまり具体的なイメージでもない、「	適度の	レベルの目標を明示する」ということあります。	海保博之(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	ヒューマンの心理学	医療・交通・原子力事故は起るのか		大山正, 丸山康則編	麗澤大学出版会; 廣池学園事業部(発売)	2001

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
11	風建物「泉殿」を配さしに灯ろうを組み、植え込み、遣（やり）水などを	<u>適度の</u>	<u>間隔</u> で加えてバランスをとる“庭の美”の表現に庭家が心血を注いだことがわ	中川登史宏(著)	1940	男	書籍/5 技術・工学	京都御所・離宮の流	転変のものがたり		中川登史宏 著	京都書院	1997
15	いまま急乾燥すれば、でんぷんがアルファ型に保たれている乾燥飯になる。乾燥飯は	<u>適度の</u>	<u>水</u> を加えて放置すれば、加熱しなくても飯になるし、また一度炊いてあるので、気圧の低	貝沼やす子(著)		女	書籍/5 技術・工学	調理実験			松元文子、吉松藤子 編	柴田書店	1997
16	能率的で快適な作業を行う空間で、	<u>適度の</u>	<u>ひろさ</u> と設備、効率的な動線、他室との連絡が重要である。				教科書/技術家 家庭/高	家庭基礎 分らしき 方とパー ナーシッ プ			宮本みち子 ほか著	実教出版株式会社	2006
17	かし私は、この美徳の本来の意味で、時に、この美徳によって得られるものために、	<u>適度の</u>	<u>謙虚さ</u> は、他徳にも栄誉ある位置を占めべきだ	ウィリアム・オスラー(著)/ 仁木久恵(訳)/ 日野原重明(訳)	1840/ 1930/ 1910	男/女/ 男	書籍/4 自然科学	平心静の心	オスラー博士講演集		オスラー 述; 日野原重明, 仁木久恵 訳	医学書院	2003
適宜(4)													
2	生のニシンの頭、内臓、尾、骨を、除き、それを水洗いしてから	<u>適宜の</u>	<u>大きさ</u> に切る。	小泉武夫(著)	1940	男	雑誌/教育・学 芸/文学 /芸術	小説宝石		2002年7月号(第35 巻第7号)		光文社	2002
3	第三、金銀は随意に之を分ち	<u>適宜の</u>	<u>分量</u> にして之を用ゆべしと云い、	福澤諭吉(著)	1830	男	書籍/1 哲学	福澤諭吉著作集		第6巻	福澤諭吉 著; 小室正紀 編	慶応義塾大学出版会	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	墨で塗抹するもよく、白紙を貼附するもよい。	適宜の	方法を適処に施す	吉田裕久(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	戦後初期国語教科書史研究	墨ぬり・暫定・国定・検定		吉田裕久 著	風間書房	2001
5	要請の協議により	適宜の	場所以で引き渡すことになりま	政府参考人(樋渡利秋君)			国会会議録/参議院/常任委員会	国会会議録		第159回国会			2004
適当(4)													
3	半島を我が統治の下に置き、併せて諸外国との関係を消滅せしむる為、	適当の	時機に於て、韓国併合を断行すべきことは、廟議に於て決定せられたる所なり。	吉岡吉典(著)	1920	男	書籍/3 社会科学	史実が示す日本の侵略と「歴史教科書」			吉岡吉典 著	新日本出版社	2002
4	で帝国を起すことにも因り、治政に史実を関係する図書及教育資料等を	適当の	場所以に蒐集整理し、一般公衆の研究に資すると共に塾を設け、市吏員各種団体員、	中島三千男(著)	1940	男	書籍/2 歴史	天皇の代替りと国民			中島三千男 著	青木書店	1990
5	関連する状況を考慮に入れ、衡平の原則に従って合意によって行われるもの、この「	適当の	場合には中間線又は等距離」という「適当な場合」とはどう意味なのか。「かつ、す	立木洋君			国会会議録/参議院/常任委員会	国会会議録		第080回国会			1977
6	沈澱しやすい成分が入っている、使用前にはボを振る。2	適当の	量をスポンジに垂らして、キレイにした金属面を磨く。	実著者不明			書籍/分類なし	掘り出しパーツ	激安中古パーツ情報	v. 11		アポロ出版:デイー・アンド・エー(発売)	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
7	釣針にミミズを付ける時は	<u>適当の</u>	長さに千切るのである	松本孝夫(著)	1920	男	書籍/0 総記	すみれ	エッセー		松本孝夫 著	健友館	2001
9	そのうち王にも御相談申し上げ、	<u>適当の</u>	対策を講ずるつもりで居りました	太宰治(著)	1900	男	書籍/9 文学	太宰治全集		第4巻		筑摩書房	1989
容易(4)													
1	ここでアワ、ビの殻から、その肉ははずすのだが、貝柱の帯が強くて、	<u>容易の</u>	ことでははずれない。	檀一雄(著)	1910	男	書籍/9 文学	檀流クッキング			檀一雄 著	中央公論新社	2002
3	てて、一目瞭然と叙述するの困難は、大手筆ならば知らざらず、著者に取っては決して	<u>容易の</u>	業ではなかった	福島行一(著)	1930	男	書籍/9 文学	大仏次郎		下巻	福島行一 著	草思社	1995
有効(2)													
3	滞在が15日以内なら1年間	<u>有効の</u>	数次ビザを、15日を超える場合には1回限りの有効ビザを取得できます。	実著者不明			書籍/8 言語	韓国語会話	ひとり旅これで十分		鄭和子, トラベルコミュニケーション研究会 著	実業之日本社	1994
11	56年から3年間	<u>有効の</u>	米国の漁獲許可証を取得し、56年の操業が行われた。				白書/農 林水産	漁業白書	昭和56年度(図説)		農林統計協会	(財)農林統計協会	1982
14	10月1日から	<u>有効の</u>	保険証を9月下旬に郵送します。				広報紙/ 関東地方/群馬県	広報おた		2008年24号		群馬県太田市	2008
15	今年3月31日まで	<u>有効の</u>	福祉医療費受給者証をお持ちの方には、				広報紙/ 近畿地方/京都府	市民しんぶん 右京区版		2008年03号		京都市右京区	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
23	ヨーロッパのユーレイパスなど、 <b>数日間</b>	<b>有効の</b>	<b>もの</b> などを指すと思います。				Yahoo!知恵袋/地域、旅行、お出かけ/海外	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
有利(2)													
1	大統領であることはよく知られているが、そのブッシュ氏の再選が危うく <b>クリントン氏</b>	<b>有利の</b>	<b>状況</b> では、近い将来アメリカの対中政策が大きく変化する可能性は大きいとみなければならぬ	柿澤弘治(著)/櫻井よしこ(著)	1930/1940	男/女	書籍/3社会科学	「政治」は誰のものか	迷走する日本の政治の核心に迫る		桜井良子 著	PHP研究所	1993
4	<b>税制改革金持ち</b>	<b>有利の</b>	<b>税制改革</b> が貧富の差を拡大している	森永卓郎(著)	1950	男	書籍/3社会科学	日本経済最悪の選択	誰が日本をこんな目にしているのか		森永卓郎 著	実業之日本社	2002
5	Point社の特許侵害で訴え、 <b>被告</b>	<b>有利の</b>	<b>判決</b> が出された。	朝日奈宗太(著)	1920	男	書籍/5技術・工学	外国特許制度概説	アメリカ篇		朝日奈宗太 著	東洋法規出版	2002
12	六月には「対テロ戦」は超党派の支持を集めやすい <b>与党</b>	<b>有利の</b>	<b>争点</b> だとして、秋の中間選挙で前面に掲げて戦うよう共和党に指示を飛ばしていることが	共同通信社(著)/北海道新聞社(著)	/	/	新聞/ブロック紙	北海道新聞	朝刊	2002/7/13		北海道新聞社	2002
14	三振に二つの内野ゴロと、 <b>投手</b>	<b>有利の</b>	<b>カウント</b> から、ことごとくバットを振らされたような内容。	河北新報社(著)			新聞/地方紙	河北新報	朝刊	2005/7/6		河北新報	2005
15	<b>債権者</b>	<b>有利の</b>	<b>合意内容</b> になっただけが、まじがちです。				Yahoo!知恵袋/ビジネス、経済	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
16	新賃借法は、 <b>貸主</b>	<b>有利の</b>	<b>法律</b> です。				Yahoo!知恵袋/暮らしと生活ガイド	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
有力(2)													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
14	ほっと企業と言いたくも、髪屋とろそいうところの	有力の	方々を委員にお願いして、それろな会議の国の政策の組合その	参考人(築郁夫君)			国会会議録/参議院/常任委員会	国会会議録		第159回国会			2004
三欄安全?													
54	国より厳しい基準の第三者チェックを実施して、安心	安全の	建物作りを実践しております				Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
67	さらな連携、地産地消、農家の安心	安全の	農産物や加工品を発送して、風の寄った良かったといわれるように磨きをかけていき				広報紙/東北地方/岩手県	広報遠野		2008年08号		岩手県遠野市	2008
豪華(1)	なし												
貧弱(1)	なし												
本気(4)													
9	山猫が申したが三人はそれは実に	本気の	競争をしてみたのだそうです。	宮沢賢治(著)	1890	男	書籍/9文学	新編風の又三郎			宮沢賢治 著	新潮社	1989
16	今の力山の王試合、その	本気の	部分ではないかという気持ちが、記者たちの心の中には生まれている。	夢枕獏(著)	1950	男	書籍/9文学	餓狼伝	長編ハードアクション		12 夢枕獏 著	双葉社	2001



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
27	手も黒人と同じようにぬぼれなくモとして受け取る可能性もある。「	本気の	自己主張なのか受け狙いだのかは、大言の内容とそれが声高に述べている事実	トマス・カーチマン(著)/石川准(訳)	1930/1950	男/男	書籍/3社会科学	即興の文化	アメリカ人の鼓動こえる		トマス・カーチマン 著;石川准 訳	新評論	1994
32	関する話題をの嫌う和樹に向かい、冗談ではすまれないような発言をすれば、	本気の	喧嘩になりかねなかった。	伊郷ルウ(著)	1930	女	書籍/9文学	誤解の理由	ミス・キャスト		伊郷ルウ 著	講談社	2001
42	2回目以降は、	本気の	勝負です。				Yahoo!知恵袋	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
45	桃井もまた、横尾の注文に対して	本気の	演技で応えた。	木部与巴仁(著)	1950	男	書籍/7芸術・美術	横尾忠則365日の伝説			木部与巴仁 著	新潮社	1995
46	警察は	本気の	捜査などしてはくれない。	石田衣良(著)	1960	男	雑誌/教育・文学/芸術	別冊文藝春秋		2003年3月号(第244号)		文藝春秋	2003
不幸(4)													
3	そのこと感じて、お客は誰一人として女=スカレットが置き去りにされた	不幸の	ことなんか考えてみない。	橋本治(著)	1940	男	書籍/7芸術・美術	虹のワルゴオル			橋本治 著	講談社	1991
16	の鳥は消えかた底ひなきなかにわれはるしむる怪鳥の鳴けりちははよ	不幸の	子を宥したまへ美よ墳墓の土くれよわがピニスト音楽の流れに溺れに音楽の流れより				韻文/詩	清岡卓行詩集		続	清岡卓行 著	思潮社	1994
18	病気や	不幸の	状況をなくしたい	宗正元(著)	1920	男	書籍/1哲学	念仏者として独立せん			宗正元 講述	真宗大谷派宗務所出版部	2004

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
複雑(1)	なし												
簡易(1)	なし												
寛容(1)	なし												
簡単(1)	なし												
完全(1)	なし												
健康?	なし												
賢明(1)	なし												
堅実(1)	なし												
危険?	なし												
緊急(4)													
7	鶴見雅彦は事件のあと	緊急の	記者会見を開き、	高野裕美子(著)	1950	女	書籍/9 文学	サイレント・ナイト	長編推理小説		高野裕美子 著	光文社	2002
10	英国人なら必ず気づくはず、と再度ダイヤル。	緊急の	用事です。衛に長につないでください。	竹中敬明(著)	1940	男	書籍/2 歴史	知っておきたい国旗・旗の基礎知識			竹中敬明 著	岐阜新聞社;岐阜新聞情報センター出版室(発売)	2003
15	日米独など西側諸国が共同して	緊急の	対策を講ずることが要請されている。	佐々淳行(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	危機の政治学			佐々淳行 著	新潮社	1992
17	110番は緊急の事件・事故のたための電話です。	緊急の	用件以外で利用される				広報紙/近畿地方/大阪府	堺区広報 堺		2008年09号		大阪府堺市堺区	2008
23	通常は自宅のPCで受信していますが、	緊急の	メールがある場合、外出先に転送しようと思いません。				Yahoo!知恵袋/インターネット、PCと家電/インターネット	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
26	ただし	緊急の	呼び出しには応じられないので、上司に事前に相談を。				Yahoo!知恵袋/職業とキャリア/就職、転職	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
34	身体、通信、居住及び移転の自由並びに財産権を制限する	緊急の	措置をとることができる	小田尚(著)		男	書籍/3 社会科学	憲法改正	読売試案2004年		読売新聞社 編	中央公論新社	2004
37	イデオロギヤや財政上の	緊急の	要請とこぼばかりでなく	ロバート・エヴァンズ(著) // 松溪憲雄(訳)		/	書籍/4 自然科学	医療財源論	ヨーロッパの選択		エリアス・モシアロス ほか編著;一圓光彌 監訳	光生館	2004

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
43	増え続ける多様な人々、	緊急の	援助を必要とする	ドナルド・スタール(著)/マイケル・ブロードウェイ(著)/中谷和男(訳)	// 1930	男/ 男/ 男	書籍/6 産業	だから、アメリカの牛肉は危ない!	北米精肉産業の恐怖の実態		ドナルド 著; 中谷和男 訳	河出書房新社	2004
気楽(1)	なし												
公平?	なし												
幸福?	なし												
好調?	なし												
極端(1)	なし												
強力(1)	なし												
窮屈(1)	なし												
急速(1)	なし												
熱心(1)	なし												
冷静(1)	なし												
利口(1)	なし												
露骨(1)	なし												
清潔(1)	なし												
正常(4)													
5	○脚の人は	正常の	人に比べて、荷重線が内側を通ります	高山美治(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	ひざの痛みをとる・治す	毎日の生活がぐんぐんになる!		井上肇 監修; 高山美治 著	成美堂出版	2000
6	この細胞の増えるスピードは、	正常の	細胞より早いのが特徴で、	荒川博仁(著)		男	書籍/4 自然科学	薬と病気			荒川博仁 著; ヘルス・システム研究所 編	ヘルス・システム研究所	2004
11	貝割れにしよう大作戦はコイズミさんがガンガン押し進めた政策により日本国民の	正常の	状態である日本経済→会社→人→家庭を一つひとつと派遣というシートにうつし不安定な				Yahoo! ブログ/芸術と人文/人文科学	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
16	アンチセンスは	正常の	機能を破壊する	石浦章一(著)	1950	男	書籍/4 自然科学	生命のしくみ			石浦章一 著	日本実業出版社	1993
親切(1)	なし												
慎重(4)													
6	「唯、乃木將軍の割腹殉死の点については、	慎重の	態度をとり、此課に於いては立入らぬ方がよからう。」	吉田裕久(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	戦後初期国語教科書史研究	墨ぬり・暫定・国定・検定		吉田裕久 著	風間書房	2001
水平(4)													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
6	この法律において「船尾灯とは百三十五度にわたる	水平の	弧を照らす白灯であつて、その射光が正船尾方向から各げん六十三度三十分までの間を照				法律/海運	海上衝突予防法		昭和五十二年六月一日法律第六十二号			1977
7	縦の部分をつかんでからだを起し、	水平の	部分につかま立って立ち上がります。	市川 洌(著)/河添 竜志郎(著)		男/男	書籍/5 技術・工学	住まいの工夫と福祉用具			NHK福祉番組取材班 編	旬報社	2000
10	「先頭を切った鴨がその身をよく持ち上げ	水平の	飛行に移ろうとする鼻を、上から抑えるように射込んだ。	樋田 満文(著)	1920	男	書籍/9 文学	昭和文学の風景			保昌正夫 ほか著	小学館	1999
11	取りつけ足を曲げてからディに組み込み、正面から見て	水平の	状態でハンダづけする。	実著者不明			書籍/分類なし	鉄道模型Nゲージカタログ	車両編	2003-2004		イカロス出版	2003
27	糸がたなるまなように小球を	水平の	位置Aまで持ち上げ、静かにはなす。				教科書/理科/高	高等学校物理II			國友正和 ほか著	数研出版株式会社	2006
28	そき、さがらさる彼の鼻のすぐ鼻の岩壁に	水平の	割目がつぜんとひらいた。	トール・ヘイエルダール(著)/山田 晃(訳)	1910/1910	男/男	書籍/2 歴史	アク・アク	孤島イースター島の秘密		トール・ヘイエルダール 著;山田 晃 訳	社会思想社	1992
33	ライクゾーンには「打者の肩の上部とフォームのズボンの上部との中間に引いた	水平の	ラインを上限とし、ひざ頭の下部のラインを下限とする本塁上の空間をいう」と記述され	橋本 清(著)/永谷 脩(著)	1960/1940	男/男	雑誌/総合/スポーツ	Sports Graphic Number		平成14年4月25日号(No.547、第23巻第8号)		文藝春秋	2002

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版社	出版年
34	垂直の線と、それに直交する	水平の	線の整然たる交わりを強調する	紅山雪夫(著)	1920	男	書籍/2 歴史	ヨーロッパが面白い		下	紅山雪夫 著	トラベジャーナル	1991
46	の華やかな彩りを前景に、これも色色橋桁とその純白のガードレールとが二条の	水平の	叢を曳き、その下には河原の草原の冬枯れの藁色をまどろどろに混えながらもす	堀 淳一(著)	1920	男	書籍/2 歴史	消えた鉄道を歩く	廃線跡の楽しみ		堀 淳一 著	講談社	1986
詳細(4)													
1	判事フランス・コバックスが殺人の	詳細の	報道を完全に禁じたことあった。	ニール・ランダール(著)/村井佳世子(訳)/田中りゅう(訳)	/ /	男/女/女	書籍/6 産業	インターネットヒストリー	オープンソース革命の起源		Neil Randall 著;村井純 監訳;田中りゅう, 村井佳世子 共訳	オライリー・ジャパン;オーム社(発売)	1999
3	母と一緒に住むことになり	詳細の	事情は知る由もない	田辺聖子(著)	1920	女	書籍/9 文学	iめえ〜る			田辺聖子 著	世界文化社	2002
4	この説は美濃部博士の唱うところにして、	詳細の	ことは、私は今日といえども知らない	真崎甚三郎(著)	1870	男	書籍/2 歴史	「文芸春秋」にみる昭和史		第1巻	文芸春秋 編	文芸春秋	1988
8	SECはEITFに	詳細の	検討を依頼し	実著者不明			書籍/3 社会科学	アメリカの会計原則		2004年版	中央青山監査法人 編	東洋経済新報社	2003
13	だいたいの場所は分かるのですが、どこから入るのか	詳細の	地図がみあたらないのです。				Yahoo!知恵袋/地域、旅行、お出かけ/国内	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
14	ページをひらくと、上のほうに	詳細の	説明があり、下のほうに図面がありますので参照なさってください				Yahoo!知恵袋/地域、旅行、お出かけ/交通、地図	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
15	是非取引しとメールをいたただいたので	詳細の	メールを返信したのですが、2日間何の連絡もありません。				Yahoo!知恵袋/Yahoo!JAPAN/Yahoo!オークション	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
21	直近の三年の	詳細の	収支計画を立てる必要があります				Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
22	「アパートマンション経営者山田里志や著名な先輩も出ている」	詳細の	相談や先輩の成功談や失敗談を直接聞ける、内容にしたいと思いませんか				Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
26	その	詳細の	調査でございます	塩田政府委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第084回国会			1978
29	具体的な	詳細の	ところでは把握していません。	橋本説明員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第101回国会			1984
単調(1)	なし												
単純(1)	なし												
丁寧(1)	なし												
適切(1)	なし												
重宝(1)	なし												
忠実(1)	なし												
愉快(1)	なし												
有益(1)	なし												
贅沢(1)	なし												
地味(1)	なし												
上手(2)													
4	11人の話を楽しく聞ける人は聞き上手	上手の	素質あり、いろいろなスタイルの聞き方があるけれど本章で取り上げた	福田健(著)	1930	男	書籍/8言語	なぜ人は話を聞かないのか	話し方が教える「聞く技術」		福田健 著	明拓出版;星雲社(発売)	2005
7	料理	上手の	知恵とコツはばりな調味料	板橋さと子(著)		女	書籍/5技術・工学	ソース・たれ・ドレッシング	かんたん美味い!		グループパセリ 編	西東社	2001

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
10	松山城で見た人数の少なさ、 <b>お家</b>	<b>安泰の</b>	<b>日々</b> には羽振りよく振舞っていた家臣の多く断絶と決共に行っていたという話	堺屋太一(著)	1930	男	書籍/9 文学	峠の群像		上	堺屋太一 著	日本放送出版協会	1981
便利(4)													
8	旅具を沢山持込む支那人旅行者には、決して	<b>便利の</b>	<b>禮造</b> ではない。	田中逸平(著)	1880	男	書籍/1 哲学	イスラム巡礼白雲遊記			田中逸平 著	論創社	2004
9	実用性のある新しい考案であって、産業上に	<b>便利の</b>	<b>あるもの</b> について許可される。	中野勝征(著)	1940	男	書籍/5 技術・工学	特許実用新案匠・意匠・商標出願の手続	全書式とその申請法		中野勝征 著	日本法令	2001
無礼(4)													
7	そんな男がなんだ、あまりいえば	<b>無礼の</b>	<b>一言だ</b> とまでいった。	半藤一利(著)	1930	男	書籍/2 歴史	指揮官と参謀	コンピの研究		半藤一利 著	文芸春秋	1992
11	今夜、ふと御本とお手紙と「週刊女性」の切抜きとを読み返して、御	<b>無礼の</b>	<b>こと</b> に気がつき、顔を赤くしておわびを言上いたします	清川妙(著)	1920	女	書籍/9 文学	花明かりのことば			清川妙 著	佼成出版社	2003
平等(4)													
4	け南部から都市へ移住した移民の比較的強い主張の強いついで、白人社会が	<b>平等の</b>	<b>機会</b> を享受するのは、自分たち黒人社会のかけである、と感じた。	原著者不明/ 関野清二(訳)	/ 1930 /	/ 男	書籍/8 言語	BBCの英語物語	英語の世界の英語		ロバート・マクラム、ウィリアム・クララン、ロバート・マクニール 著; 関野清二 訳述	講談社出版サービスセンター(製作)	2001

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	命の最中、ギリシヤに正義と平等の社会を見て、それを転覆せしめて正義と	平等の	<b>理想社会</b> を作ろうとしたわけであるが、その理想はあまりに非現実的であり、究極的には	梅原猛(著)	1920	男	書籍/2 歴史	自然と人生	思うままに		梅原猛   著	文芸春秋	1995
7	実境は、傍観者なきに非ざる日、仮令其易へ△一切	平等の	<b>心</b> は、無愛、無巨等に之に反し、我若しに於て一点に平等ならば、我は	新井奥達(著)	1840	男	書籍/1 哲学	新井奥達著作集		第5巻	新井奥達   著; 新井奥達著作集編集   編	春風社	2001
9	このことは国民に	平等の	<b>人権</b> を与えたか如く解される向きもある	松下薫一(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	「成功への方程式」、解は「失敗しないこと」			松下薫一   著	文芸社	2003
11	その精神を基にした雇用の男女	平等の	<b>法制化</b> は、欧米先進国においては既に一九七〇年代に完了しているのです。	遠藤和良君			国会会議録/衆議院/本会議	国会会議録		第101回国会			1984
12	この根拠として、主権	平等の	<b>原則</b> が援用される	吉田脩(著)		男	書籍/3 社会科学	国際法			水上千之、白杵知史、吉井淳   編	不磨書房;信山社(発売)	2002
妥当(4)													
3	ように、わたしは(知覚)という項に、事物の存当、(身体)そして(空間)という	妥当の	<b>根拠</b> を見出した。	竹田青嗣(著)	1940	男	書籍/1 哲学	意味とエロス			竹田青嗣   著	筑摩書房	1993



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
11	ところでいった方法を進めてゆくと、〈実在性〉〈価値〉〈意味〉という	妥当の	契機について何が得られるだろうか	竹田青嗣(著)	1940	男	書籍/1 哲学	意味とエロス			竹田青嗣 著	筑摩書房	1993
同一(4)	(1012件用例のうち一部のみ表示)												
1	固有権のように個人の基本的権利と地方自治を	同一の	地平で捉えるだけの歴史を有していない日本では、そのままでは受容することができない	妹尾克敏(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	新基本憲法学			手島孝 監修;安藤高行 編	法律文化社	2002
2	員の構成について、運用指針は同一の親族の企業管する官庁の出身者及び	同一の	業界関係者の評議員に占める割合は、それぞれ評議員会を支配するに支度				白書/経済	公益法人白書	平成17年版		総理府大臣官房管理室(公益法人行政推進室)	(株)セブンプランニング	2005
3	ふたりは	同一の	プレイヤード。	原著者不明/大野晶子(訳)	/ 1960	/ 女	書籍/9 文学	ネットフォクスエクスプローズ	陰謀のゲーム		トム・克蘭シー、ステイヴ・ピチェニック 著;大野晶子 訳	アスペクト	2001
4	異なった背景経験をもつ選手が	同一の	グループでトレーニングするような場合	実著者不明			書籍/7 芸術・美術	ソフトテニスコーチ教本			日本ソフトテニス連盟 編	大修館書店	2004
5	翻訳とは等しい文章を作り出すことはなく、	同一の	文章を異なる言語で実現していくことなのだ。	細川周平(著)	1950	男	書籍/2 歴史	ノスタルジー大通り	ほがらかな旅の技術		細川周平 著	晶文社	1989

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
7	3cm <sup>2</sup> のすずはくと	同一の	面積を有する厚さ0.1mmの雲母を交互に重ねるすずをお一つおきについで、そ				Yahoo!知恵袋/教養と学問、サイエンス/数	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
8	そうかえと、ま、その度合はまいでいったきた自然性の枠組というおなじで、	同一の	厚み、深さをとっているのはどこまでか、イメージとして浮びあがるようにできれば、そ	吉本隆明(著)	1920	男	書籍/1哲学	良寛			吉本隆明 著	春秋社	2004
9	るか否かの判断については証取監査における見形成の重要性判断基準と事実上	同一の	ものとして扱われることとされ、と認められない方針の変更が行われた場	実著者不明			書籍/3社会科学	決算読み方・作り方	計算書類の分類と記載例		新日本監査法人 編	中央経済社	2005
41	仕事を終え、新玉川線軒茶降りる、自宅マンションは	反対の	方向には七緒は歩きた。十二月に入ってからというものの、真冬を思わせる日が続いて	北森鴻(著)	1960	男	書籍/9文学	花の下にて春死なむ			北森鴻 著	講談社	2001
42	地位も教育もない貧しい孤獨な道で、面でもサイ人のデモとは正	反対の	生き方をしました。	三森加寿子(著)	1940	女	書籍/1哲学	心を解たされて	神のイメージ、私のイメージ		三森加寿子 著	イムマルエ総合出版局	
反対													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
47	党を代表して、政府提出、中央省改革基本法案に対して	反対の	立場から討論をいたします。	佐々木洋平君			国会会議録/衆議院/本会議	国会会議録		第142回国会			1998
平凡(4)													
1	てて紹介す普通という結構なようだが、普通の極、	平凡の	堂にのぼり、庸俗の入ったのは、むしろ憫然のいたりだ。	夏目漱石(著)	1860	男	書籍/分類なし	吾輩は猫である		上	夏目漱石 著	偕成社	1996
7	もちろん	平凡の	歌ではあるが、もう一段自然に言わせれば、その方がて感銘するであろう。				Yahoo! ブログ/芸術と人文/文学	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
8	反対にドストエフスキーは平凡人を	平凡の	面からはどうも描けなかった。	坂口安吾(著)	1900	男	書籍/9文学	坂口安吾全集		14		筑摩書房	1990
平気(4)													
3	私はそのことについて訊ねたのですが、少しだから	平気の	一言で済ませられたのです。				Yahoo! 知恵袋/健康、美容とファッション/コスメ、美容	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005
7	体質って言うか、3時間睡眠で	平気の	人も実際にいるようなので、大丈夫かもしれません				Yahoo! 知恵袋/健康、美容とファッション/健康、病気、ダイエット	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005
必要(4)													
6	そして、	必要の	事柄のみを選るところに小説の文章の第一の鍵がある。	坂口安吾(著)	1900	男	書籍/9文学	坂口安吾全集		14		筑摩書房	1990

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
58	応じる要 求の範囲や	必要の	許容範囲を患者さんと一緒に検討していくことが重要です	大井賢一(著)/ 桜山豊夫(著)/ 竹中文良(著)	1970/ 1950/ 1930	男/男/ 男	書籍/4 自然科学	国民は医療になにを求めているか	患者満足と医療サービスを考える		荒川泰行 編	メディカルレビュー社	2005
135	私「もし	必要の	時はよろしくお願ひします。	滝沢海南子(著)	1930	女	書籍/9 文学	院内感染からの生還	MRSAと闘った50日		滝沢海南子 著	新評論	1993
152	本誌も亦、確かに国家国民に取り極めて	必要の	物であると思う。	門奈直樹(著)	1940	男	書籍/0 総記	民衆ジャーナリズムの歴史	自由民権から占領下沖繩まで		門奈直樹 著	講談社	2001
不便(4)													
4	我学究の研究成果を世界的に発表する方法に於て、本邦の学者は未だ	不便の	点を有してゐること、これらについては米後、おぼながら力を捧げたいと期して	渡辺淳一(著)	1930	男	書籍/9 文学	遠き落日		下	渡辺淳一 著	角川書店	1979
不明(2)													
2	漁業被害救済対策原因者	不明の	油濁事故に対処するため、漁場油濁被害救済基金の救済事業等に助成を行う。				白書/環境	環境白書	平成12年版(各論)		環境庁企画調整局調査室	ぎょうせい	2000
4	私が日本人ジャーナラー、電話で、母行方	不明の	トラブルの件をメッセージに残した翌日、私達が都合のいい日に一度、部屋にうかがいた	さえきあこ(著)		女	書籍/3 社会科学	ニューヨークに大学院留学して			さえきあこ 著	鳥影社	2003
5	勝手に差出人	不明の	荷物はあけへんやろ				Yahoo!ブログ/エンターテインメント/映画	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
6	この巨大体育館は、前田政末期九四年に開催された意味	不明の	お祭り騒ぎ、「まつり博」のメイン会場として建てられた。	北村博司(著)	1940	男	書籍/5 技術・工学	原発を止めた町	三重・芦原発三十七年の闘い		北村博司 著	現代書館	2001
16	私は、よくよく正体	不明の	親切、やさしさに出会う旅人だ。	武田亨(著)	1950	男	書籍/2 歴史	中国ひとり旅	そこを何とか泊めて下さい		武田亨 著	連合出版	1991
不利(3)													
2	試合は、	不利の	予想を覆して、我がオックスフォードが21-11の快勝。	林敏之(著)	1960	男	書籍/7 芸術・美術	楯岡球の詩	自伝・林敏之		林敏之 著	ベースボール・マガジン社	1997
6	何となれば、かかるとさば相沢ますます	不利の	状態に陥るからである。	真崎甚三郎(著)	1870	男	書籍/2 歴史	「文芸春秋」にみる昭和史		第1巻	文芸春秋 編	文芸春秋	1988
8	出遅れおよび	不利の	情報、前3ハロインタム、調教タムなど、JRA-VANにはないデータが提供されて	実著者不明			書籍/7 芸術・美術	Target maximum	競馬予想支援データベースソフト Windows 95/98/Me/NT4.0/2000対応		市丸博司 編著	毎日コミュニケーションズ	2001
9	政権を担うことと国民大衆	不利の	法律、政策を通過させた。				Yahoo! ブログ/ビジネスと経済/金融と投資	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
12	私たちは、脆弱なコミュニティや条件	不利の	地域から、一番大切なもの	エドガー・S・カーン(訳)/ヘロン久保田雅子(訳)/茂木愛一郎(訳)	/ 1940/1940	男/ 女/ 男	書籍/3 社会科学	この世の中に立たない人はいない	信頼の地域通過タイムダラーの挑戦		エドガー・S・カーン 著;ヘロン久保田雅子, 茂木愛一郎 訳	創風社出版	2002
不良(2)													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	そういう消化	不良の	変な漢語を使ったことおどしとは正反対だ。	加藤周一(著)	1910	男	書籍/9文学	居酒屋の加藤周一			加藤周一 述; 白沙会 編	かもがわ出版	1993
6	落札した商品が動作	不良の	ようので修理に出したので保証書のお店に電話したところどうやら閉店してしまった				Yahoo!知恵袋/JAPAN/Yahoo!オークション	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
8	なぜなら、「寝坊」による遅刻がしばみられる場合には、夜更かしの原因の体調	不良の	背景になっ生生活リズムの改善とい根本的な遅刻解はかかれねらないか	吉田卓司(著)	1950	男	書籍/3社会科学	生徒指導法を学ぶ	教職入門		吉田卓司 著	三学出版	2004
偉大(4)													
2	り君の趣向なし地球中陸は三分の一にも足らず余は皆海なり陸は皆主有り海は主無	偉大の	事を試むるは海を適当なりとす海は人獣を論ぜず一切怪物の領分なり而して怪物と偉大	中江兆民(著)	1840	男	書籍/0総記	中江兆民全集			17	岩波書店	1986
可能(2)													
1	『利用制限中』と違い、復活	可能の	状態です。				Yahoo!知恵袋/JAPAN/Yahoo!オークション	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
3	今回銅賞に入賞の永田さんは、昨年のSD部門に変形	可能の	サイコガングラムで参加されました	実著者不明			雑誌/総合/レジャー/趣味	HOB BY JAPAN		2003年9月号(第35巻第9号、通巻411号)		ホビージャパン	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
11	通常のを注意もつてすれば、 <b>予見</b>	<b>可能の</b>	<b>範囲</b> にあるところがあるというとき	実著者不明			書籍/6 産業	逐条解説自動車損害賠償法			国土交通省自動車交通局保 障課 監 修;自動車保 障研究会 編	ぎょう せい	2005
12	<b>洗濯</b>	<b>可能の</b>	<b>カバー</b> 付き。	実著者不明			書籍/分 類なし	「冷え」 解消で グング ンやせ る元気 になる!			学習研 究社		2003
<b>肝心(4)</b> (547件用例のうち一部のみ表示)													
2	母親か く内容を 聞いた のですが、	<b>肝心の</b>	<b>ところ</b> を覚えて ない と言 うので 気が なっ て				Yahoo! 知恵袋/ エンタ ーテイ ンメン トと趣 味/テレ ビ、ラ ジオ	Yahoo! 知恵袋				Yahoo!	2005
3	方法論 は花咲 りだが、	<b>肝心の</b>	<b>方法</b> を適用 した事 例はき わめて 貧弱 である。	神沼 二真 (著)	1940	男	書籍/0 総記	バイオ コンピ ュータ			神沼二 真、松 本元 編	紀伊国 屋書店	1988
4	が悲し みその ものな らな うほ い失 つて、 悲が 語る こと を聞 くべ き	<b>肝心の</b>	<b>臆き手</b> が、ど こ居 なくな ると 注意 して いる。	新田 泰生 (著)	1940	男	書籍/1 哲学	プロセ ス指向 心理学 入門	身体・ 心・世 界をつ なが 実践 的心理 学		藤見 幸 雄、諸 富祥彦 編著	春秋社	2001
7	種の保 存法が 生息・ 地生 育地 の保護 を定め る点 は評価 できる が、	<b>肝心の</b>	<b>生息地</b> 等保護 区がほ ど進 んで いない。	畠山 武道 (著)	1940	男	書籍/5 技術・ 工学	自然保 護法 講義			畠山武 道 著	北海道 大学図 書刊行 会	2001
10	いく らの 流と ど 血を した ら る こ ろ で、	<b>肝心の</b>	<b>首</b> を めり しと げな ければ 戦は 終 わ ら ない。	橘 薫 (著)			書籍/9 文学	瞳の 奥 に			橘薫 著	新風舎	2001

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
12	さまざまな伝説、神話の類が音のまわりに霧のようにまわりつき、	<u>肝心の</u>	<b>音楽</b> が見えなくなってしまうところがよくある。	後藤雅洋(著)	1940	男	書籍/7 芸術・美術	ジャイツ・オブ・ジャズ			後藤雅洋 著	JICC出版局	1991
孤独(4)													
1	それと「死の馨り」が飄つて、その声の出所、その	<u>孤独の</u>	<b>境位</b> が只事ではない感じがしました。	阿部嘉昭(著)	1950	男	書籍/7 芸術・美術	椎名林檎vsJポップ			阿部嘉昭 著	河出書房新社	2004
6	友なき	<u>孤独の</u>	<b>吾</b> は、果たして高尚理想を抱きてか、その名月と対峙しか	鳩山一郎(著)	1880	男	書籍/2 歴史	若き血の清く燃えて	鳩山一郎から薫へのラブレター		鳩山一郎 著; 川手正一郎 編・監修	講談社	1996
7	ゴッホはこの地で、泥炭地帯の風景で働く人々の姿を描いたが、	<u>孤独の</u>	<b>生活</b> に耐えきれず、また彼の経済的基盤であったテオからの仕送りの受け取りが非常に面				Yahoo! ブログ /Yahoo! サービス /Yahoo! ブログ	Yahoo! ブログ			Yahoo!		2008
15	自分の手を伸べて、と見詰めてよ。	<u>孤独の</u>	<b>感じ</b> は急に迫ってくるであろう」	山岸健(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	人間的世界の探究	トポス/道/旅/風景/絵画/自己/生活/社会学/人間学		山岸健 著	慶應義塾大学出版会	2001
31	ボランティアをご利用くださいの高音障害者の子のお母さんなど、	<u>孤独の</u>	<b>状態</b> にある人の気持ちを少し和らげよう、話の気持ちに沿って傾けて話を				広報紙/九州・沖縄地方/佐賀県	広報有田		2008年12号		佐賀県西松浦郡有田町	2008
広大													



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	千春が	広大の	心と同じ高さで見られるように、真奈美も子どもと同じ高さで見ていた。	杉山眞木(著)	1940	男	書籍/9 文学	虚妄の愛			杉山眞木 著	文芸社	2005
3	四海にかこまれた	広大の	領土の皇帝になると話です。	中山勇(著)	1910	男	書籍/4 自然科学	石の文明と科学			中山勇 著	啓文社	1986
高価(4)													
6	各年齢層がもっている経済的な関係と考えられ、	高価の	柑橘の購入についての是非は、所得と関連があるの推定できる。	東哲 / 李喆柳洙(著)			書籍/3 社会科学	コミュニティ・ビジネスモデルの診断	公共性・共同性を意識して			同友館	2004
8	販売中止を通じて	高価の	競貸はただ1個も販売されなかった				Yahoo! ブログ / Yahoo! サービス / Yahoo! ブログ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
10	撮影するために、最近CCという	高価の	特殊カメラを賃貸して撮影場に投入した。				Yahoo! ブログ / エンターテインメント/映画	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
11	財閥でも、簡単に金ではない。単に	高価の	筋り物という程度なら、国民全員が窮乏して明日の米も買えない時代だ。	胡桃沢耕史(著)	1920	男	書籍/9 文学	翔べ！ 貴族警部			胡桃沢耕史 著	光文社	1994
幸運(4)													
*2	アダムは魔除け扱いたんじやないか、って。	幸運の	御守りとかね。	ロビン・ハサウェイ(著)/坂口玲子(訳)	1930/ 1940	女/ 女	書籍/9 文学	フェニモア先生、人形を診る			ロビン・ハサウェイ 著;坂口玲子 訳	早川書房	2002
*4	皆様にも	幸運の	女神が微笑むように				Yahoo! ブログ / 趣味とスポーツ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
*5	ポイントスポーツ観戦のなかでも、格闘技ならベスト。	<u>幸運</u> の	色はクリームイエロー。	エミール・シエラード(著)		女	雑誌/総合/一般	Hanako		2003年2月19日号 (No. 725、第16巻7号)		マガジンハウス	2003
*6	や宇宙に、畏怖の念を持たなくなったから、そうなのではないかと文江はいうんだ。	<u>幸運</u> の	エネルギーが、逆作用してしまっているんだと…」	早野梓(著)	1930	男	書籍/9文学	幸福の遺伝子			早野梓 著	批評社	2002
12	いよいよその	<u>幸運</u> の	<u>主人公</u> 李敏求, オ・ヘリム会員がキム・ジユクに会った。				Yahoo! ブログ /Yahoo! サービス /Yahoo! ブログ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
*13	ダメだと感じたら、素早く撤退する逃げ足の速さが、	<u>幸運</u> の	カギです。	小野十傳(著)	1950	男	書籍/1哲学	「風角宝典」占い			小野十傳 著	三笠書房	2005
巨大(4)													
2	私のような老人には、とても持て相もない	<u>巨大</u> の	<u>もの</u> です。	反町茂雄(著)	1900	男	書籍/0総記	一古書肆の思い出			5 反町茂雄 著	平凡社	1999
共通(4)													
1	の記事は、子供大好きママブロガーのお友達サークル『キラくぶ』のみんなで	<u>共通</u> の	<u>話題</u> で記事を作ったりあう企画記事です				Yahoo! ブログ /Yahoo! サービス /Yahoo! ブログ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	今まで、	<u>共通の</u>	<u>友達</u> とご飯を食べに行ったり				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
3	このときおたがいに話し合えるには、	<u>共通の</u>	<u>約束事</u> に従うが必要があり、これをプロトコルという。				教科書/情報/高	Information & Solution 新情報B			岡本敏雄, 山極隆 ほか著	実教出版株式会社	2006
4	同作業で米で協同して人類	<u>共通の</u>	<u>課題</u> に取り組むべく協議を続けている				白書/外交	我が国の政府開発援助	1995 (上巻)		外務省経済協力局	(財)国際協力推進協会	1995
5	加藤のことはソニーのスタッフの	<u>共通の</u>	<u>認識</u> だった。	江波戸哲夫 (著)	1940	男	雑誌/政治・経済/商業/経営	PRESIDENT (プレジデント)		2004年2月16日号 (第42巻第3号)		プレジデント社	2004
6	規制で、という方向になりがちだが、地域社会では対策が具体的であり、目に見える市民	<u>共通の</u>	<u>利益</u> と直結していることから、可能な限りまちづくりの環として取り	中村八郎 (著)	1940	男	書籍/3社会科学	これからの自治体防災計画	予防こそ災害対策の基本		中村八郎   著	自治体研究社	2005
面倒(1)													
無効(4)			(85件用例のうち一部のみ表示)										
1	当該届出を	<u>無効の</u>	<u>もの</u> として処理する	実著者不明			書籍/3社会科学	Q&A暮らしの中の法律相談			鈴木隆司   編	明石書店	2001
3	特定の公知事実との対比における	<u>無効の</u>	<u>主張</u> と、他の公知事実との対比における無効の主張とは、それぞれ個別の理由をなすもの	大淵哲也 (著)	1950	男	書籍/5技術・工学	知的財産法判例集			大淵哲也, 茶園成樹, 平嶋竜太, 蘆立順美, 横山久芳   著	有斐閣	2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
8	10月4日に総会の	無効の	判決が言い渡されていた。				Yahoo!知恵袋/ニュース、政治、国際情勢	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
9	「問『もはや無効である』の	無効の	時点はいつか。	吉岡吉典(著)	1920	男	書籍/3社会科学	歴史に学ぶもの逆らうもの	侵略戦争と戦後政治		吉岡吉典 著	新日本出版社	1988
10	提にして成立した権利関係に利害関係を有する立場に立った第三者にも、その法律行為の	無効の	効果は及ぶ。	中井美雄(著)	1930	男	書籍/3社会科学	通説民法総則			中井美雄 著	三省堂	2001
13	(裁判による登記の囑託)の規定は、基金償却積立金の取崩しの	無効の	訴えについて準用する。				法律/金融・保険	保険業法		平成七年六月七日法律第百五号			1995
17	とりあえずサービスで配達された期間内に契約	無効の	処置はできました				Yahoo!知恵袋/暮らしと生活ガイド/法律、消費者問題	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
無知(4)													
3	頻繁に通うのは鳥が集って池である。まったく	無知の	分野だったので、シモンは本を見たり、音の資料館に行ったり、鳥の形や声を学ばなくては	イヴ・シモン(著)/永瀧達治(訳)	1940/1940	男/男	書籍/9文学	感情漂流			イヴ・シモン 著;永瀧達治 訳	集英社	1995

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
15	それは荒削り、洗練は遠かったが、	無知の	領域に驚きと馬力をもつて突進していきうな元気に満ちていた。	永倉萬治(著)	1940	男	書籍/2 歴史	昭和30年代通信			永倉万治 著	筑摩書房	1990
34	神はこの樹の実を食うことを人に禁じ、人間を永久に	無知の	状態に置いておこうとしたのである。	澁澤龍彦(著)	1920	男	書籍/9 文学	黒魔術の手帖			澁澤龍彦 著	文藝春秋	2004
52	日本国債にまつた	無知の	人だったのだから…。	児玉清(著)/幸田真音(著)	1930/1950	男/女	書籍/9 文学	日本国債		下	幸田真音 著	講談社	2003
夢中? 無用(4)													
3	ここがしっかいていないと、	無用の	物を買って負担を重くするようになります。	斎藤隆浩(著)	1970	男	書籍/3 社会科学	「社労士」になって独立・開業	わずか2年で年収1千万円を稼ぐ!		斎藤隆浩 著	すばる舎	2004
8	大して問題になりそうにない法案についても、あらかじめ慎重に吟味すること、	無用の	紛糾を避けるようにする。	エドウィン・ライシャワー(著)/國弘正雄(訳)	1910/1930	男/男	書籍/3 社会科学	ザ・ジャパニーズ	日本人		エドウィン・ライシャワー 著; 國弘正雄 訳	文芸春秋	1979
34	その期間内における平和を維持して、	無用の	紛争を避けようという実益がある。	慶谷典之(著)/慶谷淑夫(著)	/ 1920	男/男	書籍/3 社会科学	労働法教室			慶谷淑夫、慶谷典之 著	労働法令協会; 労働法令(発売)	2005
35	こうしつた大量処分、	無用の	書類の焼却は、無気力さを打ち、魂にシャワーを浴びせ、筋肉を強化し、そして薄明か	ジャン・コクトー(著)/澁澤龍彦(訳)	1880/1920	男/男	書籍/9 文学	ポトマック			ジャン・コクトー 著; 澁澤龍彦 訳	河出書房新社	2000

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
冷酷(1)	なし												
良好(4)													
5	保護観察処分少年では83.9%の者が	良好の	成績で保護観察を終了している。				白書/安全	犯罪白書	昭和53年版		法務省 法務総合研究所	大蔵省 印刷局	1978
正式(4)		(225件用例のうち一部のみ表示)											
1	ここに、	正式の	画面があります	和久峻三(著)	1930	男	書籍/9 文学	禁断の館殺人事件			和久峻三 著	講談社	2001
2	老人がせつせと剥き身にした馬鹿とは、種のアオヤギのことです。	正式の	学名は馬鹿貝として登場します	大柴晏清(著)	1940	男	書籍/9 文学	文学とすし	名作を彩った鮎ばなし		大柴晏清 著	栄光出版社	1991
3	あなたを	正式の	監察にまわす	逢坂剛(著)	1940	男	書籍/9 文学	[ノスリ]の巣			逢坂剛 著	集英社	2002
4	彼は	正式の	辞表の日付を十二月十二日とし、十一月三十日より有効としている。	ロナルド・ケスラー(著)/山崎淳(訳)	1940/ 1930	男/男	書籍/2 歴史	女の父の罪	呪われたケネディ王朝		ロナルド・ケスラー 著;山崎淳 訳	文芸春秋	1996
5	第七〇条1ロシア連邦の国旗、国章および国歌、ならびにそれらの記載内容および	正式の	使用手続きは、連邦憲法的法律で定められる。	畑中和夫(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	アジア憲法集			萩野芳夫, 畑博行, 畑中和夫 編	明石書店	2004
9	したがって、	正式の	通知は受けておりません	国務大臣(園田直君)			国会会議録/参議院/特別委員会	国会会議録		第094回国会			1981
正当													
1	証人が	正当の	理由がなくて宣誓または証言を拒んだ	佐藤委員長			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第132回国会			1995
3	「疑うのが	正当の	心構えなのだ				教科書/国語/中	国語2			宮地裕ほか 著	光村図書出版株式会社	2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	設定者からすれば、	<u>正当の</u>	事由がなく、借地権も終了するまで。	野村豊弘(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	民法		2	野村豊弘 著	有斐閣	2004
7	個々の土地について具体的な	<u>正当の</u>	市場価格を見なければならぬ	橋本公亘(著)	1910	男	書籍/3 社会科学	日本国憲法			橋本公亘 著	有斐閣	1988
静寂(4)													
2	き放つ、真実の悟りたのだ” 積尊は禅定もとを去り、まことの悟り求め、	<u>静寂の</u>	地を探して旅した。	池田大作(著)	1920	男	書籍/9 文学	新・人間革命		第3巻	池田大作 著	聖教新聞社	1998
13	通りへ出ると、再び	<u>静寂の</u>	世界。カフェに入る。	上田美子(著)/ 栗原達男(著)	/ 1930	/ 男	雑誌/総合/一般	中央公論		平成13年6月号(第116巻第6号、1405号)		中央公論新社	2001
14	執拗に絶え間なく、彼女の部屋のなかを回った渦の背後のところに、	<u>静寂の</u>	渦湖ともいわれるべきものが、その小さな長椅子が座っていると、デイト	ローベルト・ムージル(著)/ 加藤二郎(訳)	1880/ 1920	男/ 男	書籍/9 文学	ムージル著作集		第2巻		松籟社	1992
17	対して、緊那羅は法楽の神で、その奏する瑠璃の音は、人の心を悩みかきほぐし、	<u>静寂の</u>	境地へ引き入るといわれています。	京戸慈光(著)	1940	男	書籍/1 哲学	観音経物語	内なる仏と出旅		京戸慈光 著	開山堂出版	2004
18	古都と云うより洛北貴船にますが、暑い夏の日を	<u>静寂の</u>	神社へ出掛けたいでしょう。				Yahoo! ブログ/芸術と人文/芸術、アート	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
91	完全な	<u>静寂の</u>	状態に至らねばなりません。	ルドルフ・シュタイナー(著)/西川隆範(訳)	1860/1950	男/男	書籍/7 芸術・美術	シュタイナーと美術学			ルドルフ・シュタイナー著;西川隆範編訳	平河出版社	1987
神秘(4)		(125件用例のうち一部のみ表示)											
1	前をはばむ岩の絶壁が開き、その向こうに満水をたたえた海が現れるように、偉大な	<u>神秘の</u>	扉が開放されたのだ。	佐々木君紀(著)	1960	男	書籍/9 文学	バベルの戦士			佐々木君紀著	リム出版社	1994
2	「まあ、そこです」皇宮の地下で	<u>神秘の</u>	砂絵を見守るリィナが、〈砂王〉とアズナートのまわりの《運命》を逆修正している	三田誠(著)	1970	男	書籍/9 文学	虎は至める	精獣戦争		安田均 原案;三田誠 著	角川書店	2001
4	その後、静音に双子がいて、そのことを知る。	<u>神秘の</u>	力の正体とは、双子が入れることによるまやかしたのだ。	実著者不明			書籍/7 芸術・美術	あずみ公式ガイドブック				小学館	2005
6	しかし、彼らの表現はハイムほど直截ではなく、多分にスーフィ的な	<u>神秘の</u>	衣をまとうていた。	小川亮作(著)	1910	男	書籍/9 文学	ルバイヤート			オマル・ハイヤム 作;小川亮作 訳	岩波書店	1993



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
7	この	神秘の	像とは契約とアロン杖と罪意味した	スチュアート・ムンローハイ(著)/ロ德里ック・グリエルソン(著)/五十嵐洋子(訳)	1940/ /	男/ 男/	書籍/1 哲学	失われた聖櫃	アーク伝説のなぞを解く		ロ德里ック・グリエルソン, スチュアート・ムンローハイ 著;五十嵐洋子 ほか訳	ニュートンプレス	2000
10	その当時はな一人にも分からない	神秘の	世界というのがございました。				Yahoo! ブログ/ コンピュータとインターネット/インターネット	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
新鮮(1)	なし												
素朴(1)	なし												
主要(4)													
1	二月二十七日には大統領がこれのサインを終了して、二百三ミリのりゅう弾砲の	主要の	砲身のところはもう出せないので。	大内委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第096回国会			1982
2	臨床所見で腎癌との鑑別は難しく、一部で症例で腎癌との共存がみられる。	主要の	剖面が淡褐色であること	佐藤信(著)/斎藤誠一(著)/浅野玲子(著)/荒井陽一(著)/遠藤希之(著)	1950/ 1950/ 1950/ 1950/ 1960	男/ 男/ 女/ 男/ 男	書籍/4 自然科学		泌尿器科ナースの疾患別ケアハンドブック		林正健二 監修	メディカ出版	2003
多忙(4)													
7	今期	多忙の	声優が集結してそつちの面ではかなり良かったけど				Yahoo! ブログ/ 趣味とスポーツ/趣味	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
23	結婚以来、雅子は家門の経営と育児に	<b>多忙の</b>	日々を送っていた	大平智也(著)	1920	男	書籍/2 歴史	平知盛	平家最後の勇将源義経との恩讐		大平智也 著	牧歌舎; 星雲社(発売)	2005
39	サラリンとも	<b>多忙の</b>	身にある。	今西憲之(著)	1960	男	書籍/3 社会科学	内部告発	権力者に弓を引いたの男たち		今西憲之 著	鹿砦社	2003
40	五来病に全申参候て二六社に入り候て	<b>多忙の</b>	方と相成候て、養生とマカる中仕候て、年一層の如し紛々	嵐山光三郎(著)	1940	男	書籍/9 文学	美妙、消えた。			嵐山光三郎 著	朝日新聞社	2001
特異(4)													
1	障害もちのDNAは	<b>特異の</b>	ウイルスになる	石田英湾(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	食べもので病気が治せる	桜沢・大森の正食医学理論		石田英湾 著	新泉社	2003
2	床の粥腹では、日ごろ、日本のある現代作家を冷や高慢無礼の驕児も、その	<b>特異の</b>	才能の片鱗を、ちらと見ただけで、案じておいたプランの三分の一もい	太宰治(著)	1900	男	書籍/分 類なし	走れメロス			太宰治 作	偕成社	2002
5	「田舎人の眼で田舎の消息を写したるは、是亦此書の	<b>特異の</b>	性質と云はざ得と評した。	高野静子(著)	1930	女	書籍/2 歴史	蘇峰とその時代	よせられた書簡から		高野静子 著	中央公論社	1988
得意(4)													
3	私はとばえ、でもないにぶる	<b>得意の</b>	表情、不祝儀が似合うとか暗いとか、どこでもない人種となつるような	村松友二(視)(著)	1940	男	書籍/9 文学	おすすめのおしり			日本ペンクラブ 編; 泉麻人 選	福武書店	1993

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
99	しかし、御本人は聴衆の意を迎えたりつりでも、始終満面に	<u>得意の</u>	色を浮かべていた。	山下昇(著)	1920	男	書籍/4 自然科学	フォッサグナ			山下昇  編著	東海大学出版会	1995
159	、確かに以前から聞いたことがあるような気がする幼なじみの話を出しながら、	<u>得意の</u>	笑みを浮かべると「こんにちは」と挨拶した。	乃南アサ(著)	1960	女	書籍/9 文学	水の中 のふた つの月			乃南アサ  著	文藝春秋	2003
177	しかも丹波の後ろには白痴太郎が、鬼の首を取ったような	<u>得意の</u>	微笑を浮かべた兄の民之助様を打ち眺めているのだ。	大黒石(著)	1890	男	書籍/9 文学	怪奇・ 伝奇時 代小説 選集		2	志村有 弘 編	春陽堂 書店	1999
<b>特殊(4)</b>		<b>(90件用例のうち一部のみ表示)</b>											
1	無権代理行為は、本人に対まわった効力を生じませんが、	<u>特殊の</u>	関係にある場合には、本人に効力が生じます。	山崎郁雄(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	民法の 基礎知 識	日常生 活に・ ビジネ スに必 ず役立 つ”生 きた” 法律 活用講 座		山崎郁 雄 著	自由国 民社	2002
2	へて、労働者の仕事の後或は仕事の間彼等を指導し或は楽ませる為保護すべきであるが、	<u>特殊の</u>	天分あるものにかぎる。	大熊信行(著)	1890	男	書籍/3 社会科学	社会思 想家と しての ラスキ ンリス			大熊信 行 著	論創社	2004



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	役員クラスを補強するか部長・課長・一般社員なのかによっても違ってくるが、	直接の	<b>人件費</b> のほか、人材銀行に依頼した場合には手数料がかかります。	加藤晶春(著)/松野雄一郎(著)	1950/1950	男/男	書籍/3 社会科学	株式公開の知識			加藤晶春, 松野雄一郎   著	日本経済新聞社	1996
5	五人の暗殺者によって射殺された。即死。	直接の	<b>死因</b> は、檜山の肉体が雲散したため不明。	小林恭二(著)	1950	男	書籍/9 文学	小説伝・純愛伝			小林恭二   著	福武書店	1986
6	国土建設の	直接の	<b>担い手</b> として大きな役割を果たしている。				白書/国土交通	建設白書	昭和53年版		建設省	大蔵省印刷局	1978
著名													
1	に刺激された中川一政コレクション・ブランドとの重複で興奮の極致となり他の海外	著名の	同じ作者不詳の数作品が法外(約九百~千九百)な値が付きたま当オークション出	大川栄二(著)	1920	男	書籍/7 芸術・美術	新・美術館の窓から			大川栄二   著	財界研究所	2004
2	ルソーはもはや依存癖をまかせておけばよい「未成年」ではない。	著名の	人であり、魂の指導者でなければならなかった。	松本勤(著)	1930	男	書籍/1 哲学	ルソー—自然の恩寵に恵まなかった人			松本勤   著	新曜社	1995
幼稚(1)	なし												
有望(2)													
3	二十六歳で第一学『チ』に論文デビューを果たしたと述べている <b>前途</b>	有望の	<b>東洋の青年</b> に対しては、学問仲間として礼を尽くすが自然であった。	松居竜五(著)	1960	男	書籍/0 総記	達人たちの大英博物館			松居竜五   ほか   著	講談社	1996

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版社	出版年
4	『虞美人は御存じの博士論文を執筆中の将来』	有望の	秀才・小野をめぐる、二人の女性の対比と葛藤が主骨になっている。	塚谷裕一(著)	1960	男	書籍/9 文学	漱石の白くない白百合			塚谷裕一 著	文芸春秋	1993
有名(4)													
2	世界の	有名の	諸仏、無名の諸仏を見出し、ともに歩む	加来雄之(著)	1950	男	書籍/1 哲学	親鸞	信の念仏者		草野顕之 編	吉川弘文館	2004
4	だから昔からインスピレーションを受けた	有名の	大家の所作を真似れば必ず逆上に相違ない。	夏目漱石(著)	1860	男	書籍/9 文学	吾輩は猫である			夏目漱石 著	新潮社	2003
5	轎車を雇ひて清宮の参詣を試みたが、宮は例の如く兵隊の営所に化した。	有名の	道廟仏寺概ね巡警兵屯所となるは遺憾の事だ。	田中逸平(著)	1880	男	書籍/1 哲学	イスラム巡礼白雲遊記			田中逸平 著	論創社	2004
7	女に関係なき主義をとなす貴人学者のラブさあり。	有名の	人多く、女とわ物いおば大枚の罰払い追さる	松居竜五(著)	1960	男	書籍/0 総記	達人たちの大英博物館			松居竜五 ほか 著	講談社	1996
優秀(2)		(19件用例のうち一部のみ表示)											
5	合格者の状況を見てると、殆どの高校で成績	優秀の	生徒ばかりが合格しています。				Yahoo!知恵袋/子育てと学校/受験、進学	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
残念(4)													
3	期しにわたりにはたいした戦も空戦もなく、空戦を離脱して北上をつづけることは、ただ	残念の	一語につきる。	橋本廣(著)	1910	男	書籍/9 文学	機動部隊の栄光	艦隊司令部信号員の太平洋海戦記		橋本廣 著	光人社	2001
純情	なし												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
重大(4)													
3	台湾の従来史と台湾の歴史と台湾の向かって、あは余り	重大の	事業に過ぎはせぬかということ、人々みな疑うた点であります。	鶴見祐輔(著)	1880	男	書籍/2 歴史	正伝・後藤新平	決定版	3	鶴見祐輔 著; 一海知義 校訂	藤原書店	2005
5	「能率ある公正なる政府、腐敗のない政府を造ると云う事は公民権よりも	重大の	ものである」と断定されることになる。	山室信一(著)	1950	男	書籍/2 歴史	キメラ 一満洲国の肖像			山室信一 著	中央公論社	1993
重要(4)													
17	、その製作された時代の技術水準と費用をかけた様子、着用者の格と好みがかがわれる	重要の	場所であつて、その良否は胴自体の作域のレベルに比例しているのが常で、この部	笹間良彦(著)	1910	男	書籍/7 芸術・美術	甲冑鑑定必携			笹間良彦 著	雄山閣出版	1992
32	私費留学生に対する施策の充実は	重要の	課題である。				白書/福祉	青少年白書	平成元年版		総務庁 青少年対策本部	大蔵省印刷局	1990
素朴(1)	なし												
正確の(3)	なし												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
曖昧を1	なし												
大胆1	なし												
円滑2													
1	特定行政庁の承認、協議等の手続は、有事に際しての自衛隊の行動の	円滑を	確保するため関係省庁の協力を得て迅速に措置されることが必要である。				白書/安全	防衛白書	平成6年版		防衛庁	大蔵省印刷局	1994
3	その趣旨とするところは、今先生もおっしゃいました行政事務の	円滑を	図る。	算政府委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第103回国会			1985
嚴重を1	なし												
強引を1	なし												
豊富を1	なし												
確実1	なし												
活発を1	なし												
軽快を1	なし												
顕著を1	なし												
健全2													
1	上の諸問題について、他の公共企業体共済組合との関連を考慮しつつ国鉄共済年金財政の	健全を	図るため、53年9月20日に、学識経験者等で構成する「国鉄共済年金問題懇談会」				白書/国土交通	運輸白書	昭和54年版		運輸省	大蔵省印刷局	1979
2	「久しく職を帝都の軍隊に奉じ、二意軍の	健全を	翹望して他念なかりしに、其十全徹底は一途に出づるものなきに決着せり」と	須崎慎一(著)	1940	男	書籍/2 歴史	二・二六事件	青年将校の意識と心理		須崎慎一 著	吉川弘文館	2003



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	母子の	健全を	祝ふのだと云ふ。	近藤直也(著)	1950	男	書籍/3社 会科学	「鬼子」誕生餅	初誕生儀礼の基礎的研究(九州・沖縄編)		近藤直也 著	岩田書院	2002
奇妙を1	なし												
奇麗を1	なし												
器用を1	なし												
巧妙を1	なし												
強烈を1	なし												
明白を1	なし												
明確を1	なし												
明朗を1	なし												
明瞭を1	なし												
猛烈を1	なし												
呑気を1	なし												
濃厚を1	なし												
旺盛を1	なし												
立派を1	なし												
粗末を1	なし												
率直を1	なし												
大切を1	なし												
柔軟を1	なし												
微妙を1	なし												
独特を1	なし												
独自を1	なし												
同様に1	なし												
意外を1	なし												
一様を1	なし												
懸命を1	なし												
急激を1	なし												
無数を1	なし												
無惨を1	なし												
深刻を1	なし												
対等を2													
2	れる共通認識にした。政治学者プロエクトルは、一九六〇～七〇年代に、軍事面での対米	対等を	目指したことが、かえってソ連にとって大きなマイナスだったと考え、ソ連の軍事政策に	下斗米伸夫(著)	1940	男	書籍/3社 会科学	「ペレストロイカ」を越えて	ゴルバチョフの革命		下斗米伸夫 著	朝日新聞社	1991
5	以上のように商人が、大名と対等なれたという戦国時代と鉄砲との基盤の上に、主客	対等を	基調とする、わび茶道が生れて来たのであった。それゆえ茶道の第一は四帖半の茶室にあ	高木和男(著)	1900	男	書籍/3社 会科学	食から見た日本史		上	高木和男 著	芽ばえ社	1986

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
沢山を1 適度を1 適宜を1 適当を1 容易を1 有効を3	なし なし なし なし なし												
1	との結婚の無効を宣言し、その5日後にはBoleynの結婚の	有効を	認めたことで、Henryの欲求実現に多大な貢献をした。	宮川朝子(著)		女	書籍/7 芸術・美術	イギリス中世演劇の変容	道徳劇・インタルド研究		宮川朝子 著	英宝社	2004
6	Xは配転命令の無効を主張するが、一方Yは本件解雇の	有効を	主張し、反訴として、仮処分事件における地位保全、賃金支払命令	浅倉むつ子(著)	1940	女	書籍/3 社会科学	女性労働判例ガイド			浅倉むつ子、今野久子 著	有斐閣	1997
有利を3													
1	得ぬからな。それに、この程度の坂の不利は、四頭の馬が補う。ついでに、股軍は地形の	有利を	「恃むゆえ、油断するはずじゃ」太公望は、これからの展開を読んでいる。「老師、例	芝豪(著)	1940	男	書籍/9 文学	大公望	殷王朝を倒した周の名軍師		芝豪 著	PHP研究所	2000
5	なく、直接、外国語に就くのが正しいだらう。すなはちわたしは、欧文とつきあふことの	有利を	ふたたび強調しなければならぬ。	丸谷才一(著)	1920	男	書籍/8 言語	文章読本			丸谷才一 著	中央公論社	1977
6	と勝負がつかなくなる、もしくは試合時間が長引くので禁じ手とされています。守備側の	有利を	少なくともするためのルールなわけです。				Yahoo!知恵袋/エンターテインメントと趣味/ゲーム	Yahoo!知恵袋			Yahoo!		2005
有力を1 安全を5	なし												
(957件用例のうち一部のみ表示)													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	明に疑問をもたなかった自分。安全確保について：患者一人ひとりに医療従事者がついて	安全を	確保することはできないが、だからといって患者のプライバシーが侵害されているのは納	土屋八千代(著)		女	書籍/4 自然科学	看護事故予防学			土屋八千代, 山田静子, 鈴木俊夫 編	中山書店	2003
3	目的はあの地域の危険物の除去ということで我が国船舶の	安全を	図るということですから、その目的が達成される期間ということが必要であろう	政府委員(畠山蕃君)			国会会議録/参議院/常任委員会	国会会議録		第120回国会			1991
8	場ではバイ・ステープルとも呼ぶ)で連続監視し、これが予め設定した閾値を上回ると、	安全を	守るための機器が自動起動する。	丹羽雄二(著)/吉川榮和(著)/川辺康晴(著)	/1940/	男/男/男	書籍/5 技術・工学	京都からの提言-明日のエネルギーと環境		その続編	シンビオ社会研究会 編著	日工フォーラム社; 日本工業新聞社(発売)	2001
9	度は他社に比べ、遥かに高い基準と考え方、人間にはミスが付き物ですから、二重三重の	安全を	考え、建物作りに取り組みます、又現場でも施工精度ムラや人的ミスも考えて、一				Yahoo!ブログ /Yahoo!サービス /Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
12	用しますか？私は、よほどのことではない限り、安い方を選びます。その人の判断ですね。	安全を	取るか、お金を取るか。そのときで、違います。				Yahoo!知恵袋 /Yahoo! JAPAN/Yahoo!オークション	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
豪華を1	なし												
貧弱を1	なし												
本気を5													
4	と泣いて頼んでくるだろう。色々あって、俺も遊んでばかりいられないから、ちよっぴり	本気を	出すことにしたんだよ」「そうー」勝手にするがいい、と思いつながら、アジアンは無表	十文字青(著)		男	書籍/9 文学	薔薇のマリア		2	十文字青 著	角川書店	2005
6	ようにして彼は藍に教えたのだろう。がむしやりに腰を打ちつけるだけが、必ずしも男の	本気を	証明する方法ではないことを。「は…」藍は目を細め、すぐに見開いた。いや、そう	松岡なつき(著)		女	書籍/9 文学	チェイン・リアクション			松岡なつき 著	ビブロス	2001
8	じられないと思うんですね。本気で私と結婚したいと思っているのかどうか、多分、その	本気を	信じられないというふう思うんです。これは、悪意に基づくものならば、結婚詐欺とい	松本(大)委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第162回国会			2005
不幸を4		(195件用例のうち一部のみ表示)											
1	実は <u>家族</u> の	不幸を	喜んでるんじゃない？	天童荒太(著)	1960	男	書籍/9 文学	家族狩り			天童荒太 著	新潮社	1995
2	<u>他人</u> の	不幸を	おもしろがって <u>読む</u> 人たちがいる	木村梢(著)	1920	女	書籍/7 芸術・美術	功、大好き	俳優木村功の愛と死と		木村梢 著	講談社	1982

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	落選の	不幸を	笑い飛ばしてみせた。	平野啓一郎(著)	1970	男	書籍/9 文学	葬送		第2部	平野啓一郎著	新潮社	2002
4	女の子同士って	不幸を	比べたがる子が多くないですか？6年ぶりにやっと彼氏が出来たのですがそれを言っ				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
5	そして啄木という人は、あまりにも若い読者に早く読まれる	不幸を	背負った人だ。	五木寛之(著)	1930	男	書籍/9 文学	青春の門		放浪篇	五木寛之著	講談社	1990
6	中部電力の原発建設計画が、この二つの町の人々に多大な	不幸を	もたらす。	今井一(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	住民投票	観客民主主義を超えて		今井一著	岩波書店	2000
7	神は病気や	不幸を	癒すものであり、決して人びとに制裁を加えたりはしない。	池田光穂(著)	1950	男	書籍/4 自然科学	実践の医療人類学	中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開		池田光穂著	世界思想社	2001
複雑を1	なし												
簡易を1	なし												
寛容を5													
3	視野を狭くすると、学者は独善的になり、	寛容を	失うものだが、ギルド感覚は学者たちを同業組合のように連携させ、学術論争において客観	ゲオルク・ライ(著)/嵯峨山あかね(訳)/河井弘志(訳)	1870/1930	男/女/男	書籍/0 総記	司書の教養			河井弘志編訳	京都大学図書館情報学会;日本図書館協会(発売)	2004
4	無為の治の一形態を、ここでは万事大まかで	寛容を	旨とする治政の在り方として説く。	楠山春樹(著)	1920	男	書籍/1 哲学	老子のことば			楠山春樹著	斯文会;明德出版社(発売)	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
9	他人同士が結合したとはいえ、異質に対して理解と	寛容を	示すことは凡人には容易ではない。	浅妻正美(著)	1920	男	書籍/9 文学	老いが老いを看ると	血液ガンの妻を介護して		浅妻正美 著	日本評論社	1997
簡単を1	なし												
完全を1	なし												
健康を5	23件用例のうち一部のみ表示)												
1	、引続きご指導よろしくお願ひ申し上げます。最後にりますが、町民の皆様のご多幸とご	健康を	<u>お祈り申し上げます</u> 、新年のあいさついたします。勇気と奮起をもって会津美里町議				広報紙/東北地方/福島県	広報あいつみさと		2008年01号		福島県大沼郡会津美里町	2008
2	という感覚のわりに効果が見えにくく、ストレスがたまり、リバウンドを起こしやすい。	健康を	保ちながらやせるためには、バランスよく栄養を摂ることが大切なのだ。とはいえ、食事	千葉淳子(著)		女	書籍/5 技術・工学	お腹を凹ませる1日15分ストレッチ	腹筋を鍛えて、脂肪を減らす		中村勝美, 小田真規子 監修	永岡書店	2004
4	ったことは正解だったと思いましたが。彼らのプライバシー破壊とは肉体的にも精神的にも	健康を	破壊することなのです。それは、エイズという疾病においては大きな影響を与えます。あ	南定四郎(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	エイズ危機			NHK取材班 編著	日本放送出版協会	1992
賢明を1	なし												
堅実を													
1	期金を老後生活に利用する方法があります(→第3章)。このほか、預貯金の運用では	堅実を	第一に心がけること、夫の勤めていた企業から遺族年金が支給される場合があります。	欠野アズ紗(著)	1940	女	書籍/3 社会科学	自分の年金計画をいま見直さない	平成11年年金改正前に手を打て!		欠野アズ紗 著	青春出版社	1998

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	女史のステージの声に接しなかった。知人たちの噂によると、その歌いぶりは、やや	堅実を	欠いて奔放に流れがちだという。難曲といわれているものを易々と歌いこなす度胸には	矢田津世子(著)	1900	女	書籍/9 文学	新・ちくま文学の森		16	鶴見俊輔 ほか編	筑摩書房	1996
危険を5		(990件用例のうち一部のみ表示)											
3	これは失礼。おれはまたてつきり、そういう	危険を	さけるために、雇われたのかと思っただが。	ポール・スチュワート(著)/唐沢則幸(訳)	1950/1950	男/男	書籍/分類なし	嵐を追う者たち			ポール・スチュワート 作;クリス・リデル 絵;唐沢則幸 訳	ポプラ社	2001
4	投資大衆に還元して国民の産業投資信託たらしめ」構想のもと、「多角経営をなし以て	危険を	分散し事業を安定して恒久的事業利益の平衡を維持する」べく、既存の企業をM&Aによ	白坂亨(著)		男	書籍/3 社会科学	テキスト現代企業論			坂本恒夫, 大坂良宏 編著	同文館出版	2004
6	正義のために	危険を	分かち合いながら、かつこれを克服しながら、苦楽をともにして世界の平和に貢献すると	永野茂門君			国会会議録/参議院/特別委員会	国会会議録		第122回国会			1991
7	EFTA加盟は少なくとも、オーストリア経済の孤立という	危険を	防いだ	リチャード・リケット(著)/青山孝徳(著)/青山孝徳(訳)	1900/1940/1940	/男/男	書籍/2 歴史	オーストリアの歴史			リチャード・リケット 著;青山孝徳 訳	成文社	1995
緊急を5		(90件用例のうち一部のみ表示)											
1	条又は第八条の規定により勤務時間が割り振られた時間以外に人命を救助するため	緊急を	要する作業その他の人事院規則で定める作業に従事する場合には、第五条又は前条の規定				法律/国家公務員	一般職の職員の勤務時間、休暇等に関する法律		平成六年六月十五日法律第三十三号			1994
気楽を1	なし	(103件用例のうち一部のみ表示)											
公平を4													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	夫婦が協力して形成した財産の清算を主要な目的とする財産分与制度の趣旨に反して、	公平を	失する結果となる。	二宮周平(著)/ 榊原富士子(著)	1950/ 1950	男/ 女	書籍/3 社会科学	離婚判例ガイド			二宮周平, 榊原富士子 著	有斐閣	2005
2	医師たちも、良心の呵責に悩まされていたが、あえて	公平を	期して言うならば、一般大衆への伝達手段を牛耳っていたのは医師たちではなかった。そ	ジョレス・A・メドベージェフ(著)/ 吉本晋一郎(訳)	1920/ 1920	男/ 男	書籍/5 技術・工学	チェルノブイリの遺産			ジョレス・メドベージェフ 著; 吉本晋一郎 訳	みすず書房	1992
5	って利用される施設の建設に必要な資金について、財政的負担の軽減と、世代間の負担の	公平を	図るという観点から、町債という形でお金を調達しています。				広報紙/関東地方/栃木県	広報みぶ		2008年06号		栃木県下都賀郡壬生町	2008
7	納付されない状態が続く場合には、 <u>納付された人との</u>	公平を	保つために、滞納処分などを行います。				広報紙/中国地方/広島県	ひろしま市民と市政		2008年03号		広島県広島市佐伯区	2008
幸福を5		(353件用例のうち一部のみ表示)											
1	現世の	幸福を	求めるのではない。	梶原和義(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	ユダヤ人を中心に世界は動いている			梶原和義 著	JDC	2003
2	不自然な手法は破綻する。	幸福を	手に入れること汲々とした人間は、幸福に手をかけたつもりでいて結局、そこから滑り落	青山圭秀(著)	1950	男	書籍/9 文学	最後の奇跡			青山圭秀 著	幻冬舎	2000
3	きっと、その人にも、ささやかな	幸福を	もたらしてくれたと思います。				Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	感、満足感を味わえることが幸せとある。立場は欲望の体系で、善、	幸福を	考えるものだが、その欲望は結局は生きんとする意志の下での欲望とめうもの	荻野 恕三郎 (著)	1920	男	書籍/1 哲学	人生の意味と価値			荻野 恕三郎   著	南窓社	1998
7	そして第二の真実は、物質的な環境に何も変化がなくても自分がより	幸福を	感じるよう、意識的に生活を組み立てるのは可能だということだ。	ジェイ・フェラン (著) / テリー・バーナム (著) / 森内 薫 (訳)	// 1960	男 / 男 / 女	書籍/1 哲学	いじわるな遺伝子	Sex、お金、食べ物に勝てないわけ		テリー・バーナム, ジェイ・フェラン   著; 森内 薫   訳	日本放送出版協会	2002
好調を4		(53件用例のうち一部のみ表示)											
1	秋元氏も東一局でハネ満を決めており、	好調を	キープしている。	実著者不明 / 広瀬 一峰 (著) / 馬場 裕一 (著)	//	/ 男 /	雑誌/総合 / 一般	週刊現代		2001年6月23日号 (第43巻第23号、No. 2136)		講談社	2001
3	中国が家電、自動車生産の	好調を	反映して前年に引き続き大幅に伸び、				白書/経済	通商白書	昭和59年版 (各論)		通商産業省	大蔵省印刷局	1984
4	前年同期比10.0%増と依然として	好調を	継続している。				白書/国土交通	運輸白書	昭和63年版		運輸省	大蔵省印刷局	1989
7	ニコ・ロズベルグが初日2番手、2日目3番手、中嶋一貴が最終日4番手と	好調を	維持している。				Yahoo! ブログ/趣味とスポーツ/スポーツ	Yahoo! ブログ				Yahoo!	2008
9	最近、先進諸国の不況と中国経済の	好調を	受けて、留学生の帰国ラッシュが始まっている。	金 熙徳 (著)	1950	男	書籍/3 社会科学	中国をどうみるか	新しい変化を読み解くための10章		金熙徳   著	ポプラ社	2004
極端を1 強力を4	なし												
1	人並外れた	強力を	持っている彼は、どんな乱暴をすらかも分らなかった。	菊池 寛 (著)	1880	男	書籍/9 文学	真珠夫人			菊池 寛   著	文藝春秋	2002

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	による外貨獲得高を上回る最大の外貨収入源となっている。 83年以降 <u>世銀・IMF</u> の	<u>強力を</u>	得て、最大の課題である財政赤字削減をはじめとする構造調整努力を行っており、96年				白書/外交	我が国の政府開発援助	1997 (下巻 (国別援助))		外務省 経済協力局	(財) 国際協力推進協会	1997
3	守(たじまもり)の説話などがある。出雲の勇士、野見宿禰は同天皇七年、召し出されて	<u>強力を</u>	もって知られる当麻(タイマ)のケハヤを見事に破り、力士の始祖と讃えられた。				Yahoo!ブログ /Yahoo!サービス /Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
4	<u>ハンニバル</u> の	<u>強力を</u>	もつても、敵の軍船に届かず	渡邊由自(著)	1940	男	書籍/9 文学	愛の翼の聖天使			渡邊由自 著	小学館	1994
5	う。世にいう「義経の八艘跳び」である。ついに義経を諦めた教経は、腹立ちまぎれに	<u>強力を</u>	誇る安芸太郎時家を海中に蹴落とし、安芸次郎とその郎党の二人を両脇に抱え込んで海中	鈴木亨(著)	1930	男	書籍/2 歴史	源義経と源平の合戦			鈴木亨 著	河出書房新社	200
窮屈を5													
1	堀内の「覚書」も、とかく次の間での話録が多く、やはり大石ら長老連	<u>窮屈を</u>	<u>感じた</u> のだろう。	舟橋聖一(著)	1900	男	書籍/9 文学	新・忠臣蔵		第8巻	舟橋聖一 著	文藝春秋	1998
2	そんな社会は	<u>窮屈を</u>	<u>超えた</u> 恐怖社会になると思う。				Yahoo!ブログ /Yahoo!サービス /Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
急速を1 熱心を5	なし												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	会、伝道する教会でなければならない」と力説された。燃える宣教の教会、火のごとき	熱心を	<u>もって</u> 、主のご来臨までの間、伝道し続ける教会こそ、主に喜ばれるキリストの花嫁であ	峯野龍弘(著)	1930	男	書籍/1 哲学	真のキリスト者への道			峯野龍弘 著	いのちのことば社	2001
2	います。「たまつくりの博士となつて入りこみしは」といふところだ。しかしその	熱心を	<u>聞かせ</u> たら、いかな鼻でも少しはありがたいだろう。じつは先日はくがある用事があつ	夏目漱石(著)/稲垣達郎(著)	1860/1900	男/男	書籍/9 文学	吾輩は猫である		上	夏目漱石 著	ポプラ社	2005
3	十何種かの新聞を読む。まず、この努力だ。商売熱心といつてもよいかも知れないが、その	熱心を	<u>支えている</u> のは、前述した好奇心だ。いくら商売とはいへ、好きでなければコンがつづか	扇谷正造(著)	1910	男	書籍/2 歴史	夕陽のペンマン	わがマスコミ交遊録		扇谷正造 著	騒人社	1989
4	信ずるものの悪口をいい、多くの真摯な神の僕の顔に泥を塗ることになり、彼ら	熱心を	<u>ふみにじる</u> ことになるであろう。「表1 ニューイングランド植民地の人口(1620~	田村光三(著)	1920	男	書籍/2 歴史	アメリカ地域発展史	諸地域の個性と魅力をさぐる		岡田泰男 編	有斐閣	1988
冷静を5		(25件用例のうち一部のみ表示)											
3	ずに走り出したら、新聞は公衆が彼等と一緒に駆け出すよう助けるだろう。そして人々が	冷静を	<u>取り戻して</u> 正気にかえるまでリベラリズムに訣別するだろう」と論じている。大変、適確	池田一之(著)	1920	男	書籍/0 総記	記者たちの満州事変	日本ジャーナリズムの転回点		池田一之 著	人間の科学新社	2000

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
5	に論理の落とし穴にはめられたり誘導尋問にひっかかりやすかった。つねに	<u>冷静を</u>	<u>保ち</u> 、ほんとうのことを上申書に書いた。このような非道なあつかいを受ける憤り	張 戎(著)/土屋京子(訳)	1950/1950	女/	書籍/2 歴史	ワイルド・スワン		上	ユン・チアン 著;土屋京子 訳	講談社	1993
11	、実家に戻った。だが、実家での静かな暮らしと緩やかな時間の流れは、ほどなく彼女に	<u>冷静を</u>	<u>甞</u> した。冷静にたち戻っても、熾媛はなお曹操の許へ戻ろうとはしなかった。いま自分が	藤 水名子(著)	1960	女	書籍/9 文学	公子風狂			藤水名子 著	講談社	1997
14	ゼロ”が、静かに身を落とす。ナイフを持ったまま、ファイティング・ポーズをとる。	<u>冷静を</u>	<u>失</u> うな、新祖汰一。新祖父の教えが脳裏に蘇る。「はあっ」新祖汰はトリョチャギで“	岩井恭平(著)	1970	男	書籍/9 文学	消閑の挑戦者	パーフェクト・キング		岩井恭平 著	角川書店	2002
16	ない、上履きも入ってない。なんで?!これで叱るなど仰る??思わず注意したところ(	<u>冷静を</u>	<u>心掛</u> けました)何と娘が涙。。はあ。。叱れば泣く、叱らなければ何もしない。私はどう				Yahoo!知恵袋/子育てと学校/子育て、出産	Yahoo!知恵袋			Yahoo!		2005
利口を1	なし												
露骨を1	なし												
清潔を4		(43件用例のうち一部のみ表示)											
1	あるでしょう。今後もなるかならないかは個人によって違うと思うので、あまり気にせず	<u>清潔を</u>	<u>心掛</u> けるだけでいいと思いますよ。				Yahoo!知恵袋/子育てと学校/子育て、出産	Yahoo!知恵袋			Yahoo!		2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	ごみが散らかったり、悪臭を放つたことのないよう、 <u>周囲の</u>	<u>清潔を</u>	<u>保つ。</u>				広報紙/四国地方/徳島県	広報いしい		2008年04号		徳島県名西郡石井町	2008
6	、4 感染予防各種カテゴリー、創部の消毒の徹底、全身や口腔粘膜の清潔、 <u>病室の</u>	<u>清潔を</u>	<u>保持し</u> 、感染の予防に努める。5 皮膚掻痒症の軽減：皮膚の清潔保持、保湿を心がける	実著者不明			書籍/4 自然科学	看護学入門		2005年度版9巻		メジカルフレンド社	2004
正常を5													
1	度の常識はわきまえていた。自分は異常だから。そうらしいから。人前ではできる限りの	<u>正常を</u>	<u>心がける</u> ようになっていた。小学生の時のように自分から男の子を貶めることはなく、ふ	小野一光(著)	1960	男	書籍/3 社会科学	東京二重生活	風俗嬢の「昼の顔」と「夜の顔」		小野一光 著	集英社	1999
2	だった。彼女にLSDを与え、その翌日からナイアミドの投与を開始した。彼女は	<u>正常を</u>	<u>維持する</u> ようになった。 ・ M・M (六十七歳、男性)は生涯を通して大酒のみだったが	エイブラム・ホプファー(著)/大沢博(訳)	1910/1920	男/男	書籍/4 自然科学	ビタミンB-3の効果	精神分裂病の栄養療法		エイブラム・ホプファー 著;大沢博 訳	世論時報社	2001
4	心身症の患者にこの傾向が強く、このような患者に質問紙法による心理テストを行っても	<u>正常を</u>	<u>示す</u> 。このような場合、患者が受けていると思われるストレスサーと心理テストや面接の	中井吉英(著)/橋爪誠(著)	1940/	男/男	書籍/4 自然科学	ストレスの事典			河野友信、石川俊男 編	朝倉書店	2005
5	です。とてもショックでした。今はあまり1人でいないように、予定を無理に作る事で、	<u>正常を</u>	<u>保つ</u> ています。本当に彼の悪い所も全部含めて、大好きでした。今はごはんもろ				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
親切を3		(43件用例のうち一部のみ表示)											
2	やかすと、そういうものだと思って他の方にも迷惑かけますよ。ワガママな人は、 <u>他人の</u>	<u>親切を</u>	仇で <u>返し</u> ますし、ルーズで要求に際限がないです。				Yahoo!知恵袋/Yahoo!JAPAN/Yahoo!オークション	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
3	その気がないのならほどほどにして <u>その人からの</u>	<u>親切を</u>	<u>遠慮</u> しましょう。				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
4	親切というより、善意の押し売り)私 <u>がその人の</u>	<u>親切を</u>	<u>断</u> ると、「人の親切を・・・」と不機嫌になります。				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
5	それを反映して日記では、ヨナスのことを「私が今まで注いできた <u>心からの</u>	<u>親切を</u>	<u>無駄にした</u> 傲慢な悪ガキ」と称している。	アリソン・プリンス(著)/訳者不明	/	女/	書籍/9 文学	ハンス・クリスチャン・アンデルセン哀しき道化			アリソン・プリンス 著;立原えりか 監修;黒田俊也 監訳;小林淳子, 籠宮史子, 坂田和代, 島田智紀 訳	愛育社	2005
慎重を5		(72件用例のうち一部のみ表示)											
2	いう陸相の姿のなかに、首相はおのれの投影をみているのである。こうして慎重の上に	<u>慎重を</u>	<u>期</u> してすべてのお膳立てがととのった。理性を戦場から拾いあげるときが訪れた。六月二	半藤一利(著)	1930	男	書籍/2 歴史	聖断	昭和天皇と鈴木貫太郎		半藤一利 著	PHP研究所	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
	3 らダイヤ通りの運行ができるようにしなければならぬ工事である点から、極めて難しく	<b>慎重を</b>	<b>要する</b> 工事であると言える。	廣瀬良一(著)	1930	男	書籍/6 産業	ヨコハマ「みらい線」誕生物語	計画から開通までのドラマ		廣瀬良一 著	神奈川新聞社	2004
水平を5													
	3 文のイメージに合うように古典を選ぶ。漢字漢字に合う仮名の工夫A素朴で力強い張遷碑	<b>水平を</b>	<b>基調にして</b> 安定感をB力強くたくましい牛欄造像記点画の角張りを強調C伸びやかで穏や				教科書/芸術/高	書道II			栗原蘆水 ほか著	東京書籍株式会社	2006
	4 かを確認し、少なればコンロの火を止めて材料を追加し、再点火する。(5)型板の	<b>水平を</b>	<b>維持し</b> ながらコンロから下ろす。(6) 溶融鉛が固化したことを確認し、汲み置きの水	松本修身(著)	1940	男	書籍/7 芸術・美術	作ろう・飛ばそう竹とんぼ	より高く・より遠くへ！記録へ挑戦		松本修身 著	パワー社	2005
	6 地の傾斜地は、凸凹で至るところに落差があり、移動車をスムーズに動かすために、その	<b>水平を</b>	<b>保ち</b> 、一定の傾斜でレールを敷くのが大変だったのだ。大体、わたしは移動のカットが	実相寺昭雄(著)	1930	男	書籍/7 芸術・美術	ウルトラマンの東京			実相寺昭雄 著	筑摩書房	2003
<b>詳細を4</b>		(331件用例のうち一部のみ表示)											

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年	
1	い方、食事制限をしたくない方などにお勧めです。本当にダイエットを考えられている方、	<a href="#">詳細を</a>	見てね！！いつも品薄状態なので興味がある方はお早めに。詳細は→ <a href="#">http://</a>				Yahoo!ブログ/健康と医学/美容と健康	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008	
2	タイガーバームの配合成分の	<a href="#">詳細を</a>	教えて下さい。				Yahoo!知恵袋/教養と学問、サイエンス/一般教養	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005	
5	がBackupアプリケーションのメイン画面だ。メイン画面にリストされている項目の	<a href="#">詳細を</a>	知りたい場合には、その項目を選択してから、左下にある「i」というボタンをクリック	折中良樹(著)		男	書籍/5 技術・工学	. mac 徹底使いこなし術				折中良樹 著	広文社	2002
9	でしょうし、仮に一時的には改善されても、この先も同じようなことが続くと思います。	<a href="#">詳細を</a>	お聞きししれないと適切なアドバイスはできませんが、数々の労働基準法違反は間違いない				Yahoo!知恵袋/職業とキャリア/労働問題、働き方	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005	
10	張学良氏は、問題の西安事件の核心部分について口述記録の中でも	<a href="#">詳細を</a>	語っていないもようだ	産業経済新聞社(著)			新聞/全国紙	産経新聞	朝刊	2002/6/7		産業経済新聞社	2002	
単調を4														
2	どちらの側にも緊張が高まってきた。	<a href="#">単調を</a>	破るため、正午の一五分ほどまえ、敵が射程に入りしだい砲を発射せよとヴィルヌーヴは	ロイ・アドキンス(著)/山本史郎(訳)	/ 1950	男/男	書籍/2 歴史	トラファルガル海戦物語		上		ロイ・アドキンス 著;山本史郎 訳	原書房	2005
3	運命はある真昼の午後、この平々凡々たる家庭生活の	<a href="#">単調を</a>	一撃のもとにうち砕いた。	芥川龍之介(著)	1890	男	書籍/9 文学	夢の跡	馬をめぐるアンソロジー			芥川龍之介 ほか著	新宿書房	1989
単純を	なし													
丁寧を	なし													



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
適切を													
2	掌握している各種分子のいずれをもこの際に必要に敵視せしめるような措置に出ることは	適切を	欠くものと思われる。	細谷千博(著)	1920	男	書籍/2 歴史	シベリア出兵の史的研究			細谷千博 著	岩波書店	2005
3	の一方で9頭がまともに走れば、ほとんどチャンスのない50倍以上の馬が5頭もいた。	適切を	欠く表現であるかもしれないが、大学進学組と落ちこぼれ組が一つ教室で同じ授業を受け	岡田和裕(著)	1930	男	書籍/7 芸術・美術	まる儲け！三連複！			岡田和裕 著	光人社	2002
忠実を5													
1	神と親族、友人たちの前で生涯の愛と	忠実を	誓い、リングを交換し、晴れた夫婦となったブリシルさんとアモリーさんは、お互いの顔	実著者不明/川島ルミ子(著)	/	/ 女	雑誌/総合/一般	M I S S		2003年1月号(第15巻第1号、通巻163号)		世界文化社	2003
3	事実と違って、金正日の言う通り「やりました」で通す。つまり表は	忠実を	装い、腹の中はまったく違う。	長谷川慶太郎(著)	1920	男	書籍/3 社会科学	次の世界が見えた			長谷川慶太郎 著	徳間書店	2004
愉快を5													
3	いたサーカスのテントみたいな部屋を着ていたのを見て、チャドウィックは冷ややかな	愉快を	覚えている。賭けてもいい、あの下には、コルセットしか着けていないはずだ。またいつ	ポーラ・コーエン(著)/布施由紀子(訳)	1940/1950	女/女	書籍/9 文学	運命の園に囚われて			ポーラ・コーエン 著;布施由紀子 訳	角川書店	2003
有益を1	なし												
贅沢を4	(83件用例のうち一部のみ表示)												

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア/ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	スリムなホステスがほほ笑みながら入口に立っていた。	<u>贅沢を</u>	<u>するつもり</u> はない	ジョー・シャーン(著)/田中昌太郎(訳)	1950/1930	男/男	書籍/9 文学	上海の紅い死		下	ジョー・シャーン 著;田中昌太郎 訳	早川書房	2001
5	もうそんな	<u>贅沢を</u>	<u>いえる</u> 身体ではない。	渡辺淳一(著)	1930	男	書籍/9 文学	くれなゐ			渡辺淳一 著	集英社	1979
6	<u>食事の</u>	<u>贅沢を</u>	<u>止める</u> こと。	新井恵美子(著)	1930	女	書籍/1 哲学	江戸の家計簿	家庭人・二宮尊徳		新井恵美子 著	神奈川新聞社;かなしん出版(発売)	2001
9	急に身のほどを超えた	<u>贅沢を</u>	<u>始める</u> →それを見た悪い奴らが、どこからともなく集まってくる→カネがあるのをいいこ	丸山晴美(著)/横田濱夫(著)	1970/1950	女/男	書籍/5 技術・工学	明るい節約生活入門			横田濱夫, 丸山晴美 著	角川書店	2005
10	び込む緑…。そして何より都会暮らしでは味わえない「ゆっくりとした時間」という真の	<u>贅沢を</u>	<u>追求できる</u> エリア、湘南。今月は、モデルの甘槽記子さんが生まれ育った湘南へ里帰り。	実著者不明			雑誌/総合/一般	25 ans (ヴァンサンカン)		2004年11月号(通巻302号)		アシエット婦人画報社	2004
11	さけるチーズを裂かないで頭から丸かじりした時、	<u>贅沢を</u>	<u>感じた</u> 。いつも小さく裂いてちびちび食べるから。。。				Yahoo!知恵袋/Yahoo!JAPAN/Yahoo!知恵袋	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
12	とっては嬉しいけど、でも『出かける=余裕がある』ということじゃないのかな?今は、	<u>贅沢を</u>	<u>優先する</u> んではなく、もっと国民生活を支える時だと思っただけ。				Yahoo!ブログ/家庭と住まい/家庭	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
地味を5													
1	昔の森のほうが	<u>地味を</u>	<u>肥やす</u> ことができた、というのが村人たちの一致した意見だ。	K・ナナウラ(著)/草野洋(著)	1950/1930	男/男	書籍/3 社会科学	ODAの闇	正しく使われているのか、その真相を衝く		草野洋, K・ナナウラ 共著	日新報道	2004

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	まず、房総のイワシの顔といえば干鯛である。	<u>地味を</u>	<u>養い</u> 、食糧増産の源となってきた。	佐藤魚水(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	金目鯛の目はなぜ金色なのか			佐藤魚水 著	新人物往来社	2005
3	みずみずしい放牧場の背後に緑の丘が広がり、いかにも豊かな	<u>地味を</u>	<u>象徴している。</u>	ミランダ・リー(著)/上村悦子(訳)	/ 1950	/ 女	書籍/9 文学	歓びの代償			ミランダ・リー 作;上村悦子 訳	ハーレクイン	2002
6	、しかし地味はどうか」と言いながら、「かがんで一本のススキを引き抜いて…」と、	<u>地味を</u>	<u>吟味する</u> 様子が書かれ、生産力の高い土地が選ばれていたことが想像できます。	谷本丈夫(著)	1940	男	書籍/6 産業	森の時間に学ぶ森づくり			谷本丈夫 著	全国林業改良普及協会	2004
上手を1 純粋を5	なし												
1	ラブ運UP♥チャーム情熱と	<u>純粋を</u>	<u>象徴する</u> ハートには、一途な恋を応援するパワーが。	早花咲月(著)		女	雑誌/総合/児童	My Bird day		2005年5月号(第27巻第5号、通巻392号)		実業之日本社	2005
2	あれはな効果絶大にして	<u>純粋を</u>	<u>演じる</u> という最後の手段なかなかよ政治にはかかわらないこれ以上そんなへんなことにく				Yahoo!ブログ/芸術と人文/人文科学	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
順調を5													
1	共に陰同士で、未年は静かに酉年を見守り、	<u>順調を</u>	<u>保ち</u> ます。	実著者不明			書籍/1 哲学	十二支運勢宝鑑		2004 未	三須啓仙 監修;東洋運勢学会 編纂	徳間書店	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	意見の相違は多く、	順調を	欠きます。	実著者不明			書籍/1 哲学	十二支運勢宝鑑		2004 未	三須啓仙 監修;東洋運勢学会 編纂	徳間書店	2003
敏感を1 無難を1 無事を4	なし なし												
(126件用例のうち一部のみ表示)													
1	望と晴子は鈴木夫妻の	無事を	確かめたかった	雲井瑠璃(著)		女	書籍/9 文学	瀬戸内を泳ぐ魚のよう		下	雲井瑠璃 著	草思社	2000
3	元木の連絡で駆けつけた真理子は理沙につき、顔をくしゃくしゃにして理沙の	無事を	喜んだ。和代は骨粗鬆症の影響で股関節を骨折しているうえ、子宮癌の治療中であるこ	最上鷹夫(著)	1950	男	書籍/9 文学	過去からの声			最上鷹夫 著	新風舎	2005
5	アドニス はガフの傍らを歩むかたちになり、残りの者たちは、階段を下ってゆく一行の	無事を	祈るかのよう な真摯とした顔でたがずむばかりであった。	沖方丁(著)	1970	男	書籍/9 文学	ばいばい、アース		下	沖方丁 著	角川書店	2000
6	い争うほど無駄なものもない。(信じるしかない) 行衡は、兵悟の言葉を思い出す。	無事を	祈らずにはいられなかった。	響野夏菜(著)	1970	女	書籍/9 文学	東京S黄尾探偵団	俺たちは天使じゃない		響野夏菜 著	集英社	2001
7	神谷隊長は、私達のために、巡拝の	無事を	祈願して下さった。	関根優(著)	1930	女	書籍/2 歴史	空海の道を行く			関根優 著	栄光出版社	2005
阿呆を5													
1	その時の一條大藏卿は、	阿呆を	装う役なのだが、偽りの姿と本当の姿を演じ分け、若々しくもお見事でした。	アシハラヒロコ(著)	/1950/ /	女	雑誌/総合/一般	和楽		2003年9月号(第3巻第9号)		小学館	2003
2	一月に二度も女を押し倒す	阿呆を	どうしろって言うんです?	保科昌彦(著)	1960	男	書籍/9 文学	ゲスト			保科昌彦 著	角川書店	2005
安泰を3													
2	参軍の族党はそれぞれの所領の	安泰を	必死に願っている。	池宮彰一郎(著)	1920	男	書籍/9 文学	平家		中巻	池宮彰一郎 著	角川書店	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	この日に帝釈天が孝謙と光明の至誠に感応して天への門を開き、またその治政の	安泰を	知らしめる、の意。	渡辺晃宏(著)	1960	男	書籍/2 歴史	平城京と木簡の世紀			渡辺晃宏 著	講談社	2001
4	東大寺の修二会においては、そのときの内閣の	安泰を	祈願し、国家の安寧を願っている。	養輪顕量(著)	1960	男	書籍/1 哲学	現代に生きる仏教	仏教文化の視点		三友健容 編著	東京書籍	1995
5	日本でも蒙古襲来の時に、それまで迫害されてきた日蓮上人が、国の	安泰を	懸命に祈った功で戦後、政府から認められたろう。	嵯峨冽(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	ソ連社会は変わるか	ベレストロイカと大衆		嵯峨冽 著	サイマル出版会	1988
6	代藩主として伊達秀宗が入部したとき宇和島城の鬼門に当たる場所へ伊達家・藩・領民の	安泰を	計るための鬼門の鎮として建立された寺だそう。				Yahoo!ブログ/生活と文化/祝日、記念日、年中行事	Yahoo!ブログ			Yahoo!		2008
8	推薦する候補者の当選を図って地位の	安泰を	企図したのだろう。	小村剛史(著)	1910	男	書籍/3 社会科学	あなたはどちら？尊敬される校長敬遠される校長			小村剛史 著	健友館	2002
9	二つの御正体の揺るぎなき	安泰を	主張する。	山本ひろ子(著)	1940	女	書籍/2 歴史	神話と歴史の間で			上村忠男 ほか編	岩波書店	2002
10	天皇が天地四方の神々に国の	安泰を	祈願する宮中のこの儀式に、国民ぜんたいも見なうわげである。	生源寺美子(著)	1910	女	書籍/分類なし	きらめいて川は流れる			生源寺美子 作;藤本四郎 絵	ポプラ社	1993
便利を4													
2	みなおせば、元には戻らなうけど	便利を	追及ばかりしていたら無理でしょう。				Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ	Yahoo!ブログ			Yahoo!		2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	県官は松山の士民を頗る疑惑する事になり、今治の方に親しみ	便利を	感じて遂に移序するに至ったものらしい。	内藤鳴雪(著)	1840	男	書籍/9 文学	鳴雪自叙伝			内藤鳴雪 著	岩波書店	2002
5	、さりとして、夜ごと密やかな楽しみを求めて彼の所に通うことになるアレクサンドロス	便利を	考えると、あまり本宮から離すわけにもいかなかった。	藤本ひとみ(著)	1950	女	書籍/9 文学	水晶宮のエリス	テーヌ・フオレーヌ恋の戦いの物語		藤本ひとみ 著	新潮社	1993
6	これは単に受ける人の	便利を	思っただけではない。	橋本剛太郎(著)	1940	男	書籍/4 自然科学	小児プライマリ・ケア虎の巻	医学生・研修医実習のために		日本外来小児科学会 編	医学書院	2001
7	と言ってしまう、話は簡単だが、よくよく考えると、このような流れは、単に旅行者に	便利を	もたらすだけではなく、国家と国境という人間の歴史にとって最も困難な課題の解決に、	石川好(著)	1940	男	書籍/3 社会科学	親日反日論			石川好 著	新潮社	1993
8	それなのに「結婚とは	便利を	幸せにすり替える仕掛けだ」	宮部みゆき(著)	1960	女	書籍/9 文学	模倣犯		上	宮部みゆき 著	小学館	2001
無礼を4		(59件用例のうち一部のみ表示)											
2	その連れはそわそわとして、居ても立ってもいられないようだった。	無礼を	するなど言ったのに、やっぱりやがった。	多岐川恭(著)	1920	男	書籍/9 文学	江戸の敵			多岐川恭 著	徳間書店	2004
3	自分のしたことをよくよく考えれば相手の	無礼を	とやかく言える立場ではないだろう。	六堂葉月(著)			書籍/9 文学	ケダモノは二度笑う			六堂葉月 著	リーフ出版; 星雲社(発売)	2002
5	頼朝を出迎えても馬に乗って挨拶し、	無礼を	とがめられると「これまで祖父、父、このお上総介三代は、公私いづれも下馬の礼を	清水克悦(著)	1940	男	書籍/2 歴史	たつぷる倉ウオーキング	義経・頼朝伝訪ねて		清水克悦 著	水曜社	2005
平等を5		(209件用例のうち一部のみ表示)											

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	を与えられているのに、武士だけ苗字を持ち、百姓や町人に苗字がないのは可笑的。又	平等を	欠く。人の姓名は自分と他人との区別を付け、混乱を起さない為のものである。故にたと	埜村忠雄(著)	1930	男	書籍/1 哲学	古寺探訪と其の背景		下巻	埜村忠雄 著	[埜村忠雄]	2002
4	の悲願をもつはずの聖職者が、どうして、しばしば戦争に奉仕せねばならなかったのか。	平等を	実現するための努力が、どうして不平等、差別、敵対関係をかもしだす悪業に転嫁させら	武田泰淳(著)	1910	男	書籍/9 文学	滅亡について	他三十篇評論集		武田泰淳 著; 川西政明 編	岩波書店	1992
5	公私を問わず世界のすべての面で、自由と	平等を	享受することができた。	木下毅(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	比較法 学の課題と展望	大木雅夫先生古稀記念		滝沢正 編集代表	信山社出版	2002
妥当を5													
2	詞28.0 原則的には三人称単数にのみ活用する動詞をいう。28.1 必要, 利	妥当を	表するもの。1) 種類2) 用例走らねばならない。28.2 天候, 気候を表すもの	大高順雄(著)	1930	男	書籍/8 言語	標準カタロニア語文法			大高順雄 著	大学書林	1992
5	対抗力が失われるとすれば、抹消登記それ自体に公信力を認める結果となり、解釈として	妥当を	欠くとの理由で判例を支持している。	半田正夫(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	判例ハンドブック民法総則・物権			甲斐道太郎 編	日本評論社	1992
7	持っていると言える。さて、わたしの考えでは、わたしたちに世界や現実の動かし難い	妥当を	もたらすものは、原理的には、この〈知覚〉、〈情動〉、〈感情〉、というものの、〈意識	竹田青嗣(著)	1940	男	書籍/1 哲学	意味とエロス			竹田青嗣 著	筑摩書房	1993
8	抱いたことがないので、あらゆる詩学は、暗中摸索の結果、曖昧なお筆先の論証、	妥当を	欠く体系などの雑然たるよせ集めからなる詩作の秘法を作り上げる。それを弟子たちが機械	河盛好蔵(著)	1900	男	書籍/9 文学	河盛好蔵私随想選		第3巻		新潮社	1991

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
同一を2													
1	県婦人少年室が取り扱った男女雇用機会均等関係紛争事例集」によれば、就業規則で <b>男女</b>	同一を	定めながら、執拗な退職勧告を行なった事例という(夫の出世に伴ない妻に退職を	児玉佳與子(著)	1930	女	書籍/3 社会科学	現代の差別と人権	とも生きるを社会をさめて		山田光二, 内山一雄   編	明石書店	1993
反対を4	34件用例のうち一部のみ表示)												
2	<b>海原等内閣の</b>	反対を	押し切る形で誕生した。	佐道明広(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	戦後日本の防衛と政治			佐道明広   著	吉川弘文館	2003
5	。ブッシュ大統領はこうしたEJ-3外交を支援するため、イランの <b>WTO加盟申請への</b>	反対を	取り下げ、イラン民航機用部品の供与、特にEJからイランに向けての供与でライセンス				白書/安全	日本の防衛 - 防衛白書 -	平成17年版		防衛庁	ぎょうせい	2005
6	を研究するのである。事例研究会は営業マンの勉強にはいちばん適している。特に強硬な	反対を	してくるお客さまほど、将来の良のお客さまになるという営業上の法則があるが、いった	鎌田勝(著)	1920	男	書籍/3 社会科学	鎌田勝の戦略的人材開発の考え方とその技法	困難な時代を勝ち抜くために		鎌田勝   著	政経研究所	2002
7	パーセント削減することに同意するとともに、明らかにアメリカを含意して「覇権主義」	反対を	共同で <b>声明した</b> 。こうして緊密化した中ロ関係を背景に、中国当局は、スホーイ27型	中嶋嶺雄(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	香港回帰	アジア新世紀の命運		中嶋嶺雄   著	中央公論社	1997
10	左派社会党ができて、全面講和、再軍備	反対を	<b>主張</b> している時も、その主張そのものには共感をもって	佐道正彦(著)	1930	男	書籍/2 歴史	一市井人の戦後五十年	私の中の社会主義		佐道正彦   著	日本図書行会;近代文芸社(発)	2001
平凡を5													
2	平等思想は悪平等思想一価値否認、優者排斥、およそ偉大なものを排して、	平凡を	<b>礼讃する</b> 、それともとかく悪い意味における平凡の礼讃になる。	安岡正篤(著)	1890	男	書籍/3 社会科学	この国を思う			安岡正篤   著	明德出版社	1996



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
4	前者は嘗つて一読したが、日本原稿紙で六十枚ほどの短篇、トリックそのものは、やはり	<u>平凡を</u>	<u>免れない</u> が、全体の構想と描写は、可なり風変わりな味の、特異な本格ものであった。	江戸川乱歩(著)	1890	男	書籍/9 文学	わが夢と真実			江戸川乱歩 著	光文社	2005
6	間違いのない、しかも嘘ではない書き出しの一行から先へ進めなかつたのである。自分は	<u>平凡を</u>	<u>欲し</u> 、平凡の中でしか潑刺と生きることを出来ない女なのだ。そんな自分には、竜一は荷	宮本輝(著)	1940	男	書籍/9 文学	夢見通りの人々			宮本輝 著	新潮社	1989
平気を5													
1	無理に	<u>平気を</u> <u>装った。</u>		W・S・モーム(著)/行方昭夫(訳)	1870/1930	男/男	書籍/9 文学	人間の絆		下	モーム 作;行方昭夫 訳	岩波書店	2001
3	何をいいたいのか、できるだけ	<u>平気を</u> <u>よそおって</u> です。		和田登(著)	1930	男	書籍/2 歴史	石井のおとうさんありがとう	石井十次生涯		和田登 著;和田春奈 画	総和社	2004
必要を3 (281件用例のうち一部のみ表示)													
2	たとえば居城にしても安土城、大坂城、熊本城、姫路城といったふうの偉容ある近世城郭の	<u>必要を</u>	<u>自国において認めていなかった。</u>	司馬遼太郎(著)	1920	男	書籍/9 文学	翔ぶが如く			司馬遼太郎 著	文芸春秋	1976
7	リカの計画している新鋭核ミサイルのパーシングII、巡航ミサイルの欧州展開を阻止する	<u>必要を</u>	<u>強く感じている。</u>	長谷川慶太郎(著)	1920	男	書籍/3 社会科学	経済国防論	非軍事大日本へのすすめ		長谷川慶太郎 著	新潮社	1988
9	彼らは、革命の経験を通じて穏和派との立場の違いを一層明確にする	<u>必要を</u>	<u>痛感し</u> 、本土からの伝統的な分離主義の主張を放棄した。	スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ(著)/鈴木邦夫(訳)	1930/1950	男/男	書籍/2 歴史	イタリア史	1700-1860		スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ 著;鈴木邦夫 訳	法政大学出版局	2001
不便を4 (95件用例のうち一部のみ表示)													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	点検するため、12月7日(日)まで休館します。ご	<u>不便を</u>	<u>おかけしますが</u> 、ご理解をお願いします。				広報紙/東北地方/山形県	市報かみのやま		2008年12号		山形県 上市市	2008
4	の紙を必要とし、かつカメラ・オブスクーラの中で行なう必要のある蠟燭による <u>投影法の</u>	<u>不便を</u>	<u>指摘すること</u> を忘れない。	ユルジス・バルトルシャイティス(著)/高山宏(訳)	1900/ 1940	男/ 男	書籍/7 芸術・美術	バルトルシャイティス著作集		2		国書刊行会	1992
6	して行われた同種の行為であっても、いちいち併合罪として扱わなければならないという	<u>不便を</u>	<u>生じた。</u>	板倉宏(著)	1930	男	書籍/3 社会科学	刑法総論			板倉宏 著	勁草書房	1994
8	女性の社会進出とともに、結婚後名字が変わることに	<u>不便を</u>	<u>感じる女性</u> も多くなっている。	高瀬真尚(著)		男	書籍/2 歴史	よい国	世界の法律・制度まるごとガイド		高瀬真尚 著	イースト・プレス	1996
不明を4			(27件用例のうち一部のみ表示)										
3	活、黙々とした吟味、貧しさ、異国の地、これらは往々にして多くの人々に <u>読解の</u> おりの	<u>不明を</u>	<u>明らかにし</u> てくれる」	阿部謹也(著)	1930	男	書籍/0 総記	日本人はいかに生きるべきか			阿部謹也 著	朝日新聞社	2001
4	容保はまさに断腸の思いで、 <u>わが身の</u>	<u>不明を</u>	<u>詫び</u> 、独り咽び泣くしかなかった。	井口富夫(著)	1920	男	書籍/2 歴史	会津と長州と	企業人の見た権力者の横顔		井口富夫 著	MBC21; 東京経済(発売)	2000
6	でございませけれども、六十一年度はこうした結果になつたことにつきて、まことに	<u>不明を</u>	<u>おわびする</u> わけですが、てはそういうことでした。	水野政府委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第112回国会			1988

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
8	、この音が出たのであろう。私はオーディオのわからんやつときめつけた <u>自分の</u>	<u>不明を</u>	恥じるとともに、なまじのオーディオマニアよりよほど機械の使いこなしのうまいAの音	石原俊(著)	1950	男	書籍/5 技術・工学	いい音きたい	実用以上マニア未満のオーディオ入門		石原俊 著	岩波書店	2002
不利を4		(44件用例のうち一部のみ表示)											
2	とすれば、中山間地域農業のハンディは明瞭である。そこで新しい基本法は、 <u>生産条件の</u>	<u>不利を</u>	<u>補正する</u> ための支援を行うこととした。二〇〇〇年度に導入された中山間地域等直接支払	生源寺真一(著)	1950	男	書籍/6 産業	よくわかる食の農のはなし			生源寺真一 著	家の光協会	2005
3	ある、科学者となり技術者となってお国に尽くすんだことをはつきり言いました。	<u>不利を</u>	<u>こうむった</u> ことは明らかでありまだしたけれども、私は自分がそういう行動をとったという	国務大臣(有馬朗人君)			国会会議録/参議院/特別委員会	国会会議録		第145回国会			1999
4	そこへいくと、ウグイスにはほど遠い男性の野太い声は	<u>不利を</u>	<u>免れない</u> 。しかも着ているものといえばダーク系のスーツが多い。	高島徹治(著)	1930	男	書籍/8 言語	プロが使う秘密の日本語			高島徹治 著	幻冬舎	2004
5	出す。『平和への道』ヘンリ・ナウエン(広戸直江訳)問：女性が <u>社会進出するときの</u>	<u>不利を</u>	どう <u>克服する</u> か？答：女性と男性はサイクルが違うだけ、男性と同じサイクルを歩まなく	斎藤慎(著)	1960	女	書籍/3 社会科学	社会起業家	社会責任ビジネスの新しい潮流		斎藤慎 著	岩波書店	2004
7	できないことがかってきたこと、日勤に早く戻すことによって、家庭生活や <u>社会生活の</u>	<u>不利を</u>	できるだけ <u>なくす</u> 方がよいという考え方による。	実著者不明			書籍/3 社会科学	新/衛生管理	第2種用 上		厚生労働省安全衛生部労働衛生課 編	中央労働災害防止協会	2004

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
9	を得なかつたといふことであらうかと思ひます。もちろん一目違ひといふこと	不利を	こうむられる方々に対するお気持ちは私どもよくわかりませんが、	増岡国務大臣			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第102回国会			1984
不良を2		(80件用例のうち一部のみ表示)											
5	0分中断した。昼の部の2幕途中で松浦の元カレ役で出演していた林剛史(26)が体調	不良を	訴え、舞台を一時中断した。				Yahoo!ブログ/エンターテインメント/音楽	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
6	このため、お風呂から上がってすぐの食事では消化	不良を	起こしてしまいます。	井上昌次郎(著)/谷津三雄(著)	1930/1920	男/男	書籍/5 技術・工学	40代、50代から美しくなる生活術			齋藤美代子 編	マガジンハウス	1998
7	そして、古いクルマになってくると、カプラーや内部のゴムシールが硬化することで接触	不良を	起こす場合もある。	久田泰之(著)/松本尊重(著)	1950/ /		書籍/分類なし	インプレッサ WRXオーナーズマニュアル			ベストカー 編	三推社;講談社(発売)	2004
偉大を3													
1	れながらも、私は単に普通の意味においての自然の歎美者であるに止まった。私は自然の	偉大を	讚美はしたもの、私と山というものとの間に多大の距離を感じた。私は依然と	田部重治(著)	1880	男	書籍/2 歴史	新編山と溪谷			田部重治 著;近藤信行 編	岩波書店	1993
可能を3													
11	いことか悪いことか、只私には当面する仕事がある。私はシグナルとモールス式電信機の	可能を	信じて、間断なく発着する列車の配線を主として処理してゆかねばならぬ。さういふ見方				韻文/詩	モダニズム詩集			1 鶴岡善久 編	思潮社	2003

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
19	霊研究に没頭した。彼は聖書を神の直接の声として理解し、また精霊と人間界との交通の	可能を	説いた。でもダンテやスエデンボルグにいたしましても、いったい西洋人のあの世の	川端康成(著)	1890	男	書籍/9 文学	伊豆の踊子			川端康成 著	新潮社	2003
32	又は接近せしめることであるから、意に応じて写真の結果を左右し得ること、即ち技巧の	可能を	必要とするのは勿論である、而して理想派の芸術に於ては理想化の範囲が出来る限り広	飯沢耕太郎(著)	1950	男	書籍/7 芸術・美術	「芸術写真」とその時代			飯沢耕太郎 著	筑摩書房	1986
肝心を1 孤独を4	なし												
		(120件用例のうち一部のみ表示)											
1	画家の法事は、晩年の	孤独を	映すかのように、ひっそりとしたものだった				Yahoo!ブログ/芸術と人文/芸術、アート	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
2	精神的にまいって、	孤独を	死ぬほど味わいながら、次の生きる目標・仲間・場所を見つけるのは容易ではないと思う				Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/メンタルヘルス	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
3	[見どころ]	孤独を	抱えながら生きている	中村智佳子(著)/実著者不明	/	女/	雑誌/政治・経済・商業/経済/経営	経済界		2001年3月13日号(第36巻第5号、通巻698号)		経済界	2001
5	さんざん笑った雨翔はまた沈黙した。がらんとした通りが心の中の	孤独を	隠してくれた。	韓寒(著)/平坂仁志(訳)	1980/1960	男/男	書籍/9 文学	上海ビート			韓寒 著;平坂仁志 訳	サンマーク出版	2002
6	積尊は	孤独を	感じた。	池田大作(著)	1920	男	書籍/9 文学	新・人間革命		第3巻	池田大作 著	聖教新聞社	1998
広大を1 高価を5	なし												
1	増えている。往年は奸商が[米を]買い占め、[福州の]洪塘に運んで海船に売り渡し、	高価を	貪っていた。また安沙の點商が、数多く群れを成して、青苗子銭を貸し付け、麦や米が稔	三木聰(著)	1950	男	書籍/6 産業	明清福建農村社会の研究			三木聰 著	北海道大学図書刊行会	2002

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	る 戦前はカメラといえどドイツ。ライカ、コンタックスを頂点として、高級、高性能、	高価を	疆い、市場をほとんど独占していました。そして五十年後の今日、ドイツに代わって日	船山克(著)	1920	男	書籍/7 芸術・美術	中高年のための写真道楽	熟年万歳		船山克著	家の光協会	1997
幸運を5		(216件用例のうち一部のみ表示)											
2	ら、そこそがの満ち欠けによるものではないのか、とも言えるでしょう。	幸運を	表すツキという言葉は「月」から派生し、またその月は古来「ツク」と呼ばれ、それは「	齋藤悠貴(著)	1960	男	書籍/4 自然科学	月とツキの摩訶不思議学			齋藤悠貴 著	総和社	2001
4	ユーステロップのせいで頭が切れています…。白いタキシードの次はシルバーのスーツで	幸運を	呼んでもらいますよ！でも、着うたは「男達の挽歌」にしっくりこないんで				Yahoo!ブログ/芸術と人文/芸術、アート	Yahoo!ブログ				Yahoo!	2008
6	界の関係者が居並ぶ観客席の母親の隣によく腰を落着けたが、期待を持ちながらも	幸運を	信じる気にはなれないままだった。	アレグザンダー・ウオーカー(著)/齋藤静代(訳)	1930/ 1950	男/ 女	書籍/7 芸術・美術	オードリー	リアル・ストーリー		アレグザンダー・ウオーカー 著;齋藤静代 訳	アルファベータ	2003
7	またそれ以外には、陛下の御代にこれほどの名声を、陛下のあらゆる御計画にこれほどの	幸運を	もたらすものはありません。	原著者不明/鈴木康司(訳)	/ 1930	/ 男	書籍/2 歴史	17・18世紀大旅行記叢書			中川久定 ほか編	岩波書店	1991
巨大を1 共通を2	なし												
2	G7の共同認識によって、これ以上のドルの下落というものを防ごうと、そういう認識が	共通を	いたしておるといいます。	国務大臣(宮澤喜一君)			国会会議録/参議院/常任委員会	国会会議録		第112回国会			1988
面倒を5		(923件用例のうち一部のみ表示)											

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年	
4	右の三郎兵衛あて書簡の結びに源内は、三郎兵衛にさまさまの	面倒を	押しつけただけでは悪いと思っただけからか、次のように書きそえている。	芳賀徹(著)	1930	男	書籍/2 歴史	平賀源内			芳賀徹著	朝日新聞社	1989	
7	開小説とは味わいが違うので、少しぐらい読みにくくても、5「句読をたよりに再読の御	面倒を	「讀ふ」というわけだ。自作を文士劇にしたのは、演劇改良運動をしている逍遥の真	嵐山光三郎(著)	1940	男	書籍/9 文学	美妙、消えた。			嵐山光三郎著	朝日新聞社	2001	
11	おぬしにももうしわけない	面倒を	かける。それも併せて許してもらいたい」牢人は裸の背筋に力をこめた。	澤田ふじ子(著)	1940	女	書籍/9 文学	惜別の海		上	澤田ふじ子著	幻冬舎	2002	
無効を3		(39件用例のうち一部のみ表示)												
4	したとしても、相手方(売主)がその目的を知らなかったら、後から錯誤を理由に契約の	無効を	主張することはできない。	野口恵三(著)	1920	男	書籍/3 社会科学	判例に学ぶ不動産トラブル防止法			野口恵三著	有斐閣	1991	
7	ス代も含まれていた」と開き直るが、貴子はその言葉を盾に公序良俗に反するとして契約	無効を	求める。現実には※なお、弁護士費用が払えない場合は、法律扶助協会による「法律扶助	内野智子(著)/実著者不明/谷原章介(著)	// 1970	女//男	雑誌/総合/芸能	テレバルフエフ			2005年6月号(第4巻第6号、通巻第32号)		小学館	2005
9	父に結婚の	無効を	宣言されても抗うまい。	カーラ・キャンディ(著)/新井ひろみ(訳)	/	/ 女	書籍/9 文学	プリンセスにお手上げ	世紀のウエディング3		カーラ・キャンディ 作;新井ひろみ 訳	ハーレクイン	2001	
無知を4		(58件用例のうち一部のみ表示)												
1	僕は	無知を	恥じた。	盛口満(著)	1960	男	書籍/4 自然科学	骨の学校		2(沖繩放浪篇)	盛口満著	木魂社	2003	
2	私がそれを知らないのはとんだ大恥なのかもしれないので、	無知を	さらさないように、さりげなく、度々ちよつと忘れたが、という口調で尋ねたので	清水義範(著)	1940	男	書籍/9 文学	パールのようなもの			清水義範著	文芸春秋	1995	

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	今回のファッションロケの大事な部分を大村女史任せにしたのは、 <u>自分の</u>	無知を	<u>取り繕おう</u> としていたからだ。	小池りうも(著)		女	書籍/5 技術・工学	大ヒット雑誌get指令			小池りうも 著	新風舎	2004
5	車の事なんて何にも知らず、雑誌のコラムで	無知を	<u>露呈</u> しています。				Yahoo!知恵袋/スポーツ、アウトドア、車/自動車	Yahoo!知恵袋				Yahoo!	2005
6	ある。例えば、ニキアスとラケスは有名な最高司令官として勇敢さについての <u>彼ら自身の</u>	無知を	<u>理解</u> しなければならないが、それに対して、ハリーやピキシーはまた彼ら自身の見解を絶	エックハルト・マルテンス(著)/有福孝岳(訳)/有福美年子(訳)	1940/1930/	男/男/女	書籍/1 哲学	子供とともに哲学する	ひとつの哲学入門書		エックハルト・マルテンス 著;有福美年子,有福孝岳 訳	晃洋書房	2003
8	知っているのに知らないふりをするよりは、 <u>己れの</u>	無知を	素直に <u>晒す</u> 方が、よっぽど疲れなくていい。	西澤保彦(著)	1960	男	書籍/9 文学	瞬間移動死体			西澤保彦 著	講談社	2001
9	な叡智体との深いつながりを保っていると考えられ、子供であることから経験不足や	無知を	<u>こえて</u> 、まるで老人のような叡智をそなえた神話的な生物として、描き出されてきたので	中沢新一(著)	1950	男	書籍/2 歴史	森のバロック			中沢新一 著	せりか書房	1992
夢中を1 無用を2	なし												
1	弟子は妥協はしなかったが、 <u>議論を戦わす</u>	無用を	<u>よく知って</u> いた。	小林秀雄(著)	1900	男	書籍/1 哲学	本居宣長		上巻	小林秀雄 著	新潮社	1992
2	あたしも笠倉屋さんも、御前様から <u>目通り</u>	無用を	<u>言い渡され</u> た	山本一力(著)	1940	男	書籍/9 文学	損料屋喜八郎始末控え			山本一力 著	文藝春秋	2000
冷酷を3													
1	見捨てられたと知っても長政は <u>父の</u>	冷酷を	<u>了としてく</u> れるだろう。	岳宏一郎(著)	1930	男	書籍/9 文学	群雲、関ヶ原へ		下巻	岳宏一郎 著	新潮社	1994
良好を1	なし												
正式を1	なし												
正当を1	なし												
静寂を4													
(69件用例のうち一部のみ表示)													



表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
2	旅人が草鞋を踏みながらやってきて、この	静寂を	破るようなこともなかった。	イザベラ・バード(著)/高梨健吉(訳)	1830/1910	女/男	書籍/2 歴史	日本奥地紀行			イザベラ・バード 著;高梨健吉 訳	平凡社	2000
3	町を抜けると急に辺りの視界が開け、朝もやの中に	静寂を	たたえた田園風景がゆったりとした姿を見せ始め、次第に朝の気配が滲むように溶け込ん	吉野道男(著)	1940	男	書籍/9 文学	熱球児	高校球児物語		吉野道男 著	文芸社	2002
6	に姿を消していた。あたりは再び闇に閉ざされて、先刻までのものものしさが嘘のような	静寂を	取り戻した。変わらないのは、お妻の家の明さだけであった。町内の有志が二十	笹沢左保(著)	1930	男	書籍/9 文学	大江戸龍虎伝	鼠小僧と遠山金四郎長編時代小説		笹沢左保 著	祥伝社	1998
7	淡い葉の緑いろもゆれる。溪流の音のなかでモンカゲロウをみているケンさんは、緑陰の	静寂を	感じた。トンボ大臣に出るとき、つねに持ちあるくカメラをたずさえて、どこ	田川研(著)	1940	男	書籍/4 自然科学	虫屋の虫めがね			田川研 著	偕成社	2001
8	、ゆっくりと、しずかに、夜通しかけて、その島へにじり寄っていった。薄明の	静寂を	やぶって、見張り台の号鐘が、激しく、切れ目なく打ち鳴らされている。やや遠いそ	多島斗志之(著)	1940	男	書籍/9 文学	海賊モア船長の憂鬱			多島斗志之 著	集英社	2005
10	、無気味な光景であった。天女も私たち六人も、啞のように物を言わなかった。ただその	静寂を	乱すものは、六人の足についている太い鎖のすれ合う音ばかりであった。白衣の女は松	江戸川乱歩(著)	1890	男	書籍/9 文学	大暗室			江戸川乱歩 著	東京創元社	1996
神秘を3		(59件用例のうち一部のみ表示)											
1	霞む海に歴史の	神秘を	見つめている。				広報紙/中部地方/長野県	広報うえた		2008年18号		長野県上田市	2008

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
3	八月にびつりのリクエスト、魂が呼び合う宇宙の	神秘を	感じさせる感動の曲は東京の今井栄さんからの手紙でした。	日野直子(著)	1930	女	書籍/7 芸術・美術	目覚めのパロック			日野直子 著	星の環会	2003
5	わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の	神秘を	大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。	竹田伸一(著)	1960	男	書籍/1 哲学	聖書によるキリスト教研究			竹田伸一 著	新教出版社	2001
6	クリスの	神秘を	探る旅。	新井容子(著)	1960	女	書籍/2 歴史	小さきものの祈り	インドネシアの聖剣をめぐる旅		新井容子 著	情報センター出版局	2002
8	医学を超える自然の	神秘を	力説したのである。	芥川龍之介(著)	1890	男	書籍/9 文学	夢の蹄	馬をめぐるアンロジ		芥川龍之介 ほか著	新宿書房	1989
新鮮を1 素朴を5	なし												
1	ように、自然のなかに時代の徴を象徴的に読もうとするのは、素朴な(あるいは、むしろ	素朴を	装っている)魂に固有のことだと、人は言うだろう。そのような魂の持ち主は、自	ジャン・スタロバンスキー(著)/井上堯裕(訳)	1920/ 1930	男/ 男	書籍/7 芸術・美術	フランス革命と芸術	1789年 理性の 標章		ジャン・スタロバンスキー 著;井上堯裕 訳	法政大学出版社	1989
主要を1 多忙を5			(71件用例のうち一部のみ表示)										
3	ターを訪問すること。大学病院は研修医も含めると800人の大所帯だ。どのドクターも	多忙を	極めるから、「気がついたら一日中、小走りしてたり(笑)」なんてことも。	矢嶋恵理(著)/高山周子(著)	/	/	書籍/分類なし	外資系企業就職ガイドブック		2003		イカロス出版	2001
6	して、養護教諭の五八・四％がよく思う、時々思うと答えています。そしてその理由に、	多忙を	挙げたのが四〇・二％、体がもたないを挙げたのが四〇・二％となっています。	山原委員			国会会議録/衆議院/常任委員会	国会会議録		第136回国会			1996

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
8	入院患者の容態が急変したりして、夜中であれ早朝であれ起きだしていく。父は、あの	多忙を	何年にもわたってこなせるほど頑強ではなかったのに、真夜中であれ往診を断ったこと	古山高麗雄(著)	1920	男	書籍/9 文学	妻の部屋	遺作十二篇		古山高麗雄 著	文藝春秋	2002
15	セントにすぎなかった。とくに、労働状況に不満があるという。それについてストレスや	多忙を	理由にあげた人は少なかつた。「精神的な欲求不満」が「騒音や肉体的なきさよりも	ハンス・ウルリッヒ・グリム(著)/佐々木建(訳)/花房恵子(訳)	1950/1930/1940	男/男/女	書籍/4 自然科学	悪魔の鍋	「食」のグローバル化が世界を脅かす		ハンス・ウルリッヒ・グリム 著;佐々木建 監訳;花房恵子 訳	家の光協会	2001
特異を1 得意を4	なし												
1	んかさ」一通りの自慢話がすむと、彼女は真打登場といわんばかりに身を乗り出して、	得意を	押し殺す不気味な笑顔になったものだ。	若竹七海(著)	1960	女	書籍/9 文学	船上にて			若竹七海 著	立風書房	1997
2	教えて！外資のシゴト就職活動から今日のスケジュールまで若手社員に密着取材自分の	得意を	生かして、注目の外資系企業でイケイケ働く20代の若手社員たち。	矢嶋恵理(著)/高山周子(著)	/	/	書籍/分類なし	外資系企業就職ガイドブック		2003		イカロス出版	2001
3	薬さ。それ、子取ろ」「昼日中から駄じゃれで遊ぶよこの人は。早く商いに励みな。お	得意を	荒されるよ」「この辺じゃここの人だけだ。	出久根達郎(著)/清原康正(著)	1940/1940	男/男	書籍/9 文学	時代小説最前線			平岩弓枝 他著	新潮社	1994
7	それに配給でも買出しでも、皆やってくれるし	得意を	顔一杯に表わし、肌に生彩を放っている。	萩原葉子(著)	1920	女	書籍/9 文学	木馬館			萩原葉子 著	出帆新社	1991
特殊を1	なし												
直接を1	なし												
著名を1	なし												
幼稚を3													

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディアジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
1	幼子までは帰れないとしても、思いを伝えようとして発する幼いことばが、 <u>表現の</u>	<u>幼稚を</u>	<u>越えて</u> 、なぜ心を打つのかを考えたようだ。	馬場あき子(著)	1920	女	雑誌/教育・学芸/文学/芸術	短歌朝日		2001年11・12月号(通巻27号)		朝日新聞社	2001
有望を1	なし												
有名を1	なし												
優秀を2													
1	極勝三郎教授に委嘱した。彼は学生時代の誉れ高く、大学予備門生時代から <u>学術</u>	<u>優秀を</u>	<u>認められて</u> 褒賞給費生となり、病理学教授時代にはうさぎの耳に人工癌を発生させ、“癌	磯貝元(著)	1910	男	書籍/9 文学	築地施療病院の生涯	東京市最初総合病院		磯貝元 著	楽友舎;ライフリサーチプレス(発売)	2003
残念を1	なし												
純情を1	なし												
重大を1	なし												
重要を1	なし												
真剣を5		(18件用例のうち一部のみ表示)											
1	とあそんでくれていると信じてはねまわり、じゃれついてくるクロに寸分の傷もつけず、	<u>真剣を</u>	<u>斬りあげ</u> 、斬りおろし、まよこになぐのは、かんたんではない。	越水利江子(著)		女	書籍/9 文学	忍剣花百姫伝		1(めざめよ鬼神の剣)	越水利江子 作;陸原一樹 絵	ポプラ社	2005
2	由良之助という、贅沢な配役である。人気の理由はそればかりではなかった。市村座で	<u>真剣を</u>	ふりかざし幸四郎に迫るといふ狂気の沙汰をやらかした菊五郎が、またぞろなにかしでか	皆川博子(著)	1930	女	書籍/9 文学	花櫓			皆川博子 著	講談社	1999
4	鉄舟で凄いと思うのは、剣技精妙の極地に達していて、その気になれば何度も	<u>真剣を</u>	抜く機会があった幕末風雲期を生きながら、一度も人を殺傷したことがなかったという事	中村整史朗(著)	1920	男	書籍/7 芸術・美術	剣の達人111人データーファイル			新人物往来社 編	新人物往来社	2002
5	西南戦争での、抜刀をふるっての実験者がいる「	<u>真剣を</u>	持てば身がちぢみ、腕がこわばるものである。	津本陽(著)	1920	男	書籍/9 文学	真剣兵法			津本陽 著	光文社	1991

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
6	みねは、かえしまししょう」小太郎は	真剣を	ぬき、刀のみねをかえました。	越水利江子(著)		女	書籍/9 文学	忍剣花百姫伝		1(めざめよ鬼神の剣)	越水利江子 作;陸原一樹 絵	ポプラ社	2005
7	た声が飛んできた。「十兵衛を相手にするとは」「いえ、私は以前から十兵衛先生と	真剣を	交えてみたかったです。それは私の、もう一つの夢でございました」うつとりと、七	山田風太郎(著)	1920	男	書籍/9 文学	柳生十兵衛死す		下	山田風太郎 著	小学館	1999
重宝を5													
1	の重宝を捜索かたがた、悪人どもの様子を探っていたが、関伝八郎がお筆の方と共謀して	重宝を	奪い、隠し持っていることを突きとめ、伝八郎を捕えてとごころ、悪事を白状した	東 雅夫(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	妖怪伝説奇聞			東雅夫 著	学習研究社	2005
2	人足の三平は、小森の内意を受けて、お家の	重宝を	捜索かたがた、悪人どもの様子を探っていたが、関伝八郎がお筆の方と共謀して重宝を奪	東 雅夫(著)	1950	男	書籍/3 社会科学	妖怪伝説奇聞			東雅夫 著	学習研究社	2005
3	このような宴会の場にさまざまの異国本朝の	重宝を	飾るというような座の飾りが中世に出てきた。	熊倉功夫(著)	1940	女	書籍/3 社会科学	日本の食事文化			熊倉功夫 責任編集	味の素食の文化センター;農山漁村文化	1999
4	そのころは宮内省だが…に回す予算がないといっても歴代の	重宝を	世に出すなど以てのほかかだ』と断固反対した。	胡桃沢耕史(著)	1920	男	書籍/9 文学	翔べ! 貴族警部			胡桃沢耕史 著	光文社	1994
上手2													
8	割を果たしているのだ。また踊りの場では老若男女誰もが平等。身分は関係なく、踊り	上手が	もてはやされる。普段と違う自分を表現できる機会であり、男女の出会いや交際の場にも	伊藤夏子(著)/佐藤隆二(著)	/	女/男	雑誌/総合/一般	サライ		2002年7月18日号(第14巻第14号、通巻第313号)		小学館	2002

表示番号	前文脈	検索文字列	後文脈	執筆者	生年代	性別	メディア／ジャンル	タイトル	副題	巻号	編著者等*	出版者	出版年
9	出の経営評論家・江坂氏いわく、「日本のビジネス現場では、とかく調整上手、 <u>根回し</u>	<u>上手が</u>	<u>重宝がられ</u> 、あたかもそれが仕事のできる条件であるかと思われているが、とん	実著者不明			雑誌/総合/一般	週刊現代		2001年4月7日号(第43巻第13号、No. 2126)		講談社	2001
13	とと思う。別の話だが、以前に他人から「宴会で音痴が歌うと拍手喝采ものだ、 <u>歌い</u>	<u>上手が</u>	<u>歌う</u> と座が白ける」というのを聞いたことがある。私はM社を辞めてからM社を離れた	松本孝夫(著)	1920	男	書籍/0 総記	すみれ	エッセー		松本孝夫 著	健友館	2001
16	一日一回、お腹の底から歌ったり踊ったりするだけでも、ずいぶん効果があるのだ。 <u>掃除</u>	<u>上手が</u>	<u>アレルギーを追い出す</u> ハウスダスト撃退は誰でもできる アレルギー素因をもつアレルギー	西田達弘(著)	1930	男	書籍/4 自然科学	アレルギー体質改善はこれしかない	鼻炎・しっしん・ぜんそくは必ず治せる		西田達弘 著	リヨン社	1984
無難が1	なし												
正式が1	なし												
夢中が1	なし												
正確を													
特異が1	なし												
正確を													
2	いま申し上げました自主規制以外に入ります旅行者のおみやげ品などは、	<u>正確を</u>	<u>期する</u> ために申し上げたわけですが、全体の数字から言えばきわめて少量のもの	藤原政府委員			国会会議録/衆議院/その他	国会会議録		第080回国会			1977
3	ってわかってたのに殺したんだよ! 「偽物だっただけだから、消したんだろ?」	<u>正確を</u>	<u>期そう</u> と、零が言葉を鮮明に発する。「違う! 創造主だと思ったからだ」高が零の	彩院忍(著)		女	書籍/9 文学	電腦天使		4	彩院忍 著	朝日ソノラマ	1998
4	tio”, “再輸出/総輸入比率”の試算結果をここで表示・図示することは断念する。	<u>正確を</u>	<u>期する</u> ためには、運賃や収益マージンの計算を丹念に計算し、それで十分に調整された結	篠原三代平(著)	1910	男	書籍/3 社会科学	中国経済の巨大化と香港	そのダイナミズムの解明		篠原三代平 著	勁草書房	2003

## 謝辞

本論文を執筆するに当たり、多くの方々のご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

まず、九州大学大学院比較社会文化学府修士課程及び博士後期課程でご指導をしてくださり、論文調査委員をお引き受けくださいました志水俊広准教授、松村瑞子教授、山村ひろみ教授、西山猛准教授、及び論文調査委員をお引き受けくださいました首都大学東京の奥野由紀子准教授に感謝いたします。特に、主査の志水俊広先生には、懇切なご指摘と暖かい励ましをいただきました。そして、副査の松村瑞子先生には認知言語学の見地から、山村ひろみ先生には日本語学の見地から、西山猛先生には中国語学の見地から、奥野由紀子先生には第二言語習得研究の見地から、それぞれご指導をいただき、数多くのご貴重なご意見をいただきました。心より深く感謝を申し上げます。

また、調査データの収集に当たっては、九州大学、九州産業大学、熊本大学、久留米大学のマレーシア人・ネパール人・中国人の留学生のみなさん、九州大学学部1年の日本人学生のみなさん、中国西安外国語大学日本語学科に在学中の学生のみなさん、友人である坂口香織さんの協力を得ました。

さらに、資料の判定に際しては、志水俊広先生、及び九州大学大学院比較社会文化学府修士課程の天野裕子さん、諸隈良子さん、王婷婷さん、博士後期課程の藤山智子さん、石田英明さん、岡田美鈴さん、岡田美穂さん、久保田真理さんにご協力をいただきました。中国語の例文の日本語訳に際しては、西山猛先生にご確認をいただきました。日本語の文法校正に当たっては、志水俊広先生、山村ひろみ先生、天野裕子さん、諸隈良子さん、岡田美鈴さんにご協力をいただきました。心より感謝の意を表したいと思います。

最後に、本論文の執筆を見守り励まし続けてくれた両親と、精神的、経済的に支えてくれた夫に深い感謝を送ります。